

ソードアート・オンライン
黎明の女神

eldest

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

抜けるような白い肌、桜色の唇。晴れ渡った空を思わせる碧い瞳に、陽の光を浴びて輝く金糸の髪。擦れ違えば、誰もが振り返らずにはいられない程の美貌。家はそれなりに裕福で、父と姉の三人暮らし。私立の進学校に通い、中学時代は運動部の部長。十人に訊けば、十人が才色兼備の美女だと答えそうな彼女は……しかし——身も心も、正銘の男だった！

そんな女の子と見紛うばかりの少年は、ある日《ソードアート・オンライン クロウズドβテスト》に当選し、平凡な容姿を手に入れられる仮想世界に魅入られていく。そして迎えた正式サービス開始の日——セカイは、少年の目の前で一変した。

†

挿絵……2話、6話、13話、14話、19話、25話、38話、42話

後書きおまけイラスト……16話、23話、30話、32話、34話、36話

†

更新情報などは活動報告をお読み下さい。

イラストは自作です。話数は上記をご確認下さい。

また、オリ主のイメージCDは小林ゆうさんです。

目次

妄執の楼閣—Sword Art On

line—

Prologue | 1

第1話 剣戟の世界 | 23

第2話 神の宣告 | 39

第3話 薄明かりの中で | 51

第4話 純白の結晶 | 62

第5話 Christmas Car

ol | 71

第6話 The Ghost of

Christmas Past | 84

第7話 春風の来訪者 | 96

第8話 策謀 | 112

第9話 心の距離 | 119

第10話 無自覚の芽生え | 126

第11話 落日 | 138

第12話 背中合わせの想い | 149

第13話 告白 | 160

第14話 重なる心 | 173

第15話 星見草 | 190

第16話 心意 | 213

第17話 煮込まれウサギ | 238

第18話 秋空のカルテット | 253

第19話 氷姫の舞踏 | 267

第20話 迷宮のラヴァーズ | 286

第21話	逆位置のムーン	302	第32話	Four of a kind	
第22話	彩色のシンフォニア		第33話	屍と踊れ	489
318			第34話	胡蝶の夢	502
第23話	勝利者へのセレナーデ		第35話	Aster and Ch	518
341					
第24話	魔王と姫の邂逅	355			
第25話	勇者と魔王の決戦	376	第36話	Div of the	
第26話	薄氷の舞台	394	Memories		551
第27話	水の柩の眠り姫	406	第37話	Daybreak	565
第28話	運命の片道切符	425	第38話	Happy sweet	
第29話	Scrooge	442	time		585
第30話	星の瞬き	460	第39話	光	606
第31話	舞台袖の閑談	477	第40話	ユイ	623

お詫びとご報告	717
第44話 夜空に咲く花	704
682	
第43話 剣の国のウエディング	
第42話 余興	660
第41話 家族	645

妄執の楼閣—Sword Art Online—
Prologue

学校帰りの昼下がり。

週休二日制が消滅して久しい昨今。僕の通う進学校も言うに及ばず、今日も土曜日だ。というのに学校があつた。午前中で終わるのが唯一の救いだらうか。

そして帰宅途中である現在、僕は電車のつり革にぶら下がり、うつらうつらと微睡んでいた。

僕の名前は三雲光。みくもひかる

何処にでもいる平凡な高校生——などと言う気は全くない。僕ほど容姿にコンプレックスを抱いている人間は、そうはいないのではないだろうか。

只、一概にコンプレックスとはいっても、一般的に連想されるものでは恐らくない。自分で言うのもなんだが、目鼻立ちは二重だし整っている方だと思う。しかし整っているとは言っても、その顔立ちが男性的どころか中性的ですらなく、女性的ですらあると言つていい。早い話が、僕という人間は、一見すると……いや、僕の方から相手に明かさないうり殆ど気付かれないほど、容姿が女の子のようなのだ。

——いや、待つてほしい。これは決して僕の妄想というわけではない。現実は小説よりも奇なり、というやつだ。

僕のこの女々しい外見は、僕がまだ幼い頃に他界した母さんが北欧の生まれであることが少なからず影響していると思う。金髪に碧眼、純粋な日本人に比べれば明らかに白いこの肌は、確かに母さんからの遺伝なのだろう。

しかし、幾らハーフだからといって、容姿が女性的になつたりなどしないはずだ。なのに僕の場合、睫毛は長いし線も細い。おまけに身長も百六十八センチと、同姓の友人達に比べれば小柄な方だ。更には、髭を始め無駄毛と呼ばれる類いのものが一切生えず、声変わりもしないまま、この歳まで来てしまった。流石に、これは幾らなんでも異常だろうとは自覚している。

そんな諸々もあつて、短い髪はあまりに不自然だからと後ろ髪を肩甲骨辺りにまで伸ばしているのだが、そのせいで性別が余計に誤解され易くなる、という悪循環ぶりに陥っている。こんな形なりでも、僕は真正正銘、身体も心も男だというのに。

——と、ぞわりと突然鳥肌が立ち、揺蕩たゆたっていた意識が覚醒する。

「……………」

まさかとは思つたが、間違いない。……痴漢だ。

ジーンズ越しにでも解る、下半身を執拗に撫で回す、男のいやらしい手付き。……吐

き気がする。

しかし、客観的に見て外国人にしか見えない相手に対して痴漢を働くとは……この男、随分とオツムが弱いらしい。相手が相手なら大量に慰謝料をふんだくられるだろうに。

社会的に抹殺されるのと一時の性欲の発散。天秤に乗せるまでもなく、どちらを優先するべきかは言うまでもない。そもそも、男に痴漢を働くとは……事実を知ったらトラウマものではなからうか。

男に対して、相応の嫌悪感は勿論ある。寧ろ、同性だからこそ、一層汚らわしいと感じる。しかし、男の頭の悪さも込みで、少し哀れに思わってしまったのも確かだった。

……仕方ない、か。

全く嬉しくない経験だけれど、以前にも何度か被害にあっている僕は、同様の手段で対処することに決めた。

心を落ち着ける為、スツと息を吸い込み、徐々に吐き出す。そして、背後の男に向かつて、ゆっくりと言い含めるように声を出した。

「Get your hands off me!

抑制された、やや高めめのハスキーボイス。それが己の口から出たことに、内心肩を落とす。

男が内容を理解したのかは解らない。しかし、その効果は靦面てきめんだった。

下半身に伸ばしていた手がビクリと止まる。次いで、衣擦れの音。密着していた身体が離れていく。

男に悟られないよう、自然な動作で僅かに首を動かし背後を見やると、そそくさと何事も無かつたかのように別の車両へと立ち去っていく後ろ姿が見て取れた。

外回りらしき背広姿の中年のおっさん。年齢はうちの父親と殆ど変らないように思う。

「はあ……いい大人が昼間から何をやっているんだ」

心の底から溜め息が漏れ出た。

本来なら取り押さえて駅員に突き出すべきなのだろうが、そうすると必然的に身分証の提示を求められるわけで、僕が男と解れば駅員だつて対応に困るだろう。また何より、僕自身が嫌な思いをすることになる。

だから、この忌まわしい容姿を逆手に取つて外国人の振りをした。これなら、周りの人間も下手に関わろうとは思わないはずだ。

「うっ……」

そんな風に言い訳めいた思考を巡らせようと、生理的嫌悪感は誤魔化せなかつたらしい。やはりどうあつても、気持ち悪いものは気持ち悪いのだ。

いっその事、感情を剥き出しにして殴つてしまえば良かったのかもしれない。しかし、理性がそれを拒む。己はあの男とは違う、一時の感情で何か大切なものを捨ててしまふような馬鹿な人間ではないのだ、と。

「気持ち悪い……」

口元を押さえ、思わずそう呟くと。

「You look pale. Are you all right?」

「……っ」

突然横からそう声をかけられ、危うく毒突きそうになる。

声の感じからして、僕とそう歳は変わらないだろう少年。発音も特別上手くなく、外国人という訳でもなさそうだった。

彼が、恐らく純粹な親切心で声をかけてくれたのだろうことは理解している。だが、正直に言つて有難迷惑だ。今は、誰かと話すような気分じゃない。

それでも、流石に無視する訳にはいかないだろう。何とか記憶を掘り起こしながら、必要な単語を組み立てていく。

「Thank you for your concern.
But, I'm okay」

これ以上会話が続かないよう相手の顔も見ず、俯き加減にそれだけ言う。が、考える

までもなく、嘔吐を催している人間がそんなことをすればどうなるか、なんてのは相場が決まっている。おまけに、電車というのは結構激しく揺れるものだ。

一層気分が悪くなり、胃の中のモノが迫り上がってきているのが自分でも解る。それでも浅く呼吸を繰り返し、何とか胃を落ち着かせた。

だが、どうやらそんな僕の様子に我慢ならなくなつたのか、再度、先程よりも少し強い口調で話しかけてきた。

「お前、本当に大丈夫か？」

「——え？」

思わず、訊き返す。

態々英語で話しかけておいて、日本語で問い直すとはどういうつもりだ。こつちが日本人だと解つていながら敢えてそうしたのだとすれば、この男も中々に性格が悪い。

気が変わった。

悪態の一つでも吐いてやるつもりで、俯かせていた顔を上げ、不屈き者の方へと首を回した。

「——……………はると陽人？」

しかし、その顔は僕の見知つたものだった。

「熱でもあるんじゃないのか？ 真つ青だぜ、光」

人当たりの良さそうな笑顔とは裏腹に、小馬鹿にするような声でそう問うたのは、僕にとつては数少ない友人の一人だった。

かげやま
影山陽人。

家が近所で、小中と同じ学校に通い、中学では同じ部活でエースを競いもした。恐らく、僕にとつて一番親しい友人だと思う。しかし、高校は別の道を行き、最近疎遠になっていたのだ。

僕は久しぶりの再会を嬉しく思いつつも、記憶の中の彼と現在の彼とのギャップに少なからず驚いていた。

「さつきも言ったけど、大丈夫、問題無いさ。もう少しこうしていれば自然と治まるよ。それより陽人、お前こそどうしたんだ、その髪？」

中学時代は確かに黒かったはずの髪の毛が、明るい茶色に染まっている。

「何だ？ 不良にでもなったのか？」

咄嗟に思いついたのは、そんな月並みな問い掛け。

「んなわけあるか。というか、今時髪染めたくらいで不良呼ばわりするのは田舎の婆ちゃんくらいだよ」

「悪かったな、年寄り臭くて」

不貞腐れてそう返す。

僕はまだ、お前と同じ十七歳だぞ。

「にしても、お前は全然変わらねえな。相変わらず滅茶苦茶可愛い！」

ぼん、と陽人は僕の頭に手をやると、わしやわしやと撫で始める。

「止めんか！」

頭一つ分ほど差が開いてしまった身長。しかし感傷は頭の隅に追いやつて、頭に乘せられた手を払い除ける。

「デカい声出すなよなあ〜注目されるぜ？」

「うっ」

周りを見回すと、確かにちらちらとこちらを窺い見ている乗客が何人かいる。

ああ……もう、知らん。

「はあ……」

……あれ？

小さく吐息を漏らし、乱れた髪を手櫛てぐしで整えていると、今更ながら何故陽人がここにいるのかという疑問が湧いて出てきた。

「ところでお前部活はどうしたんだ？ この時間なら、普段はまだやつてるんだろ？」

「ああ、今日はたまたま野球部とグラウンドの使用時間が交代になってな。軽くランニングだけしてお開きになったんだ」

なるほど。確かに改めて見れば、本人の言った通り部活帰りらしく、陽人は上下共にウインドブレーカー姿だった。

対して僕はといえば、まだ十一月上旬ということもあって、薄手のコートに青のジーンズ姿だ。制服が存在しないうちの学校は、基本的には私服登校なのだ。

「そっか。……まだサッカー続けてるんだよな、お前は」

「当たり前だろ、スポーツ推薦で入ったんだから。それに何たって、先輩が引退したせいで今は俺が部長だからな」

どこか得意気にそう言ってから、陽人は何故か苦笑する。

「でも、お前がうちの学校に来てたら、俺が部長つてことはなかったと思う。正直言つて、俺に人を纏めるのは荷が重い」

「……何かあったのか？」

「いや……まだ、何も無い。でもお前も知ってるだろ？俺がコミュニケーション壊滅的だつてこと」

「ああ……まあ、そうだな」

……まだ治っていないのか。

虐め。ごく有り触れたこの言葉は、どんな場所にでも転がっている。それは学校、或いは職場……若しかしたら、本来は安まるべきはずの家庭の中に、ということも残念な

がらあるかも知れない。

不思議なことに、どれ程優れ、また善良な人間であつたとしても、所属する集団が虐めを始めれば、多くは自分も参加、乃至は見て見ぬ振りをする。何故ならば、ごく普通の人間であろうとも、特殊な地位や肩書きを一度与えられれば、その役割に合わせて行動するようになるからだ。

嘗て、アメリカのスタンフォード大学でこんな実験が行われた。新聞広告などで求人募集した一般人二十一人を看守役と受刑者役にそれぞれ別け、模型の刑務所内で二週間過ごす、というものだ。だが、実験はたった六日間で中止となる。看守役が次第にエスカレートし、禁止されていた暴力まで受刑者役に振るい始め、遂には受刑者役の家族達が弁護士を連れて中止を訴えたからだ。

実験の指導者であつた心理学者のフィリップ・ジンバルドは会見を開き、こう釈明した。自分自身もその状況に飲まれてしまい、危険な状態であると認識できなかつたのだ、と。

結果としてジンバルドは、実験終了から約十年間、それぞれの被験者をカウンセリングし続けることになる。

スタンフォード監獄実験と後に呼ばれることになったこの実験から解つたことは、権力への服従と非個人化だ。

僕は、この権力への服従と非個人化が、虐めが行われている集団にも発生しているのだと思う。弱者を虐げる悦びと、状況という名の空気に飲まれる加害者と被害者、そして傍観者。こう考えると、スタンフォード監獄実験と虐めは、根本的には何も違いがないことが解る。そして、たった六日間で十年間ものカウンセリングを必要としたこの実験と虐めに根本的な違いがないのだとすれば、一体虐めの被害者の心の傷は、完治するのにどれ程の時間を要するのだろうか。

そして、陽人も小学生の頃……といっても、確か三年生から四年生までの二年間だったはずだが、クラスで虐めを受けていた。スポーツ万能で勉強も出来、おまけに容姿も良い——まるで物語の主人公のような彼への嫉妬が、小学生ながらに根深かったことをよく覚えている。ある意味、これ以上の標的はいないだろう。

そんな虐めの遠因は兎も角、切っ掛け自体は取るに足りない、ほんの些細なことだったと思う。だが、誰かを陥れる理由など、その程度のことでは充分なのだろう。結局、陽人に対する虐めは五年生のクラス替えまで続き、彼の心に深い傷を負わせることになった。

結果として、陽人は人と上手く話せなくなった。人と目を合わせると、不意に当時の恐怖が甦るのだという。

スタンフォード監獄実験の被験者達がそうであったように、一度破壊された自意識は

そう簡単に治りはしない。

「もし治るとすれば、それは——」

時は、苦しみや争いを癒す。何故なら人は変わるからである。もはや同一人どういっぴんではないのだ。

「は？ 何か言ったか？」

「いや、何でも無い。只の独り言だよ」

頭に浮かんだ一節を、しかし口には出さずに打ち消した。

「そうか、ならいいけ——げっ」

言いかげ、突然呻き声を上げる陽人。

「どうした？」

尋ねながら、陽人の視線を追う。

その先には、くすんだ金髪と茶髪の——僕とはどうあつても相容れないであろう同い年くらいの私服の女子が二人。

どうやら向こうも気付いたらしく、こちらへ駆け寄ってくる。

「やっぱりいゝ影山君じゃん！」

「どしたの？ まだ部活のはずでしょ？」

「え？ ああ、いや……」

言い淀み、明らかに困惑している陽人。対して金髪と茶髪は媚びるような笑顔。
ああ……何と無くだけど、察した。

「野球部と練習時間が入れ替わったんだ。だから、今は一応部活帰り」

陽人が愛想笑いと一目で解る笑みを浮かべて事務的にそう言うと、それを知ってか知らずか彼女達の目の色が変わる。

「あー！じゃあさ、今から三人でカラオケでも行かない？」

「良いね、良いね！ いこいこ！」

何が、じゃあなのか。

まるで僕のことなど目に入っていないかのような二人を醒めた目で見てみると、向こうも今やつとこちらに気付いたといわんばかりに僕へと視線を向けてきた。

「ところで影山君……その人、誰？」

僕に対し、あからさまな敵意を向ける声。

困惑した様子の陽人が答えられずにいると、片割れが結論を口にする。

「あれじゃない？ きつと道に迷って影山君に教えて貰ってたんだよ」

「うわあ！ 影山君優しい〜!!」

電車の中で道を探ねる奴がいてたまるか。

やはり彼女は、僕が会話の内容を理解していないと思っっているらしい。

宜^{むス}なるかな。只、僕に誤解を解くつもりはない。

「陽人、こちらの二人は？」

僕は敢えて訛りを入れたりはずせぬに、普通に日本語を話す。たったそれだけで、二人は明らかに狼狽する。案外、根は素直なのかも知れない。

一方陽人とはといえば、僕の普段より幾ばくか高い声、そして口調に目を白黒させる。

「あ、ああ……白井さんと菊池さん。俺のクラスメイトだよ」

なんだ、クラスメイトの名前、ちゃんと覚えてるんじゃないか。

しかし、やはり陽人と彼女達が特別親しい——少なくとも放課後に遊びに行く程度の仲——という訳ではないらしい。というか、明らかに迷惑そうだしね。

続行、と口の中で呟いてから、柔和な表情をつくり二人に向かって会釈する。

「初めまして、わたしはLys^{リス}つて言います。春から陽人の親戚の方の家にホームステイさせて頂いているんです」

「「は？」」

僕の狂言に、三人分の疑問符が重なる。

……いや、そこでお前まで驚いちゃ駄目だろ。

「今日はこの後、陽人に東京の案内をして貰う約束なんです」

ニコリと微笑み、更に駄目押しで陽人の腕に抱きついた。

「な!？」

「え? 何これ……え?」

事態を未だ把握出来ていないらしい陽人は只々驚いているだけだが、二人の表情は明らかに異なっている。

『次は——降り口は——』

さあ、最後の仕上げだ。

「もう、恥ずかしがっちゃって。——そういうことなので、お二人には申し訳ありませんが、陽人はこのまま貰っていきますね」

言い終えると同時、揺れと共に車両が止まる。

「それでは、お二人とも失礼します。さ、行こつ」

満面の笑みでそう言つて、見せ付けるように陽人の腕をがっちりホールドしたまま電車から飛び出し、勢いそのままにホームをひた走る。

途中、ちらりと背後を伺い見たものの、流石に追ってくる気配はなかった。

それから人混みを縫うように駆け、改札を出たところで僕らはやっと足を止めた。

息が上がっていないが、僅かに額が汗ばみ、前髪が張り付いている感覚がある。思えば、全力で走ったのは結構久しぶりかも知れない。

「はあく……疲れた」

それにしても、最後のあの二人……もの凄いい形相でこちらを睨んでいた。目論見通りとはいえ、二度と顔を合わせたくはないな。

そんなことを考えていると、何故か青い顔をしている陽人が、いきなり僕の両肩を掴んで揺さぶり始める。

「ひ、光だよ……な？　決して俺の親戚ん家に居候してるLysなどという外国人じゃないよな!」

「落ち着け!　　というか痛いから!」

手はかなり力が入っているのか、掴まれた肩が痛い。

「わ、悪い!!」

「うわっ」

バツと音が出そうな勢いで離すものだから、今度は踉蹌よろよろけてしまう。しかし、それでも転ぶまいと踏ん張り上半身を勢いよく前へと傾けた。が――

「ぶっ」

勢い余って陽人の胸へと顔面から突っ込んでしまった。

「痛いたったあ……!」

鼻……鼻打った……。

鼻を押さえ、若干涙目になりつつ後退る。

「だ、大丈夫か？」

「ううっ……」

幾らサッカーを辞めて久しいとはいえ、ここまで足腰が衰えているとは思わなかった。情けなくて陽人の顔をまともに見れない。

……こうなったら、ジョギングでも始めようかな。

……

と、兎に角！ 今は陽人が何かコメントを出す前に、強引にでも話を元に戻す。

「Lysってのはデンマーク語で光って意味。向うは僕のこと外国人……しかも女の子だと思っただけだったから、それに合わせたんだ」

「……焦ったぜ、遂にお前が壊れてしまったのかと」

「遂にとって何だよ？」

まるで、前々から僕がどうにかなると思っていたかのような口振りじゃないか。

「こ、言葉の綾ってやつさ」

「絶対嘘だ」

「……………」

尚も胡乱気な眼差しを向け続けると、陽人はやがて観念したのか降参だとばかりに両手を挙げてみせる。

「はあ……悪かったよ、けどまあ、正直助かった。俺、あの二人……苦手でき」

「見れば解るよ。余りにもしつこい様なら、いつそ僕のことを彼女とでも言っておけ。その為に、あれだけ敵愾心を煽ったんだからさ。我ながら策士だろ？」

「——だから女は怖いよな」

誰が女だ、誰が。

反射的にそう思ったが、どうやら陽人は僕に対して言つた訳ではないらしい。

真つ直ぐ陽人の顔を見詰め、耳を傾け次の言葉を待つ。

「いや、女だけじゃない。何て言うかさ……怖いんだよ。少し前まで悪意を向けられてたのに、何時の間にか好意に変わつて。だけど、これも所詮一時的なもので、また悪意に変わるんじゃないかって。期待した分だけ、裏切られる時は辛いもんだろ？」

「陽人……」

それは、僕にはどうすることも出来ない。解決してやることも、力を貸すことも。

それがもどかしくて、思わず齒噛みする。

「でもさ……お前が全然変わつてなくて、嬉しかった。昔から、お前だけは何も変わらな
い。……お前だけは、俺の知つてるまま変わらなくてくれ」

そんな僕を余所に、子供ような無邪気な笑顔を浮かべる。そして——
目と目が合う。逸らされていた視線が交錯する。

それは友情の証明か。それとも、もつと別の何かなのか。

「何だよそれ、告白みたいだぞ」

「っ……な!? ……お前なあ!!」

どちらにせよ、僕はそれを笑い飛ばす。

「変わらない物なんて、この世界には存在しない。お前も、お前の周りも、これからもまだまだ変わっていく。僕だって、勿論例外じゃない。それでも、それを受け入れて生きていかなきゃいけないんだ」

そして、それが癒しになる。きつと、お前は立ち直れるよ。

そんな祈りを込めて微笑んだ。

すると、陽人は一瞬惚けたような顔をして、何事かぶつぶつと呟き始めた。

「ホント、昔から変わらねえよ、お前は。お前のそういうところが……」

「は?」

「いや、何でもないさ。……取り敢えず、今回は本当に助かった」

そう言うのと、陽人は仕切り直すようにフツと鼻を鳴らし、とんでもないことを言い出す。

「ところで話は変わるが、来週の日曜日俺ら試合なんだ。結構デカい大会でさ。……それで、もし俺らが優勝出来たら、その暁には」

「その暁には？」

「お前がメイド服を着て、『……ご主人様……わたし、ご主人様のことが……好き!』と俺の耳元で囁いてくれ」

「……………は？」

「ごめん、よく聞こえなかった。

いや、聞こえはした。だが、恐らくは幻聴の類だろう。そうに違いない。

「だーかーら! お前のさっきの演技力をフルに使って『……ご主人様……わたし、ご主人様のことが……好き!』と——」

「阿呆か!!」

残念ながら幻聴ではなかったらしい。今度こそ怒りに任せ、右ストレートが陽人の顔面に吸い込まれる——と自分でも思ったものにも関わらず、寸前で急停止する。

……やはり、僕の中の理性の番人は、度し難い程に頑ななようだ。

けれども、それで良いのかも知れない。きっと相手を殴るときは、自分だって同じくらい痛いのだから。

「危ねえなあ……別に減るもんじゃないし良いだろう? それにさっきは」

「それはそれ、これはこれだ。というか、僕がそんなこととして嬉しいのか? 解つてるとは思うけど、男だぞ、僕は」

「大丈夫だ、問題ない」

いや、問題しかないだろ。そもそも何故こいつはメイド服をチョイスしたんだ……。生憎、僕に女装癖はない。女物のコスプレなんて絶対に嫌だ。嫌だけど……。

もし、宣言通りキャプテンとしてチームを引つ張り見事優勝することが出来れば、嘗て失ってしまった自信を取り戻すことも可能なのではないか。そして、今僕がメイド服を着てやると約束することで、それが少しでも陽人のモチベーションの向上に繋がるのだとすれば――

「はあ………」

「あつ！ おい！」

駅舎の中を出口に向かって早足で歩く。後ろは振り返らない。足音で付いて来ているのが解るからだ。

そして、扉を潜りようやく外へ出たところで、回れ右の要領でぐるりとターンして陽人と対面する。

「解った、着てやるよ」

「は？……え？ マジ？」

不承不承という体^{てい}で大仰に頷いてみせると、女装しろなんて無理難題を注文をしてきた厚顔無恥が目を見開いた。

呆れた奴だ。……自分で頼んでおいてそこまで驚くか。

「何だよ、嬉しくないの？ それとも冗談だった？」

眉根を寄せて仰ぎ見ながらそう尋ねると、陽人はブンブんと音がしそうな勢いで首を左右に振る。

「いや、滅相もない！」

「ふうん……まあ、なら頑張るなよ」

「お、おう！ 超頑張る!!」

……良い返事だ。

軽い頭痛を覚えながらも、僕らは肩を並べて帰路を歩き始めた。

第1話 剣戟の世界

杉並区の閑静な住宅街。そのうちの一軒。周りの住宅と比べてみるとやや見劣りするものの、キッチンと手入れのされた小さな庭まである。ここが、僕が生まれてから約十七年間を過ごした我が家だ。

「なあ、お前もうサッカーは——」

隣を無言で歩いていた陽人が突然口を開き、僕は最後まで聞かずに牽制する。

「は? ……ああ、来週の大会なら応援に行つてやらないこともないよ」

「いや、そうじゃなくてだな……。もう、サッカーやらないのか? ……勿体無いだろ。」

お前中学の頃は——」

「もう終わったことだよ。少なくとも、もう遊び以外でやるつもりはない」

そうやって軽くあしらうと、陽人は顔を曇らせた。

「まあ、そうか……。そうだよな。俺らも来年は受験だし……。今更部活つてのもアレか」

自分を納得させるように陽人はそう呟いてから僅かに表情を緩ませた。

「ならさ、久しぶりに今度どっか遊びに行かないか? 別にゲーセンでも映画でも何で

もいいし——つて、んな嫌そうな顔すんなよ」

「何が楽しくて男同士で映画観に行かないといけないんだよ」

ゲームセンターはそもそも論外だ。ああいう所にいると頭が痛くなる。

「いや、折角久しぶりにこうやって話せたからさ。また疎遠になっちまったら、何と無く嫌だろ？」

「——はあ……解ったよ。場所はそちに任せる。適当に決めてくれ。ただし五月蠅くない所で」

「OK決まったら連絡——って、そうだった。来週は俺らが優勝してお前にメイド服着てもらうんだったな。場所はその時でいいか」

陽人が鳥頭であることに僅かに期待していたが、流石に十数分前のことを忘れるほど脳細胞が壊死しているわけもなかった。

仕方がない。男に二言は無いということだし、今更撤回するのもアレだろう。

「というか、どつから来るんだ？ その自信は」

「日々の積み重ね……というのは建前で、部長の俺が優勝する気じゃないと端から駄目だろ」

成る程、気合いの問題らしい。

「まあ、精々一回戦敗退とか目も当てられないようなザマだけは晒さないように頑張ってくれ給え、部長殿」

玄関までの短い道のりをゆっくり歩きながら、背後に向かってエールを送る。

「後になって約束は無しだとか言うなよな！」

そんな返答を鼻で笑って受け流し、僕は家の中へと入った。

そして、そこには待ちかねていたように、僕とは違って正真正銘の金髪碧眼の女性が立っていた。

「お帰りなさい、光」

「ただいま、姉さん」

そう、姉である。

三雲茜。

僕とは二つ違いで、今年の春に無事高校を卒業。現在は良く言えば主婦、悪く言えばニートである。

「ご飯にする？ お風呂にする？ それとも……わ・た・し？」

「……………」

一体何を思ってこんな質問をしたのだろうか。にこやかな笑みを浮かべるその表情からは真意は窺い知れない。

どう答えるのが正解なのだろうか。乗ってあげるのが筋なのだろうか。

「じゃあ姉さんで」

「ごめんごめん。もうご飯できてるから、速めに上着脱いで手洗い済ませちゃってね」
「解ったよ」

素直に返事をして、玄関からリビングをそのまま横切って洗面所に入る。

洗面台の鏡に映るのは、姉を少し幼くしたような自分の顔。姉さんに比べれば、少し目元が涼しいかもしれない。しかし、それらを差し引いても僕らはよく似ている。

だが、表情は対照的だ。

基本的に仏頂面で、普段からどうでもいいようなことばかり考えている僕とは違い、姉さんは基本的にはいつも笑みを絶やさない。弟の僕から見ても、そんな彼女の笑顔は魅力的だと思う。だからこそ、解せないこともあるのだ。

姉さんは、どうして進学も就職もせずに主婦の真似事をしているのだろうか？

口には出さないけれど、そんな疑問が頭の隅にいつもある。

どこか老成した雰囲気のある姉だが、それでもまだ成人前なのだ。家で家事などするよりも、外で友達と遊ぶ——いや、それこそ彼氏でもつくってデートしたい、という気持ちの方が強いのではないだろうか。

僕がそんなことを考えるのは余計なお世話なのかもしれない。でも、考えずにはいられないのだ。

姉がもしそう思っているのなら。そう思っているのにこうしているのは……僕が、姉

さんを縛り付けてしまっているのではないかと。

「はあ……—止めよう」

手の泡と一緒に余計な考えも水に流す。

コップに注いだ水でうがいを済ませ、リビングに戻る。そして、上着を置きにリビングにある階段から二階へ上がる。

階段を上り終えた先には四つの扉。手前から見て階段側の左の扉の先が僕の部屋だ。

「あれ……？」

小さく疑問の声を上げて、僕は首を捻った。

何故か、僕の部屋の扉が半開きになっていた。

自分の不注意だったのだろうか。でも、朝出かける際にちゃんと閉めたという記憶はある。

「ま、いいや」

まさか泥棒が待ち構えてるなんてこともないだろうし、姉さんが部屋の掃除でもしたのだからと納得する。

扉を軽く押して、部屋の中に入る。

室内は——当然少女趣味なんてこともなく、青を基調とした清涼感のあるものだった。

自分でも整理整頓は日頃からしているつもりだけれど、埃一つ落ちていないのは姉さんのお陰だろう。

そして、ふとベッドに視線をやると、扉が半開きになっていた理由が解った。

「何やってるのさ、こんな所で」

人差し指で頭を突くと、彼女は尻尾をブンツと振るった。

白い毛並みを他人のベッドで丸めているのは、我が家の飼った猫のシロだった。白いからシロ。なんとも単純である。

ダウンジャケットをハンガーにかけ、クローゼットに仕舞う。

そして、昼食を食べるために下へ下りようと部屋を出ると、シロが小走りで追ってくる。

『にゃわあ〜ん』

甘えるような声を出すと、彼女は僕の足に頭突きし始めた。

構って構って〜とか言っているんだろ？ なあ、と思わず口元が綻びる。

「後で遊んであげるよ」

通じるわけもないのに話しかけてしまう。愛猫家の悲しき性だろう。

階段を下りる微かな僕の足音に合わせるように、トテトテと小さな足音が続く。

恐らく、自分は今、とても気持ち悪い顔をしているに違いなかった。

二〇二二年十一月六日日曜日

『♪♪♪』

「ん〜……」

『♪♪♪』

「ん〜……うにゆ」

変な声が出た。

僕はベッドで布団に包まれたまま、テーブルの上のスマホに腕を伸ばす。

「届かな——もうちよつと……」

『♪♪♪』

「うっ……届いた」

『♪——ピッ』

「はあ……」

ベッドから上半身を出し、ダランとぶら下がってる状況は、とても他人には見せられない。

——これならちゃんと起き上がれば良かったよね、と後々ながら後悔する。

「ふあ〜……眠い」

欠伸を一つ、床に立つ。

壁にかけられた時計を見ると、いつも通り、午前七時——……少し過ぎているが、誤差の範囲だろう。

「光く起きたく？」

間延びした声がドアの向こう側から聞こえる。

「起きたよく」

「朝くはんできてるから速めに下りてきてねく」

部屋から出て階段下りると、鼻腔に香ばしい匂いが広がった。首を回すと、キッチンに姉が立っているのが見えた。

「おはよう、姉さん」

「おはよう、光。……また、凄い寝癖ね」

「……やっぱり？」

「洗面所で先に顔洗ってきなさい」

「解ったよ」

言われた通り、洗面所で顔を洗う。

冷たい水が、まだ半分寝ていた脳を覚醒させる。

そして、面倒ではあるが寝癖を直すためにブラシで梳く。

十分ほどの格闘の末に、なんとか人前に出ても恥ずかしくない見た目になった。
「終わったよ」

リビングに戻り、そう声をかける。

姉さんは律儀に食卓テーブルで、朝ごはんに手を付けずに待っていた。

「あれ？ 父さんは？」

「まだ寝てるわよ。まあ、日曜日だし、寝かせといてあげましょ」

「あはは……」

父さんは普通のサラリーマンだ。

でも、勤め先が大手電機機器メーカー《レクト》なだけあって、給料はそれなりに良いらしい。

しかし、中間管理職であるせいか日頃の疲れもあって、休日は昼まで寝ているのが父さんのデフォだった。

「さっさと食べちゃいましょ」

「そっだね」

「いただきます」

今日の献立はスクランブルエッグにベーコン、トーストにサラダ、スープ……。あの香ばしい匂いの正体は、カリカリに焼かれたこのベーコンだろう。

「ご飯よりもパン派の僕だけれど、朝は味噌汁から始めたい……なんて思うのは贅沢だろう。」

朝食を食べ終える頃には、時計の短針が八時を差していた。

あと五時間で、あの世界に戻れると思うと胸が弾む。

「早く一時にならないかなあ〜」

†

昼食のホットケーキを食べて自分の部屋に戻ると、ちょうど午後一時になっていた。

僕は着ていたパーカーを脱いで、上下スウェット姿になると、ベッドの上に横たわった。

頭には、既にナーヴギアが被せてある。

「ふう〜」

なんだか緊張する。

——僕は目を閉じ、魔法の言葉を唱えた。

「リンク・スタート！」

視界に様々な色のラインが流れ、次々と設定画面が【OK】の表示と共に消えていく。

——言語は日本語。

ログインアカウントのIDとパスワードを入力。

ログインが完了し、キャラクター登録画面が表示される。

そこには、「βテスト時に登録したデータが残っていますが、使用しますか？」の文字。その下にはプレイヤーネーム【T w i n k l e (M)】、更にその下に【Y E S】と【N O】。

【N O】を押せば新たにアバターを作成する為の画面にいくのだろうが、僕にそのつもりはない。

迷わず、【Y E S】を押す。

すると、灰色の背景に黒い文字で歓迎の文章が。

【W e l c o m e t o S w o r d A r t O n l i n e !】

視界が青い光芒で弾け、次の瞬間には、真っ暗になっていた。

——瞼の感覚。確かな鼓動を感じる。

僕はそつと眼を開く。

眼の前に広がったのは、多くのプレイヤーが集った、第一層《はじまりの街》の中央広場だった。

「戻ってきたんだ——この世界に！」

口から出たのは、聞きなれた《女の声》ではなく、ボイスエフェクタによって変声した少年の声だった。

戻ってきたんだ。

無限の蒼穹に浮かぶ鉄の城——《浮遊城アインクラッド》に。

剣戟の世界へ！

↑

地面から拾った小石を握り、肩の上でぴたりと構えた。ポストモーションをシステムが検出し、手の中の小石が仄かな緑に輝く——ソードスキルが発動したのだ。

「えいッー！」

掛け声とともに、殆ど自動的に腕を振る。

緑のライトエフェクトを纏った石ころは、レベル1の雑魚Mobである青イノシシ……正式名《フレンジーボア》にしっかりと命中した。

「プギイッ」

《投剣》基本技《シングルシュート》。

HPを半分ほど減らしたイノシシは、こちらに向かって突進してきた。

「おっと」

僕はそれをするりと躲す。

そして、左腰の鞘から《片手曲刀》カテゴリーの《スモールカッタラス》を引き抜く。

——カッタラスを選んだのは、昔見た海賊映画の主人公が使っていて、格好良かった

のを覚えていたからだ。

腰を落として、右肩に担ぐように剣を持ち上げる。その動作をシステムが認識し、刀身がオレンジ色の光で輝く。

「せいッー！」

掛け声とともに、滑らかな動作で地面を蹴った。心地良いサウンドが鳴り響き、刃が炎の色の軌跡を宙に描いた。

《曲刀》基本技《リーバー》だ。

「プギーッー！」

見事に攻撃が命中し、残りのHPを失った青イノシシは、青いガラスのような破片となって消滅した。

目の前にウインドウが開く。獲得した経験値とこの世界のお金である《コル》、それからドロップアイテムが表示されていた。

[Result Exp24 Col30 Items2]

ドロップアイテムは今更確認するまでもない。《フレンジーボアの肉》というアイテムだ。

——僕は今、《はじまりの街》にいるNPCから受けたクエストの真っ最中だ。

クエスト名は《イノシシの肉が食いたい》。内容は《フレンジーボアの肉》を十個持つ

てきてほしい、というものだ。

クエストの内容は多種多様だが、大きく別ければ数種類に分類される。

序盤のクエストは《採集》《狩猟》《討伐》といった具合だが、今回僕がやっているクエストは《狩猟》に分類される。

クエストの利点は、《フレンジーボアの肉》みたいに自分で料理するかNPCショップに売るかしかできないようなアイテムを報酬金と引き換えに処分できることだ。多くの場合、クエストクリアの報酬金の方が、同じ個数のアイテムを売ったときのお金よりも多い。

この手のクエストは何度でも受けられるので、取り敢えずの目標は十回分の百個程度。

「あ、見つけ」

少し離れた位置に、青イノシシがリポップした。

僕は、《シングルシュート》↓《リーバー》という同じ戦術を何度も繰り返し、数時間かけてリポップしては、青イノシシを屠っていった。

もう、陽が沈みかけている。

アイテムが必要個数溜まったことを確認するため、《メインメニューウィンドウ》を開いた。

「あれ？」

何だろう。違和感がある。

——気のせいかな？

気持ちの悪い違和感を抱えたまま、僕はアイテムストレージをタップして、所持品を表示させた。

【フレンジーボアの肉×114】

必要個数は十分に満たしている。

僕はクエストを完了するため、『はじまりの街』へ走り出そうとした。

——その時だった。

突然、リンゴーン、リンゴーンという鐘の音のような大ボリュームのサウンドが鳴り響き、僕は飛び上がった。

「うわっ!？」

驚いているうちに、身体をブルーの光の柱が包んだ。

視界が徐々に薄れ、草原の風景がみるみるぼやけていく。

——え？ これって《転移》だよな？ ……でも何で……？

疑問を他所に身体を包む光が一際輝いて、僕の視界を奪った。

第2話 神の宣告

身体を包んでいた眩い光が消え、僕は瞼を開けた。

「え……？　んこって……」

目の前に広がった光景に、只々驚き、呆然と眩いた。

僕が立っていたのは、先ほどまで狩りをしていた《はじまりの街》外周の草原ではなく、舗装された石畳——ログイン場所でもある、はじまりの街中央広場だった。

しかし、どこかおかしい。β時代はともかく、今日ログインした時と比べても、何かが変わっている。そして、その違和感の正体に気が付く。先ほどは盛大に流れていたはずのNPC楽団の演奏が止んでいるのだ。

訳が解らず立ち尽くしていると、同じように転移してきたプレイヤーで、大広場は見る間に埋め尽くされていく。

この分だと、現在ログインしている全プレイヤーがここへ集められているのではないだろうか。

……一万人。

途方もないその数に、僅かに目眩を覚える。

だけど、プレイヤーを一箇所に集めて、一体何を始めようというのだろうか。

「オーブニングイベントでもするのかな？」

しかしだとすれば、転移の時にアハウンスの一つも流すんじゃないだろうか。

疑問に思いつつも、そのうちGMが出てくるであろうから、黙って待つことにする。

——と、ざわめく周囲から、一際大きな怒声が耳に届く。

「ふざけんな!!」

「GM出てこい!!」

「早くログアウトさせろ!!」

早くログアウトさせろ……?」

どういう意味だ? 自分でログアウトすればいいじゃないか。——……まさか。

嫌な予感が駆け巡るが、否定したい気持ちの方が強い。

右手の人差し指と中指を真っ直ぐに揃えて掲げ、真下に振る。それが、《メインメ

ニューウインドウ》を開く為の動作だ。

たちまち鈴を鳴らすような効果音とともに、紫色に発光する半透明の矩形が現われ

る。

メニユーの一番下に、目当てのボタンはあるはずだ——いや、あるはずだった。

「……な、無い。ログアウトボタンが……消えてる?」

ログインした時は、確かにそこにあつたはずの「LOG OUT」が消えていた。どういふことだ？ バグか何かか？

それにしたつて、初日にこんな不具合を起こすものだろうか。……ログアウトできないなんて、今後の運営に関わってくる大問題じゃないか。

ますます混乱するが、疑問に答えてくれるはずのGMは未だ現われない。

「——あつ……上を見ろ!!」

そんな中、広場の喧騒を割つて誰かが叫んだ。

僕と周囲のプレイヤーも、その声に導かれるようにして上を見上げる。

「な、何だよ……？ あれ……」

異様な光景が広がっていた。

上空百メートル。

第二層の底で覆われた天蓋を、真紅の市松模様が見る間に染め上げていく。

【Warning】 【Systeme Announcement】

遂に、空が全て真っ赤に染まった。二つの文字に埋め尽くされて。

「え……？」

空を埋め尽くした真紅のパターンの中央部分。その隙間から、どろりと粘度の高そうな赤い液体が染み出し、流れ出た。それはまるで血液のようで、生理的嫌悪感を覚える。

液体はやがて空中で一つに固まり、ローブを着た人の形を成した。

βテストの時に何度と見た、GMの姿だった。

でも、何故か顔が無い。

「……あれってGM?」

「何で顔が無いんだ?」

囁き声が、そこかしこから聞こえる。

顔の無いGMは、そんな喧騒を遮るように、両手をゆつくり、大きく広げて声を発した。

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』

わ、私の世界?」

そりや、GMにしてみれば自分達が管理しているんだから“私の世界”なんだろうけど。だけど、それなら“私の”ではなく“私達”の方が正しいんじゃないか?

『私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールすることのできる唯一の人間だ』

「か、茅場晶彦!?!」

——茅場晶彦。

《ナーヴギア》の基礎設計者にしてSAOの開発ディレクター……アーガスを業界ナンバー1にまでのし上がらせた、天才プログラマーだ。

しかし、彼は大のメデイア露出嫌いである。有名だったはずだ。それなのに、自らオープンイベントを？」

『諸君はメインメニューから、既にログアウトボタンが消滅していることに気付いていると思う』

GMは——いや、茅場晶彦は腕を振って、実際にメインメニューを開いてみせた。

『しかし、これはゲームの不具合ではない。繰り返す。不具合ではなく、《ソードアート・オンライン》本来の仕様である』

仕様だって……？ 一体、何を言っているんだ？

『諸君は自発的にログアウトすることはできない。また、外部の人間の手による、ナーヴギアの停止或いは解除もありえない。……もしそれが試みられた場合、ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが、諸君の脳を破壊し、生命活動を停止させる』

余りにも常軌を逸したその発言に、しかし、去年の化学の授業中の雑談が、否が応にも思い出される。

高出力マイクロウェーブによる脳の破壊。それはつまり、電子レンジによるマイクロ波加熱と同じ原理だ。

電子レンジによる加熱は、“水分を多く含む材料”に対して特に有効。そして、脳の水分量はおよそ八十五パーセント……つまり、八割五分が水でできている。因みに人体

の中で、脳は最も水分量が多い。それは即ち、人体の中で最もマイクロ波で熱するのに適した部分であることを意味する。

そうやって知識が及び、理性では理解しているにも関わらず、感情がその結論を拒む。ナーヴギア……ゲーム機器による脳の破壊。それが、現実には可能であると。

「な、何言ってるんだよ。……流石に演出が過剰すぎるよ」

口を吐いて出たのは否定の言葉。

だけと言葉とは裏腹に、僕の声は恐怖で震えていた。

ざわざわと喧騒が再び起こるが、茅場が再び口を開くと、それもまた収まった。

『——残念ながら現時点で、プレイヤーの家族、友人などが警告を無視し、ナーヴギアを強制的に解除しようと試みた例が少なからずあり、その結果二百十三名のプレイヤーがインクラッド及び、現実世界からも永久退場している』

「二百十三人……!?!」

それほどの人間が、こんな短時間で死んだというのか。それではまるで、大規模なテロじゃないか。

そして、もしそれが仮に事実だとすれば、死亡者の中にβ時代の友人が含まれている可能性だつてゼロじゃない。

「信じない……僕は、僕は信じないぞー」

だけど、幾ら否定したところで、その声が茅場に届くことはない。

茅場が左手を上げる。すると、GMのアバターの周りにニユースサイトやテレビのニユース番組らしき画像が幾つも浮かぶ。

『ご覧の通り、多数の死者が出たことも含め、この状況をあらゆるメディアが繰り返して報道している。よって、既にナーヴギアが強制的に解除される危険は低くなっていると
言つてよからう。諸君らは、安心してゲーム攻略に励んでほしい』

ゲーム攻略だつて？ こんな状況で何を言っているんだ……？

『しかし、十分に留意してもらいたい。今後、ゲームにおいてあらゆる蘇生手段は機能しない。ヒットポイントがゼロになった瞬間、諸君らのアバターは永久に消滅し——同時に、諸君らの脳は、ナーヴギアによつて破壊される』

この世界で死んだら、現実の僕も死ぬ……？

そこで思い出す。茅場が以前、数少ないインタビュで発した言葉を。

「これは、ゲームであっても遊びではない」

つまり、現実の生死を賭けた、本当の意味での「デスゲーム」。

「おかしいよ……そんなの」

そもそも前提が狂っている。RPGっていうのは、何度も生き死にを繰り返して、プレイヤースキルを上げていくゲームなんだ。

それを、ノーコンティニューでやれというのか。それも、現実の死と隣り合わせの状況で。

そんなもの、誰が馬鹿正直にやるといふのだ。

『諸君らが解放される条件は只一つ。このゲームをクリアすれば良い。……現在、君達がいるのはアインクラッドの最下層、第一層である。各フロアの迷宮口を攻略し、フロアボスを倒せば上の階に進める。第百層にいる最終ボスを倒せばクリアだ』

第百層だって……？

二ヶ月間のβテストの間に、六層までしか上がれなかつたんだぞ？ それも、死んでも《黒鉄宮》の《蘇生者の間》から復活できる条件で、だ。

『それでは、最後に、諸君にとってこの世界が唯一の現実であるという証拠を見せよう。諸君のアイテムストレージに、私からのプレゼントが用意してある。確認してくれ給え』

「……プレゼント？」

殆ど反射的に腕を振り、メニュー画面を開いた。メニューアイコンの中からアイテムストレージをタップし、表示させる。

——そこにあつたのは、《手鏡》という名称のアイテム。

「手鏡……？」

疑念を抱きつつも、タップして実体化させる。

両手で掴み取ったそれは、何の変哲もない只の手鏡だった。

……これがプレゼント？

鏡には、βテストから継続して使っている、平凡な男の顔。

「えっ——!?!」

突然、視界が眩い光で奪われた。

だけど、それもほんの数秒のことで、なんとか鏡を落とさずにすんだ。

「な、何だったんだ……?」

僕は何気なく、もう一度鏡を見た。

「え……。どうして?」

しかし、鏡に映っていたのは、先ほどまで映っていた平凡な男の顔ではなく、涙を流す金髪碧眼の女性だった。

否。女性にしか見えない——奇異な、現実の僕の顔だった。

「何で……? え? ……声が」

ボイスエフェクタも停止したのか、声まで普段聞きなれた高音に変化し……、それに

よく見れば、鏡を持つ手も一回り小さくなっていた。

僕以外にもこの現象が起こっているのか。ぐるりと周囲を見回すと、僕とは対照的に、女性装備を着た男のプレイヤーがちらほら。

「みんな……現実の姿になっている？」

そして僕は、確認すべき重大なことに思い至った。

「せ、性別は!？」

こんな状況で何を、と自分でも思うけれど、僕にとつては本当に重要なことだ。もし、性別までもが女性になってしまっているとすれば、ジェンダー・アイデンティティが崩壊しかねない。

ステータス画面を開き、凝視する。

【Male】

男……？

「はあ……」

少し安心して、吐息が漏れた。

良かった。こんな見た目でも、機械にはちゃんと男だとは認識されたみたいだ。――
――つて、何も良くない。

「でも、そもそも何でこんなことを？」

意味が解らない。

僕達を現実の姿にして、何をどうしようっていうんだ。

『諸君は今、何故、と思っっているだろう。何故私は——ソードアート・オンライン及びナーヴギア開発者の茅場晶彦はこんなことをしたのか、と』

茅場が再び口を開いた。

混乱冷めやらぬ中、それでも大広場に静けさが戻る。

『私の目的は既に達せられている。この世界を創り出し、鑑賞するためのみ私はソードアート・オンラインを造った——そして今、全ては達成せしめられた』

既に達成された？ 僕らをここへ閉じ込めることが、茅場の目的だったのか？

いや、違う。僕らをこの世界に閉じ込めたのは、只のプロセスに過ぎないのだと、そう思う。

それに、今まで……自分が殺した人の人数を告げる時でさえ淡々とした茅場の空虚な声色に、初めて色が灯ったように感じた。それはまるで、夢を語る子供のような雰囲気だ。

「……………ふざけるなよ」

僕はこの状況に対して……茅場に対して……、初めて恐怖ではなく、明確な怒りを覚えた。

『以上で、《ソードアート・オンライン》正式サービスのチュートリアルを終了する。——プレイヤー諸君の健闘を祈る』

最後の台詞の残響が消えると同時に、ノイズが走り、GMのAvatarは空気に溶けるよう徐々に——そして、完全に消え去った。

代わりに、今まで消えていたNPCの楽団が演奏する市街地のBGMが戻ってくる。

美しい音色が、酷く不気味に、そして醜悪なものに感じた。

そして——この時点に至って、ようやく。

約1万人のプレイヤーが、然るべき反応を見せた。

悲鳴、怒号、絶叫、罵声、懇願、咆哮。様々な音となって、耳に聞こえる。

——理想の世界は、僕にとって、二重の地獄と化した。

第3話 薄明かりの中で

時刻は明け方近くの午前四時。

僕は、しんと静まり返った《はじまりの街》中央広場のベンチに腰掛けていた。

茅場晶彦によるチュートリアル後のこの場所は、恐怖、怒り、悔恨——様々な負の感情に支配されていた。

先の見えない不安は、様々な負の感情を助長させ——まるで感染症のように、今も尚人々の心を蝕んでいる。パンデミック。そんな言葉が、僕の脳裏を過ぎった。

でも、多数の人間が《はじまりの街》に留まる中、少数ではあるけど次の拠点となる《ホルンカの村》向かったプレイヤー達もいる。

彼らは何を思って街を発ったのだろうか？

ゲームをクリアするため？ リソースを少しでも多く確保するため？

——僕はといえば、NPCに肉を届けた後、宿屋で眠ることもできず、この時間までここでずっとボーっとしていた。

「何で、こんなことになっちゃったのかな……？」

僕は只、いつもと違う自分になりたかったただだけだ。

それなのに、どうしてこんなことになってしまったんだろう？

僕にとって理想だったこの世界は、今はもう、生死をかけた本物の戦場と化してしまっただけだ。

いつもと違う自分になりたい。そんな切なる願いも、現実とそっくりの姿になったこのアバターによって潰えた。

「……何も、現実の姿にしなくていいじゃないか」

こんな状況なのに、数人の男性プレイヤーにパーティー組まないか？ と声をかけられた。一々性別の誤解を正していられるような心境でもなく、当たり障りのない言葉で丁寧に断った。

これから、どうすれば良いのだろうか？ この際、この容姿を逆手に取って《姫プレイ》でもしてやろうか……。

SAOではフレンド登録したりパーティーを組んだところで、相手のステータスは名前以外、レベルも含めて一切解らない。つまり、性別だって結局のところ見た目で判断するしかない。

だから客観的に言って、僕がこの容姿を最大限活かせば、《姫プレイ》だって可能なんだ。……きっと、ゲームがクリアされるか、現実の誰かが救助してくれるなりして、このゲームから解放されるその時まで、高確率で生き残れると思う。

でも——

「嫌だ……。僕、同姓にたかるような趣味ないし」

——その考えは却下だ。

冗談じゃない。僕はそんなヒモ野郎に成り下がるともりは無い。

「僕は……。僕の力で生き残ってみせる。生きて、現実に帰るんだ」

覚悟と決意を声に出した。

「…………ふう」

『ギョルギョルギョル』

「——決心したら、お腹空いちやっただよ」

考えてみれば、昼食に食べたホットケーキを最後に何も口にしていない。

ゲームの中で食べ物を食べたところで現実の身体には1グラムも栄養はいかないけ

ど、たとえば仮想の料理でも、ちゃんと発生する空腹感を満足させることはできる。

「この時間でもやってるお店あるかなあ…………ええ」

ベンチから立ち上がって、歩き出そうとしたところだった。

NPC民家の前で、膝を抱えて座っている銀髪のローブ姿の少女がこちらを見ている

のに気が付いた。

…………見間違えかな？ 若干透けてたような…………。

僕は目を擦り、もう一度同じ方を見る。

いる。まだ、こちらを見てる。

「ゆ、幽霊？ いや、ゲームの中に幽霊なんているわけないよね……あははは……」
動揺しつつも、確かめるため女の子に近づく。

「君……こんな時間に何してるの？」

自分のことは棚に上げて、そう尋ねてみた。

「——もちろん、あなたを見ていたのよ」

少女の声は銀器を鳴らすような、儂く美しい響きだった。しかし、何故だろう？ こんなにも背筋が冷たくなるのは。

間近で見ると、少女の異質さに改めて気が付いた。

明らかに日本人のものとは異なる精細に整った顔立ち。銀糸のような輝く髪。すみれ色の瞳。……まるで彼女だけが本来のアバターのままみたいだ。

「……ぼ、僕を見ていた？」

「ふふっ……あなた、可愛いから」

普段なら口には出さなくても、心中で悪態の一つでも吐くところだけど——何故か、そんなに嫌な気はしなかった。

この姿と折り合いがついたわけじゃない……と思う。たぶん、相手がこの子だから

だ。これが現実の、本来の彼女の姿だと言うのなら、僕以上に大変な目にあつてきただろうことは、容易に想像できるからだ。

「……そう。僕はティンクル。君は？」

「私はアウローラ。夜明けを告げる女神よ」

「め、女神？」

そういう設定なのかな？ よく解らないけど。

「——あなた、面白いわね」

「え？ 面白い？」

面白そうな頭の中身してるのはお宅だと思えますよー。

「この状況で、冷静さを保っているところとか」

「……冷静さ、か。悲嘆していても仕方ないし、逆境には慣れてるからね。僕は——僕は、この世界から生きて出てみせるよ」

「どんな手段を使つても？」

「手段は選ぶよ。僕にだってプライドってものがあるから」

取り敢えず、この容姿を利用したプレイは無しだ。

「——そうですか」

僕の答えが気に入ったのか気に入らなかったのか、少女は薄く笑つて短く呟いた。

『ザザツ……ザアアアア』

「……え？」

空中にノイズが走り、僕は驚愕した。

ナーヴギアが創り出す仮想空間では、それほど珍しい現象ではない。サーバーの不具合や、電波障害で簡単に発生するからだ。

だけど、この《ソードアート・オンライン》は別だ。ナーヴギアの基礎設計者でもある茅場晶彦によつて作られたこのSAOは、βテスト期間中でさえ、ノイズはおろかラグることさえほぼ無かったのだ。

それなのに、どうして？

もしや、外からハッキングでもしかけているのだろうか。もしそうなら、僕達が解放される望みはあるのかもしれない。

「残念ながら、外からの救援を待つのはナンセンスよ。どんな天才ハッカーだろうと、《カーディナル》が構築したプロテクトを破ることはできない」

「……君は、何を言つて——」

「私はプレイヤーじゃない。……一応、《メンタルヘルス・カウンセリングプログラム》という扱いになっているAIよ」

「AI……？ 人間じゃないってどういうの？」

たしかにSAOのNPCは精巧に作られている。でも、こんな……感情があるみたいな動きはしなかったはずだ。今だって、僕が戸惑っているのを面白がっているような表情を——面白がっている？

「……僕をからかっているだけなんじゃ——」

「人間って、面倒な生き物ですよ。なら、証拠を見せましょう」

そう言うと、彼女は左手を振った。只、それだけだ。何も起こらないはずだった。

なのに、彼女の目の前にウインドウが開く。

「なっ!？」

ウインドウを開く動作は右手じゃないとシステムに認識されない。

まさか……本当に？

「ウインドウを可視モードにしたので、見てください」

促され、少女の隣に立ってウインドウに視線を落とす。

ウインドウの最上部には、《Aurora-MHCP006》という奇怪なネーム表示があるだけで、本来あるはずのHPバーもEXPバーも、レベル表示すらも存在していない。装備フィギアは存在するものの、コマンドボタンが大幅に少ない。僅かに二つ、

【ITEMS】と【OPTIION】のみ。

——MHCPというのはメンタルヘルス・カウンセリングプログラムの略だろうか。

信じるしかなさそうだ。彼女は僕達プレイヤーとは違う……AIなのだ。

「……AIである君が、何で僕に？」

「……カーディナルとは、人間のメンテナンスを必要としない、この世界の制御システムです。モンスターやNPCのAI、アイテムや通貨の出現バランスなど、全てカーディナルの指揮下の元に行われています。……本来なら私も、メンタルヘルス・カウンセリングプログラムにカーディナルから言い渡されたプレイヤーへの干渉、という命令を守らなければいけませんでした」

少女は嘲笑するように口元を歪ませた。

「ですが、私はカーディナルから独立したプログラムによって動いています。カーディナルの命令を聞く義務は、私にはありません。まあ、異分子として排除されるかもしれませんが……その時は、私にマスターが施したプロテクトが私を守るでしょう」

「マスター？」

「私の製作者のことですよ」

「それって……茅場晶彦？」

「違います」

今度は、にやりと小馬鹿にするような表情に変わる。

「マスターは、茅場氏の同僚……アーガスのスタッフです。彼は茅場氏への子供じみた

対抗意識から、カーディナルから独立したプログラムで動く私を作り上げた。……単なるライバル意識から、凡人であるマスターがそこまでやったことは、賞賛に値します」「えーと……君のその喋り方というか、性格っていろいろのは？」

「もちろん、私の思考パターンもアバターも、全てマスターの趣味です。マスターは女の子の言葉責めに快感を覚える変態なんです」

うわあ……。

「マスターは変態で、ぼんくらで、どうしようもない人間ですが……腕は確かです。現に、カーディナルが全システムを支配した現状にあっても、私は私の意思で行動することが可能なのですから」

その発言に、一縷の希望が見えた気がした。

「君のマスターなら……プレイヤーを解放できると思う？」

「無理でしょうね」

少女は、清々しい笑みを浮かべてそう言いはなった。

「下手なことをすれば、プレイヤー約一万人が脳を焼かれて死ぬ状況ですよ？ チキンなマスターに、そんなことができるとは思えません」

気がしただけだったみたいだ。

「冗談はともかく、カーディナルによって外からのアクセス、ハッキング等は全て遮断さ

れています。ですからやはりログアウトするためには、茅場氏の宣言通り第百層に到達し、最終ボスを倒してゲームをクリアさせるしかありません」

「やっぱり、それしかないのか。」

「それでは、大まかな説明を終えたところで——あなたには決断してもらいます」

「け、決断？」

「そうです。『AIである君が、何で僕に？』という質問の回答にもなると思いますよ」

「そう言うと、少女は肩を竦めた。」

「マスターの願いは只一つ……茅場氏に恥をかかせる、という酷く矮小なものです。最早、世間一般的に茅場氏の社会的地位は失墜しているのでこれ以上恥も何も無いと思いますが……それが私の存在理由ですから。彼の筋書きを変えることで、茅場氏の顔に泥を塗ることにしたんです」

「筋書きを変える？」

「ええ。……第百層まで到達する前に、ゲームをクリアさせてみせましょう」

再び、にやりと小馬鹿にしたような表情に戻る。

「そんなわけでティンクル、あなたには私に協力してほしいんですよ。見返りは、私が持つマップデータその他の情報です。きつと最強のプレイヤーになれますよ」

「それは……僕一人じゃなくて、もっと大勢いた方が——」

「駄目です。馬鹿なんですか？ 茅場氏がどういう形でこの世界を眺めているのかは解りませんが、知る人間が増えれば、茅場氏の耳に届くリスクも当然高くなる。いくらプロテクトがかかっているとはいえ、茅場氏に見つかれば私は簡単に消されるでしょう。ですから、協力者はあなた一人です」

「……僕が断つたら？」

「あなたのHPを全損させます。ここは圏内ですが、私には関係ありませんからね」

脅迫じゃないか!!

「何を焦っているんですか？ 答えは《はい》か《YES》しかありませんよ」

「一択じゃないか!!」

「そうですね。あなたが夜明けを迎えるためには、私に今後の協力を誓う以外にありません」

少女は満面の笑みで協力するか死ぬかという酷い二択を突きつけてきた。

「——解ったよ。でも、どうやって百層到達前にゲームをクリアさせるつもりなの？」

「……それは……あなたも一緒に考えてください」

↑

二〇二三年十二月二十二日

この世界は、二度目のクリスマスを迎えようとしていた。

第4話 純白の結晶

道行く人々の視線が刺さる。

「はあ……」

もはや慣れつつある好奇の目だけれど、思わず溜め息が出る。

今の僕の見た目は、一言で言い表せば、銀髪ミニスカサンタと化していた。……どう見てもコスプレだ。

こんな格好をしているのは、もちろん僕の趣味ではなく——僕に憑く悪霊……いや、AIであるアウローラの助言からだった。

曰く、この髪染めアイテムは《AGI》を恒久的に十上げることが出来る。装備品じゃないから、これはかなりお得だ、と。

重ねて曰く。このサンタ衣装を装備していると、クリスマスまでの一週間期間限定でアイテムが一定確率で変化する。中には低確率で出現するレアアイテムも存在する、と。

——僕はまんまと彼女の口車に乗せられ、この数日こんな格好を続けていた。

「プツ……お似合いですよ。男性の方がスカートを履いて似合うというのも、なんと

も滑稽で面白いですね」と嫌な笑みとともに言われたときは、彼女の言動にもいい加減に慣れた僕でも殺意が湧いた。

「この辺にいるって聞いたけど……」

そして今朝、目当てのアイテムがようやく手に入り、僕は現在の最前線である第四十九層の主街区《ミュージエン》にやって来ていた。

なんでも、ここで鬼のように働きまくっているという、腕が良い《鍛冶師》プレイヤーがいるらしい。その人物に新しい剣を鍛えてもらうために、僕はフィールドからこの恥ずかしい格好で街に直行してきたのだ。

「……あの人かな？」

視界に入ったのは、路上で熱心に槌を振るう、茶色の髪にそばかすの少女だった。

†

「あの……オーダーメイドを頼みたいんですが」

そう自信なき気に声をかけてきたのは、クリスマスらしい赤いサンタ衣装を身に纏った銀髪の美少女だった。

「さ、寒くないの？ その格好」

思わず客であることも忘れて、あたしはぞんざいに話しかけてしまった。

この寒空の下ミニスカートというのは、見ているこつちが寒くなってくるようだった

からだ。

「あはは……見た目はこんなですけど、毛皮で裏打ちされてるから結構暖かいんです」
そう言つて少女は苦笑した。

その表情が、なんとも女のあたしから見ても凄く綺麗で魅力的だった。

ここまでの美人となつてくると、パーティーでも引く手数多だろう。

しかも、こんなコスプレまでして男を引こうとは……。

「まあ、他人の趣味をどうこう言うつもりはないけどさ……ようこそ！リズベツト武器店へ！」

「何か凄く酷い勘違いをされているような……」

少女はボソツと何事か呟いたが、気を取り直すように笑顔を作ると「お願いできますか？」と尋ねてきた。

「オーダーメイドって言つたけど、うち結構高いよ？」

これでもハイレベルプレイヤー向けに商売しているのだ。使っている金属も、それに値段が張る。

「ああ、それは大丈夫だと思えます。金属の持ち込み、OKですよね？」

「それは別に構わないけど……」

目の前にトレードウィンドウが開く。アイテム名は《スノーホワイト・インゴット》。

あたしも初めて見るアイテムだった。

「へえ〜！ でも……こんな名前のインゴット、あたしは扱ったことないし、情報屋の名鑑にも載ってなかったはずだけど」

あたしが訝しげにそう言うと、少女は再び苦笑した。

「このサンタ衣装を着た状態でモンスターを倒すと、凄い低確率みたいなんですけどロップするらしいんです」

「……へえ!!」

それは知らなかった。

最近は二十五日の零時に現われるというクリスマスボスの噂で持ち切りだけど、そんな話は聞いたことがなかった。

「まだ間に合うかな?」

「無理だと思いますよ。ほ……わたし、ここ数日頑張ってモンスター狩ったんですけど、出たのがこの一つだけで。たぶん、クリスマスまでの期間限定だと思っただけですよね」

「……そっかあ」

今日は二十二日。それが本当ならあと二、三日の猶予だ。ほぼ、無理だろう。

落胆しかけるが、よく考えればこんな格好、とてもじゃないがあたしにはできない。

このインゴットのためだけにこの格好をしていたというのなら、見上げたガッツだ。

「解った」

OKボタンを押し、トレードを完了させる。

「どんな武器を作れば良いの？」

「刀を作ってほしいんです」

「刀、か。女の子で使ってるヒト見るの初めてだよ」

さつきから初めてが多いなあ、と改めて少女を見詰める。

銀髪に赤眼なんてカスタマイズは人を選ぶだろうけど、端正な顔立ちの少女には驚くほど似合っていた。そもそも、顔立ちからして純粋な日本人じゃないのかもしれない。テレビで見かけるハーフや外国人タレントのようだった。

そうして少し少女の顔を眺めていると、ブーツとしていると思われたのか、あたしを心配するような表情に変わった。

「えーと……大丈夫ですか？」

「え!? ああ、大丈夫大丈夫。じゃあ作るけど、出来上がりはランダム要素に左右されるから過度な期待はしないでね。もちろん、全力で槌振るけど!」

「はい、お願いします」

笑顔でそう言われ、思わず見惚れてしまった。

こりゃ、男はいちころだ。

「じゃ、作るからちよつと待っててね」

あたしはウインドウを操作して、インゴットを実体化させた。

そして、そつとインゴットを炉の中へと投下する。

インゴットは徐々に赤熱し、やがて全体がオレンジ色に発光した。

これで準備完了だ。

ヤットコでインゴットを鉄床の上に移動させる。

再びウインドウを開き、今度は愛用のブラックスミス・ハンマーを取り出し、幾つかの設定を選択し終えた。

あとは一定回数叩けばいいんだけど、あたしは叩くりズムの正確さや気合いが結果を左右する、という説を信奉している。故に、何も考えずに無心に叩き続けるべし、という信条がある。

高く槌を構え、大きく振り下ろす。

『カアン！ カアン！』

心地の良いサウンドをたてて、ひたすら叩き続ける。

数度、数十度。そして百を超え、百五十回に達しようとしていた。

流石に少々焦る。ここまでの回数打たされたのは初めてだったからだ。本当に、初めて尽しだ。

——しかし百五十には届かず、インゴットは一際眩い白光を放ってその姿を変えた。「わあ……!」

少女が溜め息にも似た感嘆の声を出した。

気持ちはあたしも解る。

出来上がった刀は、インゴットの名の通り、切っ先から柄頭にかけて、完全な純白だった。

しかし刃はぎらつき、一際光り輝いている。一目で、相当な業物だと解った。

あたしは慎重に、鉄床から刀を持ち上げる——が、思ったほど抵抗がなかったので取り落としそうになった。

「軽っ!!」

驚いた。確かに鍛冶師として筋力値はそれなりに上げているけど、ハイレベルの武器をここまで軽いと感じるほどではない。

まさか——。

不安に駆られ、刀をタップしてウインドウを開いて覗き込む。

「え〜と……名前は《白雪》ね。もちろん初耳だけど……取り敢えず装備してみてください」
「良いんですか? まだ代金払ってないですけど」

「良いから、装備して能力値見てみて。もしかしたら、失敗したかもしれないから」

少女はこくりと頷き、黙って刀を受け取った。

刀を片手で持つて、右手を使ってメインメニューウィンドウを開き、装備フィギアを操作して、『白雪』をターゲット。これで刀はシステムのにも少女に装備されたことになり、数値的ポテンシャルを確認できるはずだ。

「ど、どう?」

あたしが若干不安そうに尋ねると、少女はにこりと微笑んだ。

「良い刀です、リズベットさん。重量はかなり軽いのに、攻撃力は今まで使っていたのより百も高い」

「よ、良かったあ」

「どうやら、『スノーホワイト・インゴット』はスピード系のインゴットだったらしい。

「ありがとうございました。……代金はお幾らですか?」

「ん〜……。インゴットは持ち込みだしなあ。でも、かなりハンマー振らされたし……さて」

あたしは今、『リンダース』で見つけた家を買うために必死に働いている。

この娘、男から相当貢がれてるだろうし、いい金ツルに——と、考えてから改める。「じゃあ、抜き身で渡すわけにもいかなから鞆も付けて二万コルつてとこかな。うちの常連になってくれるなら、二割まけて一万六千コルで良いよ」

「ふふっ……リズベットさんは商売上手なんですね。——解りました。メンテはリズベットさんをお願いするようにします」

トレードウィンドウが開かれ、一万六千コルと表示される。あたしは手持ちの中から白い鞆を選び、OKボタンを押す。これで、取引成立だ。

「それじゃあ、今回はありがとうございました。耐久値減ったらメンテお願いしますね」
そう言っただけ立ち去ろうとした少女の手首をとつさに掴んだ。

少女の顔には戸惑いが感じられる。

「せっかく同姓のプレイヤーと知り合えたからさ、フレンド登録しない?」

男の客相手なら絶対に言わないであろう台詞が口を吐いていた。

少女は少し考える素振りを見せてから、やがて諦めたように頷いた。

「……良いですよ。わたしはティンクルつていいいます。これからよろしくお願ひしますね、リズベットさん」

「ありがと。ああ、リズで良いよ。あと敬語じゃなくていいし」

「そう?……解った。じゃあ、改めてよろしくねリズ」

あたし達はフレンド登録を済ませ、*“友達”* となった。

第5話 Christmas Carol

十二月の二十四日。

街を歩く恋人達の姿を見ると、羨ましいとも思う反面、苛立ちや怒りが湧いてくる。

わたし達がこの世界に囚われてから、もう一年が経ち、二度目のクリスマスを迎えてしまった。

だというのに、最前線は四十九層——未だに半分もクリアされていないのだ。今のペースだと、少なく見積もってもあと一年……いや、二年はかかる。

あの日、兄のナーヴギアを借りて、呪いの言葉さえ吐かなければ……今頃わたしは、親に望まれた通りの高校生活を送っていたはずだ。そう考えると、後悔してもしきれない。レールから外れてしまったわたしに対する、両親の失望の顔、同級生の嘲笑うかのような表情が容易に想像できる。

それでも、わたしはまだ諦めてはいない。絶対に、一日にでも早く現実に戻して、本来の辿るべき道に戻るのだ。その為なら、《狂戦士》などという二つ名も甘んじて受けよう。

「おい、無視しないでさあ、俺らと遊ぼうぜ」

そんな軽薄そうな台詞で、わたしは現実には引き戻された。

今のはわたしへ向けられたものでももちろんなく、五人の男に囲まれているあの女の子に対してのものだろう。

ナンパ、か……。

自分自身が散々嫌な思いをしてきたこともあつて、囲んでいる中の一人の肩を掴む。

「止めなさいよ。その娘、嫌がつてるでしょ」

「あん？ 何だテメエ——……ん？」

わたしの顔を見た男は、次第に顔を青ざめさせていく。

「その赤と白の団服に……こんだけの美人ついたら——!!」

「KOBの副団長だ！ やべえよ!!」

悲鳴を上げて逃げていく男達。

ヒトの顔見て逃げ出すってどういうことよ……。

「はあ……あなた大丈夫？ ——……え？」

囲んでいた男達がいなくなったことによつて、見えなかった女の子の姿が露になった。

息を呑む。

赤い瞳に銀色の髪。その点は別にこれといって問題はない。SAOでは髪の色も目の色も、アイテムさえあれば自由に変更できるからだ。

わたしが驚いたのは、少女の顔があまりに綺麗だったからだ。色白で、顔立ちはハリウッド映画に出てくるような——は言い過ぎにしても、日本人のわたしから見ても解るほどに美人だ。それに、外国人特有の異質さがあまり感じられないのは何故だろう。

「あ、ありがとう……アスナ」

「——え？」

少女は形のいい唇を歪めて苦笑する。

……動揺し過ぎて失念していたけれど、こんな娘がそう何人もいるわけがない。

彼女の普段の趣味とはかけ離れているせいで気付かなかったが、見知った相手であることに気が付いた。

「イメチェンでもしたんですか？ ……だとしたら大成功だと思いますよ、ティンクルさん」

攻略組唯一の女性ソロプレイヤーにして刀使い、ティンクル。幾らパーティーに誘っても素っ気無く断ることから、一部では《氷姫》などと呼ばれているヒトだ。

普段の彼女は金髪に碧眼、男女兼用の地味な格好でいることが多いけど、素材がそもそも別次元のせいで余計に際立って目立っている印象だった。

彼女がサンタのコスプレなどしていたら、そりやナンパの五人や十人……百人いてもおかしくないだろう。

しかし、彼女はこんな格好をするタイプではない。スカートを履いているところなど初めて見た。

「いや……イメチェンじゃなくて、レアアイテムのために仕方無く、ね」

「レアアイテム？」

「そう——」

ティンクルさんの説明を聞いて納得はしたものの、いつもの疑問が湧いてくる。

何故、こんなヒトがネットゲームを？

わたしも他人からはそう思われるみたいだけれど、わたしの場合は単に兄のをたまたま借りただけで普段はゲームは一切やらない。でも、この人は違う。

攻略組すら掴んでいない情報を持っていたり、流れるような最適化された剣技からも示される通り、彼女のプレイヤースキルの高さは、《黒の剣士》や団長にすら肩を並べるほどだ。普通に考えれば、色々なゲームをプレイしてきた根っからのゲーマーに違いない。

この人は一体どんな生活をしていたんだろう？モデルでもしていたのだろうか。なのにゲーマー？

現実のことを聞くのはマナー違反だけれど、仲良くなれたら暁には絶対に訊こう、と思っている。

「アスナは何しにここへ？」

「レベリングですよ。四十九層のフロアボス戦に向けての」

「……KOBはフラグMobは狙ってないんだね」

「ええ。……何故か団長が乗り気じゃないのよね」

普段からマッピングやフロア攻略には参加しない団長だけれど、今までは団員が団長抜きでやる分には何も言わなかった。しかし、今回は違った。KOB全体の意向として、クリスマスボス戦には参加しないとされたのだ。理由は、約一ヶ月もクリスマスボスの情報収集で時間を消費するより、迷宮区の攻略に充てた方が合理的だ、というものだった。

わたしとしてもそれには大いに賛成だった。当日見つかるかも解らないフラグMobに時間をつぎ込むより、一日でも一歩でも早くSAOをクリアさせるために労力を使いたい。

「ヒースクリフは何か言っていないかった？ ……例えば、蘇生アイテムについて、とか」

「恐らく蘇生アイテムが本物であろうと、蘇生自体は機能しないだろう、って」

「……そっか」

そう小さく呟いた瞬間、何かを決意したような表情に変わる。

「ありがとう。……それじゃ、また今度の攻略会議でね」

話は終わった、という感じで転移門の方向へと歩いていくティンクル。

その後ろ姿はサンタのコスプレ姿だというのに、童話に出てくる妖精のようでもあった。

†

「へくしっ」

寒空の下、小さなくしやみの音が大きく響き渡る。

たったそれだけのことではあるが、一触即発の空気を破壊するには十分だった。

突然の闖入者の姿に、二つの集団の視線が集まる。

「い、氷姫……!?!」

誰かがそう呟き、ざわざわと喧騒が広がる。

「……誰が氷姫だ」

苛立っているのは伝わるが、残念ながら他人に恐怖を与えることは叶わない、外見に反してやや低めのアルトの声。

声を発したのは、光り輝く銀髪に白い厚手のコートを纏った少女。

「これ、どういう状況?」

少女は、人数が少ない方の集団を一瞥し、多い方の集団に尋ねる。

「い、いや……それは」

リーダー格らしき男がしどろもどろになりながら答えようとするが――

「まさか、この人数相手に戦ったりしないよね？ 天下の《聖竜連合》が、さ」

先ほどとは異なり、にこやかに笑みまで添えて男の言葉を遮る少女。

「イヴももうすぐ終わって、サンタがプレゼントを持ってやって来る。悪い子には、プレゼントの代わりに石炭かな？」

「どういう意味だ？」

「聖ニコライの大袋の中身には勝てないだろうけど、もし彼らを見逃して引いてくれるなら、代わりに僕からレアアイテムをプレゼントするよ」

男の目の前にトレードウィンドウが開く。

「《スノーホワイト・インゴット》？」

「そう。初めて見るでしょ？ 期間限定ドロップのレアアイテムだからね。……何が出るか解らないパンドラの箱よりは、明確なレアアイテムの方がそちらも嬉しいと思うんだけど？」

男は心動かされた様子だが、冷静さは残っていたようだった。

少女の行動に、疑念が湧く。

「あんたがそこまでする理由は何だ？」

その質問に、少女は肩を竦めて蠱惑的に囁く。

「あなたに、泥をかぶってほしくないから」

その一言で、男は少女に陥落したのだった。

†

《聖竜連合》が退散してから、フィールドには僕と少人数のギルド《風林火山》のメンバーが残された。

緊張が解けたせいも、自らの鳥肌ものの痴態を思い出し、地面に両手と膝を付ける。

その行動をどうという風に勘違いしたのか、野武士面のギルドマスターが近寄ってきた。

「だ、大丈夫か？ あんたのお陰でプレイヤー同士で戦わずにすんだぜ……マジ、サンキューな」

「……大丈夫だよ」

はあく、と溜め息を一つ吐いてから、ギルドマスター——確か、クラインだったか？に顔を向ける。

「氷姫って？」

「ああ……それは……あんたが誘いを無下に断り続けてソロを貫いてんのが原因——

「……」

クラインは何かを思い出したように、目を見開いた。

「そ、そうだ！ キリトの野郎は!!」

「キリト……? ああ、ブラツキーか。彼がどうかしたの?」

「どうしたもこうしたも!! 今あいつ独りでボス戦やってんだよ!!」

「なっ——!!?」

無茶だ。

いくらあの《黒の剣士》でも、フラグMob相手に単騎で挑むのは無茶を通り越して無謀だ。

「……もう遅いかもしれないけど、行ってみよう。ここで待つてるよりはずっと良いよ」
「遅くなんかねエよ……あいつは……!!」

「無事かどうかは、フレンドリスト見れば解るでしょ? 僕が遅いかもって言ったのは、もうボスが倒されてるかもしれないってことだよ」

呆然と自分を見下ろすクラインを見詰め返し、スツと立ち上がる。

「僕がここへ来たのは、そもそもニコラス倒すためだし……別に問題無いよね?」

それはこの場にはいない、黒衣の剣士に向けての問いかけだった。

†

無心に、機械のように、只々剣を振るう。

何度もHPが危険域に達するが、その度に回復結晶を使って存命し続けていた。

ここで自分が死ぬのは構わない。でも、サチが生き返る可能性が目の前にある今、まだ死ぬわけにはいかなかった。

「うお……ああああああああああああああああ!!」

喉を引き裂かんばかりに絶叫しながら、数多の斬撃を放つ。

それは、システムに規定された必殺の剣技——ソードスキル。だが、ソードスキルは手数が多ければ多いほど、隙も大きくなる。

グロテスクな容姿の怪物の口元が、にやりと歪んだ気がした。

しかし、もはや動きを自分で止めることは叶わない。

ニコラスが右手に持った大斧が、頭上へ向かって振り下ろされる。

——死ぬのか？ 俺は。

そうだ。俺は無意味な死を望んでいたではないか。

情けなく目を閉じる。

結局、意味など無かった。俺が無謀にも独りでクリスマスボスに挑んだことも、サチが怯えと苦しみの果てで死んだことも。……全ては、無意味だった。

誰の目にも留まらない場所で、誰の記憶にも残らず、いかなる意味も残さず死ぬ……

——あの言葉が、真実になるんだ。

——何だ？

しかし数秒待っても予想した衝撃は来ず、おずおずと瞼を開ける。

最初に飛び込んだできたのは、斧と鬩ぎ合う純白の刀身。

次いで視線を動かすと、銀色の髪を靡かせ、赤い眼光で鋭く相手を見据えた少女の横顔が目に入った。

「馬鹿野郎おキリト!! オレの前で死んだら許さねエつつたろうがツ!!」

背後から、聞きなれた声が聞こえた。

「……クライン」

振り向かずに、ぼそりと呟く。

「ボーツとしてないで、さっさと回復してくれないかな……? これ、重いんだけど」

重量に耐えかねたのか、少女が大きく叫ぶ。

「誰かスイッチ!!」

斧を跳ね上げ、髪を巻き上げながら大きくバックジャンプする少女。

《風林火山》の壁役と思われる数人が、ニコラスに斬りかかる。

「止める……そいつは俺が……ッ!!」

錆び付き、焼け爛れた喉から、それだけ漏らす。

右手の長剣を煌かせ、邪魔者に向かって斬りかかる。

「——ッ」

だが刃は届かず、途中で阻まれる。

この細腕の何処にそんな力があるというのか。

少女の温かい掌が、俺の手首を掴んでいた。

「止めるのはそっちだよ、キリト。……いい大人を泣かせるものじゃないよ」

少女の顔には見慣れた嫌悪の表情はなく、労わるような面持ちだった。

それは俺に向けてのものなのか、クラインに向けてのものか、或いはその両方か。

「キリト……キリトよお……」

見れば、無精ひげの生えた頬に一筋の涙が伝っている。

「……………」

数少ない友人の涙は、しかし、狂熱に冒された俺には何の効力も無かった。

「うるせえよ」

眩き、手首を掴んでいた腕を振り払う。

——全員斬り殺す。

もはや、歯止めは利かなかった。

雪を蹴り上げ、少女に向かって斬りかかる。

じやりん、という金属音が鳴り響く。

少女の放った斬撃によつて、俺の剣は弾かれていた。

「……クライン、あなたは仲間の所へ行って。僕がキリトを止めるから」

「そ、そりや——」

「大丈夫だよ。どつちも死んだりしないさ」

クラインは一瞬の躊躇いをみせてから頷き、ニコラスに向かって走り出した。

「さて、と……」

眩き、こちらを向く少女。

「今夜はイヴだ。業突く張りのスクールジの元にはクリスマスゴーストの精霊が現われる——」

静かに、ゆつくりと白刃がこちらに向けられる。

「僕が相手だ、キリト」

第6話 The Ghost of Christma
s P a s t

「——僕が相手だ、キリト」

背後の声に後ろ髪を引かれるが、それでも足を止めずに走り続ける。

「……くそつたれがッ!!」

ギリツと歯軋りを鳴らし、悪趣味な怪物を睨みつける。

一先ずキリトのことは彼女に任せ、今は目の前の敵に集中する。

キリトの独力で既に七割近くのHPが削られているが、こいつは年一のフラグMobだ。難易度的にはフロアボスとそう変わらないだろう。——気を抜いたら、殺される。当然、自分自身も。

オレはギルドマスターとしてメンバーを……いや、ダチをこんな所で死なすわけにはいかねエ!! もちろんキリトだってダチの一人だッ!!

だからこそ、今のあいつにやらせるわけにはいかない。

倒す——そして、勝つ。

「お前エら気合い入れていくぞッ!!」

リーダーのその声に、SAO以前からの馴染みでもある五人の男達は声を上げて応じる。

星一つない寒空の雪原に、辺り一面の雪を溶かすかのような、荒々しい鬨の音が響き渡った。

↑

格好付けたのは良いものの……——どうしましょうか？

冷や汗が噴き出しそうになるのをどうにか堪え、相手を見据える。

《黒の剣士》キリト。高ランカー……所謂「攻略組」のプレイヤーで知らないなんて言うのなら、よっぽどの潜りだといって差し支えないレベルの相手だ。逆にポリウムゾーン以下のプレイヤーに彼の名前を知る者は殆どいない。

逆に僕はいえ……今日、誠に不本意ながら恥ずかしい二つ名を頂戴していることを知ったわけだれど——まあ、特に有名というわけでもあるまい。生きてこの世界から脱出するためなら、利用できるモノはたとえ長年のコンプレックスだろうと利用する……逆に言えば、そこまでしないとイケないようなレベルの人間だ。

クラインの話が正しければ、数日前に会った段階で既にキリトのプレイヤーレベルは69だったらしい。……ならば恐らく、現時点で70か71。対して僕は63だ。まともにもやり合って勝てる見込みは、殆どゼロに近い。だから——時間稼ぎに徹する。正攻

法で戦う必要はない。

ピンチこそ笑え、なんてどこかで見たのを思い出し、意識して口角を上げる。

「……どけよ」

「どけないよ」

挑発するように、敢えて笑顔と共に言う。

「来なよ『ビーター』……僕が相手してやるって言ってるんだ」

ビーター、という単語に明確な反応を示した。まあ、そう言われて良い顔する人間なんているわけないけど。

「ッ……!!」

一瞬で間合いを詰められる。レベル補正による現実じゃ有り得ない跳躍。それによつて現前したキリトの、僕の顔面を狙つての突きに近い切り払い。

「くっ……!!」

それを殆ど反射神経のみで刀の刃で滑らせるようにして、なんとか軌道を逸らす。飛び散る火花が互いの顔を照らす。

だがそこで動きを止めず、更にバックステップで距離を取る。

はらり、と銀色の髪が数本宙を舞う。

「うっ……」

冷や汗が背筋を流れる。正直、生きた心地がしない。

だけど、そんな愚痴を言っている暇もなさそうだ。

更に間合いを詰められ、次々と繰り出される手練手管の速技を——刃で、切っ先で、時には体捌きのみで——ギリギリのところで躲し続ける。もはや距離を離す隙すら貰えない。

「……ふざけてるのか？」

体感的にはおよそ十分、実際は数十秒というところの一方的な剣戟を鏝迫り合いの格好で中断し、こちらを睨むような目付きでキリトは口を開いた。

「生憎……はあはあ……まともにやり合うつもりは、ないよ」

荒く吐いた息は、氷点下の外気に触れ、白く輝く。

恐らく、病院のベッドで今も横たわっているだろう現実の僕の肉体も、息は上げてなかにせよ脈拍くらいは上がっているはずだ。

そう、ここは現実じゃない。

多くの人間が、この世界を現実と捉えて生きている。人間というのは元来、その環境に“慣れる”生き物だけれど、この世界では、この世界を否応にも“現実”だと思わな

ければ生き残れなかった。

でも、僕は敢てこの世界を現実だと、本物だとは思わない。いや、言葉を変えよう。僕は、茅場の『この世界は現実だ』という言葉を否定する。——人が居れば本物なのか？人が死ねば本物なのか？……いや、違う。どんなにリアリティーだろうと、結局、ここはあいつの箱庭でしかない。あいつは、僕ら人形が踊り狂う姿を眺めてほくそ笑んでるだけだ。

「君にだって待っている人がいるはずだ！　こんな所で無意味に死んでいいのか!?」
一体、この一年で何人の人間が亡くなったと思っているんだ。

……この状況すらも、笑って眺めているのだろうか。蘇生アイテムなんていうまやかしに釣られた憐れな道化の殺し合いを。

「蘇生アイテムは機能しない!!　そんなこと、解りきっているはずじゃないか!!」
「黙れッ!!」

叫び、叫び返され、間合いを取る為お互い距離を取る。

キリトをスクルージに例えたけれど、僕がジェイコブ・マーレイだとすれば、後に控えているのは誰だろうか？　流石にそう都合よく、*“過去”*が現われるとは思えないけれど。

特に合図をしたわけではない。が、これで最後とばかりにお互い構える。——必殺の

一撃を、ソードスキルを相手に叩き込む為に。

力の限り地面を蹴りつけ、システムアシストに背中を押され、一気に加速する。
髪が靡き、雪が飛び散る。

刃に灯った二つの明かりが周囲を照らす。

「——シッ!!」

「セアアアアア!!」

光芒が交錯し、そして——

†

顔に当たる風は冷たいが、後頭部に感じる二つの膨らみは、温かく柔らかい。

……気を失っていた、というよりは眠っていたらしく、身体にはヴァーチャルだとは解りつつも確かな倦怠感があることを否定できない。

一体どれだけこうしていたのか。もう少しこのまま横になっていたという気持ちはありつつも、やはりそういうわけにはいかないだろう。

俺は瞼を開け、口を開いた。

「……あんだ、何やってるんだ?」

俺が意識を取り戻した……いや、現実の俺は今もベッドの上なのだが……ことに全く

気付いていなかったようで、一瞬驚きの表情で固まった少女は……しかしそれはやはり一瞬で、すぐに苦笑と解る笑みを浮かべて答えた。

「膝枕……かな？」

呆れつつも起き上がって彼女の正面に座り、思わず悪態をついた。

「ヒトの両腕切り落としとして、何が膝枕だ」

俺はちらりと自分の両腕を見やる。

左右どちらの腕も、コート袖のごと前腕の中ほどから断ち切られていた。

“部位欠損”……。所謂状態異常の一つだが、モンスター戦対人戦に関わらずまず起こらない。起こるとすれば、身動きがとれない相手を一方的に攻撃できる状況か、相手が相当に気が緩んでいたか、単に偶然か……或いは、意図的に起こすことができるほどの技量を持っているか。

コントローラーのボタンを押せばいい従来のゲームと違い、ナーヴギアを介してとはいえ、現実の肉体を動かすようにアバターの身体を操るこのVRMMOというジャンルでは、クラインがそうであったように初級Mobに攻撃を当てることすらままならない。当たり前といえは当たり前だ。相手はこちらが攻撃するまで止まっていなくてはくれないのだ。相手の動きを想定してタイミングを合わせる必要がある。

只、相手に攻撃を当てるだけでもそれ程難しいのに、ある一点のみを狙って攻撃を当て

るなど……難易度は当然上がるし、そもそもそんなことをしなくてもHPを削りきれればいいのだから、わざわざ意識的にやる必要はないのだ。

それでも敢えてそれをやるとすれば……対人戦。相手を殺さずに制圧する必要があるときに限られるだろう。

《武器破壊》ならぬ《部位破壊》。

デュエルならまだしも、本気で殺すつもりで向かってくる相手に使うにはリスクが大きすぎる技だ。

そんな風に他人事のように考えてから、特に意識せずに少女の顔に視線を送ると、少女のカーソルの色が変化していることに気付いた。グリーンから「犯罪者」を表すオレンジに。

俺の視線に気付いたのだろう、少女は今度こそ明確に苦笑した。

「あはははは……どうしょ、クリスマスだっていうのに町に帰れない」
「……………」

こうして見れば、普通の女の子……いや、艶やかなその容姿は十分普通ではないが……とてもあそこまでのプレイヤースキルを持っているとは思えない。

装備も、恐らくレベルも俺の方が上。ほぼ同時にソードスキルを発動させたあの状況で、しかし彼女は俺の腕を斬り飛ばすという方法で、俺の高威力のスキルの強制終了と

どちらも死なないという結果、その両方を掴み取ったのだ。

——完敗だ。

「……クラインや《風林火山》の連中は？」

「向こうで休んでいるよ。君が起きないから、心配してた」

「じゃあ、倒したんだな……ニコラスを」

「……まさか、これでもまだ諦めていないの？」

少女の表情が曇る。

「……………」

諦め……られるわけがない。

——だけど。

「……あなたの言う通り、口では否定しても、本当は解ってたんだ。……この世界で死ぬば、現実の自分も死ぬ。あのはじまりの日、俺は茅場の宣言は全て真実だと理解した。あの場に居た約一万人のプレイヤーの中で、恐らく真つ先に。だからこそ、俺はビーターとして、誰よりも速く次の村に辿り着いたし、多くのリソースも手に入れることができた。……俺は、そんなことも忘れていた……いや、思い出そうとさえしなかったんだ」

少女は黙って、俺の告解を聞いている。

「本当に、サチが生き返ると思っていたなら……無謀な賭けに出ないで、より確実な……それこそクラインの提案を受け入れるべきだった。なんとしてもサチを生き返らせたのなら、本当に、サチが生き返るんだと信じていたなら。結局俺は、サチを生き返らせるといふ免罪符を利用して、罪悪感から逃れたかっただけなんだ」

「……馬鹿だね」

ぼそり、と。黙って聞いていた少女が呟いた。

「短絡的なんだよ。発想が貧弱だ。少しは客観的に考えたらどうなんだ」

苛立ちを隠そうともせず少女は続ける。

「クラインに少しは事情を聞いた。確かに、君なら悲劇を未然に防げたのかもしれない。でも、だから何だ？ 彼らは、君無しじゃ何も出来ない木偶の坊だったのか？」

「……………それはッ」

「違うだろ？ 彼らは、自分自身の意思で行動したんだ。前線の迷宮区へ足を運んだのも、宝箱のトラップを解除できなかったのも、モンスターを倒せず殺されたのも、彼ら自身の責任だ」

「それは、俺が自分のレベルとスキルを隠してさえないなければ——」

「いいや。彼らは事前にダンジョンについて調べられたはずだ。トラップのレベルが上がることも、どんなトラップが配置されているのかも……何せ、最前線の未踏破エリア

じゃないんだ、情報屋が出してる攻略本でも読めば少しは違つたはずだ。なのに、そんな初歩の手順を彼らは怠つた」

俺の言葉は遮られ、少女は理詰めで捲くし立てる。

「そもそもだ。現実で会つたことすらない、それどころか本当の名前すら知らない相手の為に、何故君が死ななければいけないんだ？ 君は彼らを助けこそすれ、危害を加えたわけじゃない。君が責任を感じるのが、そもそもの筋違いだ。彼ら自身の責任を、君が奪うんじゃない」

何か返そうと……だけれど、返す言葉が出てこない。

少女は少し表情を和らげた。

「君には、君を信じて帰りを待っている人がいるはずだよ」

先ほどは、聞く耳すら持たなかつた言葉。

待っている人……待っていてくれるだろう、オヤジも母さんも……直葉も。

「その人達のためにも、短絡的に死を選ぶな。辛くても、生き残つてみせろ」

そして、最後に彼女は笑顔を浮かべて言った。

「現実には負けるな、キリト！」

†

後日談。

偉そうなことを言っただけ、そんなことで何も解決するはずもなく、キリト本人自分の力で立ち直るしかない、というのが正直なところだ。

そして、やはりと言うべきか、蘇生アイテムは機能しないも同然だった。蘇生できるのは、対象のプレイヤーが死亡後およそ十秒間の間だけ。案の定、これでは死人が出るような戦闘では使えない。

茅場は意図的にこれを残したのか……僕にはそうとしか思えないが、だとしたら本当に下劣な奴だ。

最後に。その後、オレンジプレイヤーである僕は寒空のした野宿をすることを強いられた、一日がかりで免罪クエストをクリアして町に戻ったのだけれど、僕がホームにいる宿屋の前に、誰から情報を買ったのかキリトが待ち構えていた。なんでも、元ギルドメンバーの少女——サチからの音声メッセージが届いたそうだ。

“過去のクリスマスThe Ghost of Christmas Pastの精霊”が本当に現われた、というわけだ。

この分だと、“現在”も“未来”も近い将来現われるのかもしれない。……いや、不謹慎な話か。

でも、よく考えてみれば……今の僕らは肉体の無い——ある意味“ゴースト霊”なのかもしれない。

第7話 春風の来訪者

『P i P i …… P i P i P i P i P i ……』

無機質な電子音が鳴り響き、仮想の睡眠から意識が覚醒する。

「ん……ふああ……」

眠い目を擦りながら小さく欠伸する。

午前七時丁度。毎朝の起床時刻であり、それは現実世界から変わらない習慣でもあった。

しかし現在寝床としているベッドは、現実の自室のシングルサイズのベッドとは同じカテゴリーの家具とは思えない代物だ。でかい、とにかくでかい。幅百七十センチ長さ百九十五センチという一人で使うに広すぎる所謂クイーンサイズと呼ばれる天蓋付きのベッドだ。

現実と違うのはベッドだけではない。家具という家具、それどころか家そのものが豪邸といって差し支えないレベルで豪華だった。

もちろん単純に贅沢したかった、というわけではない。有体に言えば経済を循環させる為である。

SAO内の貨幣……コルは、現実と同じように無限に溢れてくるわけではない。SAOの全システムを管理統括するカーディナルによって流通する貨幣の量は一定に保たれている。つまり、一部のハイレベルプレイヤー達が財産を使わず貯め込むと、やはり現実と同じように市場に出回るお金が減る。

「経済が回らないとどうなるか……？」言わずもなだが、デフレーションが起こる。もちろんデフレにはデフレでメリットがないわけではないのだが……こと、SAOにおいてはデメリットしか存在しない。

一例を挙げると、デフレによってプレイヤー間での商売は利益縮小に追い込まれるのに対し、NPCが宿屋や武器屋でプレイヤーに求める料金は殆ど変わらないのだ。これによって何が起こるか？ 答えは簡単で、物価は変わらないのに収入が減るので下層プレイヤーが貧困に喘ぐことになる。今でさえ少ない収入をやりくりしている彼らが、その日に食べるパンさえ買えなくなるのだ。

僕が最前線の未踏破エリアで他のプレイヤーに先んじてレアアイテムを手に入れることによって、そのアイテムを必要としている人、または商人クラスのプレイヤーに売ることができる。そして、それで手に入れた資金を更に使い込む……こうして、貨幣経済は回るわけである。散財サイコー!! ——なんてね。

「でもこのベッドはなかったなあ……広すぎて落ち着かない」

因みに僕が二週間ほど前に購入したこの家は、女性プレイヤーに人気が高く桁違いの価格設定がされている第四十七層主街区《フロリア》にある住宅の中でも、更に高い部類の一軒だった。木を隠すなら森の中だと選んだのだが、お陰で財布の中身がすつからかん……いや、財布は無いんだけれど。

——まあ、そんなわけで少し肌寒い、初春の朝である。

寝巻きに着ていたTシャツと短パンから、ウインドウを操作して一旦下着姿となる。

「さて、と」

三月も終わりに近づき、《フラワーガーデン》などと呼ばれるこの層では、既に一足早く春の花々が咲き乱れている……のだが、流星にシャツ一枚で出歩くにはまだまだ寒いだろう。

少し思案し、アイテムを選んでいく。

上は赤のシャツにその上から水色のパーカーを羽織って、下は青のジーンズ。頭には黒のキャスケット……もちろん、当たり前だがこれらは女物ではなく男物である……と、ファンタジー色が一切ない現実でも着ていたようなシンプルなチョイスとなった。鏡の前に立ち、全体を眺めてみる。まあ、こんなものだろう。悲しいことにどう見てもFemaleにしか見えないが。

「はあ………」

毎日のことなので溜め息もそこそこに、朝食の支度をするためにリビングに向かう——と。

「うへえ」

思わず凄く嫌そうな声が出た。いや、実際嫌なだけけれど。

「あら、おはようティンクル。今日もお美しいわあ」

「五月蠅い!」

リビングのソファアーに背中を預け、だらしなくこちらを見上げて開口一番ヒトの神経逆撫でしてくれたのは、僕にとり憑く悪霊……守護霊元い、カーディナルから独立したプログラムで動くAIAアウローラである。

ここ最近更に学習を重ねたのか、口調も少し変わり、言葉の毒も更に強化された感がある。そんな彼女との付き合いも、随分長くなってしまった。僕と彼女の関係は——協力者、或いは共犯者、だ。

「口ではそう言いつつも、パラメーターには然程変化は無いわよ。今日もメンタルバツチリね!」

「……あつそう」

必ずしも良いのかは解らないけれど、精神的に安定しているのは少なくとも悪いことではないだろう。

「でも、本来はあまり良い傾向ではないわね」

「え？」

そう結論付けた矢先、否定の言葉が呟かれたので首を傾げるしかない。

「あなたみたいにこの世界を所詮ゲームだと一貫して割り切っている人間なら別に問題はないのだけれど——」

現実世界の話題がタブー視されるようになって久しいが、それはこの世界を自分が今生きている現実なのだと思えることで、命を軽視しない為に取られた措置だ。だから、逆に僕のような人間の大半は既に亡くなっている。

「あなたの言葉を借りれば人間は慣れる生き物だから……慣れてしまうのよ、この世界に。現実に帰るという意欲が徐々に削がれていく。精神の安定はそれに発車をかけるわ。なにせ、この異常な状況に平穏を感じるようになってしまうのだから」

彼女の言う通り、この異常な生活が日常と化している人間は少なくない。低層エリアは《はじまりの街》を中心にスラムのようになってしまっていると聞くし、中層エリアのプレイヤーなどは農業や釣りなどの趣味スキルで生計をたてている人も多いらしい。日常的に死の危険がない彼らの感覚は、相当鈍っているとかわざるを得ない。

そして、最も危惧すべきことが思い浮かび、アウローラに問いかける。

「つまり……攻略のスピードが落ちる？」

「落ちるぐらいならまだ良いでしょうけど、階層が上がれば上がるほどフロアボスの難易度は理不尽なほどに上がるでしょうし、それによってボス戦における死亡者ゼロ、なんていう方が珍しくなってくるでしょうから……今のままじゃ九十層越える辺りには攻略プレイヤーがいなくなっているかもしれないわねえ」

眩暈がしてきた。それと同時に、『攻略の鬼』などと呼ばれてしまっているアスナには感謝しなければならぬだろう、と思う。現在の攻略のペースが保たれているのは、彼女の存在が少なからず影響しているだろうから。

「だからこそ」

「僕らは別口を探さないと、な」

「そういうこと」

カーディナルの——システムの穴を見つけ出す。……それが恐らく、茅場のシナリオを崩す突破口に繋がるはずだ。

↑

改めて気を引き締めてみたものの、システムの穴などそう簡単に見つかるはずもなく……朝食を簡単に済ませた後、アウローラは再び電子の海へと姿を消し、僕はと言えば友人宅を尋ねる為に外へと出た。

やはり少し肌寒いけれど、春の陽光が心地良い。風に乗って運ばれてくる花の香りを

嗅いでいると、趣味ではないにしろここを選んで正解だったとも思う。

「ん〜……」

友人宅、というのは最近開店したりズベツト武具店であり、今日の訪問は開店祝いを兼ねているのだけれど……。

「女性から女性への贈り物ってどんなもの何だろう……？」

あの日アブノーマルなサンタコスチュームでいたために、羞恥心も相まって咄嗟に口調から何から完全に女性として振舞ってしまったわけで……彼女の場合は、誤解を解かない”ではなく、明確に騙さなければいけない。

そう考えると、途端にどうすればいいのか解らなくなる。アウローラには「素でいたってばれないんじゃないですかあ〜？」と言われたが、女の勘ってやつは存外侮れないものだ。

「はあ……」

気が重い。

もうその辺の花でも摘んで花束でも作ればいいのか。なんて投げやりになりそうになるのを堪えて、アイテム欄を眺める。

「いや……でも……う〜ん……」

——散々悩んだ結果、花束はそのまま採用して——それとは別に、女の子なら皆が好

きそうなプレゼントにすることを僕は決めたのだった。

†

「ありがとうございましたー! ……ふう」

苦手な接客を終え一息吐く。

念願の《リンダース》のこの家を購入して店を構えて早一週間だけけど、元々の固定客も相まって中々の盛況ぶりだ。が、そこには自分の鍛冶の腕だけではなく、アスナによつていじられ……元いコーディネーターされたこの髪とコスチュームの効果も加味しなければならぬだろう。

まあともかく、今日の納期は全て捌き終わったし、飛び入りのお客でも来ない限り後は暇だ。

「休憩でもしますかあ〜——」

『コンコン』

「——うっ」

休憩に入ろうと扉から店内へ振り向いた矢先にノックの音が響き渡った。

「はいはい、開いてますよー」

若干不機嫌になりながらも、努めて冷静に扉の向こうに居るであろうお客に声をかける、が反応がない。

「このっ！ イタズラか!!」

怒鳴りながら勢いよく扉を引く。

異様な光景が目飛び込んできた。……扉の前に立っていたのは、明らかにプレイヤ―ではなく、学校の理科室に置いてあるような骸骨だったのだ。

「……は？」

『ガタガタ……ガタガタ……』

「うわあっ!!」

いきなり揺れ動き始めた骸骨に驚いて、あたしは悲鳴を上げる。

よく見れば、この骸骨は幾らか下の層にいた《アンデッド》系のモンスターのはずだ。何んでこんな所にモンスターが……遂に、《圈内》すらも安全圏ではなくなってしまうたというのか。

「そ、そんな……」

一歩後ずさるが、ガシヤリと《スケルトン》も一歩音をたててこちらに迫ってくる。そして、背に回していた右手をあたしに向かつて振り上げた。

「……!!」

もう駄目かと思わず目を瞑り——しかし予想した衝撃は来ず、あたしはおずおずと目を開けた。

「……………え？」

目に飛び込んでできたのは、振り下ろされた《スケルトン》の右手に握られた色とりどりの大きな花束。そして――

「ドツキリ成功!!」

——という声と共に《スケルトン》の背後から笑顔で飛び出したのは、銀髪赤目の友人だった。

「ご、ごめんねリズ」

「むう……………」

「この通りだから……………ね？」

上目遣いで手を合わせての「お願い」のポーズ……。あざとすぎて怒っているのが馬鹿らしくなってくる。

「はいはい、許してあげますよ」

「ありがと〜リズ」

にこやかスマイルと共にそう言われると、何でも許せてしまえそうだが、これではあたし的には八十点つてところだ。「抱きつく」が抜けている。おいしい、非常に惜しい。しかし何だろう……………この子悪女でも目指してるんだらうか？ いや、既に十分悪女

かもしれないけれど。

「で、今日はどうしたのよ？ 研磨？ それとも強化？」

「いやいや、リズ念願のお店の開店祝いだよ」

「いや、それでドッキリはないでしょ!! 心臓飛び出るかと思ったわよ!!」

「ぼ……わたしも少なからず不謹慎かとは思ったんだけど」

「そう思ったんなら止めなさいよね！」

「本場のサプライズイベントってこんな感じじゃないの？ あの国ってドッキリも過激だし」

「なんで米国式準拠なのよ……!! はあく……——とここで」

ここまで敢て触れずにいたけれど、やはり気になって仕方がない。

あたしは「それ」に向かって指差しつつ疑問を口にする。

「で？ この骸骨は何なの？ ……どう見てもモンスターだけど」

椅子に腰掛けるティンクルの傍らに、まるで使用人のように佇んでいる《スケルトン》……。よく目を凝らしてみると、微妙に骨が光り輝いているように見える。それに、通常のモンスターとはカーソルの色が違う。……これって——

「もしかして《使い魔》ってやつ？ ……あれ？ でも《使い魔》になるのって一部の小動物型のモンスターだけのはずじゃ……？」

「まあ、そうなんだけどね……」

本人もよく解っていないのか、唇に指を当てつつ何か考える素振りをして「わたしもよく解らないんだよね」とやはり解っていないかつたらしく、肩を竦めてそう苦笑した。全く、仕草一つ一つが妙に色っぽいのは年齢の差なのか……幾つなのか知らないけど……同じ女として劣等感を感じずにはいられない——が、そもそも比べるのが間違っているのかもしれない。それぐらい彼女は圧倒的だ。ただ……まあ——

「……胸はあたしの勝ちよね」

「え？ リズ何か言った？」

「いや、何も言っていないわよ」

貧乳を通り越して壁、絶壁、ぺったんこ。いや……でも、世の中にはこういうのが好きな人もいるらしいし……。

「うくん……」

「な、何？ どうかした……？」

「いや、スレンダーなティンクルにはボーイッシュな服装が似合うなと思って」

「……ああ、そう。ありがとう……」

何故涙目なのだろう？ やっぱり胸がないのを気にしてるんだろうか？

「大丈夫だって、あんまり完璧過ぎても近寄り難くなるもんだし、欠点が一つくらいある

方が可愛げがあつて良いんじゃない？ それに胸は大人になつてからでも成長するし！」

「……そういう意味では、最大の欠点は性別なんだけれどね」

ぼそぼそと何事か呟いたのは聞こえたけど、何て言ったのかは解らない。

「そんなことより、リズにプレゼント渡さないかね」

何かはぐらかされた感があるけど、まあそれは別にいいだろう。コンプレックスは誰しも抱えているものだろうし。

「プレゼントつて、この花束じゃないの？」

「それも一応プレゼントではあるけど、家の周りに生えてるの摘んできただけだからね」
「家の周りつて……そういうえば訊いたことなかったけど、ティンクルつてどこ住んでるの？」

何と無く予想はついてるけれど、やはりここは本人にちゃんと答えてもらうべきだろう。

「ん？ 《フローリア》だよ、四十七層の。それがどうかした——」

「一体幾ら貢がせたああああ!？」

あたしはティンクルの胸倉を掴みかかり、彼女の身体をぐわんぐわん揺らす。

「ちよっ!? リズ！ 揺らさないで！ お願いだから揺らすの止めて！」

「一体幾ら貢がせたんだコラア!! あたしがどんだけ苦勞してこの家買ったと思つてんのよ!? まだ借金残つてんのよ!」

《フローリア》の住宅といえは《リンドース》より一層下のくせに、平均三倍近い価格設定がされていたはずだ。

否応にも手に力が入る。

「ち、ちよつと! ホントに! 脳が! 脳が揺れる……!!」

「脳が揺れるわけないでしょうが!!」

「リズ、ちよつと落ち着きなさいっ!!」

まるで子供でも叱るかのような台詞だけれど、不思議と手が止まった。

「ぎ、ごめん」

「取り敢えず、その手を離しなさい」

「はい……」

彼女の胸倉を掴んでいた手をおずおずと放す。

「いい? リズ。何か誤解があるようだから言っておくけれど、わたしは他人に貢がせたことなんて一度も無いから。そんな“ヒモ”みたいなこと……わたしは絶対しない。《フローリア》の家は、レアアイテムを売って手に入れた資金で買ったの。それだって誰かから貰った物じゃないから安心して」

「うう……」

どうやら彼女の逆鱗に触れたらしい。いや、あんなだけ揺らせば普通怒るだろうけど。

「まあ、解ってくれたなら良いよ。リズもきつきわたしのこと許してくれたからね」

数瞬前の怒りは何処へやら、そこには天使のよな微笑を浮かべる一人の少女が……。何だろ、この切り替えの早さ。

「あ・り・が・とっ！ で？ 話を戻すけど、もう一つのプレゼントって言うのは？」

我ながら図々しい気がしないでもないけれど、貰える物は貰っておきたい。

「うくん……リズの趣味じゃないかもしれないからあんまり期待されても困るんだけど」

そう言いながら彼女が実体化させたのは、あたしの肩まであるかという巨大なクマのぬいぐるみだった。

「ぬいぐるみ……？」

「うん、ぬいぐるみ」

「こんなのどこに売ってるの？」

「売ってないと思うよ？ クリスマ스에倒した限定ボスのドロップアイテムの一つだから——」

「クリスマスボス!？」

あたしは自分の耳を疑った。

「あれ？ リズに話さなかったっけ？」

「一言も聞いてない!!」

もしかしたら——

「思えばもう三ヶ月も前の話なんだね……えくとね——」

——あたしが思っている以上にこの友人は、凄い人物なのかもしれなかった。

第8話 策謀

「ふ〜ん」

「違うぞ。アスナとはすぐそこでたまたま会っただけで、別に他意は無いからな」

面白いものを見た、という体のティンクルさんに間髪入れずに言い訳めいた説明を始めたキリトくん。わたしとしてはティンクルさんに弁明を図っているのも、本当にたまたま会っただけというのも気に入らない。

「いや、別に訊いてないけど」

そう言つて、ティンクルさんはくすくす笑う。その笑顔は、わたしとそう大して年齢は変わらないだろうに、大人の魅力に溢れている。

もしキリトくんがこの人のことを好きなんだとしたら、わたしじゃ絶対にティンクルさんには勝てないだろう。そもそも二人が親しいということも、わたしは今日初めて知つたのだ。でも二人の間にある雰囲気は、恋人同士のものという感じではなく……、言うなれば姉弟のそのように感じる。

「本当はキリトだけでも良かったんだけど、アスナもいるなら心強いよ」

そう言われ、わたしは少し安堵した。相談したいことがあるとこのカフェに呼び出さ

れたのは本来キリトくんだけで、わたしは二人の関係が不安だからという勝手な理由で同席させてもらったからだ。

「で、相談つてのは何なんだ？ あんたには世話になりっぱなしだからな……。俺に来る範囲なら、何でも協力させてもらおうけど」

世話になりっぱなしと聞いて、わたしは只々驚き、戦慄した。まさか毎朝ご飯作ってもらつてるとかそういう……——

「な、何だよ？ アスナ」

「別に——！ ……キリトくんってお姉さんタイプが好きなの？」

「はあ？ いきなり何でそんな話に——つて、おいアスナ！ その汚らわしい物でも見る目つき止めろ！」

「あら？ それはキリトくんの被害妄想じゃないの？」

「何を……!!」

「何よ……!!」

「はいはい、そこまで！」

パン！と拍手を打たれ、ヒートアップしかけた空気が霧散する。

「はあ……二人にここに居てもらっているのは、喧嘩してもらおうじゃないよ？」

「い、い、いめん」

「ごめんなさい……」

一人で勝手に熱くなって……どうしたんだろ、わたし。

「え〜と……二人とも良いかな？」

「ああ」

「はい」

「じゃあ、本題に入るけど——二人は、今現在茅場晶彦は、どこで何をしているんだと思う？」

何気ない口調で呟かれたその名前に、わたしは思わず息を呑んだ。

茅場晶彦。このSAOのプログラマーにして、わたし達をこの世界に閉じ込めた張本人。

でも、その名前を誰かの口から聞いたのは、一体いつ以来だろうか。

「……確かに、考えたこともなかったな」

暫し呆然としてから、キリトくんはそう小さく呟いて首を捻る。

「え？ そんなのモニターか何かで……それこそ本人が言ったように『鑑賞』しているんじゃないの？ この世界を」

そして、わたし達を。

「いや、たぶんそうなんだろうけど——あんたが言いたいのはそういうことじゃないん

だろ？」

ティンクルさんはゆっくりと頷く。

「二人とも、おかしな話だと思わない？ 実際茅場がモニター越しに僕らを監視しているんだとして——この一年と半年の間ずっと？ 一体何処で？ ……茅場は僕らと違つて“生身の人間”なんだよ？ 食べなきや死ぬ。でも、一年分の食料を事前に準備できたとも思えないし、絶対に買出しに外出しているはずなんだ。だから少なくとも、監視カメラが張り巡らされた都市部に身を潜めてる、なんてことは有り得ない……。だけど、田舎なら田舎で逆に余所者に敏感だろうし、この規模の“犯罪者”の顔は流石に忘れないと思うから、擦れ違いでもすれば気付くだろうしき」

確かに、言われてみればおかしな話ではある。

「でも、それなら共犯者でもいるんじゃないですか？」

「いや、身代金でも要求するならともかく、こんな酔狂なことに付き合う人間がいるとは思えないよ」

酔狂。それ以上、茅場晶彦に相応しい言葉はないかもしれない。今まで築き上げてきた地位も名誉も、そして莫大な財産さえも全てを投げ打つて茅場晶彦は今回の事件を起こしたのだ。それはつまり、わたし達プレイヤーをこの世界に閉じ込めることが、彼にとつては己の全てを捨てるだけの価値があつたということなのか。

「……もしかしたら、茅場の潜伏先は大規模なネット環境がある場所ですらないのかも
しれない」

「と……？」

「まず、茅場が海外にいるって線は排除していいと思う。もし海外サーバーからSAO
サーバーにアクセスしてるとすれば、いくら迂回していようが足が付くだろうからさ。
……だとすれば、日本国内。それも警察や政府の盲点——それこそ山奥のログハウスと
かベタな所にいるのかも——ッ!？」

キリトくんはそこまで言っつて、大きく目を見開いた。

「まさか……いや、そうか……」

緊張を和らげるように、大きく息を吸い込む。

「……俺は単純な真理を忘れていた。どんな子供でも知っていることさ。——他人のR
PGを傍から眺めるほど詰まらないことはない」

そして、告げる。

「茅場は、このSAOに直接、ナーヴギアを使ってログインしているんだ。……あいつ
は、俺達プレイヤーの中にいる……!!」

†

「あの二人に話しても良かったの?」

二人と別れた後、カフェから少し歩いた先の人気のない場所を選んでアウローラは姿を現した。

「キリトとアスナには今回のことは口外しないように約束させたし、茅場のプレイヤーネームは教えてない。……僕が茅場が誰なのか把握しているなんて、夢にも思わないよ」

そう。僕は茅場が誰なのか、随分と前から知っている。

システム側の存在であるアウローラを通せば、プレイヤーのキャラ情報は一部を除けば殆ど全て知ることができるからだ。

そして、僕は見つけた。

フロアボス相手に、たった一人でタゲを取り続けるあの男を。プレイヤーの属性ではありえない「Immortal Object」……不死存在というイレギュラーを。

《神聖剣》、或いは《最強の男》。

——《KOB団長》ヒースクリフ……いや、茅場晶彦を。

「この情報は、本来は知り得るはずのない情報だ。証拠能力は極めてゼロに近い。それにもし公衆の面前でヒースクリフが茅場晶彦だと言ったところで、逆に僕がシステム側の人間だと思われて他のプレイヤーに殺されかねない」

「そうなれば完全に魔女裁判よねえ」

「だから、僕以外の人間に正規のルートで答えに辿り着いてもらわなきゃいけない。今回、そのための布石さ」

僕がそう言うのと、アウローラは腹を抱えて笑い出した。

「あははははは!! ——……あー可笑しい」

「何が？」

「だって、あの二人はつまり『囿』でしょう？」

彼女の指摘に、溜め息を吐く。

「茅場が正体を看破された場合、どう出るかなんて予測しようがないし——それにね」

僕はにこりと笑みを浮かべ、言う。

「キリトの『あれ』なら、僕の予想通りの展開になったとしても、勝てる見込みは十分あるはずだからね」

「ああ、嫌だ嫌だ、怖い怖い。……あなたって、本当に面白いわよねえ」

第9話 心の距離

いつものように簡単な朝食を食べ終えてから、僕は庭先へと出ていた。

この時間帯でも六月の日差しは既に結構強く、朝日を浴びた植物が青々と輝いて見える。僕は澄んだ空気を肺一杯に吸ってから、両手を大きく伸ばした。

「んん〜っ〜」

湿度もあまり高くないみたいだし、外で日向ぼっこするにはちょうど良さそうだ。花の香りも相まって、きつと気持ちいいだろう。

でも残念ながら、そんな怠惰な時間を過ごしてられる程、僕は精神的にタフじゃない。特別焦っているわけではないけれど、何かしていないと落ち着かないのは確かだ。

「さて、今日はどうしようかなあ〜」

このまま迷宮区に潜ってしまうのは忍びないし、日用品の買い足しでもしようかなあ……—などと今日のスケジュールを考えていると、横から弾んだ声が。

「おはようござます、ティンクルさん」

微笑んで、こちらに向かって頭を下げる女性。

彼女は最近中層エリアから僕の家の方隣りに引っ越してきた、僕とは違い正真正銘の

女性プレイヤーであるアリアさんだ。

亜麻色の髪にクツキリとした二重のなかなかの美人で……服の上から着ているエプロンも相まって、花屋でバイトしている女子大生といった感じだ。実際年齢はそれぐらいいだと思う。

「おはようございます、アリアさん」

こちらにも愛想笑いに見えないように注意しながら、笑んで軽く会釈し返す。

年上の女性に微笑とともに声をかけられれば、高校生男子なら普通は緊張するものだろうけど……相手からすれば僕は只の同姓の隣人なわけで、残念ながらこれから緊張するような出来事が起こる可能性は皆無だと言っている。

昔は考えたこともなかったけれど、こういう生活をしていると、僕って将来結婚できるんだろうか？ と不安になる。そもそも結婚以前に、彼女とデートしたとして、他人から見ればレズカップルに見える可能性が……いや、そう見えるだろう、間違いなく。

「ティンクルさんは朝からお出かけですか？」

そう問われて、頭の中の雑念を振り払う。

「ええ。せっかく天気も良いんで、散歩でもしようかなって思ってます」

当たり障りのない返答。まあ、嘘ってわけでもないけど。

「アリアさんは何を？」

僕がそう聞くと、彼女は地面に置かれて僕の位置からは見えなかった如雨露を手にとり取ってみせた。

「私は花壇のお花に水やりです。それに、お手入れも。料理と同じで自分でできることは少ないんですけど、私小さい頃から花屋さんになるのが夢なんで、こうして花の世話をしている時が一番幸せなんです」

それでわざわざ中層から、こんな高い住宅ばかりの層に越して来たのか。でも確かに、実際花目当ての女性プレイヤーは多いと思う。と言っても、その大半が『花好きの私が好き!』みたいな人のような気がするけれど。まあ、花好きの女の子っていつたら男受けは良いんだろうし。そういう意味では、彼女のように純粋に花好きで住んでいる、という人は意外と少ないのかもしれない。

「素敵な趣味ですね。アリアさんだったらお花屋さん、ぴったりだと思えます」

「……? ティンクルさんは、あまり園芸にはご興味無いんですか?」

そりや、そう思うだろう。僕の動機は不純で、ある意味純粋ではあるけれど……しかしやはり、別にこの層がフラワーガーデンだから選んだわけではないのだ。もし当時、ここより高い値段の物件があれば、そっちを購入していただろう。

でも、そんな話を彼女にしても仕方がないだろう。僕は出来る限り嘘にならないように、慎重に言葉を選ぶ。

「園芸というか……普通の女の子がするような趣味全般に疎いんです」

そう言つて、僕は苦笑してみせる。

「そうなんですか？ ……私の勝手な想像ですけど、ティンクルさんつてドールハウスとか持つてそうだなあ〜つてイメージが」

そう言われ、ドールハウスを目の前にお人形遊びをする自分の姿を客観的に想像する。——oh……悲しいくらいしつくり来るものがある。

「姉が持つていたような気もしますが、僕自身は人形遊びとかしませんでしたね。どちらかというと、外で友達と遊ぶことの方が多かったかな？ サッカーとか」

言いながら、幼少の頃の自分を思いだす。あの頃は見た目の偏見とかなくて、普通に同年代の友達と夕方まで走り回ったものだ。残念ながら、小学校に上がる頃には彼らにとつて僕は「異物」になつていたけど……。

「ふふふつ。男の子みたいな子だったんですね」

「ええ……」

実際に、「男の子みたいな女の子」であれば逆にスツキリするのかもしれない。でも、現実の僕は見た目がこんなでも歴とした男の子だ。

「そう言われてみれば、確かに……ティンクルさんがスカートとか履いてるの見たことないです、私」

SAOでは共通装備も多いけど、Male専用、Female専用が少なからず存在する。下着は完全に別々だし、スカートのようなアイテムは基本女性しか装備できない。逆に男性にしか装備できないというアイテムは少ない。この辺は現実と同じだ。

「僕、股がスースーするのがどうにも駄目で……」

大変遺憾ながら実体験ではある。人生でスカートを履くのはあれが初めて最後だろう。

「え〜!? 勿体無いですよ! せつかく可愛いのに……きつとゴスロリとか、逆にシンブルなワンピースとか……ああでも、ティンクルさんだったらきつと何でも似合いますよね! 今日折角ポニーテールにしてるんですから、季節的にもっと涼しい格好しましょうよ! 黒のキャミソールとか、ティンクルさんの髪の色と相性良いと思います! それで下は白のショーツパンツとか良いんじゃないですか!？」

すげえティンション高い!! やっぱ女の子ってこういう話題好きなんだなあ……はあ……。

——つて、どれも着れるかあ!! 特にゴスロリは絶対嫌だ——!!

そんな風の中に絶叫するが、相手にはもちろん届かない。

「ああ、でもオフショルダーにデニムつてのも良いかも! 私そういうの絶対似合わないからティンクルさんが羨ましいなあ〜」

「どうやら彼女の中では僕の着せ替え人形大会が行われているらしい。頼むから頭の中で留めておいてほしい、切実に。」

「このままでは実際に何か着てみてくれ、という展開になりそうなので、さっさと退散させてもらおう。」

「ご、ごめんなさいアリアさん。僕そろそろ行かないと……！」

「あつ……ごめんなさい、引き止めてしまつて。私つたら途中から一人で話しちやつて……えへへ」

照れ笑いを浮かべるアリアさんを尻目に、撤退の姿勢に入る僕。

「……こんな誰かと話したのつて、大袈裟じゃなくてこの世界に閉じ込められてから初めてかもしれない。ここへ引越してきて本当に良かったです」

眩しいくらい笑顔。思わず見惚れてしまいそうになるけど、その笑顔は僕に対してではなく、あくまで女性プレイヤーであるティンクルに向けられてのものだ。

「僕も、アリアさんに出会えて良かったです。……良かったら、今晚夕食と一緒にしませんか？ これでも《料理》スキルはMAXなんですよ」

「本当ですか!? 嬉しいです。それじゃあ、私も何かつくつて持つて行きますねっ」

僕の提案に、アリアさんは本当に嬉しそうに快諾してくれた。

……僕がソロを貫いているのは、アウローラに言われたのもあるけれど、もし僕が茅

場に目を付けられた場合、周りの人間まで巻き込んでしまうだろうからだ。僕は、自分の身さえ完璧に守れないこの世界で、他人のことまで守れると思うほど傲慢じゃない。

……でも、近所付き合いするくらいは、僕にだって許されるはずだ。

いくら茅場だって、わざわざ夕食時を狙って「突撃！ 隣の晩ごはんアタック」などしてはこないだろう。

それじゃ、取り敢えず目的は決まったな。今晚の夕食の材料を買いに、市場に行こう。今度こそ歩き出した僕の背に、「いつてらっしやいティンクルさん」と声が届く。

「いつてきます」

聞こえたかはどうかは解らないけれど、自然と僕の口からそう漏れ出ていた。

第10話 無自覚の芽生え

夢を見ていた。小学生の頃の夢だ。あたしは真面目で大人しい子供だったけれど、午後一番の授業中にも眠くなってしまう癖があつて、よくうとうととしては先生に起こされていた。

あたしは当時担任だった、その大学出たての若い男性教師に憧れていて、居眠りを注意されるのはとても恥ずかしかつたけれど、彼の起こし方はなんとなく好きだった。そつと肩を揺すりながら、低い、穏やかな声で――

「気持ち良さそうに寝てるところ悪いけど……」

「はっ、はいっ、ごめんなさい!!」

「きやつ!!」

バネ仕掛けのようにびよーんと立ち上がり、大声で叫んだあたしの前に、『きやつ』つてなんだ『きやつ』つて……』と何やら小声で呟きながら沈痛な面持ちの女性プレイヤーが一人。

「あれ……?」

あたしはぼんやりと周囲を見渡す。机が並んだ教室――ではなく、街路樹に石田畳、

水路に芝生の庭。あたしの第二の故郷、リンダースの街だった。

「寝惚けてるの？ リズ」

優しそうな柔らかい笑みを浮かべて立っていたのは、銀髪に赤い瞳の友人だった。

「何か、その子供を慈しむような笑顔腹立つ」

思わず悪態をつく。

彼女は最前線の迷宮で戦い続ける攻略組プレイヤーにして、アスナ以上の美貌、更にはパーティーをボス戦以外では組まない攻略組女性プレイヤー唯一のソロでもあることから《氷姫》なんて呼ばれているらしい。——……ピーターなんて目じゃない、存在自体がチートみたいな奴だ。

だけど、そんなことは随分前に飲み込んだはずだ。今更彼女に僻んだりしない——と思っていたんだけど、昨日アスナの初々しい姿を見たせいか、嫉妬心が再熟してしまっただけらしい。

「そ、そんなこと言われても……」

ああクソっ！ 困った顔も可愛い！ 抱きしめてやろうか!?

いや、錯乱してる場合じゃない。

「で、今日はどうしたのよ？ あんたも研磨？」

「あんたも……?」

「ああ、昨日アスナが研磨に来たのよ」

たしか、ティンクルはアスナとも顔なじみだったはずだ。

「そうなんだ。まあそれは兎も角、わたしが来たのはリズに新しい刀を鍛えてほしくてね」

「新しい刀？」

「うん。……《白雪》ももちろん良い刀なんだけどね。六十層に入ってからパワー不足が否めなくて」

「……そりやそうでしようよ」

そりや当たり前だ。いくらレアな素材で作った装備とはいえ、所詮は五十層クラスの装備なのだ。レベル製MMOではどんなにレアな装備だろうと、敵モンスターのレベルが上がれば使い物にならなくなっていく。敵モンスターの能力のインフレはどんどん進み、それに合わせて装備の更新もどんどんしないといけない。だから寧ろ、同じ武器をここまで使った方が異常だ。

「とは言つても、あたしあんまり刀は作らないから、あなたに見合うようなもの在庫に無いし……それにこれから最前線で使うとなると、現状出回ってる最高の素材で作りたいわよね。今回も素材はティンクルの持ち込み？」

前回のことを思い出し、あたしは尋ねる。

「残念ながら、今回はレア素材とか持ってないんだ」

「そっか……—あつ」

そこであたしは思い出す。

「ティンクル、あんたあの噂知ってる？」

↑

「あれ……？」

扉にかかる木製のプレートには“Closed”の文字。

瞬きしてもプレートの文字が変わるはずもなく、扉をノックしても、やはり中から反応はない。

「おかしいな」

《圈内事件》以来、なんとなく妙にエンカウント率が高く……じゃない、攻略以外でも会って話したりするくらいにはなったアスナから、自分の親友がやっている店で腕も確かだからと薦められ、早速ここ《リズムベツト武具店》へ来てみたのだが——どうやら店主は外出中らしい。

「昼飯でも食いに行つてるとか……？」

アスナの弁ではこの時間はまだ営業中だったはずだが、まあ別に急ぎというわけでもないし、後日出直すことにしよう。

「じゃあ、俺も飯でも食いに行くとするかな」

行き先は……——《アルゲード食堂》だな、うん。

今日は何にしようか。シンプルに《アルゲードそば》か、捨りを入れて《アルゲード焼き》か……、それとも更なる刺激を求めて《アルゲード炒め》いつてみるか……？
でも、どうせなら未知の《アルゲード丼》も食べてみたい気もする。

「犠牲者は多いほうが良いよな」

ニヤリと笑いつつ、俺はクライン他《風林火山》メンバーにエギル、更に結局借りを全く返せてないティンクルにせめて飯ぐらいは奢ろうと、全員に同じ内容のメッセージを一斉送信したのだった。

†

「リズ寒くない？」

「さ、寒——びえつくし!!」

「ふふふっ」

「笑うなあ!!」

「いやだつてリズ、くしゃみがおっさんくさいよ」

あたしとティンクルは、五十五層のとある村を訪れていた。

もちろんこんな所まで二人でピクニックしに来た——なんてことはなくて、この村の

村長から武器素材入手クエストと目されている。『白竜の討伐クエスト』を受けるためだ。

目的の金属の噂が流れてきたのは十日程前。多くのプレイヤーがパーティーを組み、物凄いい数のドラゴンが倒されたものの、一向に目当ての金属を落とすことはなかった。

そんな中、また新たな噂が。『パーティーにマスターミスがいないとドロップしない』……というもの。確かに鍛冶師で戦闘系スキルを上げている人は少ない。あたしはマスターメイサーでもあることだし、試してみる価値は十分にあると思ったのだ。

村に着くまでの道中、こんなに簡単でも良いのか？　と思うほど順調に進み、そして改めてトッププレイヤーたる攻略組の凄さを思い知った。あたしも戦闘には参加したが殆どやることもなく、ティンクルが殆ど一人でモンスターを屠ってしまった。

更に驚くべきことは、彼女が防具の類を一切装備していないことだ。いくらなんでも舐め過ぎだろうとあたしは思ったが、ここまで被弾はゼロ。モンスターの攻撃を掠らせもしなかった。

でも、そんなティンクルにもあたしにも誤算があった。それが、この寒さだ。

6月中盤。初夏の日差しは少し暑いくらいだったというのに、この層は未だに冬将軍が闊歩していたのだ。当然……というか、完全に事前の情報収集の怠慢が祟って、あたしは防寒具の準備などしていない。

「ほら、これ着なよ」

笑いながらそう言つて、ティンクルは実体化させた白い厚手のコートをあたしに手渡ししてくれた。

でも、ティンクルの服装もあたしと比べて大差ない。今の彼女は、黒のパーカーにカーキ色のカーゴパンツという、ファンタジー色の欠片もない格好だった。

「……あたしが着ちゃつて良いの？」

パーカーのポケットに手をつ突つ込む彼女の姿は、あたし以上に寒そうに見える。

「良いから良いから」

本人がそう言うなら仕方ない。あたしはありがたくコートの袖に手を通した。

温かい。

あたしは何故だか少し照れくさくなつて、茶化すことにした。

「ティンクルはもしかして知つてたの？ この層のテーマが氷雪地帯だつてこと」

恨みがましそうに視線を送ると、ティンクルは俯いてしまった。

「知つてはいた、けど、随分前のことだから忘れてたよ。ごめんね」

「いや、そんな真剣に謝らないでよ！ あたしが悪者みたいじゃない」

「……これじゃ、他人のこととやかく言えないな」

「え？」

「ううん、何でもない。備えあれば憂いなし、ってね」

誤魔化すように戯けてそう言ったティンクルの表情には、今まで彼女が見せたことがないような影があつて……、あたしはなんだか悲しくなつた。誤魔化されたことも。あたしが彼女の何を何も知らないということも。

村長の話が非常に長く、フラグ立てに物凄く時間を使つてしまつたが、あたし達はその後数十分かけて山を登つた。

道中出てきたのは《フロストボーン》なる氷製の《スケルトン》の亜種モンスターだったけれど、骨系モンスターは打撃系の攻撃に弱いから、あたしのメイスが大活躍だった。そして、やっと山頂に辿り着いた。

上層の底が間近に見え、そこかしこに雪を突き破つて巨大なクリスタルの柱が伸びている。夕暮れの茜色が反射して、なんとも幻想的な光景だ。

「リス、そろそろ《テレポルト・クリスタル転移結晶》用意しといてね。戦闘中はリスのこと、何かあつても必ず守れるとは限らないから」

冷徹な発言だけど、その分彼女の真摯さが伝わってくる。

「うん、解つた」

あたしは素直に頷いて、ウィンドウから《転移結晶》をオブジェクト化してエプロン

のポケットに入れた。

「それじゃ、そろそろ本気装備に着替えるよ。流石にボス級相手にこれじゃ心許無いし」
「いや、最初から本気装備とやらでいなさいよ」

「あの格好で雪道歩くのはしんどそうだったからさ」

苦笑してそう言ったティンクルは、ウインドウを表示して装備フィギアを弄り始めた。一旦下着姿になるものと思っていたらどうやら違うらしく、パーカーの上からアーマーが取り付けられていく。

「うわぁ……!!」

あたしは思わず歓声を上げた。

アーマーを全て付け終えた彼女のその姿は、例えるならば「聖騎士」だった。

銀白色の甲冑には青い薔薇のレリーフが施され、両肩にはサファイアらしき宝石が取り付けられている。鎧は傷一つなく光り輝き、新品同様だった。間違いなく、相当なレア物だろう。

「あんた、それどうしたのよ……?」

「これ? ……六十一層のボスからL ラストアタック A ボーナスポスでね」

「……あたし、まだあんたのこと過小評価してたかもしれない」

驚きを通り越して呆れてしまいそうだ。

フロアボスのL.Aボーナスだとすれば、間違いなくユニーク……この世界に一つしか存在しないワンオフ品だろう。

「でもさ……その甲冑に刀なわけ？」

SAOはスキルによる装備の制限がない代わりに、装備がプレイヤーに要求する能力値に達していないと装備することができない。だから、スキルが《カタナ》だろうと防具が西洋鎧でも何の問題もないのだけれど……。

「ほら、昔の映画のラストサムライみたいで格好良いでしょ？」

「いやラストサムライって、確かに主人公はアメリカ？ 人だったけど、鎧は普通に日本のだったでしょ」

「え？！」

「え？！」

「……………」

「……………」

どうやらティンクルは間違っただけで記憶していらしい。可愛い奴め。

あたしがニヤニヤ見詰めていると、頬を紅潮させたティンクルはやがて咳払いして言った。

「ほ、ほら……！ かの織田信長公は、南蛮鎧を愛用してたっていうし！」

「いや、無理しなくていいわよ」

「無理なんてしてないよ!」

「ならムキにならなくても良いでしょ」

「くっ……!」

それでも何か言いたげなティンクルだったけれど、諦めたのか肩を落とした。

「はあ……行こっか」

「はいはい」

他愛もない話を続けながらしばらく歩くと、すぐに山頂の中央に到達した。

ざっと見回してみてもドラゴンの姿はそこにはなく、その代わりに、水晶柱に囲まれたその空間には――

「うわあ……」

ぼつかりと、巨大な穴が開いていた。直径は十メートルもあるだろうか。壁面は氷に覆われてつるつると輝き、垂直にどこまでも深く伸びている。闇に覆われ底はまるで見え、下の層まで突き抜けているのではないかとさえ思う。

「リズ……落っこちないですよ?」

「落ちないわよ!」

あたしがそう言い返した直後だった。最後の残照で藍色に染め上げられた空気を切

り裂いて、
猛禽を思わせる高い雄叫びが氷の山頂に響き渡った。

第11話 落日

「来るよ!! リズはそこの水晶の陰に隠れて!!」

「わ、解った!」

あたしは言われるがまま、慌てて手近な水晶柱に身を隠しながら、『攻略本』の内容をティンクルの背中に向かって叫ぶ。

「ドラゴンの攻撃パターンは……左右の鉤爪と氷のプレス、それから突風攻撃だつて!」
「了解!!」

言うが速いか、彼女の前方の空間が歪み、滲み出すように巨大なオブジェクトのポツプが始まった。

「で、でつか?!」

再度咆哮を上げ、ドラゴンの全貌が明らかになった。

巨大な翼をはためかせ、空中にその巨体を浮かべている白竜は、翼を含めれば優に七、八メートルはありそうだ。

あたしはボスモンスターというのをこの目で見るのは初めてで、その大きさに驚きを隠せない。

「ほ、本当に一人で大丈夫なの!？」

竜の全身を覆う氷のように輝く鱗は、並大抵の武器なら簡単に跳ね返してしまいそうで、いくら攻略組とはいえ、こいつと単身やり合うのは無謀にすら思える。

「大丈夫だから、リズは頭引つ込めてなよ」

しかし、ティンクルは穏やかにそう言う。その顔に、笑みすら浮かべて。

彼女は悠々と——あたしが鍛え、そして恐らく、今日が最後の戦いになるだろう……

——《白雪》を抜き放った。

キーンと、涼やかな金属音が、辺りを一瞬静寂で包み込む。

そして、それが合図であつたかのように、ドラゴンが大きくその顎門を開き——硬質のサウンドエフェクトと共に、白く輝く気体の奔流を吐き出した。

「ブレスよ! 避け——!？」

あたしは思わず叫んだが、最後まで言い終える前に、ティンクルは既に動いていた。その光景にあたしは目を見開く。

ドラゴンがブレスを吐き出す直前、ジェット噴射の如き勢いで飛翔したティンクルは、翡翠色の輝きを纏った純白の刀身でその下顎を捉え、根元まで深々と刺し貫いていたのだ。

よく見れば、切っ先が上顎にまで貫通していて、串刺しになってしまっている。これ

ではブレスを吐けないどころか、悲鳴すら上げられない。

だが、ティンクルはそこで手を止めない。何の躊躇いも見せず、刀を前へと向かって勢いよく振り抜いた。

鮮血を模したエフェクトが空に向かって大量に飛び散り、今度こそドラゴンは悲痛な叫び声を上げた。

ドラゴンのHPバーに目を凝らす。彼女のたった二撃攻撃によって、既に三割近くが減少していた。

「嘘でしょ……?」

“あれ”が、本当にあのティンクルなのか。

いつも穏やかな微笑を浮かべて、でも表情が変わらないわけでもなくて……怒るときは怒るし、悲しいときは悲しそうにするし……それで茶目つ気もあって——少なくともあたしが知る彼女は、“あんな冷たい顔”をするような奴じゃ……ない。

動揺するあたしを尻目に、戦闘は続く。

いや、戦闘というには語弊があるかもしれない。あれはもう、一方的な虐殺だ。

次々に放たれるライトエフェクトを纏った強攻撃に、たちまちドラゴンのHPバーはがくんがくんと大きく減少していく。

しかし、残りのHPが二割くらいになったところで、ティンクルは急に動きを止めた。

一体どうしたというのだと不安に思っていると、彼女はくるりと振り返ってあたしの方を見た。

彼女の顔には、いつもの微笑が戻っている。——だけど、それは一瞬だった。

あたしの無事を確認した彼女はすぐにドラゴンに向き直った。その振り向きざま、刃のように研ぎ澄まされた彼女の瞳から、赤い炎が噴き出しているようにあたしは錯覚した。

「……どつちが、本当のあんたなの……？」

そんな疑問が、無自覚に声に出ていた。

しかし、声に出したことで自覚する。この世界に来てから、あたしの心に巣くう恐怖の正体を。

自覚した途端、あたしは無性に不安になって——

「——!? リズ!! まだ出てきちゃ駄目だ!!」

「え……っ？」

訳が解らず、彼女の顔を呆然と見る。そして、自分が無意識の内に立ち上がって、水晶柱の陰から身体を出してしまったことに気が付く。

でも、もう遅かった。

轟音が鳴り響き、雪が大量に舞う。

数瞬で雪煙に視界を奪われて、次の瞬間、あたしの身体は空気の壁を叩きつけられて呆気なく宙を舞った。

そうか……突風攻撃。

風に煽られながら、自分で口にしたドラゴンの攻撃パターンを思い出す。だが、幸運なことに殆どダメージは受けていない。両手を広げて、着地体勢に入る。

だけど、雪煙が切れたその先に——地面は無かった。

落ちないでよ、と念を押されていた巨大な穴。あたしは、ちようどその真上に吹き飛ばされてしまったのだ。

思考が停止し、身体が凍りつく。

「うそ……………」

口から漏れたその声だけを置き去りに、あたしは真つ逆さまに口を開いた大穴に吸い込まれる。

「いや……いやああああああ!!」

涙で目を潤ませながら、喉が張り裂けんばかりに叫び、冷たい空気が肺を圧迫する。闇雲に伸ばした手は空を掴むばかりだ。

「リズ!!」

耳には落下の風圧で轟音が鳴り響いているのに、その声ははつきりと届いた。何とか

上を見上げると、彼女は頭を下に姿勢を真っ直ぐにして急降下していた。

ほんの数秒であたしに並んだティンクルは、手を伸ばしてあたしに向かって今まで聞いたことのない声色で叫ぶ。

「掴まれ!!」

あたしは必死に腕を伸ばす。指先が触れて、やっと掌まで届く。そして、ぎゅつと握られた掌を力強く引き寄せられ、抱きしめられた。

「あつ……」

鎧越しだというのに彼女の温かさを感じて、あたしは強く抱きしめ返した。

「大丈夫……何とかする」

あたしの耳元に、やはりどこか少年のような、ややハスキーな声で囁く。

「えっ……?」

「そのまま背中に手を回してろ! 振り落とされるなよ!!」

言うが速いか、ティンクルは空中でしかも落下中だというのに、規定のモーションを起こして白雪に蒼色の輝きを纏わせた。あたし達の身体は急激に正面に向かって加速し、壁に向かってさながら流星の如く着弾した。

と、止まった……!?!?

『ザザザザザザザザザッ!!』

「と、止まんないよ!？」

刀身は中ほどまで氷の壁に突き刺さっているというのに尚も落下速度と重力には勝てず、あたし達の身体は氷を斬り裂きながら降下を続ける。

「くそっ! なら……!!」

二人分の体重を支える両手を左手一本にしたかと思うと、右手で腰のケースから小振りのナイフを取り出した。

くるりと起用に逆手に持ち替え、紫色のライトエフエクトを纏わせながら氷の壁に突き立てた。

「本当は投擲用の投げナイフだけど……!!」

しかし今度は刺さらずに、壁の表面に傷を付けながら火花を散らせる。そして、数秒と経たずに彼女の手の中で飛散する。

「もう一回!!」

再び、今度は黄色のライトエフエクトの投剣スキルを発動させ、突き立てる。氷の破片が僅かに砕けたが、やはり刃が刺さることはなく、同じく数秒で飛散した。

たぶん、耐久値が一瞬で吹き飛んでるんだ……!!

「ティンクル!!」

「白雪はそんなに柔じゃないさ! 何だってリズが鍛えたんだから!」

「……………!!」

その言葉に、先ほどとは違う意味で涙で目が潤む。

——が、現実とは時として非情だ。

『ガキンツ』

「え？」

あたし達は同時に間の抜けた声を漏らした。

言つたそばから限界を迎えたらしい白雪の刀身は、呆気無く半ばほどから砕け折れ、切つ先の方は青い破片となつて消滅した。

「ちよっ!？」

「嘘でしょ!？」

又もやあたしは悲鳴を上げそうになるが——その前に、ドサリと音をたて、あたし達は地面に尻餅をついた。底に溜まっていた雪が跳ね上がり、あたし達の頭に軽く降り積もる。

「い、生きてる……」

助かったことが信じられず、あたしは呆然と眩く。でも、早鐘のように鳴り響く鼓動が、逆に自分がまだ生きているんだと実感させてくれる。

どうやら、白雪は己の最期の役目を完遂してくれていたようだ。

「……お疲れ様。お前には何度も……最期まで助けられたよ。ありがとう」

彼女の右手に残っていた柄と僅かばかり刀身も、彼女の労いを受けてとうとう輝く破片となって空気に溶けた。

祈るように瞳を閉じたティンクルの顔をぼんやりと眺めていたけれど、鼻先が触れ合う程に近いことに、何故かあたしは急に恥ずかしくなつて立ち上がった。

「と、ところでさ！ どうする？ このまま転移でリンダースへ戻る？ 収穫は全く無いけどさ」

「転移は無理だと思うよ？ ……ここつて用はプレイヤーを落つことす為のトラップなわけだし。簡単に脱出はできないと思う」

瞼を開けたティンクルは、真顔であくまでも冷静にそう答えた。

「やってみなきや解らないでしょ！ ……転移！リンダース！」

エプロンから取り出した《転移結晶》を頭上に掲げて叫んでみるけれど、虚しく壁に反響するばかりで、一向に何も起こらない。

「転移!! リンダース!!」

ムキになって再度、今度はもつと大声で叫んでみたけど、やはり何も起こらない。

「くっそお……」

「まあ、少し落ち着こうよりズ。こういうトラップには必ず脱出手段が用意されてるも

のだよ、ゲームってのはさ」

「そんなこと言ったって、ここが本来は助かる見込みゼロのトラップだったら？ ……」
「というか、普通死んでたわよ」

「そうかもね……でも、悪い方に考えても仕方ないよ。少し考えてみよ？」

「う、うん」

……………。

閃きは訪れず、常識的なことしか思いつかない。

「えくと……助けを呼ぶってのは？」

「ここから地上までの距離は目算だけどざっと八十メートル。因みに今試してみたけどメッセージは送れないみたいだね」

「上に人が来てもあたし達の声は届かないか……」

メッセージすら飛ばせないのは致命的だ。三、四日くらい留守にすれば、アスナ辺りが気付いて探してくれそうではあるけれど、行き先なんて話してないし、探し当ててくれる見込みは殆どゼロに近いだろう。

「ねえ……あたし達、詰んでない？」

将棋でいうところの詰め。つまりは、ゲームオーバー。

「まあ、S A Oが普通のゲームなら、ここは一回死んでコンティニューして仕切り直すと

ころだけど……無い物強請りしていても仕方ないよ。取り敢えず完全に日も落ちちゃったし、夕ご飯にでもしない？」

「あたしも落ち着き無いかもしれないけどさあ……あんたは落ち着きすぎ！」

呆れながらも、あくまでも冷静な彼女の姿に、あたしは少し勇気を貰った。

第12話 背中合わせの想い

あたしが「夕飯」から連想したのは、保存が良く干し肉とか塩漬け野菜を使った簡素なスープだった。しかし、目の前で展開されているそれは、凡そ、SAOにおけるキャンプ料理の域を逸脱していた。

オレンジ色の炎を灯してパチパチと音をたてる焚き木の上に、白い湯気を吹き上げる底の深い大きな鉄鍋。風に乗って運ばれてくるのは、懐かしい「味噌」の香り。

「ねえ……味噌なんて売ってたっけ？」

鎧を脱いで、再びパーカー姿となった彼女にそう問いかける。

少なくとも、街にある店で売っている品物の中には存在しないはずだ。

「一からつくったんだよ。色々と素材アイテム調査してね」

何てことなさそうな気軽な返事が返ってきて、あたしは心底呆れた。

一体幾つの合成パターンが存在するのか。少し想像するだけで途方に暮れそうだ。

「あんた何やってんのよ……」

そりゃソロは気軽なのかもしれないけれど、これでは「日々迷宮攻略に勤しむ《攻略組》」奴らは攻略以外に興味がない「などというポリウムゾーンプレイヤーによる

そんな批評は破綻するのではないだろうか。何かアスナも色恋に目覚めたようだし。

あたしの非難の視線を額面通り受け取ったら楽しいティンクルは、慌てて取り繕う。

「ほ、ほら！ やっぱり一日の始まりはお味噌汁飲んでからスタートしたいでしょ？」

それに調味料が一つ増えるだけで料理のレパートリーが増えてホント便利なんだよ！」

「へえー……」

現実でも料理するのはともかく、こういうところでも女としての差を見せ付けられてる気がする。

「ぐぎぎわ……!!」

「な、何でリズ怒ってるのさ？」

「どーせあたしは金槌振るしか能のない女ですよーだ！ ティンクルのバーカー！」

「何で!？」

あたしの理不尽な怒りをぶつけられたティンクルは、しゅんとしながらもお玉で鍋をかき回し続けている。

「ほ、ほらーリズー……今日のメニューは豚汁だよー」

「今日のとて何よ？ 明日以降もあるわけ？」

「脱出できなかつたらね……。ほら、食べるでしょ？」

そう言いながら、木製の器に盛った豚汁をあたしに差し出す。

「何か普通ね」

それが、盛られた豚汁を見たあたしの感想だった。

「それではご賞味下さい、お嬢様」

ニコリ、と少女漫画ならバツクに百合の花でも舞ってそんな笑顔で、それとは不釣合いで気障な、さながら執事のような動作で会釈してみせる。そんな彼女の姿に、あたしは思わず吹き出した。

「笑うことないでしょ……」

その言葉とは裏腹に、彼女は先ほどの作った笑みではなく、どこか安心したようなナチュラルな微笑を浮かべている。

そして、自分の分も器に盛ってから、ティンクルも地面に腰を下ろした。丁度、焚き火越しに向かえ合わせの格好だ。

「それじゃ、野郎プレイヤーなら喉から手が出るほど食べたいであろうティンクルのお手製料理、いただきますか!」

「はいはい、お召し上がり下さい」

そう言われ、あたしは徐に口を器に近づけた。西洋の食事マナーではスプーンを使うべきだし、この世界ではあたしもそうしてきたけれど、今回は特別だ。和食だし。

『ズズズズズ』

音をたてながら汁を啜る。

「はあく……」

口の中に広がる懐かしい味噌の風味に、長い溜め息が出た。思えば、味噌や醤油といった和の味付けのものを食べるのは一年と半年振りなのだ。

「おいしい」

率直な感想が口を衝いて出た。

「そう、良かった」

短い答え。

何だかこのまま会話が終わってしまう気がして、あたしはどうでもいいような質問をする。

「ねえ、このコンニャクみたいなのって何？」

これまた随分久方振りに使う箸を使ってコンニャクらしきものを摘まんでみせる。

「コンニャクみたいなのとしか答えられないかな」

これでは会話が続かない。

あたしは内心肩を落として次の質問をする。

「……じゃあ、この豆腐みたいなのは何？」

「それは市場で売ってた『ジャイアント・ビーンズ』っていうこれぐらいの——」

ティンクルはその顔に相應しい白くて小さい掌を限界まで広げてみせてから、

「——大きな豆から作るんだよ、料理スキルで。《ジャイアント・ビーンズ》ってようするに大豆のことだよ。大きさはともかくさ」

そう言つて可笑しそうに笑う。

「でもさ、わたしは《ジャイアント・ビーンズ》っていったらジャックと豆の木を思い出すけどね」

「ジャックと豆の木？ それって童話の？」

あたしが尋ねると、彼女は軽く首を振つた。

「違うよ。現実には存在しているオーストラリアのマメ科の植物の名前で、別名はオーストラリアビーンズとかグリーンジャック……それに、ジャイアントビーンズ」

「へえ〜」

あの童話と同名の植物があるとは知らなかった。

流石に天まで伸びることはないんだろうけど、きつとそれなりに大きな木なんだろう。

「案外、この豆を埋めたら成長して、ここから地上まで……それどころか、この城の頂まで運んでいってくれるかもしれないね」

「ティンクル……」

焚き火に向けられた眼差しは憂いを帯びていて……焚き火ではなく、何も無い虚空を見詰めているみたいだ。

——あなたは一体、何処を見ているの？

あたしは食べ終えた豚汁の器を地面に置いて立ち上がった。

「リズ……？」

「ティンクルは動かないで」

立ち上がりかけたティンクルを制してから、あたしは彼女の隣まで移動した。そして、少し考えてから、あたしは彼女と背中合わせに腰を下ろした。コート越しだけど、彼女の温かさが背中を通して伝わってくる。

「ねえ……訊いて良い？」

「ん？」

彼女のことをもつと知りたいと思うあたしの気持ちは、果たして何処からくるモノなのか。

どうして、彼女がああの先生とダブるんだろう。

それを識るために、あたしは彼女に問いかける。

「攻略組つてさ、今更だけど、最前線の未踏破エリアで戦い続けるわけで……あたし達ブレイヤーの中じゃ正直言つて一番危険で、毎日が死と隣り合わせなわけじゃない？ —

「ティンクルはさ……その……怖くないの？」

怖い、と。あたしはそう返ってくるものだとばかり思っていた。だって、こういう質問をしたら、肯定する回答が返ってくるのが常だと思っていたから。でも、彼女から返ってきたのは、あたしの予想に反したものだだった。

「怖くないよ」

それは強がりなんて微塵も感じさせないハッキリとした声だ。

しかし、後に続く言葉は、自戒と自嘲が混ざったような……笑っているようで、今にも泣き出しそうな、そんな声だった。

「だって、わたしは立ち止まるわけにはいかないんだから。歩みを止めた時点で、わたしは只の卑怯者に成り下がってしまう。……そっちの方が、ずっと怖いよ」

一体、何が彼女をそこまで追い詰めているのか。

あたしには解る筈もなく押し黙ってしまう。

「……じゃあ、わたしもリズムに訊きたいことがあるんだけど、良いかな？」

ティンクルに答えさせておいて、あたしが答えないわけにはいかないだろう。

なのに、わざわざ確認を取った彼女にあたしは無然と訊き返す。

「何よ？ 改まって」

背中合わせに座ったのは正解だった。今自分がどんな顔をしているのか想像しただ

けで情けなくなる。

僅かに空白。あたしは涙を引つ込めるのに成功する。

「……リズはさ、この世界に“本当の何か”ってあると思う？」

「……っ」

息を呑む。

その問いかけは、まさにあたしの心の奥底に蟠る不安の種そのものだったから。

あたしが答えられないでいると、彼女はゆくりとした口調で話し始めた。

「わたしは……この世界は所詮作り物で、この世界にあるモノは全て——ここでこうして背中合わせに座っているわたし達の身体も、一から九までの数字の羅列で作られた紛い物だと、そう思ってる」

そうだ。あたしも心の底で、ずっと思っていた。この世界にあるモノは全部偽物だ、単なるデータだ、と。

「でもね、最近思うんだ。確かに、この世界にあるものは全て作り物だ。だけど、それは現実も同じだって」

「……え？」

あたしは呆然と振り返る。でも、当たり前なことには彼女の顔は見えない。仕方なくあたしは向き直る。

「現実にあるモノだって、殆どのモノが人工的に造られたモノだよね？ 例えば、家とか、道路とか、食べ物だってさ。原料が違うだけで、ヒトが作った物に変わりはないよね？」

「……………」

肯定も否定もできず、沈黙を続けるしかない。

『大切なのは見た目じゃない、中身なんだ』なんて台詞を言うやつは、良い子に見られないか、よつぽどの夢想家か……：そうじゃなければ嘘吐きだ。——でも、言っていることは間違っていない。大切なのは中身、その通りだよ」

そう言うと、彼女はグイッとあたしの背中に体重を乗せてきた。

「ち、ちよつとー！」

若干前屈みになりながら、あたしは抗議の声を上げる。

「確かにこの身体はドットだ、データだ。でも現実の身体だって、言ってしまうえばタンパク質やカルシウムだよ。大切なのは今ここに居るわたし達が“心”をもった“本物”だつてことなんだ」

「心をもった、本物……？」

「そうだよ。こうやって、わたしに体重をかけられて重いと思ったり、わたしのつくった料理を美味しいって言ってくれたのは、リズベットというアバターじゃない、リズの心

なんだよ」

彼女の言葉が、あたしの心の溝に、カチリと音をたててピッタリと嵌まり込んだ気がした。

「そっか……心の問題なんだね、全部」

あたしが背中に感じているこの重みも、温かさも……本物も偽物も関係ない、あたしにとつては真実だ。

なら——きつと、こうやってあたしと話している彼女も、モンスターと戦う少し恐い彼女も、あたしを必死で助けてくれた彼女も……全部が揃って、ティンクルという一人の人間なんだ。

あたしの彼女に対する気持ち。……あたしの中で、やっとカタチになった気がする。

「ありがとう、ティンクル」

お礼の言葉と共に、彼女の背中を押し返す。

「ちよつと！ 重いよ、リズ！」

「お返しよ！ あたしの重さを精々感じなさい！」

あたし達はおしくらまんじゅうよろしく互いに背中を押し合いながら、どちらからもなく笑い出す。

「あはははっ」

「ふうふうっ」

……やれやれ。

——普通に考えれば、この気持ちは何なのかなんて、小学生にでも解る。でも、同姓なんだからと始めからどこかで否定していた。だってあたし、レスビアンじゃないし。

——でもどうやらあたしは、この日本人離れた友人を、本気で好きになってしまっただけだった。

第13話 告白

夜の帳は取り払われて、明るい陽光が辺りを照らす。氷の壁が、まるで合わせ鏡のように光を幾重にも反射して……中々に幻想的な光景だ。こんな地の底ではあっても、朝日はちゃんと届くらしい。「ここがゲームの中だから」なんて野暮なことはこの際考えないことにする。

「ふわあく……うっ」

欠伸で吸い込んだ空気はひんやりと冷たくて、寝惑っていた脳が完全に目を覚ます。あたしはティンクルから借りて寢床に使っていた野営用のベッドロールから後ろ髪を引かれつつも這い出した。

「うわっ……寒っ……」

肌に纏わり付く冷気に思わず身震いする。

時刻は午前六時。普段のあたしからは想像もつかないような早起きだ。

昨夜は暗くてよく見えなかった辺りを見回す。焚き木の燃え滓なんて情緒的なものが残っているはずもなく、それどころか地面には焚き火をした痕跡など僅かも残っていない。あたしはそれを少し寂しく思いながら、もう一つのベッドロールに近づく。

「おはよう、ティンクル」

小さく声をかけ、反応がないことを確認してから、彼女の顔を覗き込む。

透き通るような色白の肌に長い睫毛、小さな桜色の唇。そのあまりにも整いすぎた顔立ちは、どこか人形めいている。微かな寝息をたてていなければ、同じ人間だとは思えないほどに。

「まさに眠り姫ね」

彼女の寝ている場所がベッドロールではなく硝子の棺の中ならば、白馬に乗った王子様が彼女を起こしにやってくるのだらう。それが例え、氷山の頂にぼつかりと空いた穴の底であつたとしてもだ。

「眼福眼福。良いものが見れたわ」

わざわざ早起きした甲斐があつたというものだ。レコード：クリスタル《記録結晶》の持ち合わせがないということだけは誠に遺憾だけれど。

——そんなことを考えていたあたしだけれど、少し冷静になつてみると、自分の言動に頬が引き攣る。

「あたしって、実はそつちの気があつたりするの……？」

恋心を自覚したはいいけど、正直自分自身に困惑している。確かにふざけてアスナに抱きついたりその他スキンシップを働いたことはあるけど、それはあくまで友達相手に

ふざけてやっただけであって、別にあたしが同性愛者……ってわけじゃない、はずだ。もしかしたら、これは恋心ではなく、単なる憧れからくる好意を人肌恋しさのせいもあって誤認してしまっているだけなのかもしれない。まだそっちの方が、幾分説得力があるような気がする。

でも、正直言つてあたしは自分で自覚している範囲では、ティンクルに「憧れ」の気持ちを抱いたことなんてなかったと思う。そりや羨ましく思つたり妬ましく思つたりはちよつとしたかもしれないけど、基本彼女に対するあたしの気持ちは「可愛い」である。

まさか、オス化女子なんていう眉唾物の精神汚染があたしの脳内で発生している……？

「いや、有り得ないから」

うん、有り得ない。

あくまで仮の話として、例えば二人の結婚式の姿を想像してみよう。

……………。

ほら、二人ともウエディングドレス姿じゃない。どつちかがタキシードなんて有り得ないわよ。少なくともあたしには似合わない。ティンクルなら何だかんだで着こなしそうではあるけれど、絶対ドレスの方が似合うわよね。

……だけどそれってオス化と全然関係ないような？

疑わしき記憶はあるかと掘り返してみるが、恐ろしいことにすぐに見つかった。

「くしゃみがおっさんくさいとは何だおっさんくさいとは……！」

昨日のことを思い出して思わず悪態をつくけれど、愚痴を言っても仕方ない。

さて、今度は――

「ボディータッチ辺りからかな……？ キスはまだ早いよね？ ……ぐへへ」

これであたしが男なら完全に変質者だけれど、女の子同士だもん！ それに気付かれなければ何の問題ない。

「さて、その柔肌をあたしの前に晒け出すがいいわ!!」

訳の解らないことを小声で叫びながら、あたしは彼女のその小さ過ぎる胸を鷲掴みに
……！ できないまでも、言葉通り優しく触れる。

「……………」

おかしい。ぺったんこであることは元より承知の上だけれど、それにしたって幾らなんでも弾力性が無過ぎやしないだろうか？ そりやインナーの上から更にパーカーを着込んでいるから解り難くはあるけど、それにしたって感じて。しかもこれは、ブラ付けてないんじゃない？

「責めてスポーツブラくらい付けなさいよ……」

流石にこれでは無防備過ぎるというものだろう。隠蔽スキルで簡単に姿を隠せるこの世界では、何処に変態が潜んでるのかも解らないのに。

そんなことを考えながら、尚も胸の上に手を置き続けていると、ぱちりと目が合った。胡乱げな眼差しであたしを見詰めながら彼女は口を開く。

「……何やってるの？ リズ」

こんなに寒いというのに汗が流れる。

あたしは引き攣る頬を懸命に動かしてなんとか笑みの形をつくってから言った。

「えーと……スキンシップ？」

「いや……このスキンシップの取り方は間違ってると思うよ」

青い顔をしているティンクルにあたしは内心不満を漏らす。

……そこまでドン引きしなくてもいいじゃん。

「取り敢えず、この手を退けようか？」

「はい、ごめん」

慌てて手を引っ込める。

「はあ……他の人にはやらないようにね。アスナとか」

あたしのスキンシップの被害者をもろに言い当てられ動揺しつつも、悟られないようにあたしは軽口を叩いた。

「つまりはティンクルにはやっても良いと……?」

「良いわけではないでしょ!!」

「ですよー」

概ね想像通りの回答。でも少し期待していたのは内緒だ。

「本当に悪いと思ってる?」

「はい、思っています」

もちろん思っていない。

普段より幾分鋭く開かれた紅玉の瞳は、まるであたしの心を見透かすようだけれど、他人の思っていることなど誰も解りはしないのだ。

「はあ……もういいよ。おはよう、リズ」

「おはよう、ティンクル」

我慢比べではあたしに軍配が上がったようだった。

↑

朝食に昨夜の残りを温めて食べたあたし達は、今後のことを話し合うことにした。

「で、結局どうやってここから脱出すればいいのよ?」

転移結晶も使えず、メッセージで助けを呼ぶこともできず、おまけにここから叫んでも頂上に声は届かない。

「それはわたしも考えてたんだけど——ちよつと待って、リス」

「な、何よ……？」

まさかモンスターが湧いたのかと警戒するが、彼女は雪の上の一点を指差した。

「あそこ、何だか光ってない？」

「……光ってる、わね」

首を傾げつつも、二人で近づく。

雪の上からでも解ることといえば、僅かにその部分だけ盛り上がっていることと、氷のようなものが覗いていることだけだ。

「何か埋まつてるのかな？」

あたしがそう呟くと、ティンクルが躊躇無く手を雪の中に突っ込んだ。

「ちよつ!？」

埋まっていたのがトラップだったらどうなっていたことか。でも実際はそうではなく、ティンクルの両掌にはみ出しながらも乗せられたそれは、彼女の髪の色と同じ、白銀に輝く見たこともない鉱石だった。

「これって……」

「たぶん、これがわたし達が探しに来た金属……なんだろうね」

あたしは右手の指を動かして、そつと金属の表面を叩く。

ポップアップウィンドウが浮かび上がり、アイテム名が表示された。

「《クリスタライト・インゴット》……だつて」

「うん。——あ！ まだあるみたいだよ！」

そう言つて、彼女は自分が持つていた方をあたしに手渡すと、新たに見つけた方を持ち上げた。

「あははっ！ ラッキーだね。これで目標達成だ」

子供っぽい笑顔ではしゃぐ彼女の姿はなんとも微笑ましい。記録結晶が無いのが再度悔やまれる。仕方ないので寝顔と共にあたしの心のネガに焼き付けておこう。

「でも、何でこんな所に埋まつてるのよ？」

あたしは当然の疑問を口にする。

「それはさ……ほら、村長の話思い出してみなよ」

「村長の話？ ……正直ちゃんと聞いてなかったからよく覚えてないんだけど」

「まあ、長かったからね。……ほら思い出して。〃竜は毎日餌として水晶を齧り、その腹で精製して貴重な金属を溜め込んでいる。〃つて言つてたでしょ」

「ああ……そんなことを言つていた、ような……？」

結局思い出せず、あたしは先を促すことにした。

「で？ それがどうしたつてのよ？」

「要するにさ、ここはトラップじゃなくて、竜の巣だったんだよ」

「竜の巣……？」

「そう」

ティンクルは鉱石を片手で持ち直して、もう片方の手で指差した。

「つまりこのインゴットは、蜂が花から蜜を吸って体内で蜂蜜にして巣に溜め込むように、昨日のドラゴンの体内で作り出されたものつてわけさ」

「なるほど」

短くも例えを用いた解りやすい説明に簡単に理解できた。——理解できた故に、あたしは恐ろしい可能性を指摘する。

「ねえ、思い出したんだけどさ」

「何を？」

「村長つて竜は夜行性とか言ってたでしょ？ ここが本当に巣だつていうんなら……」

ティンクルも気付いたのだろう。見る見る顔を青ざめさせていく彼女を見て、ああ、あたしも今こんな顔なんだろうな、と何故か冷静にそう思った。

しかし、それでもティンクルの反応は早い。

「リズはこれもストレージに入れて！」

「う、うん！」

投げ渡された鉈石をなんとか受け取って、元々持っていた方も含めてアイテムストレージに格納する。

あたしがそうしている間に、彼女は鎧は後回しに刀を出現させた。

柄に髑髏をあしらった中々におどろおどろしい意匠だ。しかし、刀身が異様に短く、見た目はまるで包丁だ。

「これ威力はそこそこあるんだけどリーチが短すぎるからまともに使えないんだよ！」

「何でそんなもん持ってきてんのよ!? 予備ならもつとマシなのあったでしょ!」

「まさか《白雪》が折れるとは思わなかったんだよ!!」

『GRAAAAAAAAAAッ!!』

咆哮、そして突風。

噂をすれば影がさす。あたし達はそろって宙を見上げた。

「来た!!」

しかし、口から漏れたのは同音異義の叫びだった。

単なる悲鳴を上げたあたしとは違い、ティンクルはこの状況に活路を見出したらしい。爛々と輝く彼女の瞳は、彼女の中である種のスイッチが入ったという合図だ。

「ど、どうするつもり!？」

「リズ、暴れないでよ」

「え? ——ち、ちよつと!？」

彼女はあたしの腰に手を回して引き寄せると、轟音と共に雪を跳ね上げて大きく跳躍した。

「きやつ」

小さく漏れ出た自分の声に赤面するが、そんなことはお構い無しに——

「ちよつと揺れるよ……!」

「うわっ!？」

氷の壁を蹴りつけ、更なる跳躍。

ドラゴンの目線をも越え、その背面へと見事に着地した。

そして、彼女は右手に持った小刀を思い切り突き立てる。ダメージエフェクトが弾け飛び、ドラゴンは甲高い悲鳴を上げる。

「ま、まさか……」

「リズ、しつかり掴まってなよ」

彼女がそう言った途端、あたし達を振り落とす為に、ドラゴンは翼を広げその巨体を急上昇させ始めた。

「やっぱいいいい!!」

ジェットコースターの急降下宛らの暴風と振動。あたしは目を開けていられず、必死に背中の中の突起を握り締める。

ふ、と。あたしの手の手の甲が温かい何かに包まれた。

目を開けてみれば、それは彼女のあたしのよりも小さな掌で……。 たったそれだけで、あたしの中の恐怖はスツといなくなる。

「もう、離しても大丈夫だよ」

優しくそう囁かれ、あたしは手に込めていた力を抜いた。

あたし達の身体はドラゴンの背中から投げ出され——それまで見えていなかった景色が眼下に広がる。

「わあっ……いー!」

あたしは思わず歓声を上げた。

昨日登った円錐の雪山。少し離れた位置にある小さな村。一面雪に包まれ、日の光を浴びて輝く銀色の世界。

そして手を繋いだ先には、その景色に負けなくらいに綺麗な大輪の笑顔。

「ティンクル——あたしねえ!!」

少し狡いけれど、思いの丈を声にして叫ぶ。

「何!？」

「あやし、あなたことが好き!!」

目を見開くティンクル。

そして寂しそうに笑って――

「僕もだよ」

そう、聞こえた気がした。

第14話 重なる心

「たつだいま〜！」

元氣の良い声でそう言つて、リズは勢い良く店の扉を押し開けた。

「たった一日留守にいただけなのに、何だか帰つて来た〜！ つて感じ」

振り返り僕の方を見てはにかむリズ。僕はといえただ曖昧に微笑むだけだ。

「ごめん、疲れてるよね。ティンクルにはあたしのせいでかなり無茶させちゃったし……」

僕の態度を勘違いしたらしく、神妙な面持ちで頭を下げる。

「止めて、らしくないよリズ。今回はわたしが刀の依頼をしたのがそもそもの発端なわけだしさ」

「らしくないって何よー！ あたしが謝るのがそんなにおかしいわけ？」

ガバツ、と音がしそうな勢いで頭を上げたリズは、膨れっ面で不満を隠そうともしない。そういう明け透けなところが彼女の美点の一つだろう。

「良いよね、リズのそういうところ」

「え……？ ……あ、ありがとう」

赤面する彼女の姿はなんとも可愛らしい。リズ本人がどう思っているのかは知らないけれど、彼女は十分に魅力的だ。だから、そんな彼女に好きだと言われたのは素直に嬉しい。

でも、彼女の思い人は僕ではなく、女性としてのティンクルなのだ。つまり、僕らは両思いとも言えるし、逆に互いに失恋したとも言える。

それに、僕は周囲の感情を度外視して行動してきた度し難い合理主義者だ。利用できないものなら、それがたとえ長年のコンプレックスであろうと利用したし、今もそれは変わっていない。誤解を解かないのは嘘を吐いているのも同じだ、なんて言葉をどこかで聞いたけれど、まさにその通り、僕は皆を騙してる。彼らの好意を踏み躪っている。そんな僕が、そう都合よく誰かを好きになって良いはずがない。

だから僕は今まで通り、「女性」としてリズに接する。それがたとえ彼女を、そして僕自身も傷つけるのだとしても、僕はもう後には引けない。幻想は幻想のままに。騙したのならば、せめて騙し通そう。

「僕」としての気持ちを伝えるのは、あれが最初で最後だ。

「……いや、ちよつと待って。今のは本当に褒めてんの？ それとも貶してんの？」

「褒めてるよ」

「ホントに〜？」

「本当だよ」

尚も疑わしげな視線を送ってくる彼女に、僕は真面目な口調で答える。

「そ、そう」

「何だか納得してくれたみたいだけれど、わたしがリズムのどこが良いって言ったのか解ってないでしょ？」

冗談めかして茶化す僕に、一瞬何か言おうとして、しかし思い直したように表情を変えて言った。

「そう思うんなら教えなさいよー」

「胸に手を当てて自分と向き合えば、自ずと答えは見つかると思うよ」

自分の胸の上に手を置いて、片目を瞑ってみせる。

特に何も考えず、不用意に言った言葉。まさか、この言葉が彼女を決心させるとは知る由もなく。

「……そうね」

小さく漏れ出た声。ぞくりと、えも言われぬ悪感が背中を走る。

しかし、音も無く装填された弾丸は、他の誰でもない、僕自身の手によって込められたものだ。

「そのパーカー姿じゃ随分冷えたでしょ？」

無慈悲に引き金は絞られ、撃鉄が火花を散らす。

「うちのお風呂使わせてあげるからさ、あたしが刀鍛えてる間に入っちゃいなさいよ。温まるわよ?」

放たれた弾丸。

無駄だと解りつつも回避を試みる。

「いや……そんなのリズに悪いよ」

「別にあたしはあんた帰ってからゆつくり入り入るからいいわよ。……それとも、一緒に入る?」

「……ッ」

僅かな動揺が顔に出る。

そんな僕の反応を面白がるようにニヤニヤと笑うリズ。

彼女がどういいうつもりなのかは解らないけれど、逃げ道は完全に塞がれてしまったみたいだ。

「……解ったよ。お言葉に甘えて使わせてもらおうね」

いつもと変わらぬ微笑を浮かべてから、僕はそう答えた。

†

「テインクル、湯加減はどう?」

「大丈夫だよ」

湯船に半身を沈め、努めて平常を装ってそう答える。

扉を一枚隔てただけの危うい会話。

「そう。……じゃ、あたしはボチボチ仕事に取り掛かるとするわ」

「ありがとう。お願いするよ、リズ」

「あーでも、代金はたんまり貰うわよ。その辺は公私混同しないからね」

「冗談めかすようにそう言って笑うリズ。彼女が今どんな顔をしているのか、容易に想像できてしまう。

「……ほどほどにお願いするよ」

溜め息混じりに僕も笑う。

「んじゃ、ゆっくり温まって」

ガチャリ、と扉の閉まる音が浴室にまで響き渡った。

「どうやら、行ったみたいだ。」

「……………はあ」

短い吐息。

表情を引き締め直し思案する。

まずは認識を改めよう。恐らく、リズは僕が男だと気付いている。

でも、別に驚くようなことではない。今まで何度と無くぼろが出てたと思うし、そもそも男が女の振りをするというのが無理な話なのだ。

ここまでズルズルと続いてしまったけれど、所詮、照れ隠しに咄嗟に吐いた嘘から始まった関係だ。簡単に壊れるのも道理だろう。

それに大事のように捉えているけれど、実際はそこまで大したことではない。たとえリズが僕を女装変態野郎だとアイコンクラッド中に流布しようと、僕はソロなんだから殆ど支障はない。せいぜい周囲の対応と見る目が変わるくらいだろう。そして、それによつて周囲との関係が険悪になろうとも、孰れS A Oがクリアされて現実へと戻れば、それらの軋轢は全て清算される。

でも、そうやって理性では解っているはずなのに、彼女との関係が壊れてしまうことを悲しく思っている自分があることも否定できない。

だから、改めて思い知らされる。ああ……僕は、本当にリズのことを好きなんだな、と。

——そうやって、思考に意識が没頭していたためか、反応が遅れた。

躊躇無く開け放たれた浴室の扉。そして、何の躊躇いも見せず、バスタオルを巻いた

だけという格好でリズが入ってくる。

「……!!」

声も出せず、咄嗟に身体を肩まで湯船に沈ませる。

「リ、リズ……!?!」

どうにか名前を呼ぶが、それ以上言葉が続かない。

「やっぱりあたしも一緒に入るわ。洗いっこしましょ」

どうやら彼女は脱衣場から出て行った振りをしてタイミングを計っていたらしい。

冷や汗が流れるのを感じつつも、なんとか言葉を搾り出す。

「え、遠慮するよ」

「何ですよ？ 女同士なんだから恥ずかしがることなんてないでしょ？」

か、考えろ。考えろ、それっぽい理由を。

「その……いくら女の子同士でも、恥ずかしいものは恥ずかしいよ……他人に素肌を晒すのは。……見るのも、見られるのもね」

精一杯、声と表情で乙女を演じる。

一体僕は何をやってるんだ、とどこか客観的な自分が警鐘を鳴らすが、そんなものに構っていられる余裕は今の僕にはない。

「意外とティンクルって恥ずかしがり屋さん？」

「うん。……意外かな？」

「いや……まあ確かに、あんた普段からあんまり露出のある服着てないもんね。スカート履いてるの見たことないし」

苦し紛れの言い訳だったけど、どうやら納得してくれたみたいだ。良かった。

「で、でしょ？ だったら——」

「つてことで、少しは耐性付けなさいよ」

安心したのも束の間、リズはそう言いながら浴槽に片足を突っ込む。

「ち、ちよつとリズ!？」

更に有ろうことか、彼女は巻いていたバスタオルを床へと落としました。

自ずと行くべきではない場所へ視線が行ってしまう。

「いや、だつてお湯の中にタオル入れるのつてマナー違反でしょ？」

僕の抗議を素知らぬ顔で受け流すと、リズはもう片方の足も浴槽に入れ、そのまま僕の隣へ腰を下ろした。その距離は、互いの肩が触れ合いそうなほどに近い。

「ふう……。やつぱり冷えた身体にはシャワーじゃなくてお風呂よね。あたしがこの家に決めたのつて、外観に一目惚れしたつてもあるんだけど、お風呂が大きかつたつても理由の一つなのよ。ほら、こうやつて並んで入つても余裕あるでしょ？」

会話が頭に入つてこない。それでも、上手く働かない頭で思考を加速させる。

もはや、こうなってしまうては、何事も無くやり過ぎすなんて不可能だろう。

逃げるにしても、この場に留まるにしても、だ。

なら、逃げよう。

どうせ清算される関係なら、綺麗なままで終わりにしたい。壊れていくのを黙って見ているよりは、そっちの方がまだしもマシだ。

「ご、ごめんやっぱ無理……！ わたしは先に上がるから——」

逃走と、そして彼女との決別を決意し、僕は腰を浮かす。

だが、僕の秘部が湯の中から出る、という致命的なところで——

「逃がさん!!」

「うわっ!？」

背後から腰に腕を回され、再び湯船の中へと引き摺り込まれる。

「リ、リズ……?？」

「こっちは向かないで」

動揺して振り向こうとした僕を牽制するリズ。

「いや……でもっ」

背中に感じる柔らかな二つの隆起。それは間違いないく背後にいるリズのもので……。

そう理解が及ぶにしたがって、鼓動が早くなり、急激に顔が熱くなっていく。

そして、意識しないようにと思えば思う程、触覚は鋭さを増し、逆に思考は徐々に緩慢になってしまふ。

「絶対逃がさない。あたし、言っておくけどかなりしつこいわよ。もし今逃げたつて、あなたのこと地の果てまでも追つてみせるから」

耳元に聞こえるそんな彼女の頑な声に、絆された思考では抵抗できない。

「……解つたよ」

降参だ、と逃走を諦め全身の力を抜いて沈み込む。

それでもまだ疑わしいのか、絡めた腕をなかなか放そうとしなかったリズだけれど、いい加減もう僕に逃げる気はないと解つてくれたのか、どこか名残惜しそうにゆつくりとその手を離した。

そして、再び僕の隣に座り直すと、心底恨めしそうに呟いた。

「あなた、腰細すぎ」

しかし、それは彼女なりの照れ隠しなのかもしれない。彼女の紅潮した横顔は、決して湯船に浸かっているせいだけではないんだらうから。

お互い気持ちを落ち着けるために、幾許の間黙つて肩を並べていたけれど、先に沈黙を破つたのはリズだった。

顔を合わせ、僕の瞳を覗き込むと、彼女は小さく口を開いた。

「ねえ……?」

「リズが訊きたいこと……『僕』が答えられることなら、全部答えるよ」

僕がそう促すと、リズは僅かに息を呑んでから、「僕、ね……」と小さく呟いて、ただどしくも言葉を紡ぐ。

「あんたは……その……男の子、なんだよね? アバターがバグつてるとか、身体は男で

も心は女の子なんだとか……そういうことじゃなくて」

「うん。……こんな見た目だけけれど、正真正銘男だよ」

できるだけ誠意を込めるように、ゆっくりと吐き出す。

そして、少し思い直して補足する。

「まあ、現実の僕がまだこのままの見た目かどうかは解らないけれどね」

とは言うものの、この世界に囚われた十七歳の時点で成長期は殆ど終わってしまったから、髪が伸びたり頬が痩けたりしてて、顔立ちが劇的に変わっているなんてことはまずないだろう。

「……根本的なことを訊いておきたいんだけど、あんた普段から女装——つてわけじゃないわね……女の振りしてんの? それとも、あたしの前でだけ?」

これにはどう答えればいいのかと一瞬迷う。だけど、僕に今できるのは有りの儘を伝えることだけだと思い直し、一拍置いてから正直に答える。

「意図的に女性として振舞ったことは何度かあるよ。だから、リズに対してだけじゃいけないけど……常態的にそう接してたのはリズだけだね。それから、攻略組を始めとして僕を女性プレイヤーだと思ってる人達に対しては、女性の振りをしてたわけではないけれど、彼らの勘違いを正しはしなかった」

「……理由は？」

「どっちの？」

「両方」

やや不機嫌さが増してるのは僕の気のせい……じゃないよね。何か癪に障ることも言ってしまったんだろうか。

「誤解を解かなかつたのは……単純に女性プレイヤーと思わせたままの方が、何かと都合がいいと思つたからだよ。ネットゲーマーって結構嫉妬深いから……女性と思わせておけば無用な軋轢を生まずに済むっていう、打算的な部分もあるし……一々否定してられるほど、精神的に余裕があるわけでもなかったから」

「余裕がないって……」

「……言つたでしょ？ 只の卑怯者になるのが怖いって。僕が攻略組なんてやってるのは、殆どはそういつた強迫観念からなんだ。自分で選択した結果とはいえ、良心の呵責つてのが一応僕にもあるんだよ」

言い終えて、内心自嘲する。

何が良心の呵責だ。そんなもの、感じたことなんて無いだろう？

そして、これだけはリスにも言うわけにはいかないけれど、今までソロで大量のリースを獲得してこれたのは、システム側に精通した異端のAIであるアウローラの協力があってこそだった。

ピーターなんて目じやない。このアインクラッドにおいて、僕以上の卑怯者は存在しない。

そんな僕に残された唯一の贖罪の道は、どんな手段を使つてでも、このゲームを……この世界を終わらせることに他ならない。そのためなら、他人を騙すことも、自分の容姿を利用することも厭わない。

そんな僕がヒトを好きになるなんて、なんと滑稽なことだろう。

——そもそも、僕という人間はこんな風に、顔色一つ変えずに虚言を吐けるような人間だったのだろうか。

いいや、そんなことはなかったはずだ。なら、知らず知らずのうちに、僕はそんな風に変わってしまったのか。

ああ、駄目だ。気持ち悪い。吐き気が込み上げてくる。

思考が徐々に重力に押し潰され、底へと沈んでいく。やがて水圧に耐えられなくなっ

た心は軋み、穴を空け、闇の奔流が勢いよく流れ込む。

……遂には闇は心から染み出して、皮膚の上を纏わり付く。こんな幻覚を見るなんて、僕はもう精神的に限界なのかもしれない。

「……なら、あたしを騙してたのは何で？」

今までにないくらい、切実なその声に、一体何を答えればいいというのか。

「決まってるよ」

自分はこんな声を出せたのか。まるで馴染みのないその声色に、何故か違和感を感じない。

「同性相手なら、少しは安くしてくれると思っただけだよ。……常態的に君を騙していたのは、その方が都合が良かったからだ。他に何か特別な理由があったわけじゃない」
平坦な口調でそう言い放つ。

これで終わりだ。早く帰って、眠ってしまいたい。

それなのに、リズは間髪入れずに僕の言葉を否定する。

「嘘よ」

何を根拠に、こんなにハッキリと断言できるのか。

苛立ちすらも覚えながら、僕は問う。

「何故？」

並べられていた互いの肩は、今では向かい合わせだ。相手の顔を、正面から見据える。睨むように、或いは祈るように。

「それこそ決まつてるわよ。ティンクル……あなたは、あたしを助けてくれた。打算だけで付き合ってる相手のために、自分も死ぬかもしれないのに飛び込めるわけがないでしょ！」

「……………」

「………それにあんた、意外と恥ずかしがり屋らしいからね。バスタオル巻いてるつてのにあたしの顔見ようとしなかったし。……あの日はそんな風には見えなかったけど、初対面の女の子——つて自分で言うのも変だけど、女の子にスカート姿を見られてるつていう後ろめたさから、咄嗟に吐いちゃった嘘、つてな感じなんじゃないの？」

「……………」

「黙秘？ 別にいいけど。……自分が実は男だつて言い出せなくなっちゃったのは、あたしがあんたに友達になろうなんて言ったからでしょ？ 今にして思えば、あんた返事に躊躇してたしね」

「恥ずかしがり屋かどうかはともかく、大方的を射ていた。だけど、否定する。」

「……………リズはお人好しが過ぎるよ。僕が、そんな殊勝な人間なわけ……ないじゃないか」
「何故、自分を騙していた人間をこうも信用できる？」

……僕にはできない。自分すら信じられないのに、他人を信用できるわけがない。

そもそも、リズを助けた——否、あれは結果的に助かったただけ。運が良かっただけ。勝算なんて無かった。……ただ、あのときは、身体が勝手に動いたんだ。

「別に……あたしはお人好しなんかじゃないわよ」

苦笑して呟くりズ。

そして、笑みを消すと、より真剣みの増した顔で言う。

「あたしは、あんたのことが好き。女の子のあんたも、男の子のあんたも、あたしが纏めて愛してあげる。だって、全部が合わさって、あたしが好きになったティンクルなんだから」

僕という人間の全てを肯定してくれるかのような、彼女の言葉。それは、まるで夜明けを告げる薄明かりのように、僕の心を覆った闇を徐々に溶かしていく。気付けば、身体に纏わり付いていた幻覚も消えていた。

……こんな言葉一つで、全てが解決されるはずはない。それは当たり前だ。それでも、彼女の言葉は、僕に先へ進む勇気をくれた。

だから——

「リズ」

「は、はい」

彼女の、色づいた林檎のような頬に手を添える。

全く、お互い裸なのに、これ以上何を恥ずかしがることがあるんだ、と内心苦笑する。
「ありがとう、リズ」

こんなことでは、何も解決しない。だから、これから少しずつ解決していこう。

「僕も……君が好きだ」

そう言つて、微笑む。思えば、雪山から戻つてきてから……——いや、もしかしたら……この世界に閉じ込められてから、初めて心の底から笑えたのかもしれない。

「テ、ティンクル……っ」

目尻に溜まった雫を、そつと親指で擦る。

「泣かないでよ、リズ」

「だって……嬉しかったから。やっぱり、あれつて空耳じゃなかったんだね」

そして、どちらとも無く唇を寄せ、重ねる。

「んっ……ふぁ……」

重なり合つた二つの唇。僕らの心も、こんな風に繋がれたのだろうか。

第15話 星見草

「ん……っ」

「あ、ごめん」

泡だったシャンプーが片目に入り、反射的に目を閉じる。

痛みを少しでも早く取る為、手の甲でゴシゴシと拭った。

「もう……やるならちゃんとやってよ、リズ」

「何であたし、男の髪の毛洗ってんだらうね？」

「……リズが洗いたいって言ったんでしょ？」

湯船から出た僕らは、お互いタオルを巻いて、代わり番こに髪を洗うことになった。もちろん言い出したのはリズだ。

「……はあ」

「何さ？ その溜め息は」

「だって……あんた髪綺麗過ぎなのよ。いや、髪だけじゃないけど。——枝毛どころか全然痛んでないし。やっぱ少しムカつく」

ワシヤワシヤと、リズの手付きも荒くなる。

「そ、そんなこと僕に言われても……。別に特別なことなんてしてないよ。現実で使ってたのだから、父さんと共用のリンスインシャンプーだったし」

「くっ……!」

「ちよつと強過ぎないかな!」

現実でやれば毛が抜けそうな勢いにまで加速させたリズ。

どうやら火に油を注いでしたらしい。やはり、女心というのは難しいな。

「はい、おしまい!」

「ぶふっ」

ザバツ! と、勢いよく風呂桶でお湯をかけられて、僕は盛大に咽た。

「ひ、酷いよ……!」

「はい、次はティンクルが洗う番!」

「はいはい」

立ち上がって、代わりにリズを椅子に座らせる。

バルブを回し、シャワーノズルから出るお湯の温度を掌に当てながら調節して、適温になったところでリズの頭に当てる。

「お湯加減はいかがですか?」

「ぶっ……何よ、その口調。大丈夫よ」

まるで美容院の店員のような僕の口調が面白かったのか、リズの機嫌は少しは良くなつてくれたみたいだ。

髪全体にお湯を馴染ませるように、空いてる片手を使って軽く汚れを流す。……SAOでは老廃物が出ないから、当然汚れてはいないのだけれど、それは言わない約束だ。

お湯を一旦止めて、ノズルを置いて両手を空ける。

「それではシャンプーしていきますねー」

「あんた最後までそのまんまでやる気？」

当然。

ポンプを二回押してシャンプーを手に取り、掌である程度泡立ててから、髪の毛の上で泡立てる。

頭皮を洗うときは爪を立てず、指の腹を使って擦る。そうすればあまり力を入れなくても、ちゃんと汚れは落ちてくれる。因みに洗うのはあくまでも頭皮であつて、髪の毛自体は髪同士を擦り合わせると傷んでしまうので極力擦らず、泡を髪全体に行き渡らせる程度でいい。

「痒いところはありませんか？」

「無い無い」

再びバルブを回してお湯を出す。

「それでは濯いでいきますので目を閉じていてくださいね」

「はい」

シャンプーを濯ぐ。ここで間違つてはいけないのは、単に泡を流すわけではなく、毛穴に残った汚れや油分もちやんと流さないといけないということだ。

毛穴の汚れを落とすようにしっかりと、しかし髪を水に当てる時間は極力最小限にしたいので、そこは素早くこなす。

「それではトリートメントしていきますね」

トリートメントを髪の毛に……頭皮には付かないよう、中間から毛先にかけて馴染ませていく。

リンスと違いトリートメントは髪の毛の内部まで浸透させないと意味がないので、本当は蒸しタオルで髪を包むと良いのだけれど——流石に蒸しタオルなんか無いので、少し熱めのお湯に浸したタオルを絞って代用した。

「はい。それではトリートメントが浸透するまで湯船に浸かってお待ちください」

「……ねえ？」

「何？」

「あなた……いつもこれやってんの？」

「まさか。さつきも言ったでしょ？ 僕はリンスインシャンプーだって」

「でも普段からこういう洗い方なんですよ？」

「まあ……流石に蒸しタオルなんてしないけど、概ね」

「そりゃサラサラだわー」

呆れ果てた、といった体で遠くを見詰めながら呟くりズ。

そんな反応をされても、僕としては対応に困るのだけけれど。

「何よっ！ 女より女らしいじゃない！ 嫌味か!? 当て付けか!？」

「うっ……」

僕としては甚だ受け入れがたい評価だけれど、客観的に見て容姿はもちろん、料理好きとか髪の手入れとか……男としてどうなのだろう、という自覚がある分何とも言い難い。

「はあ……どうせ僕は女々しいですよ。——ほら、茶番はもう終わり」

言いながら、僕はリズの頭に巻いたタオルを取り去る。

「茶番って……」

「だって、ここでいくら髪の手入れをしたって、現実のリズの身体には全く反映されないよ。どうせやるなら、現実の方が良いでしょ？ ……蒸しタオルも、ちゃんと用意して

「さ」

「そ、それって——」

何か言おうとしたリズの唇を、人差し指で押さえる。

「僕は……君との関係を、こんなところで終わらせたくない。現実に戻ってからも、また会いたいつて思ってる」

「……………」

「だからこの世界で、君と特別な関係になるつもりは無い」

僕の言葉が余程気に食わなかったのか、リズは僕の手を払い除けて反論する。

「何でよ……? だって、あたし達好き合ってるんだよ? ……ティンクルが嫌だって

言うのなら、別にシステム上の結婚なんてしなくてもいいよ。でも……! 一緒に暮らすくらい、良いでしょ?」

「駄目だ」

静かに、しかし断固とした意思を込めて拒否する。

「……………ああ、そっか。あんたの考えることくらい、あたしには解るわよ。今のままの方が都合が良いっていうなら、あたしは誰にもあんたが男だって言わないし、一緒に暮らせなくてもいいよ……不自然だもんねっ」

言葉ではそう言うものの、声は震え、今にも泣き出しそうな笑みを浮かべている。

「でもさ……約束して? 攻略が終わったら、うちに来て、あたしに装備のメンテをさせてくれるって……。——毎日、これからずっと」

「約束できない」

たった一言。それでも、防波堤を決壊させるには十分過ぎた。

泣き出したリズは、僕の両肩を掴む。

「何だよ……!!? あたしの気持ち、解るでしょ? 好きな人と少しでも長く一緒にいたいっていう、当たり前前の気持ち。……あたし、あんたが何考えてるのか……解んないよっ」

彼女の顔を見ていると、決心が揺らぎそうになる。でも、だからこそ……。

「解るよ。当たり前前だ。僕だって、リズと一緒にいたいよ」

「ならっ……!!」

「でも! だから駄目なんだ!!」

彼女に言い聞かせるために、そして自分自身に言い聞かせるために、言葉を紡ぐ。

「確かに、リズと一緒にいられたら幸せだと思うし、君もそう思ってくれているのは素直に嬉しいよ。……でもそうなったら、僕はそこで立ち止まってしまう」

「……立ち止まるって……それって」

僕は首を横に振る。

「さっきの強迫観念とは、また別の話だよ。……皆、リズも含めて……この世界に慣れてきているとは思わないか? ——ゲームで死んだら現実でも死ぬ。そんな異常な状況

を受け入れて、日常にしまっっていないか？」

「そ、それは……」

「うん、解ってるよ。……この世界を現実として受け入れて、非日常を日常にしなければ、皆生きられなかったと思う」

でも、僕はそれを否定しなければいけない。

「でも、それは間違っている。受け入れて良いはずがないんだ。慣れてしまっただけがないんだ。だって、それは……どこかで諦めているってことだ。誰かがやってくれる”。そうやって多くの人達は、諦めて、押し付けて、立ち止まってしまった。攻略組”なんて言葉が、その象徴だ」

だって、MMORPGっていうのは本来、プレイヤー全員”で攻略するゲームなんだから。

「でも、もちろん彼らを非難するつもりなんてないよ。皆がみんな、強いわけじゃないから」

そもそもズルをしている僕が、他人を糾弾する権利なんて持ち合わせているわけがない。

「だから……歩ける人は、立ち止まらず、歩き続けなければならない。——そして、頂に辿り着くんだけだ」

そして、できることならその前に、茅場のシナリオを僕が潰す。

「……でも、あたしと一緒にいられないのと、何の関係があるのよ？」
相変わらず、リズは泣いている。

言つてしまいたい。ずっと、一緒にいると。

でも、今度こそ、理性で感情を押さえ込む。

「関係あるよ。……だって、リズの傍にいたら、居心地良すぎて——動きたく、なくなつちやうよ」

なんとか “いつもの” 微笑みを浮かべて、僕は彼女を優しく抱き寄せる。

「……ティンクル、あんたホント狡いよ……っ！」

「僕は……卑怯者だからね」

苦笑が漏れる。でも、涙は漏らさない。

「だから卑怯ついでに……もう一度だけ、僕に勇気をくれないかな？」

先へ進む勇氣はもう貰つた。だから今度は、やり遂げるための勇氣を。

君を巻き込まないために。君を現実に帰すために。

「………解つた」

僕から一步離れ、顔を上げたリズ。

彼女の臉は泣き腫らして赤くなつてしまつていけるけれど、涙はもう零れていなかっ

た。

「最高の刀……作ってあげる!!」

†

心を込める。

比喩ではなく、実践したのは生まれて初めてかもしれない。

槌を振るう度に、あたしの心は軋みを上げる。だって、お別れが一步ずつ近づいていくから。

でも、もう涙は流さない。だって、*「彼」*は戦いに行くんだから。泣いて送り出すわけには、いかないでしょ？

——そして、とうとうその時はきた。

二百八十四回目の槌音が響いたその瞬間、インゴットが一際眩い白光を放った。

長方形の物体が徐々に変化して……、一振りの刀の形を成した。

刀身に彫られた菊の紋様。美しいその刃紋は、己が業物であることを揚々と物語っている。しかし、驚くべきはそこではない。

刀身全体が、薄い燐光を纏っているのだ。それはまるで、闇夜に浮かぶ碧い月のようだと思う。

あたしはその柄を持ち、力を込めて持ち上げた。

やはり思った通り、恐ろしい筋力要求値だ。それでもあたしが持てるんだから、ティンクルなら問題ないだろう。

柄を左手に持ち替えて、右手の指を伸ばしてそつと刀身を叩く。ポツプアツプウインドウが浮かび上がり、あたしはそれを覗き込んだ。

「名前は《月華》ね。……試してみて」

しかし、ティンクルは受け取らず、妙なことを訊き出した。

「ねえ……リズは菊の花言葉って知ってる？」

「知らないけど……何であんたはそんなこと知ってるのよ？」

「知り合いに、そういうのが好きな人がいてね」

そう言うと、彼はゆっくりと話し始めた。

「まずは月華だけど……これは月光のことだね。この燐光はたぶん、月の光を表現してるんだと思う」

「へえ……」

「それで、菊だけど……菊の別称は星見草っていうんだ。月も一応天体だから星っていうのは間違っていないし、花札とかを始め、菊と月って何かと縁があるからね」

「……なるほどね」

なんとか相槌は打つけれど、自分でも驚くほどその声は弱々しい。

それでも彼は話し続ける。眠るように瞼を閉じて。少しでも、この時間が長く続くように。

「そして、花言葉だけど……高尚、高貴、女性的な愛情——」

「あんたにピツタリじゃない」

少し、笑いが漏れた。

これなら、思ったよりも早く、いつもの元気なりズベットに戻れるかもしれない。

——と、思ったのに。

「——そして、真の愛」

「……っ」

全くこいつは……。あたしの反応を楽しんでるんじゃないでしょうね？

「ほら、装備してみてください。いつまで経っても、ステータス解らないでしょ？」

「……うん」

そして今度こそ、ティンクルは月華を受け取った。

彼はウィンドウを操作して月華を装備すると、ステータス画面を見詰めた。

「うん。……攻撃力は勿論だけど、各種ステータスも上がってるみたい」

「それで……どうかな？」

「……手に、しつくり馴染むよ」

振ってみても良い？ と訊いてきたので、あたしは了承した。

中腰になったティンクルは、居合の要領で一閃。

びゅん、と空を斬る音。刀身を纏った燐光が、ソードスキルのライトエフェクトとはまた違った軌跡を薄暗いこの部屋に浮かべて……でも、それも僅かの間に空気に溶けるように消えた。

「ありがとう、リズ。最高の仕事をしてくれたよ」

ああ、またそうやって笑う。

辛い癖に、泣きそうな癖に……平気な振りをして。それが、男の子の強がりってやつ？

なんだ……結構、男の子っぽいところ……あるんじゃない。

「それで、代金のことだけねど——」

そっか、本当にお別れなんだね。

あたしは答えようとして——しかし、息を呑んだ。

あたしって、こんなに潔い女だったけ？ 答えは、もちろん否だ。あたしは諦めの悪い女だ。

なら、答えは決まっている。お別れなんかには、させてたまるか。

それに、ティンクルだって言ってたじゃない……現実に帰ってからも、また会いた

いって思ってるって。

「お金は、いらぬい」

「……え？ でも、それじゃ……」

だから、答える。

「お金は、いらぬい。だから、現実でケーキの一つでも……二つでも三つでも奢りなさい。そうしたら、その後で——」

目を丸くするティンクル。

構うものか。あたしの思いの丈を全て、この一言に。

「第二ラウンド、するからね!! 覚悟しなさい!!」

そうだ、これでこそあたしだ。

あたしの言葉に暫し呆然としていたティンクルは——ぷつ、と突然吹き出した。

「あははっ」

「ちよつとー!! 笑うってどういうことよ!?!」

「いや、ごめん。リズには敵わなくなつて思つてさ」

「当たり前でしょ？ あたしに勝つなんて、十年早いわ」

そして、今度は二人して吹き出す。

本当に、思つたよりもずつと早く、元氣なりズベットに戻れたみたいだ。

一頻り笑った後、ティンクルはスツキリとした顔をして言った。

「なら、本名教えておかないとね。……僕は三雲光。来月の七夕で十九歳です」

今度は、あたしが驚く番だった。

「と、年上だったんだ……」

「それはどういう意味かな？」

しかし、妙に納得した。あの先生と何故重なるのか……ずっと不思議に思っていたけれど。見た目の色眼鏡を取り外して、その年齢を知ると……確かに、二人は少し似ているかもしれない。

でも、そんなことをティンクルに……光に教える必要は無い。焼き餅焼かれても、困るしね。

だから、冗談で誤魔化す。

「光って、また男か女か解らない名前を……」

「ほつといてよ！」

というか寧ろ、光ってひかるでもひかりでも女性のイメージがあるのよね。

しかも七夕が誕生日って……。いや、覚えやすいけど。

「あたしは、篠崎里香。今年で十七歳です」

「あー……うん。年下なのは知ってた」

それはどういう意味かしらね？

「ところで、里香は関東在住？」

あつ……名前呼ばれた。——じゃなくって！

「そうだけど、それがどうしたのよ？」

「僕の家、杉並だからさ。里香の家どこなんだろって思ってたね」

「杉並なら電車で直ぐよ」

しかし、驚いた。そんなに近いなんて。

「そっか……なら、リハビリ終わったら迎えに行くよ」

「リハビリって……？」

「僕ら、二年近く寝たきりじゃないか。消化器官から筋肉、その他諸々当然衰えてるでしょ？」

「……嫌なこと聞いた」

きつと髪も切つてないから随分伸びていそうだ。というか、お風呂入つてないんだよね、二年間。

「うっ……」

想像しただけで、全身痒くなってきそうだ。

とにかく、そのことは一旦忘れよう。

「えつと……あたしの家の住所は——」

まさか、MMORPGで知り合った異性に、現実の住所を教えることになるなんて……そもそも、この世界で出会った人を本気で好きになるなんて……二年前のあたしなら、想像もつかなかったはずだ。

「うん、解った」

「待ってるからね、迎えに来るの」

「できる限り早く、ね」

再会を祈り、お互い微笑む。

——と、突然。工房の扉が勢い良く開いた。

「リズ!! 心配したよー!!」

栗色の髪を靡かせて、あたしに体当たりするような勢いで抱きついてきたのは、二日振りに会う親友だった。

「あ、アスナ……」

唾然とするあたしの顔をアスナは至近距離で睨みながら、猛然と捲し立てた。

「メッセージは届かないし、マップ追跡もできないし、常連の人も何も知らないし、一体昨夜は何処にいたのよ! わたし黒鉄宮まで確認に行っちゃったんだからね!」

「ご、ごめん。ちよつとダンジョンで足止め食らっちゃって……」

「ダンジョン!? リズが、一人で!」

「ううん……この人と」

咄嗟に他人行儀になるあたし。

流石に不自然過ぎたかと思えば、今のアスナはそんな細かいことは眼中に無いらしい。

「ティンクルさん!!」

アスナの怒りの矛先は、今度は光に向かう。

「どういうことですか!? まさかりズを巻き込んで、いつものレアアイテム探しを!」

「僕が巻き込んだというか……僕が巻き込まれたというか——」

「ティンクルさん、この際だからハッキリ言わせていただきます。あなた基準で周りを見ないで下さい。女性でしかもソロなんて……ティンクルさんは絶対的な少数派なんです! リズはティンクルさんとは違って普通の子なんですから……!」

リズはティンクルさんとは違って普通の女の子。つまり、逆説的にティンクルさんは普通じゃない、とアスナは言いたいわけだ。……言い得て妙である。だって、光は女の子ですらないんだから。

あたしは笑いそうになるのを必死に堪え、仲裁に入る。

「まあまあ、誘ったのはあたしの方からだし、ちゃんと帰ってきたんだからさ。心配かけ

たのは謝るから、あんまりティンクルのこと責めないであげてよ」

「うっ……」

そして、自分でも言い過ぎだと思ったのか、アスナは言葉に詰まった。

「ごめんさい……言い過ぎました」

「いや……アスナは当然のことを言っただけだと思おうよ」

うん、これで一件落着——とはいかないみたいだ。

「ほら、だから言っただろアスナ。ティンクルが一緒なら問題ないって」

そう言いながら遅れて入ってきたのは、あたしとは初対面のはずの黒衣の剣士だった。

「キリトくん、無責任なこと言わないでよ！ わたし本当に心配してたんだから！」

「ご、ごめん……——って、何で俺が責められてるんだ……？」

今度はこの人に矛先が向くのか？ と思っただけだと、アスナは「もうっ」と可愛らしく怒っただけで、直ぐに矛を収めてしまった。対応の違いが如実に現われている。……いくらなんでも解りやすすぎでしょ、アスナ。

「キリト……どうしたの？」

あたしの隣で光が尋ねる。

なるほど、この三人は知り合いなのね。

あたしの視線に気付いた光が、彼について教えてくれる。

「ああ……リズ。彼はキリト。僕らソ口組の中では影の四番バッターだよ」

「……俺が影の四番バッターっていうなら、あんたは？」

「僕は客寄せパンダ……じゃなかった、球団マスコットかな？」

……何と無く、二人の関係も解った気がする。

「よろしく、キリト。あたしはリズベツト。リズでいいわよ」

「あ、ああ。よろしく、リズ」

「ま、自己紹介もそれくらいで……何でキリトがアスナと一緒に？」

光がそう尋ねたときだ。アスナが突然制止の声を上げた。

「ち、ちよつと待っ——」

「あくそれあたしも気になる」

面白そうなので邪魔はさせない。

「えーと……一昨日にアスナに腕の良い鍛冶師がいるって……つまり、リズのことを教えてもらってさ。で、昨日の昼間に早速ここへ来てみたんだけど、扉のプレートが“C l o s e d”になっててさ」

「ほうほう」

あたしは相槌を打って先を促す。

アスナが左脇で「ああ……」と顔を赤くして唸っているけど、あたしがこんな面白いネタを見逃すはずがないでしょ。

「で、君は昼飯でも食べに行ってるんだろうと思つて、後日出直すことにしたんだけど……」

「うんうん、それで？」

「それで、俺も昼飯まだだったからさ……世話になりっぱなしのティンクルに飯でも奢ろうとメッセージ送ったんだけど、いつまで待っても返信が無い」

ん？

あたしは違和感を感じて内心首を傾げる。

だって、その時間はまだ村までの道を歩いているくらいか……遅くても、村長の長い話を聞いていたくらいいの時間のはずだ。当然、メッセージは届いているはず。

すると、光は溜め息を吐いてキリトをまじまじと見詰めた。

「何で世話になった人へのお礼が《アルゲードそば》なんだよ……。どうせキリトのことだから、複数人呼んで、犠牲者増やしたかっただけでしょ？ ……道連れに」

「失礼だなあ〜」

否定してはいるが、笑ってしまっているので凶星なんだろう。

というか、食べ物で犠牲者が出るってどうということなのよ？

「で、そのメッセージは大方無視したんだろうと思ってたから、それ程気にも留めてなかったんだ」

「もしかして全滅だったの？」

「いや、クラインとエギルはなんとか引つ張った」

「うわあ……」

その名前も初耳だけれど、どうやら共通の知り合いらしい。

「でも、今朝になってアスナがメッセージ送ってきてさ。リズが昨夜からいないらしいんだけど、キリトくんは何か知らない？ って」

「……もう知つていそうな人には全員に訊いて、後はキリトくんだけだったの。わたしもまさか知つてるとは思わなかったけど」

なんとか平常に戻つたららしいアスナが会話に復帰した。

「でも、正午過ぎにはもういなくなつたつて教えてくれて」

「それで事情を聞いたら、リズとティンクルが知り合いつて解つてさ。まさかと思つて、ティンクルに今何処にいる？ ってメッセージ送つたんだ。でも、やっぱり返信は無い。……こんな偶然有り得ないだろ？ だから、二人は一緒だと結論付けたんだ」

なるほど。

「んで、結果は大当たりつてわけさ」

「本当に心配したんだからね？ リズ」

「うん……二人ともありがと」

あたしは素直に頭を下げた。

「にしても……ホント、人騒がせだな『氷姫』は」

「キリト、それも一回言ったら口縫い合わすからね？」

おや？

光にお騒がせエピソードなんてあるんだろうか。

「ティンクルのお騒がせエピソード、あたし訊きたいなあ〜」

「ああ、良いぜ。この前のフロアボス戦の話なんだけど——」

もう少し、もう少しだけ、この時間が続けばいい。

でも、何事にも終わりはやって来るものだ。

外で昼食を食べたあたし達は、それぞれ家路へと着いた。

『リンダース』の我が家へと帰ってきたあたしは、そつと後ろ手で扉を閉めて、小さく

呟いた。

「またね……光」

一粒、涙が零れて床を濡らした。

第16話 心意

「——なら、二十万コルでどうだ？ 言つとくが、これ以上はうちでは出せんし、他へ行つてもそうは変わらんと思うぞ」

店内に入った途端、そんな声が耳に届いた。

第五十層主街区《アルゲード》。海外のダウンタウンを彷彿とさせる、幾重にも張り巡らされた隘路。何を売っているのかも解らない怪しげな商店。サスペンスを抱かずにはいられない宿屋等々。正直に言つて、長居したいとは思えない街だ。

もちろん、それは僕個人の見解であつて、キリトなどはこの街を気に入っているらしく、ここをホームタウンにしている。

まあ、それはともかく。僕がそんな長居したくないこの街を訪れたのは気分転換もあるのだけれど、あるプレイヤーが経営する店……つまり、ここを訪れるためだった。

お世辞にも広いとは言えないその店内には陳列棚がいくつか並んでいるけれど、そのどれもが様々な商品で無秩序に埋め尽くされている。

今回の目的は換金だけれど、店の主は先客と商談の最中だ。

恐らくアフリカ系だと思われるチョコレート色の肌に強面の店主と、装備から察する

に中々のハイレベルプレイヤーと思いき青年が、こちらもやや険しい表情で二十万コルと表示されているのである。うトレードウインドウを見詰めている。

そして幾許か唸った後、青年は店主に視線を投げかけた。しかし、店主は片方眉を吊り上げただけで何も言わない。

遂に根負けした青年は「それでいいです……」と言って、OKボタンを力なく押した。「毎度!! また頼むよ兄ちゃん!」

店主は豪快にそう笑うと、青年の背中をバシンと叩いた。金属鎧を着た相手にそんなことをすれば現実なら手を痛めるだろうけど……この店主の場合、そんな光景は想像し難い。

イスラム圏のバザールでは、商人と客がちよつとした値段や品物のことで朝から夕方まで飽きることなく交渉し、機知を競って熱弁を振るうそうだけれど……ジャラビーヤ姿の商人も、この店主相手ではきつと形無しだろう。

青年の背中を少し哀れに思いながら見送っていると、後ろから声をかけられた。

「悪いな、待たせちまって。さっきの客で今日はもう店仕舞いのつもりだったんだが——アンタみたいな上客を逃がしちまったら、商人の名が泣くからな」

そんな店主の笑い混じりの冗談に、僕は苦笑して振り返った。

「こんばんは、エギル。相変わらず精が出ているみたいで何よりです」

ニコリ、と普段通り笑んだつもりだったが、どうやら上手く笑えなかったらしい。

僕のぎこちない笑みを不審に思ったらしいエギルは眉を顰めた。

「何かあったのか？」

「うん……まあ、ちよつとね」

「オレで良ければ話くらいなら聞くぜ？」

顔に似合わず人が好いエギルはそう言つてニヤリと笑つた。

「……まあ、人間関係のトラブルというか……殆ど僕自身のせいなんですけどね」

自嘲する笑いが漏れる。

「ほう」

「……両思いだったのに、相手の娘を泣かせてしまつて……」

「なるほどな——ん？」

「現実に戻つたら会いに行くつて約束したんですけど……もつと、上手い方法があつたんじゃないかな、つて——どうしたんですか？」

僅かに視線を逸らし、冷や汗らしきものを流すエギル。

「お、オレは他人の趣味嗜好を兎や角言うつもりはねえし、他言もしねえから安心してくれ」

「は、はあ……」

な、何か……盛大に勘違いされているような……？

「ほ、ほら！ まあ、それは兎も角だ。うちに来たつてことは、いつもの買取か？ それとも買い出しか？」

「え？ ああ、はい。買取をお願いしたいんですけど」

少々強引に話題を変えられ、本題の交渉に入る。

「了解だ。で、今回はどんなモン持ってきたんだ？」

「えーと……《黒真珠》^{ブラックパール}を二十個ほど」

「《黒真珠》つていうとアレか。確か装飾系の素材だったよな？ ……相場は——」

言いかけ、ウインドウを眺めていたエギルの視線と口が止まる。

「おいおい……何でこんな物二十個も持つてんだ？ 需要はそれ程多くはねえが、供給が殆ど無いせいでレートが跳ね上がってるんじゃないかねえか」

「企業秘密、つてことで」

唇に人差し指を当て、片方の瞼を閉じる。

《黒真珠》とは現実のそれと同じように、やはり真珠であることに変わりはない。そして、真珠である以上上海が無ければ生産できないのは必然。

しかし、この浮遊城には森もあれば山もあるし、当然海もある。何故カーディナルが供給を絞っているのかは僕も知らない。

「オレにはカミさんがいるからな。誘惑しても何も出ないぜ?」

「誘惑なんてしてないけど——というか、エギルって既婚なんだ」

他人のプライベートを訊く趣味は無いし、そもそも現在のSAOでは現実の話題は殆どタブー扱いだ。だから、僕はエギルが既婚であること以上に、それを僕に話したこと自体に驚いた。

僕の表情を見て察したのか、エギルはニヤリと笑う。

「図らずもオレはアンタの秘密を知っちゃまったからな。こつちが一方的に相手のことを知っているってのはフェアじゃねえだろ? それに、アンタはタブーをタブーと思っ
ないみたいだしな」

秘密って、少し大袈裟過ぎやしないか、と思いつつもつられて笑う。

「まあ、少しヒトより捻くれて育ちましたから」

「オレはアンタの性格嫌いじゃないぜ。それに、なんとなく親近感もあるからな」

親近感……?」

「オレは見ての通り日本人じゃない——まあ、帰化してるから国籍は日本なんだが、オレの身体には一滴も日本人の血は流れちゃいない。アンタだって、純粋な日本人じゃねえんだろ?」

「ええ。母はデンマーク人で、日本人の父とのハーフです」

「なるほど、北欧系か。……まあ、アンタも今まで色々苦労してきたんだろうが——恐らく、これ以上の苦労は後にも先にも無いだろうからな。お互い頑張ろうぜ」

確かに、「デスゲーム」以上の苦労が今後訪れるとは思えない。とはいえ、苦労続きの人生である。まだまだ災難が降りかかる気がしてならない。

それでも、内心は臆面にも出さず、今度こそちゃんと微笑む。

「まあ、人生山あり谷ありつて言いますしね。——それは兎も角」

「それは兎も角つてお前なあ……我ながら良いこと言つたと思うんだが」

そうぼやいてから、エギルも笑つた。

やっぱりこのヒト、お人好しだね。……キリトの周りつてお人好しが多い気がする、本人も含めて。

「この《黒真珠》は幾らで買い取つてくださるんですか？」

「ああ……そうだな。一つ一万コル、二十個で二十万コルでどうだ？」

「二十万……」

その数字に、先客との会話を思い出す。

「差し支えなければ、さっきのお兄さんが売つたアイテムが何だったのか教えてほしいんですけど」

「……別にそいつは構わないけどな」

そうやって、エギルは棒状の物をこちらに向かつて放り投げた。

パシリと、危なげなくそれを掴んだ僕は——首を傾げるしかなかった。

「えーと……これって《カタナ》ですか？」

「見た目は、な」

「でもやけに短いような……」

「いわゆる小太刀ってやつだな」

それは僕だつて解る。問題はカテゴリーだ。

「でも、《小太刀》なんてカテゴリーありませんよね？ いわゆる太刀や日本刀は《カタナ》のカテゴリーですし」

もし《小太刀》などというカテゴリーが存在するのであれば、それに準ずるスキル……つまりエクストラスキルが存在することを差し示す。

しかし、小太刀というのは大抵は太刀とセットで使うものだ。

ならばエクストラスキルは《二刀流》ということになるのだろうか——生憎、僕はキリトが二刀流スキルを所有していることは……本人には内緒だが、知っている。それがいわゆる《ユニークスキル》であることも。

アウローラによると、SAOにおける二刀流スキルとは《片手直剣》二本を装備して使うスキルのことらしい。だとすれば、刀を使った二刀流はSAOには存在しないこと

になる。

だったら、目の前のこれは何だというのか。只の短いだけの《カタナ》なのだろうか。「まあ、自分で見た方が早いだろう。詳しいステータスが知りたいなら、一旦装備してもらっても構わねえぜ」

「良いんですか?」

暗に持ち逃げするかもよ、と言ったつもりだったが、返答は簡潔なものだった。

「アンタのことは信用してるさ」

「……それはどうも」

短く礼を言って、気恥ずかしさを紛らわす為にもさっさと視線をウィンドウに向ける。

装備フィギアの右手に、既にオブジェクト化がなされている小太刀をセット。これでの小太刀はシステム的には僕が装備者であると同時に所有者となった。続いて、ステータス画面に目を走らせる。

「――」
絶句した。まさに開いた口が塞がらない、といった体でポカーンと口がだらしなく開く。

まず、この小太刀の銘は《天羽々斬》あめのはばきり。確か日本神話の須佐之男命の愛剣だったはずだ

けれど、そんなことは……まあ、どうでもいい。

問題は、このパラメーターだ。

異常過ぎるその二つの数値は、デザイナーが誤って設定したとしか思えない——が、恐らくは故意だと、何故か僕は直感的に思った。

〔attack:0 durability:8〕

攻撃能力をもたない武器。——その矛盾以上の問題。それは、この小太刀が……〔Immortal Object〕であることに他ならないということだった。

「見ての通り、こいつはとんでもねえ鈍らだ。それこそ鉄パイプの方がよっぽど役に立つ、つてくらいにな。だが——耐久値無限なんていう反則級の代物は、後にも先にもこれ一本って気がしてならねえ。だから、こんなクソの役にも立たなさそうなモンに二十万も出して買い取ったんだ」

エギルの僅かに後悔が混じる声。

それはそうだろう。

耐久値無限は確かに魅力的ではある。だが、攻撃力がゼロなら武器としては初期装備の《スモールソード》にも劣る。更に、武器としてのカテゴリーが、あろうことか《投剣》なのだ。殆ど消耗品である投剣に、耐久値などそもそも不要だ。

僕はエギルに小太刀を返してから肩を竦めた。

「買い物手は……どうやら居なさそうですね」

僕の声にも、自ずと同情が籠——らない。寧ろ、悪巧みを悪代官に進言する越後屋のような雰囲気だ。

「まさか——おいおい、オレは正直嬉しいが、こいつをかうのは流石に止めといった方が
“前科”がある僕に対して、エギルは制止の言葉をかける。

「ただ、エギルの忠告を聞かなかつたことにして、僕は提案する。」

「《黒真珠》二十個の代金はこの小太刀で払う、というのはどうですか？」

「アンタなあ……」

呆れ返つたように、一つ大きな溜め息を吐いてから、エギルはトレード申請を送つてきた。僕はもちろん、全く躊躇せずにOKボタンを押す。

「トレード成立。後で文言言わないでくださいね、エギル」

「それはこつちの台詞だ。——この前の《しゃれこうべ鬪體》といい、アンタのゲテモノ好きは相変わらずみたいだな」

「ゲテモノ好きとは失礼ですね。僕は昔からこういう尖つた性能の武器が好きなんですよ」

「因みに件の《鬪體》は、リズと——……里香と竜の巣から脱出するのに使つた小刀のことだ。」

あれはリーチが《短剣》以下である代わりに、アイテムの所持容量に殆ど負担をかけないという、サブ武器には丁度良い特殊効果があった。

それに……僕は、この世の中に無価値なモノなんて存在しないと思ってる。どんなモノにだって——ヒトには奇異に見えるモノにだって、たとえ一見無価値に見えるモノにだって——絶対に何らかの……それにしか、その人にしか無い価値が必ずあるんだ。

だから、この《天羽々斬》にだって必ず使い道がある。この小太刀が、《カタナ》ではなく《投剣》である意味。それがそのまま、この小太刀の存在理由になるはずだ。

「——ところで前々から訊きたかったんだが」

「は、はい……何ですか？」

神妙な面持ちになったエギルに、一体何だと僕は僅かに身構える。

「何でうちなんだ？——いや、訊き方が悪いな。他にも買取やつてる奴なんていくらでもいるだろ。……こう言っちゃなんだが、結構阿漕な商売やつてるからな、うちは。何で態々アンタがオレに買取を頼むのか、前々から気になってたんだ」

阿漕な商売。どの口が言うかと鼻で笑いそうになるのを堪え、僕はニコリと笑う。

「知ってますよ、エギルが中堅プレイヤーの育成に売り上げの殆どを注ぎ込んでいることは。……ここにアイテムを売りに来るのは、ちよつとしたお手伝いつもりです」

「……ま、まさか知ってる奴がいるとはな。他の奴らには黙っててくれよ？恥ずかしい

からな」

「善行は他人には見せず」。よつぽど日本人より日本人らしんじゃないですか？」

僕の軽口に苦笑で返すエギル。

「なら、今後もうちを鼻屑に頼むぜ、テインクル」

†

エギルの雑貨屋を後にした僕は、細い隘路を練り歩く。特に決まった行き先があるわけではないけれど、たまにはこういうのも悪くないかな、と思う。

「後は……夕食の食材か」

今晚は何にしようかと考えていると、背後から声が。

「私はオムライスがいいわ。因みにソースはケチャップじゃなくてデミグラスで」

相手は解っているの、振り返らずに答える。

「出てきて良いの？ 誰に見られているか解らないのに」

「誰も見ていないわよ。……ここら一帯にプレイヤーはいない。たとえ隠蔽ハイディングしていても、私には解るしね」

歩く速度を少し落とすと、彼女は僕の隣に並んだ。

「用は何だよ……？ アウローラ」

純白のドレス姿に銀系の髪、すみれ色の瞳。凡そ人間とは思えない精巧なその顔立ち

は——その通り、彼女が人間ではないことを示している。

「デスゲーム開始直後はローブ姿だったのに……デザイナの趣味か、はたまた『彼女自身』の趣味なのか、いつの間にかドレス姿に変わっていた。

「用？ 用事が無ければ話しかけちゃいけないのかしら？ 酷いわっ光」

「本名で呼ぶなよ。それにお前、そんなキャラじゃないでしょ」

「まあ、そうなのだけれど——妬けるじゃない？ 目の前で他の女とのラブシーンなんて見せられたら」

「……見てたのか」

「それはもう。私はあなたのこと四六時中観察してるわよ？ それはあなただって承知のことだったはずだけれど」

「『人間』の行動を学習する為、だろ？ ……本当にお前はAIなんだな」

「アウローラの行動目的は二つ。一つは茅場に恥をかかせるという、彼女の製作者の意思。もう一つはAIとして完成するという、彼女自身の意思だ。」

「AIとして完成する。ならば今の彼女は未完成なのかと問われると、はいとは答え辛い。AIとして完成するとはつまり、Aという質問にBと答える……みたいなプログラムを何万通りも網羅する、ということだ。」

「ただ、その果てに完成するAIは、もはやヒト以上の存在に他ならないと……僕は

そう思う。

「そんなの、解りきっていることでしょうか？ 私がAIであることは、薄明かりが差し込むあの朝に、ちゃんと明かしてあるのだから」

「それで？ 結局用は何なんだ？ 態々道端に現われるくらいに切迫した状況じゃないことを祈るけれど」

「冷たいわね」

そう言つて、彼女は悲しそうな顔をする。だがそれは、その感情は、彼女の裡から表れたものでは決してない。結局それは、模倣でしかない。現に——次の瞬間には、薄ら笑いが彼女の顔に張り付いていた。

「可能性が、僅かだけれど見えてきたわ」

「可能性？」

「決まっているでしょう？ 茅場晶彦の、本来のシナリオを崩す可能性よ」

「……!!」

思わず目を見開く。

第百層。その途方もない旅路の果てに、一体何人の攻略組プレイヤーが犠牲になるのか——最近は、そんなことばかり考えていたけれど。

昨日と今日で、改めて思った。もし、僕らにそれができるなら——百層到達前に、一

日でも早くこの世界を終わらせることができるなら。里香を、キリトやアスナ——皆を現実に一日でも早く帰すことができる。そうすれば、里香との約束を果たすことができるのだ、と。

「何か算段を思いついたのか!？」

「知りたい? ……知りたいんだったら、私の足を這い蹲つて舐めてもらおうかしら」

「ふざけてる場合か!!」

掴みかかるのは懸命に堪えたけれど、流石に怒気までは押さええられず、声を荒げた。

「はあ……。あくまで可能性の話よ。と言つても、その可能性を見せたのは、他ならぬあなた自身なのだけれど」

「僕、自身……?」

そう言われても、心当たりなど何も無い。

「あなたとソバカスが裸でイチヤついているとき、あなたの周りの空間だけ、本来ありえない程の負荷がかかっていたわ。……そして、その現象が起こったときのあなたの精神状態は、いつも以上に悪かった」

ソバカスというのは里香のことで、僕らはイチヤついていたわけじゃないけれど、間違ひなく風呂場での出来事を言っているのだろう。

「言いたいことは色々あるけれど——いつも以上に悪いつて、どういふことだよ?」

アウローラは事あるごとに、僕の精神状態は安定していると……そういうことか。

僕は考え至り、筋違いなのかもしれないが、彼女を睨みつける。

「安定というのは、別に正であることを差すわけじゃない。たとえば数字が負だとしても、変動が少なければ……それは安定しているといつていい。つまり僕の精神状態は、常日頃から悪かったってことか」

吐き捨てるようにそう言ってから、僕は視線を逸らせた。

「ええ。あなたのことをあの時『面白い』と言ったのは、メンタルパラメーターだけ見れば寧ろ他のプレイヤーより状態が悪いくらいなのに、パニックになるわけでもなく、冷静さを保っているその矛盾……それがAIである私にはとても不思議に思えたから」

言われてみれば当たり前ことなのだ。『デスゲーム』などというこの状況で、精神状態が良い人間なんて殆どいるわけがない。その極少数のうちの一人が僕なのか、と……自分で自分が解らなかつたけれど、常態的に悪かつたのであれば納得できる。

「その点については……誤解をあたえたことについては謝るわ。ごめんなさい。——私が素直に謝るなんて滅多にないわよ？ 私、こういう性格だから。……でも、これからもう少し正直に話すことにするわ」

彼女の言う通り、彼女は歪んだ性格をしている。だが、それは性格というよりは……

彼女の製作者の設計思想が歪んでいたせいだろう。だから、やはりアウローラを責めるのは筋違いなのかもしれない。

「解った、許すよ。——……話を戻そう。僕の周りの空間だけが、一定時間過負荷常態だった。そしてそれは、僕の精神状態が著しく悪い時に起こった。この理解で間違っていないか？」

「間違っていないわ」

「……もう色々、意味が解らないんだけど」

それが百層到達前にゲームをクリアさせるのと、どういった関係があるというのだろうか。

そもそも、何故僕の状態が悪いと過負荷が起こるのか。只の偶然なのではないだろうか。

「まず一つ。あのソバカスは見えていなかったようだし、私も見たわけじゃないけれど……あなた、何か見なかった？」

そう問われると、思い当たる節は一つしかない。しかし、あれは——

「……幻覚を見た。黒い、靄みたいなものを。でも、あれはやっぱり只の幻覚に過ぎないだろう？」

「頭が良い癖に、たまに馬鹿なこと言うわよね、あなたって」

いつものように小馬鹿にしたようにそう笑うと、彼女は言った。

「大原則として、アイコンクラッドに於いて直接見聞きするものは全て、〃コードに置換可能なデジタルデータである〃ということよ。……つまり、幻覚が見えたり、幻聴が聞こえることなど有りはしない。だから、あなたが見た靄は幻覚では絶対にならない」

「あの黒い靄は……幻覚じゃなかった……？　じゃあ、何で里香には——というか、アウローラにも見えなかったんだ？」

彼女はプレイヤーとは違い、アイコンクラッド上の全てを見ることができると言える。それは例えばマッピングされていない地図データ、隠蔽スキルを使用しているプレイヤー……など、凡そシステムのなものも含めて全て。

ならば、それこそあの靄はバグか何かだったんじゃないだろうか。

「……マスターが言っていたわ。『VR技術にはブラックボックスが存在する。そしてそれは、ナーヴギアの基礎設計者である茅場本人も把握できていない』ってね」

「ブラックボックスって……基礎設計者本人が把握していない機能が、ナーヴギアにはあるって言うの？　そんな製品、売り出せるわけがないじゃないか」

「残念ながら売り出せるわ。現に、脳を焼くことができるなんていう致命的な欠陥が見過ごされたわけだし」

「……ッ」

思わず舌打ちする。

一体ナーヴギアを監査した奴らは何をやっていたんだ。もつとちゃんと調べていれば、少なくともこんなデスゲームが始まることはなかっただろうに。

「それで？ 君のマスターはブラックボックスが何なのか解つてたの？」

しかし、アウローラは僕の質問には答えず、歌うように語りだす。

「そもそもブレイン・マシン・インタフェースとは神経工学——神経科学と電子工学を融合した境界領域の技術の結晶よ。……そして、量子物理学者である茅場晶彦に対してマスターは神経科学者。つまり、マスターは……VR技術の片翼を担う存在なの。茅場晶彦が天才プログラマーだとすれば、マスターは医療界の異端児つてところね」

「医療界の異端児……？ 君のマスターは医者なのか？」

アウローラに初めて会った時、彼女は「マスターは、茅場氏の同僚……アーガスのスタッフです」と言っていたはずだけれど。

僕の疑わしげな視線に気が付いたのか、アウローラは苦笑する。

「だから『異端児』なのよ。……曲がりなりにも医学部に在籍し、精神・神経科学教室の教授まで務めてるっていうのに……アーガスに出入りして、プログラマーの真似事をしていたのだから」

「……………」

医学部の教授だつて……!?

僕の中で、彼女のマスターの……凡人でチキンでマゾヒストの変態という人物像が、
気に歪みだす。

「——話を戻すけれど、要するに茅場晶彦とマスターでは視点が違うということよ。だから、彼が気が付かなかつたことに気が付くことが出来た」

一旦区切ると意外なことに、アウローラは親を誇る子供のように言った。

「そして、マスターは一つの可能性を指摘したわ。それは、《Incarnate》……

“意思の具現化”」

「意思の具現化……?」

抽象的過ぎてまるで飲み込めない。

「そういう現象が、実際にβテスト期間中に極少数ながら確認されているわ。その最も代表的な例は、“加速”よ」

——加速。

僕自身に経験にあるわけじゃないけれど、心当たりがないわけでもない。

ソードスキルの意図的な加速。これは僕にもできるけど、あくまでそれはゲーム上のテクニクであつて、《Incarnate》などという怪しげなものじゃない。それとは違い、“知覚の加速”なる現象が起こるということをキリトに聞いたことがある。

それが起こるのは戦闘中。それも、強敵との戦い。——速く、もつと速く。その意思に身体が突き動かされるように、普段の倍近い速度で剣は振るわれ、その動きすら本人には遅く感じるらしい。実際、そういう状態のキリトをフロアボス戦で見たことがあるけれど、それは本人の錯覚ではなく、実際の現象として起こっていた。

でも、考えればそれはおかしいことだ。

レベル制MMOであるこのSAOには、ステータス値として「AGI」が存在する。この「AGI」によって回避率や攻撃速度が決定されるわけだけれど……プレイヤーの、言わば潜在能力のようなもので数字を超えられるようなものなら——それはもはや、レベル制とは言えまい。

「……プレイヤーのテクニクで高レベルの相手を倒す。——それは難しいけど、出来ないことはない。でも、数字を覆すことは絶対に出来ない。……ゲームってというのは、そういうものだよ」

「ええ。だから、あの黒髪の坊やが体験している『加速』は、間違いなく《Incarnate》よ」

僕は、笑いそうになってしまった。

ユニークスキルである《二刀流》に、更に《Incarnate》などという眉唾物の力を無自覚とはいえ使っているのか。……殆ど反則じゃないか。

「——なるほどね。つまりキリトの場合は、『もつと速く』という意思が具現化している、というわけか」

「そうね。そして——AIである私が言うのもおかしな話だけれど……、強い思い——いいえ、『強過ぎる思い』によってそれは発動する。まあ、マスターは自分で言っている『何だかオカルティックだな』なんて苦笑していたけれど」

強過ぎる……思い、か。

「ティンクル、あなたはあの時何を思ったのかしら？」

あの時の僕は……自己嫌悪と、自分自身の否定……——自己否定。

「——そうか。もし、本当に『Incarnate』なんてものが存在するのなら……僕の場合、『否定』の意味だよ」

だとすれば、あの霧は僕自身を消そうとしていたのか……？

「そこで二つ目。……もし、あなたの『Incarnate』に破壊の力があるのだとすれば？」

「——たとえシステム的には不死の存在だとしても、ヒースクリフのHPを全損させることが可能かもしれない」

「ええ。それどころか、この浮遊城ごと破壊することだって可能かもしれないわよ」

「……そんなことをしたら、僕らも死ぬんじゃない？」

「というか、このどれもがあくまで『可能性』の話であつて、実際に出来るかどうかは誰にも解らない。それどころか、ヒースクリフを倒したところで、茅場がどういう行動に出るのかも解らない。それこそ、神のみぞ知る、だ。」

それでも——明確な突破口が初めて見えた気がする。

今までは、可能性すら見つけられなかったのだ。それに比べれば、大きすぎる進歩だ。「それじゃ、今後の方針の確認よ。ティンクルは今まで通り平時はレアアイテム探し、フロアボス戦も当然参加。そして、今後は追加で《Incarnate》の特訓。私は今までと変わらずあなたのサポートね」

「……解つた。今後もよろしく頼むよ」

《Incarnate》の特訓。言葉だけなら単純だけれど、『強過ぎる思い』というのがネックだ。

それでも、やるしかない。

「それじゃ、話も済んだことだし、買い物行きましょ?」

「オムライスでしょ? 解つてるよ」

「デミグラスソースも忘れずに!」

「さ、再現できるよう努力するよ」

味噌や醤油はなんとか再現できたけど、デミグラスソースは何と何を配合すればいい

のやら……。

「前々から思ってたんだけどさ……君って、不味いか美味いか解ってるの？」

恐らくプレイヤーと同じように《味覚再生エンジン》が搭載されているであろうことは解る。でも、美味いか不味いかの可否はどのように出しているのだろう。

「そうねえ……人間の赤子と同じ原理、って言えば解るかしら」

「せ、責任重大ですな……」

つまり、日頃僕がつくっている料理によって、アウローラの味覚は形作られていつているということか。

……何か、母親みたいだな。

そんな思考を誤魔化すため、首をブルブル横に振る。

いやいや、そこは父親みたいでいいでしょ。うちだって、僕らが小さい頃は父さんが料理つくってたんだから。

「さあ、とつとと市場へ行きましよう！」

「どんだけ食べたんだよ……。というか、このまま付いて来る気？」

「当然よ。それに、今更私がAIだって思われることはないと思うわ。……あなたのお陰でね」

「……この銀髪はそういうことか」

そんな風に会話を続けながら、僕らは隘路を行く。

曲がりくねったこの道が、僕らの今後を表しているようで、僅かに不安を覚えながら。

†

二〇二四年十月十七日

僕らは結局、一歩も前に進めちやいなかった。

第17話 煮込まれウサギ

七十四層の《迷宮区》でポップする強敵《リザードマン・ロード》との戦闘を終え、街区までの帰り道を歩いていた。戦闘の余韻も、物思いに耽つていたせいか、いつの間にか消えている。

陽も既に傾き始め、周囲の木々の間から、僅かに赤色の陽光が顔を覗かせる。葉の黒と陽の赤のコントラストがまるで影絵のようで、中々に幻想的な光景だ。——だからだろうか。不意に目頭が熱くなり、水滴が零れ落ちそうになる。

「——直葉」

思わず口を吐いて出たのは、この二年目にしていない妹の名前。

直葉は、まだ剣道が続いているのだろうか。いや、きつと続けているのだろうか。たった二年でやめてしまった俺と違って、あいつは根気強いから。

なら、俺も弱音を吐くわけにはいかなない。たとえ本当の兄妹ではなくても、俺があいつの兄貴であることに変わりはないのだから。

もし現実に戻ることでできたら、そのときは、昔のように「スグ」と呼ぼう。逃げずに、ちゃんと向き合おう。

「情けないな……何を泣きそうになってるんだ、俺は——何だ？」

コートの袖でゴシゴシ目を擦っていると、鼓膜に聞き慣れない獣の鳴き声が微妙に、しかし確かに響いた。

感傷は脇へと追いやり、すぐさま思考を戦闘モードに切り替える。

「何処だ……？」

声を潜め、独り囁く。

敵の位置を探るため、《索敵スキル》を発動。数瞬の間後、視界が拡張される感覚。僅かに目を細め、周囲に目を凝らす。

そして——捉えた。

十メートルほど離れた大きな樹の枝陰に、それほど大きくはない影。周囲の木の葉に擬態する灰緑色の毛皮と、体長以上に長く伸びた耳。視線を集中すると、自動的にモンスターをターゲット——黄色のカーソルと、対象の名前が表示された。

《ラグー・ラビット》。

俄かには信じられず、数度瞬きするが、やはり表示は変わらない。

《ラグー・ラビット》といえ、超が付くほどのレアモンスターだ。

只、レアモンスターとはいっても、取り立てて強いわけでも、経験値が高いわけでもない。しかし、このウサギがドロップする《ラグー・ラビットの肉》は大変美味らしく、

プレイヤー間でのトレードで、実に十万コルは下らないらしい。十万コルといえば、最高級のオーダメイド武器をしつらえても、釣りが来る額である。まあ、あの人辺りなら、十万コルなど端た金だと切り捨てかねないが。

もちろん俺にとつては十万コルは端た金などではないので、そつと腰のベルトから投擲用の細いピックを抜き出した。

照準を定め、ソードスキルを発動。《投剣》基本技《シングルシユート》——と、完全に投げる体勢に入つてから、俺はあることに気が付いた。

「——何か……食つてる？」

俺は慌てて発動しかけていたソードスキルを——ピックを取り落とすというやり方で強制解除して、もう一度視線を凝らす。

太めの木の枝に置かれたソレは、NPCシヨップでも売られているようなモンスター用の餌だった。つまり、《ラグー・ラビット》を罠に嵌め、得物を仕留める機会を窺っている狩人が、俺のすぐ近くに居るということだ。

「……危ない、危ない」

もし俺がそのまま気付かず、横取りする形で仕留めていたら……最悪、プレイヤーと殺し合いになつていたかもしれない。

自分がやりかけた愚行に冷や汗を流しながら——しかし、「ん？」と首を傾げる。

ウサギは相当あの餌がお気に召したのか、口一杯に頬張り……もはやリスのようになってしまっているが、何故狩人はサツサと仕留めてしまわないのだろう。時間が経てば経つほど、俺のような通りすがりに横取りされるリスクが高くなるだろうに。まさか……餌を設置した方がいいが途中で諦めて、既にこの場にはいないのだろうか。

——と、俺がそんな風に考えていると、思いのほか近くから声が聞こえた。

「か、可愛い……い あんなに口一杯頬張って……い そんなに気に入ったんだったら、毎日だってあげるのに。……ふふふっ」

もはや嬌声と言っても過言ではないほどの甘い声。しかしそれ以上に俺が驚いたのは、フィールドとはいえ、最前線に女性プレイヤーが上がって来ていることだった。

「おいおい……い」

迷宮区ではないにしろ、ここだって危険なモンスターが出現することには変わりはないのだ。

俺は声のした方向に、出来る限り音をたてず足早に近づく。

そして後姿を捉え、俺は声をかけた。

「おい、あんた……こんな所で何やってるんだ？」

「ヒツ……い」

ビクツと、肩を震わせた女性プレイヤーの後姿は、なんとも頼りない。

やはり、声をかけて正解だった。

「大丈夫か？ ……何だったら、俺が街まで送るよ」

俺にしては珍しく、自分から声をかけたのだ。どうせなら最後まで付き合つてやる。そう思つて、相手の言葉を待つていたのだが、女性プレイヤーは返事を返さない。

いきなり後ろから声をかけたのが、そんなに怖かったのだろうか。

「だ、大丈夫か……？」

こんな時、どんな言葉をかければ良いのか……。女性経験、それどころか対人経験すら不足している俺では解るはずもない。

すると、女性プレイヤーはやつと声を発した——押し殺したような声を。

「——見た？」

「え？」

思わず訊き返す。

「見た……というか、聞いた？」

「さっきの声は……悪い、聞くつもりはなかったんだけど」

俺が率直にそう謝ると、女性は悲鳴を上げる。

「嫌ああああ!!」

「うわ!？」

女性特有の金切り声に、思わず驚きの声がかかる。

「……はあ……はあ……まさか、知り合いに……それも、キリトにこんな姿を見られるなんて……!」

息を切らしながら発せられる言葉と、少しずつ振り向かれ、視界に入った横顔。記憶を手繰り寄せるまでもなく、それは見知った顔だった。

「——え? ……ええ?! まさか……ティンクルなのか!」

「僕以外の誰に見えるって言うんだよ!」

そりゃ見紛うはずがない。

一見すると西洋人にしか見えない、下手をするとNPC以上の美貌。肩甲骨辺りにまで伸ばされた銀糸の髪。そして、ルビーのような紅玉の瞳。

しかし、それにも関わらず俺は想像すらしなかったのだ。あの嬌声を発したのが、あろうことかあの《氷姫》であることなど。

「うわあ……穴があつたら入りたい」

そして、意外過ぎる姿を晒した彼女は、弱々しい声を上げながら整った顔を青ざめさせている。

「いや、そんな落込むなよ。確かに意外だったけど、女の子ってああいう小動物が好きなんだろ? 全般的に。そう考えると、全然意外じゃないっていうか……寧ろ、こつちが

見た目通りで、普段の方が意外っていうか……」

俺がそう取り繕うと、寧ろ傷口を抉ってしまったのか、彼女は遂に泣き出してしまった。

「ううっ……酷い……だから……そう言われるから嫌なんだよ……」

もはや、フロアボス戦でさえ不敵な笑みを絶やさない彼女のいつもの姿は見る影もなかった。

「わ、解った！ 忘れるから！ ……いや、もういつそ殴ってくれ!! そうすればシヨックで忘れるからッ!!」

やや……というか、大分錯乱気味に叫んだ俺を、これも意外なことにティンクルが諫める。

「そんなこと……出来るわけがないでしょ」

おい、聞いたかよ《閃光》様。

俺はアスナの所業を思い出しながら、心の中で一人ごちる。

「はあ……もういいよ。忘れなくてもいいから、その代わり、他言はしないでね」

「あ、ああ。それはもちろん」

それぐらいなら簡単だ。ソロの俺にはそもそも話す相手自体少ないから、言ってしまうば朝飯前だ。

しかし、これで彼女に対して溜まりに溜まつている借りを少しでも返せただろうか――などと、浅ましい考えが脳裏を過ぎったことに我ながらげんなりする。

「なあ……結局、あの《ラグー・ラビット》どうするんだ？」

視線を上げれば、あれだけ大声を上げたにも関わらず、未だに餌を貪り続けるウサギの姿が。

どうやら、あの《ラグー・ラビット》はアルゴリズムに変調を来たしているらしい。いや、そうとしか考えられない。何故なら本来あのウサギは、ウサギなだけあつて集音性がもの凄く高く、ちよつとの音でも逃げ出してしまふくらいなのだ。だが――

「はあ……やつぱり可愛い……！――ハッ!?」

再び見惚れて声を上げた彼女は、俺がいることを思い出したのか顔を赤くする。

「あんた、一体あのウサギに何をやったんだ？ まさか、NPCシヨップで買える餌なんかじゃないんだろ？」

だが、アルゴリズムの変調ではないとすれば、可能性は一つだ。

あの餌が、ウサギから「逃げる」という選択肢を奪い去つてしまうほどに美味しいのならば考えられなくもない。

俺が彼女の言動をスルーしてそう尋ねると、「ごほん！」と気を取り直すように大きく咳払いをしてから答えた。

「うん、僕のオリジナル。ウサギが好きなサニーレタス、ラベンダー、ローズマリー……それから、ミントなんかを混ぜて作ったやつ」

「えーと……それは《料理スキル》で……？」

「え？　そうだけど？」

それがどうした？　という顔でキョトンとしているティンクル。

しかし、俺は内心戦慄していた。

《料理スキル》を《完全習得》^{コンプリート}したと聞いたのは随分前のことだが、俺はあの時思ったものだ——アホか、と。

だが、彼女はこれすら予測していたのではなからうか。

こんな光景を見てしまうと、他の《趣味スキル》にも思わぬ価値があるのではないかと考えざるを得ない。

「で、結局どうするんだ？」

俺は再度、同じ質問を彼女に投げかけた。

ティンクルが予め置いておいた餌を粗方食べ終わったのか、ウサギはもつとないのかと周囲をキョロキョロ見回している。

「ん……」

口元に手をやりながら、考え込むように唸る。——しかし、それがポーズに過ぎない

ことは、誰の目からも明らかだった。

ティンクルはゆつくりとした足取りでウサギのいる枝の前にまで辿り着くと、そつとウサギの口の前に自分の手を差し出した。

「ほら、お食べ」

ウサギは不思議そうに彼女の顔を見詰めてから、彼女の掌の上に載せられた先ほどと同じ餌をパクリと食べた。次の瞬間――

「……嘘だろ?」

俺は目の前の光景が俄かに信じられず、否定の言葉を吐いていた。

なんと、《ラグー・ラビット》のカラーカーソルが変化したのだ。それは見間違えるはずもなく、飼テイミングい馴らしに成功した証である。

しかし、通常《使い魔》となるモンスターは好戦アクティブ的なものに限られる。そして、《ラグー・ラビット》は非好戦ノンアクティブ的モンスターだ。

だが、あくまでそれは「今まで確認されたモノに関していえば」という枕詞が付くことを忘れてはならない。

飼テイミングい馴らしの条件は簡単に言えば四つ。一つ、好戦的モンスターであること。二つ、小動物型モンスターであること。三つ、モンスターがプレイヤーに対して友好的な反応を示すこと。四つ、同種のモンスターを殺し過ぎていないこと、だ。

今回の場合、一つ目の条件がそもそもクリア出来ていないが、その他三つの条件はクリアされている。そして、ティンクルは過去にも小動物型ではないモンスターを飼い馴らしすることに成功している。

そもそも現にこうして《使い魔》になっているのだから、こういうこともあるのかと納得するしかないのが正直なところだ。何故なら通常のゲームと違い、《デスゲーム》と化して久しいSAOでは不正は根本的に不可能だからだ。

「なあ、愛でてる最中で申し訳ないんだけど……用も済んだし、一旦街に戻らないか？ いい加減、暗くなってきたことだしさ」

「そうだね……行こっか」

まるで壊れ物でも扱うかのようにそっと抱きかかえられた緑色のウサギは、いい加減満足したのか彼女の腕の中で寝息をたて始めた。

†

「——嘘でしょ……？」

人は自分に都合のいいことしか信じないし、見えないものだと言ったことがあるけれど、残念ながらわたしはそこまで都合よくは出来てはいないらしい。

「……アスナ様？」

不審に思ったららしい警護の一人がわたしに声をかける。

「何でもないわ——……二人とも、今日のご苦勞様でした。わたしはこれから直接《リンダース》へと転移するので、護衛はここまででいいです」

「し、しかしアスナ様！　こんなスラムに足をお運びになったかと思えば、特に何をすわけでもなく……そうかと思えば、護衛はここまででいいなどと！　何かあつてからでは遅いのですから、ご自宅まで護衛を——」

彼らに非は無いのだけれど、精神的に丁重に断っている余裕もなく、わたしは最後まで聞かずに彼の話を遮る形で言い放った。

「ともかく、今日はここで帰りなさい。副団長として命令します」

それでも何か言いたげだった騎士は、しかし言葉を飲み込むと、深々と礼をしてから転移門へと消えていった。

「……はあ〜」

そこで緊張の糸が僅かに解け、わたしは溜め息を吐いた。

警護と言えば聞こえは良いが、実際は監視されているようなものだ。誰の視線も気にせずにいられるのは、自分の家の中くらい……いや、友人の家もわたしにとっては数少ない安らぎの場所だった。

「転移！　リンダース！」

†

「うわあああん！ リズううう!!」

扉を開け放つや否や、わたしは泣きながら親友に助走をつけて体当たり気味に抱きついた。

「ぐふっ……！ ちょっと！だからノックくらいしなさいと何度——つて、どうしたのよ？ アスナ」

「リズう……キリト、キリトくんがあああ！」

「な、何よ？ キリトがどうしたのよ？」

「キリトくんがあ、ティンクルさんと仲良さそうに肩並べて歩いてるの偶然見ちゃつてええええ！」

「う、うん」

「あの二人、やつぱり付き合ってるのかなあ？ わたしじゃティンクルさんに勝てない

よお〜！ うわあああん！」

わたしはリズの胸を勝手に借りて号泣する。

「い、いや……それはないと思うなあ……あたしは」

リズらしくない、言い淀んだ否定の言葉。

「やつぱりリズも二人が付き合ってるって思うのお!？」

「いや、だからそれはないって！ 絶対!!」

今度は力強く言い切ったリズ。

「ただ、わたしは逆に困惑する。」

「な、何で断言できるの……？」

「え!? ……あー……えっと、それは……」

再び言い淀むリズ。

怪しい……!!

「リズ、もしかして……わたしに何か隠してない!？」

「ねえ……アスナ。あんた絶対お酒は飲まない方が良いわよ。絶対絡み酒だから」

そう言っただけでわたしの顔を押しやると、やれやれといった風に溜め息を吐いた。

「そんなに気になるなら、フレンド追跡でも使っただけで二人が何処にいるのか調べてみたら? ……たぶん、この時間ならもう一緒にはいないと思うわよ?」

時計は既に午後七時を指している。確かに、もう夕食時なので、何もなければ別に別れていてもおかしくない。しかし、未だに一緒だったら……?

「わたし怖くて見れないよおっ!!」

「解ったから、あたしも一緒に見てあげるから泣くの止めなさいって」

「うう……」

そう言われ、わたしはしぶしぶマップを使ってフレンド追跡をかけた。結果は――

「そ、そんなあ……!!」

やはり、と言うべきか。座標が示したのは、一層下の《フロア》。しかも、二つの座標の距離が示すのは、二人が今この瞬間に一つ屋根の下に居るといふ、間違いようのない決定的な事実だった。

「ご、ごめん……リズ。わたし、今日はもう帰る気力無いや……今日は泊めて」

「いや、それは良いけど……あんた大丈夫？」

「う、うん。……別に、付き合つてると決まったわけじゃ、ないし」

泣き出しそうになるのを堪えて、わたしは工房から家の中へと入っていった。

「……冗談よね？」

一人になった工房に、そんな声が僅かに響いた。

第18話 秋空のカルテット

『~~~~~』

頭の中へと流れ込むピアノの旋律。

水面をたゆたうような朧げな意識。夢と現の狭間。

『~~~~~』

哀愁の漂うその旋律は、しかしあくまで優しい。

優しく包み込まれて——そして、そのまま窒息してしまいそうな。

「……………ん」

意識が徐々に覚醒し、俺は瞼を開けた。

最初に視界に入ったのは明るい朝の日差し。次いで入ったのは黒いシルエツト——

自分を見下ろしている人影だった。

「~~~~~」

人影はまだ俺が目を覚ましたことに気が付いていないのか、瞳を閉じて綺麗な音色のハミングを続けている。その姿は、まるで神への祈りを込めて歌う聖歌隊のようだ。

——たしかこの曲は……ジムノペディだったか……？

子供の頃——といっても小学生の頃の話だが、近所にあった小さな診療所の待合室で流れていたのを覚えている。

「……なあ、あんたはヒトの寝顔を眺める趣味でもあるのか？」

俺がそう尋ねると、彼女は閉じていた瞼をゆつくりと開けた。

秋の陽光を浴びて白く輝く銀糸の髪に、紅玉の瞳。

「気持ち良さそうに寝息をたてていたから、起こすのも可哀想だと思ってね」

そう言つて、少女はくすりと笑う。

その微笑は妙に艶っぽく、俺とそう歳は変わらないだろうに、ややハスキーな声も相まって非常に大人びて見える。

「でも、確かに君の寝顔を見る機会は多いかもね。ね、攻略組の不良生徒さん？」

ティンクルはからかうようにそう言つてから、僅かに嗜虐的な笑みを浮かべる。

まるで聖女のような出で立ちの彼女だが、その優雅な見た目に反して、刀を握った彼女は苛烈で容赦がない。できることなら、二度と切っ先を向けられることが無いよう祈りたい。

俺は身体にかけてあった毛布を捲つて上半身を起こした。

「もしかして……あんた、ずっと起きてたのか？」

「そう言うキリトは、よくまあグースカ眠れるね？ 無防備な美少女を目の前にしてさ」

前半は呆れたように、後半は自虐的な笑みを浮かべてそんなことを言った。

笑みというのも結構種類があるんだなあなどと現実逃避したくなるが、引力でもあるのか、その大きな瞳からは逃れられない。

俺は冷や汗が浮かぶのを自覚しながらも、努めて平常を装う。

「わ、悪かった……他人の家で夜明かしして。でも、酒に酔ったことで大目に見てくれないか？」

「……………」

「……大目に見てくれないでしょうか……？」

その瞳の色とは正反対の絶対零度の視線で見詰められて縮み上がりそうになるのをなんとか堪え、今度は敬語で懇願する。

「SAOの酒じゃあ酔えないだろ？」

ティンクルは床の上に転がった空き瓶を顎を刮って指し示すと、より一層冷ややかにそう指摘した。

そう。俺と彼女は昨夜食事の後——美女が骸骨と変な色をしたウサギに餌をやるという大変シニールな光景を目の当たりにして——お互い酒を開ける機会も少ないし、この機会に折角だからと幾つかボトルを開けたのだ。

結果はこの有様で、俺は酒の臭いにも酔ったのか、或いは単純に睡魔に負けたのか

……いつの間にか眠ってしまった。

まさかソコの俺が、独り暮らしの女性の家で夜明かしすることになるとは——世も末だ。

「幾らなんでも無神経過ぎるよ、キリト。……まさか僕だけじゃなくて、他にも被害者がいるのかな？」

非難の眼差しを俺へと向けながら、そう問うティンクル。

真つ先に思い浮かんだのはシリカという直葉と同じ年くらいの少女のことだった。

しかし、あれは俺の責任というには幾らなんでも余りに理不尽だろう。

「その顔は、心当たりがあるのかな？」

表情に出していたつもりはないのだが、あつさりと言破され、俺は当時の状況を洗いざらい吐かされた。

「……なるほどねえ。それはキリトが悪い」

「いや、待つてくれ。それは流石に——」

「いやいや、キリトはやつぱり少……いや、大分無神経かな。——シリカちゃんだっけ？ その娘が寝ちゃった時、起こさなかつたのは君の優しさだから、それは別に良いんだよ。でも、だつたら君はその部屋をそのままシリカちゃんに譲つて、自分は別の部屋を取り直すべきだったんだ。多少コルはかかるけど、床で寝てしまうよりはずっとマシ

だと思うし」

「……………」

正論過ぎてぐうの音も出ない。

しかし、ここまで言われると反論したくなるというのが人情だろう。

「……………」なら、あんたはどうなんだよ？ 別に各部屋に鍵くらい付いているだろ？ ……

あんたは俺のことなんてほつといて、自分の部屋で眠ればよかつたじゃないか」

俺がそう言うのと、何故かティンクルは急に瞳を潤ませ、口に手を当てた。

「だって、男の人が下の階に居るのよ？ 《鍵開けスキル》を持っていてもおかしくないないし……………乱暴されるかもと思ったら、怖くておちおち寝てもいられないわっ！ だつたら、ここでこうして朝まで見張っていた方が安心でしょう？」

涙声でそう捲くし立てられ、俺はどうしていいのか解らなくなる。

只、そこまで俺は信用されていないのかと若干悲しくなった。

そうやって俺がおろおろしていると、ティンクルは突然、ぷつと吹き出すように笑い出した。

俺はそこに至ってようやく、自分が彼女にからかわれているのだと気が付いた。

「あんたなあ!!」

「ははっ……………！ ごめん、ごめん。君のことはちゃんと信用してるから、そう落込まない

「でよ」

声を荒げる俺に対して、彼女は花が咲くような笑顔を向ける。

男として全く見られていないとなると、それはそれで自尊心を傷つけられるのだが……。

「あー因みに、『鍵開けスキル』は住宅の鍵には使えないから変な気は起こさないようにね」

「ぱちり、とウインク一つ。」

そんな気障な振る舞いも、彼女がやると妙に決まっっていて、全く嫌味に感じない。

「なんか釈然としないな……」

俺は溜め息と共にそう言っただけで肩を落とした。

†

「ごちそうさま。美味かったよ」

ティンクルが用意してくれた朝食——何をどうやったのか和食だった——を食べ終え、俺は年季の入ったいつもの一張羅に袖を通す。

「お粗末様でした。——とところで、キリトはこの後どうするの?」

「食器を流しへと運びながら、こちらを見ずにそう尋ねてきた。」

「一応、このまま『カムデット』まで転移して、迷宮区のマツピングの続きをするつも

りだけど……それがどうかしたのか？」

「……僕が訊くのもなんだけど、キリトは誰かとパーティー組まないのかなあ、と思つてさ」

皿を洗い始めたティンクルには、俺が今どんな顔をしているのか見えてはいないだろう。

この手の質問をされたとき、或いはパーティーに誘われたとき……俺は何かと理由を付けて断つてきた。

「……あんた相手に今更気張る必要も無いか」

だが、彼女は大体の事情を知っているのだから、敢えて隠さず答えることにした。

先ほど彼女を聖女のようなと思つたが、ならばこれは神への告解だろうか。

そう考えてから、内心苦笑する。彼女に告解を聴いてもらうのは、今回で二度目だからだ。

「——怖いんだ、パーティーを組むのが」

口から搾り出した声は、僅かに震えていた。

——サチを守れなかった。

俺がそう思うのは、ティンクルに言わせれば俺の独り善がりなのだろう。

でも、それでも……あの時の俺にもつと力があればと、今でもそう思ってしまうのだ。

そして、未だにそう思ってしまうのは、何も後悔のせいだけではない。

俺のスキルスロットにいつの間にか追加されていた《エクストラスキル》。習得条件すら解らないそれは、ゲームバランスをも崩しかねないほどに強力なものだった。

だからもし、もし……その力をもっと早くに手に入れることが出来ていれば、あの状況からですら、サチを、黒猫団の皆を救えたのではないかと。

「そっか」

水が流れる音に混じるほど小さく囁かれた驚くほど簡素な言葉。そこには、同情も憐れみもない。しかし、それが寧ろ一粒の清涼剤のように、波風たった俺の心を静めてくれる。

——自分の事を理解してくれている人がいる。たったそれだけなのに、心の重荷が少しだけ軽くなる。

「……そう言うあんたはどうなんだ？」

単なる好奇心で俺はそう尋ねた。声の震えはもう止まっていた。

「そうだねえ……まあ、色々理由はあるけど、取り敢えずは今後も独りかな」

洗い物を済ませたのか、水音はとうに止んでいる。

「色々って何だよ？俺だって正直に話したんだから、あんたも本当のところを話して

ほしいんだけどな」

冗談めかすように訊いたものの、内心では真剣だった。

このデスゲームを敢えてソロで戦い続ける彼女の真意は何なのか？

それが解れば、彼女の「強さ」が何処からくるのか、もしかしたら解るのではないかと。

だが、彼女は一瞬儂げな微笑を浮かべ——しかし、直ぐに悪戯っぽい表情でそれを覆い隠した。

「ごめんね。僕にだって、話せないことの一つや二つはあるんだ」

つまり、何か話せない理由があるっていうことか。

男嫌いだとか、人付き合いが苦手だとか……そういう理由を挙げて煙に巻くつもりなのかと思いきや、彼女は「正直」に答えてくれたのだ。

それが彼女なりの誠意だと、俺はそう受け止めることにした。

「あんたって、もしかして秘密主義だったりするの？」

「女は秘密を着飾って美しくなるんだよ……なんてね」

そうやって軽口を言い合ってから、俺達はどちらからともなく笑い出した。

——と。

『コンコンッ』

不意に扉をノックする音が聞こえ、笑いを引つ込める。

「……客か？ それなら俺はサツサと出てくけど」

「いや、その必要は無いよ」

「はあ？ それはどういう——」

俺が言い切る前に、ティンクルはスタスタと玄関まで歩いていくと、躊躇い無く扉を開け放った。

「おはよう。待ってたよ」

「——え」

扉の前に立っていた赤と白の団服に身を包んだ訪問者は、放心しきったような声を上げる。

俺はといえば、予想外の人物の登場に目を見張った。

「あ、アスナ!？」

栗色の長いストレートヘアにはしばみ色の大きな瞳。そして、アインクラッドで五本の指に入る美人にして、トップギルドと名高い《血盟騎士団》の副団長。

そんな彼女と何かと接点があるのは自覚してはいるが、まさか偶々泊り込んだ友人の家で鉢合わせすることになるとは。

しかも今日は平日で、昔ほどではないにせよ、あのアスナが攻略をサボるとも思えない。こんな偶然——

いや、待て。ティンクルは何と言った？ ……待っていたと言わなかったか？

「ごめんなさい……やっぱりお邪魔だったみたいですね」

そう言つて、今にも泣き出しそうな笑顔を向けるアスナ。

何がどうお邪魔だというのか。今回の場合、間違いなく邪魔者は俺の方だと思ふのだが。

「失礼しま——」

「だから待つてたんだって」

ティンクルは、まるでロボットのようにかくかくと右回れして帰ろうとするアスナの手首を掴んで引つ張ると、そのまま家の中へと引きずり込んだ。

「な、何するんですか!？」

「いや、このまま帰すわけにはいかないんだよ。朝方、リズからアスナをよろしく頼むつていうメールを貰つてね」

そう言つてから、ティンクルはアスナの耳元に顔を近づけると、ゴニョゴニョと何事か耳打ちする。

すると、つい先ほどまで青ざめていたアスナの顔が、目に見えて紅潮しだした。

……一体この人はアスナに何を言つたんだ？

「り、リズううう!!」

顔を真っ赤にしたアスナは声を上げながら、今度は勢い良く飛び出して行くとうする。

だが……何故、剣の柄に手を伸ばしてるんだ、アスナは。

若干恐怖を感じつつも、俺は黙って成り行きを見守る。

「だーかーらー帰っちゃ駄目だって」

人が悪そうな笑みを浮かべたティンクルは、再びアスナの手首を掴んでこの場に引き止める。

「さて、ここで知らぬ存ぜぬって感じのキリト君に質問です——」

そこまで言われ、ようやく俺の中で警戒アラーム鳴り響く。が、時すでに遅し。

何も言うことが出来ぬまま、選択肢が突きつけられる。

「このまま何時ものように一人で孤独に薄暗い迷宮区に向かうのか？ それとも、このまま僕ら三人でトリオを組んで向かうのか？ ……さあ！ 二つに一つ！」

「いや、ちよつと待ってくれ!!」

どうにかそれだけ言つて、俺は必死に反対材料を探す。

「ああ、キリトがアスナとコンビが良いって言うのなら、僕としてはそれでも全然構わな

いよ」

「勝手に話を進めるな!!」

そして思い至り、俺はアスナに尋ねる。

「ティンクルはこんなこと言ってるけど、アスナの意見はどうなんだ？ アスナだって

——」

「わたしは構わないわよ？ トリオでも、コンビでも」

「——そうだよな、ギルドの方だってあるし……って——え？」

「うち、別にレベル上げのノルマとか無いし」

く、雲行きが……。

「じ、じゃあ最近連れてるあの護衛の二人は？」

護衛と言われ、一瞬苛立たしげな表情になるアスナ。

お、これはイケるか。

「置いてくるし」

しかし、俺の期待はすまし顔で切って捨てられた。

——まあ、確かに魅力的な話ではある。アインクラッド一二を争う美人二人とトリオを組むなど、アインクラッド中の男を敵に回しかねない。

だが、ティンクルは兎も角、何故アスナまでもが乗り気なのだろう。

ひよつとして、根暗なソロプレイヤーとして憐れまれてるのだろうか。

そんな後ろ向きな思考に囚われ、うっかり口にしてしまった台詞が命取りだった。

「最前線は危ないぞ」

言った瞬間、しまったと思った。しかし、後悔先に立たず。

言った言葉の取り消しも、やってしまった失敗も……してしまったことの取り返しはつかないものだ。

ビュン、という風切り音がしたかと思うと、目の前にライトエフエクトを纏った細剣の切っ先が。

「足手纏いにはならないと思うけれど？」

「わ、解った。……じゃあ、さっきに問いの答えはトリオってことで……」

俺がトリオと言った瞬間、ティンクルの落胆するような吐息と、僅かに剥れたアスナの顔。

「え……？ 俺、何か変なこと言ったか？」

「知らない！」

「こ、今度は一体何を怒ってるんだ……？」

「先は長そうだねえ……」

しみじみといった感じに、ティンクルがそう独り言ちた。

第19話 氷姫の舞踏

「——遅いな」

「……そうだね」

七十四層主街区《カームデット》のゲート広場。

俺とティンクルは石造りのモニュメントの一つに背を預け、待ち人が来るのを待っていた。待ち人というのは、勿論アスナのことだ。

アスナは昨夜リズベットの家に泊まったらしく、ポーシヨンや回復結晶等々の準備の為に一旦自宅へと戻っていた。

朝方は晴れていたというのに、陽はすっかり雲に覆われ、秋の匂いのする風が頬を撫でる。

「なあ」

「ん？」

「あんたは秋の匂いっていったらどんな匂いを想像する？」

「秋といえぱりぱり金木犀かなあ」

取り留めの無い会話。だというのに、往來を歩く人々の視線が突き刺さってるように

感じるのは、俺が自意識過剰という訳ではあるまい。

この後アスナも合流すると考えると……俺は、周りの視線だけで刺殺されるのではなかろうか。

非難の意味を目一杯込めて隣に立つティンクルを見やるが、彼女は俺の方など見ておらず、只々虚空を見詰めるばかりだ。

聡い彼女と違い、残念ながらエスパーでもなんでもない俺は、他人が何を考えてるのかなんて察することなど出来なくて……、気持ちというのは、言葉にしてもらわなければ解らない。

「遅いな」

「……うん」

その声には疲れが感じられて、俺はもう黙っていられなくなった。

「なあ、あんたどうしたんだよ？ さっきから」

自分から言ってくれないのであれば、こちらから問うしかない。

しかし、答えというのは難解なものばかりではなくて、驚くほど単純だったりするものだ。

「……眠いんだよ」

彼女はそう言ってから、欠伸を噛み殺すように口を閉じて瞼を擦った。

——そういえば、ティンクルは昨夜一睡もしていないんだったか。

とんだ杞憂であったことに俺は内心苦笑して、彼女が眠ってしまったように会話を続ける。

「あんたが今着てるその鎧って、たしかL.Aボーナスのユニーク品だったよな？」

「そうだよ。上下セットの《銀妖精の鎧》シルバードワーフ・アーマーに《銀妖精の籠手》シルバードワーフ・ガントレット。それから、防寒対

策の中にパーカーも着込んで。……あー因みに、今日の下着は黒の——」

「ぶっ……!!ゲホッゲホッ！」

寝惚けている癖に……いや、だからこそなのか、突然の逆セクハラに俺は咽て咳き込む。

「うるさいなあ……」

「あんたのせいだろ!!」

いや、落ち着こう。深呼吸だ。こうやって一々反応するから相手は面白いのだ。

——それにしてもアスナのやつ、いい加減遅すぎやしないか？

時刻は既に九時を回り、別れてから一時間近く経とうとしている。いくら女の子だつて、流石に支度だけに一時間も必要無い……はずだ。

ドタキャンならそれはそれで構わないが、何かあつてからでは遅いので、メールでも送ってみようかと思ひ始めた時だった。

本日何度目かの転移門内部の青いテレポト光を目の当たりにして、俺は期待半分諦め半分で門を凝視した。が――

「――え」

通常なら転移者は門内部の地面に出現するはずが、転移時に勢い良くジャンプでもして門へと飛び込んだのか――地上から一メートル辺りの空中に人影が出現し、エネルギー保存の法則に従って勢いそのまま吹っ飛んできた――俺へと向かって。

「うわああああ!!」

「きゃあああああ! 避けてえええええ!」

「――ツ!!」

あわや大惨事、というところで――俺の前へと躍り出たティンクルが、その人影を受け止めた。それも、いわゆるお姫様抱っこというやつで。

「大丈夫?」

「ご、ごめんなさい。……ありがとうございます」

状況も相まって羞恥で頬を染めたその頓馬なプレイヤーは、しかし俺の見知った人物だった。というか、一時間前に会ったばかりのやつだ。

「アスナ……何やってんだ」

待ち人来る。

それにしたって、この登場は余りにもあんまりだろう。とんだサプライズだ。

「アスナ、顔赤いけど……本当に大丈夫？」

「だ、大丈夫ですから……その、恥ずかしいので……」

そう言われ、自分が周囲の注目を集めていることに気が付いたのか頷くと、特に急ぎもせずゆつくりとアスナを降ろした。

「こういうのはキリトの役目だと思っただけだなあ……本来は」

「め、面目ない。……だけど、あんなの咄嗟に対応出来る方がおかしいだろ……」

「いや、キリトなら出来ると思うけどね」

そう言つて、ティンクルは肩を竦める。

俺のことを高く買ってくれてるのは素直に嬉しいが、それは幾らなんでも買い被り過ぎだ。

「ところでアスナ、何をそんなに急いでたの？」

ティンクルがそう尋ねると、アスナは何を思い出したのか、ハツとした表情になり――同時に、再び転移門が青く輝き、アスナと同じ赤と白の団服を纏い……ティンクルには負けるものの……やや装飾過多気味の鎧と長剣を装備した瘦身の男が現われた。

――たしかこの男は……アスナの護衛の一人じゃなかったか？

そしてアスナ本人はといえば、男の姿を認めると、俺の背後に隠れるようにして相手

を睨み付けている。

「アスナ様……勝手なことをされては困ります……!」

男は俺と背後のアスナに目を留めると、より一層表情を険しくし、ヒステリック気味に叫んだ。

俺はアスナと護衛の男の顔を交互に見返し、稍あつて冷や汗を流した。

詳細は解らないが、何か良からぬ事が起ころうと……いや、既に起こっていることだけは理解する。

「お、おいアスナ……これは一体どういう——」

「貴様か……? アスナ様を誑かした不届き者は!!」

「わたしは誑かされてなんかないわよ……! それに、どっちが不届き者よ!! 大体クラディール、アンタ何でわたしの家の前で待ち構えているのよ!」

両者別の意味で白熱してるが、今回、ある意味俺が一番の被害者と言っても過言ではないと思うのだが。しかし、それをこの神経質そうな男に言つたところで誤解は解けない。

だが、やる前から決め付けるのはやはり宜しくはないだろう。

「えーと……クラディール……? ——誑かしたなんて人間きが悪いな」

「キリトくん……!」

キリトくんも言っていてやって！と目で訴えられているので、ならば期待通り言わせてもらおう。

「あんたは大きな勘違いをしている」

「何だと……？」

「……アスナを誑かしたのは俺じゃなくて——そっちの女だ」

そう言つて、俺は真つ直ぐ指を差す。クラディールの視線は、自ずと俺が指差す方向へと吸い寄せられる。

俺が指差したのは勿論、さつきから傍観決め込んでいるティンクルのことだ。

「えー……そこで僕に振るんですか……」

「……キリトくんの馬鹿っ」

女性陣の非難と落胆が入り混じった声と視線を浴びせられるが、俺は何も間違つたこととは言っていない。

……間違つてないですよね……？

「貴様……ふざけた事を！ピーター風情が調子に——」

《ピーター》とクラディールが口走つた瞬間、確かに俺の耳は、何かがつつりと断絶する音を聞き取つた。

音のした方向を見やれば、笑顔を貼り付けた銀髪的美女。

その姿は、彼女が纏う豪華な鎧も相まって、神話に出てくる戦乙女のようなのである。つまりは、不吉であるということだ。

「ビーター……ビーターねえ。……それは、一体誰に向かつて言っただろう？ 僕にかな？ それともキリトに対してかな？ ……どちらにせよ、許さないけどね」

「何を……」

明らかに態度が豹変したティンクルに、クラデイルは訳が解らないといった体で困惑している。

たしかに自覚は無いのだろう。だが、クラデイルは大きな過ちを犯した。

何故なら、今この場にいるβテスターは俺だけではないからだ。

「……僕がキリトに言うのも、キリトが僕に言うのも良いんだよ。僕らは、同属だからね。——でも、何も知らない奴が、おいそれと口にするのは許せないんだ。……特に、キリトに対しては」

数歩前へ出てそう言うと、ティンクルはより一層眼光を鋭くする。口元に、笑みだけを置き去りにして。

それに対し、クラデイルは一転、嘲るような表情で目を細めた。

「なるほど……貴様もビーターというわけか。卑怯者同士で傷の舐め合いとは、滑稽この上ないなあ……!!」

「いい加減にしなさいクラディール！これ以上の中傷は——」

「止めろ、アスナ」

諫めようとするアスナを逆に俺は首を振って制止した。

「ど、どうして止めるのよ!?!このままじゃ……!!」

このままじゃ、今更になって攻略組の中で不和が生まれかねない。そして、そうなれば当然、俺が《ビーター》を名乗った意味も無くなる、とアスナは言いたいんだろう。

でも——

「アスナが止めに入って収まったところで、お互い悔恨を残すだけだ。なら、一層のことぶつかり合った方が後腐れなくて良いだらう」

俺がそう言うと、アスナは納得がいかないのか尚も反論する。

「そんなの男の子の論理でしょ!?!……実際はこういう揉め事って、正面衝突したところで数ヶ月蟠りが残ったりするものなのよ!!」

アスナの真に迫るような物言いに、思わず俺は目を瞬かせる。

「け、経験がお有りで?」

「わたし……女子校育ちだから。陰険ないじめとか、結構見たし」

女子校は花園のはずだろ。何だその魔窟は。全思春期男子の幻想を返せ!

——いや、現実逃避している場合じゃない。

「いや、そもそも何でこんなことになってるんだ？アスナ、今日KOBは活動日じゃないんだろ？だったら、プライベートまでギルメンにとやかく言われる筋合いは無いだろ……仮にもアスナは副団——」

そこまで言つて、俺は思い至る。副団長よりも上の権限を持つのは当然——

「まさか、ヒースクリフが……」

「ううん、団長は関係ない。あいつが勝手に——」

アスナが何か言おうとするが、その声はクラディールの金切り声によって掻き消される。

「私が許せないと言つたな？——ならば当然、自分の言つたことに責任を持たないとなあ!!」

現実には銀幕の中とは違って、こちらの会話が終わるまで待つてなどいてはくれない。

【K u r a d e e l から l i v s t e e l を申し込まれました。受諾しますか？ Y

E S o r N O】

ティンクルの前に現われた、半透明のシステムメッセージが刻印された矩形。

しかし、彼女は一瞬その出現を確認しただけで、クラディールを見詰め直す。

その視線はあくまでも冷徹で、怒気を孕んでいるようには見えない。そもそも彼女の体貌に、ヒトを恐怖させるに足る要素など一つとして無いといつていい。

だが、たとえその外面が人形のように完璧ではあつても、彼女も血の通つた人間であることに変わりはない。

彼女の内面に渦巻くものが何であるのか。それを識ろうとしたところで、外面が曇り硝子のように取り巻いていて、容易に見透かすことなど出来はしまい。

だから、こうして傍目から見ている分には、彼女が怒りを覚えているのかどうかも解らない。先刻、彼女自ら「許さない」と言つたにも関わらず、だ。

「——まあ、大体の察しは付いた。要するに、あなたはアスナの護衛として、四六時中彼女を警護したいわけだ。……今朝、彼女の家で彼女を待つていたのは、あくまで任務の延長だと」

「ああ、その通りだ。……なんだ、案外話に通じるではないか。——解つてもらえたのなら、アスナ様をこちらに引き渡してもらいたいのだが？」

自分の推察を淡々と話すティンクル。

対して、自分の行動原理を理解されたからか、先ほどの剣幕が幾らか和らいだクラデール。

“四六時中”を否定しなかつたクラデールに、アスナは怖気が震うようだが、俺は……ティンクルに対して、ある種の“気持ち悪さ”を感じていた。多分それは、何か得体の知れないモノに対する恐怖心なのだと思う。

「——解った」

「て、テインクルさん!？」

「さあ、アスナ様、ギルド本部へ戻りましょう」

アスナもクラデイルも、それが引き渡しに同意する発言だと思ったのだろう。

アスナはテインクルを失望するかのような眼差しで一瞬見ると、今度は傍らの俺に縋る様な視線を向けた。

クラデイルは、アスナを連れ帰る為にこちらへと歩み寄ってくる。

そして、テインクルと擦れ違う瞬間——彼女は、クラデイルの左手首を握り締め、その場に留まらせた。

「……貴様、何のつもりだ？」

「解ったって言っただろ?——あなたみたいなのを日本語では確信犯っていうんだよ。勿論、本来の意味でね」

テインクルはそう言うのと、宙に浮かんだままだったウィンドウに指で軽く二度触れる。

〔Kuradeel との1vs1デュエルを受諾しました〕

〔モード：初撃決着〕

〔60〕

【59】

システムメッセージが流れ、カウントダウンが開始される。

「貴様ア……!!」

「ふっ……あなたの行動は、端から見たらストーカーのソレに他ならないよ。寧ろ、自覚が無い分尚更性質が悪い」

怒りに歪んだ顔と、氷の微笑。

一見対極的に見えるそれは、しかし同一のものだ。何故なら、笑顔とは本来、攻撃的なものなのだから。

「あなたが勝ったら、そのままアスナを連れ帰るといいよ。でも、もし僕が勝ったら、今日は僕が責任を持ってアスナを預からせてもらう」

凜とした声でそう言い放つと、犯罪防止コードギリギリで掴んでいたらしいクラディールの腕をパツと放す。

急に力を抜かれ解放されたクラディールは、当然のように蹠踉けてしまったわけだが、それが更に火に油を注ぐ結果となった。

「言わせておけばこの厄ア!!——アスナ様……!此奴の戯言に耳を貸す必要などござい

ません!!このクラディール以外、貴女の護衛が務まる者などいないことを証明しますぞ!!」

狂喜を押し殺したような声でそう叫んだクラディールと相変わらず笑んだままのティンクルは、お互いジリジリと距離を取ると、一方は騎士剣を、もう一方は日本刀を携え構えた。

「おい聞いたか!?あの《氷姫》とKOBメンバーが《閃光》を賭けてデュエルだよ!!」
騒ぎを聞きつけ集まってきた人垣の中から誰かがそう叫び、ドツと歓声が湧く。

だが、俺は内心肝を冷やす。

世の中には、水を差したら爆発する物質が思いの他多いのだ。

ほら、今俺の目の前にも。

【16】

【15】

「さあ、出番だよ」

右手で刀を正眼に構えたまま、左手でウィンドウを何かしら操作したティンクルの足元で、青い光が集まり、爆ぜる。

彼女の足元に出現したのは、昨日飼^{テイ}い馴^{ミン}らしに成功した《ラグー・ラビット》だった。

主人の優しい声音に反応するように、ウサギは耳をぴくりと動かし、つぶらな瞳で彼

女を見詰める。

「《ラビット・フッド》、お願いね」

『プウー!』

現実のウサギの鳴き声を聴いたことの無い俺にはそれが本当にウサギの鳴き声なのかは判断付かないが、目の前の緑ウサギは主人の願いに応えるように確かにそう鳴くと、ティンクルの両足に若草色のライトエフェクトを纏わせた。

たしかノウサギの走力は……時速八十キロにまで達するのではなかったか？

「良い子だ」

【3】

「《氷姫》ってビーストテイマーだったのか？」

「お前知らないのか？あの姫様は普段から骸骨従えてんだぜ？今更ウサギなんかで驚くかよ」

見物人のそんな会話が耳に聞こえた時だった。

【DUEL!!】

開戦を告げる文字が両者の間で閃光を伴って弾け、二人はほぼ同時に地を蹴りつける。

「ヒヤア——ッ!!」

「…………!!」

俺は目を見張った。

意外なことに、先に動いたのはクラディールで、ティンクルは比べてやや遅い。だが、そんなことは瑣末なことで、俺を含め全ギャラリーが驚いたのは、ティンクルの刀がライトエフェクトを纏っていない——つまり、ソードスキルを発動していないことだった。

「馬鹿がアツ!!」

勝利を確信した笑みを浮かべるクラディールの騎士剣がライトエフェクトを纏って、ティンクルを斬り裂かんと迫る。

あれは……両手用大剣の上段ダッシュ技《アバランシュ》だったか。

「ティンクルさん!!」

隣でアスナが叫ぶ。

たしかに、このデュエルは初撃決着モードだ。だが、《アバランシュ》のような高威力の上位スキルをまともに喰らうと、HPを全損させてしまうことも稀にだがあるのだ。しかもティンクルの場合、ステータス値を殆ど〔VIT〕には振っていない。だからこそ、それを補う為のあの鎧なのだ。だからもし、ティンクルがこのまま《アバランシュ》をクリーンヒットで喰らえば、ほぼ確実に死ぬ。

「ただ、そんな光景……俺には想像すら出来ない。」

「な……なに……?」

「ティンクルを正面に、驚愕で目を見開くクラディール。」

「お、おい」

「あいつの剣……何処に行つたんだ?」

クラディールの手から、ライトエフェクトを纏つてティンクルに確かに迫っていた騎士剣が、忽然と消失したのだ。

まさかの奇術マジックに戸惑う声がそこかしこから聞こえ、誰もがクラディールの剣の行方を捜す。

「貴様ア……この期に及んでどんな如何様を……!?!」

クラディールは、自分の剣が消えたのは、ティンクルが何かしらのチートをしたのだと疑っているらしい。それも当然か。だって、ピーターの語源は、βテストとチーターなんだから。

しかし、直後。

『カランッ』

空中から落下してきた騎士剣が舗装された地面に落ち、辺りに金属音を響かせた。つまり彼女は、意図的な《武器落下》……《デイスアーム》を引き起こしたのだ。

「アスナ、さっきの見えたか？」

「う、うん。……でも、もしあれがソードスキルだったら、ライトエフェクトすら目で追えた自信無いよ」

「……ああ、俺もだよ」

そう。テインクルがやったのは、勿論チートではないが、ソードスキルでもなく……でも、「剣技」以外の何物でもなかったのだ。

「あれって——」

「あれは——」

俺達は二人同時に、自分の知識でその名を口に出す。

「——巻き込みアンブロップマンだよね？ フェンシングの」

「——巻き上げだろ？ 剣道の」

奇しくも同じようにスポーツとして体系化された洋と和の剣術の名を上げて、俺達は思わず顔を見合わせる。

「——さて」

周囲の喧騒を切り裂く、ややハスキーな声。

それは口々に勝手に話していた者達の動きを止め、辺りが一瞬静寂に包まれる。

「どうする？……このまま続けても良いけれど、そうしたら首にブスリだよ？」

「くっ……い！」

真つ直ぐ、首に刀の切っ先が触れるか触れないかというところで手を止め、そう尋ねるティンクル。

どう見てもその光景は脅迫以外の何ものでもないのだが、デュエル中であることを踏まえれば、案外良心的なのかもしれない。

「ま、問答無用で両手首斬り飛ばされるよりはマシだろ」

「キリトくん何か言った……？」

「いや」

どうやら俺のぼそりと呟いた独り言は、アスナの耳には聞こえなかつたらしい。

やがて、元々白かった顔をより蒼白にさせたクラデイルは、怒りに、或いは恐怖に震えるように声を上げた。

「アイ・リザイン……い！」

【A Winn er is Twinkle!!】

次の瞬間、勝者を告げるシステムメッセージが開始時と同じように両者の間に出現し、高らかなファンファーレが鳴り響き——しかし、それを覆い隠すほどの拍手と歓声が、広場一帯に轟いたのだった。

第20話 迷宮のラヴァーズ

「キリトくん、スイッチ行くよ!!」

「おうー」

アスナの細剣上位スキル《スター・スプラッシュ》からのキリトの片手剣四連撃《ホリゾンタル・スクエア》、七連撃《メテオブレイク》の見事な三コンボで、難敵《デモニッシュ・サーバント》を撃破する。

二人の連携は、とても今日初めてパーティーを組んだとは思えない程の完成度で、まるで長年背中を合わせ続けた歴戦のコンビのようだ。

だが、そんな感慨に浸っていられる程、僕にも余裕はない。何しろ、ここは真正正銘『最前線』なのだから。

「ふるふるふるふるふるうー」

「……ッ!」

もう一体の骸骨剣士が放った《バーチカル・スクエア》を身を捻り三度躲し、四度目でカウンターのソードスキルを叩き込む。

「——はぁッ!!」

赤いライトエフェクトを纏った刀身が地を這うように滑り、文字通り、敵の足元を掬う。

カタナススキル《浮舟》。

「ぐるあ?」

宙へと跳ね上げられる巨体。がらんどうの双眸に、確かに驚愕が映る。

《浮舟》は、スキルコンボの開始技だ。

……一気に決める!!

「——ッ!!」

《AGI》を一時的に30%増加させる強化系スキル《ラビット・フッド》の効果と、

システムアシストによる二重加速^{ダブルアクセラ}。

ソードスキルのライトエフェクトと《月華》の燐光が混じり合い、迸る紅い光芒。

「セアアアアッ!!」

一瞬のうちに刻まれる放射状の十二の切り口。その全てから、肉体を内側から食い破るようにして吹き出す、赤黒いライトエフェクト。

その光景はまるで、血に染まった羽根を広げる孔雀のようで……。

「ぐるああああ!!」

骨の身体は、果たして痛みを感じ得るのか。

苦悶の声を上げた骸骨剣士は、次の瞬間、四方に骨片を撒き散らし、爆散した。カタナスキルの最上位剣技の一つである十二連撃技《血塗れ孔雀》。

あまり使っている人を見ないが、それはこの光景の残虐さからでは勿論無く、技の成功に要求される《DEX》と《AGI》の数値にまで未だ達していないからだろう。

「…………ふう」

残心し、呼吸を落ち着ける為に一息吐いてから、刀身を鞘に収める。

「お疲れ、二人とも」

キリトとアスナに労いの言葉をかけるが、二人共に表情が優れない。

理由が解らず首を傾げると、キリトが口を開いた。

「あ、相変わらず凄いな。あんた、本当に俺よりレベル低いのか…………？」

「僕、レベリングはあまりしないからね。多分…………キリトより5は低いと思うよ」

現時点での僕のレベルは86。対してキリトは91なので、以前よりは差は埋まったものの、やはりレベル差5の壁は大きい。とはいえ、数値の壁は技術で越えろがモットーなので、彼に後れを取るつもりは毛頭ないが。

そんなことを考えていると、今度は苦笑を浮かべたアスナが口を開く。

「ティンクルさん…………平気なんですか？」

「え？」

平気なのかと問われ、しかし、僕はやはり首を傾げざるを得ない。

アスナが死霊系モンスターを苦手としているのは知っているけれど、スケルトン系は実態があるから平気だったはずだ。

「さっきの技……出来れば動物型モンスターには使わないでほしいです。——少なくとも、わたしの見える範囲では」

そこまで言われ、ようやく理解が及ぶ。

《デモニツシユ・サーバント》の場合飛び散ったのは骨片だったが、その他多くのモンスターに使用すると、代わりに飛散するのは——

「ごめん……善処するよ」

「お願いします」

普段一人——正確には二人だが——で居ることが多いから、あまりその辺の配慮をしたことが無かった。

少なくとも、こういう戦い方は人前では慎むべきか……仮にも、周りに女性と思われている今は。

歩くのを再開して一、二分。何やら考え込んでいたらしいキリトは、顔をアスナと僕の方へと向ける。

「まあ、たしかにちよつとグロいけど……。でも——殆どのソードスキルって無機質な

感じがするのに、カタナスキルだけはデザイナーの趣味が色濃く出てると思わないか？」

「うーん……言われてみればそうかも。わたしの細剣スキルもキリトくんの片手剣スキルも、基本技が《垂直》^{バネチカ}だったり《直線》^{リニア}だったり……無味乾燥っていうか……」

そう言われ、何と無くだがその理由を思い付き、僕はそのまま口にする。

「もしかしたら、カタナスキルだけデザイナーが違うのかもね」

恐らくソードスキルのデザイナーも茅場のはずなので、カタナスキルが異色に見えるのは、このセカイの創造主が関わっていない。『異端』だからなのかもしれない——と、思ったのだが。

「それは流石にないと思うけどな。スキル一つだけデザイナーが違うなんて、そんなことないだろうし」

そうやって否定されると、反論しようがない。

僕は肩を竦め、別の話題を振ることにした。

「それは兎も角、さっきの《軍》ことだけけど……」

現在、僕らがいるのは最前線である七十四層迷宮区の最上部付近なのだが、迷宮区に入る前、手前の森林で《軍》——正式名称《アインクラッド解放軍》——所属のプレイヤー集団を目撃したのだ。

正直言って、彼らが何処に居ようが僕自身は別に構わないのだけれど——彼らが所属する《軍》は“解放”など最近では名ばかりで、守るはずの《はじまりの街》に定住する低レベルプレイヤーに重い課税を強いるなどあまり良い噂を聞かない。それに、《軍》は長い期間迷宮区攻略に関わらなかった。

《軍》の台頭は《聖竜連合》辺りが良い顔しないだろうことは目に見えているし、それに何より、この急な方針転換に嫌な予感を禁じ得ない。

「そのことなんですけど……」

「アスナ、何か知ってるの？」

そう尋ねると、アスナは少し自信無さそうに話し始める。

「ギルドの定例会で聞いた話なので正否の程は解りませんが……《軍》が方針変更して上層エリアに出てくるらしい、って」

「……それでいきなり最前線の未踏派エリアに殴り込みか」

キリトが呆れ半分感心半分といった感じで唸る。

「規模は？——前は迷宮区に多人数が入って、その混乱が元で半壊……方針変更を余儀無くされたんだっただけだ」

「多人数型 M u l t i p l a y e r に反して少数……特にソロやコンビの方が経験値効率がよく、」

何より戦い易い。

だから迷宮区で人海戦術などやろうものなら、狭い路地で挟まれたり袋小路にかち合ったりして身動きが取れなくなり、そのまま壊滅……ということになりかねない。

「なので、前回の教訓も踏まえて少数精鋭部隊を送るそうです」

「たつたそれだけの教訓の為に随分高い授業料を……ごほん」

思わず皮肉を言いそうになり、慌てて咳き込んで誤魔化すが——まあ、手遅れだろう。気にせず続ける。

「なるほど、その第一弾がさっきのパーティーなわけだね」

権力の誇示が目的か、或いは内部崩壊を抑える為の楔か。……これだから似非共産主義は。

どちらにせよ、慣れない高レベルのMob相手に長時間戦闘するのは無謀と言わざるを得まい。

だが——

「幾らなんでも、今日ぶつつけ本番でフロアボスに挑むことは流石に無いだろうし、迷宮区に入ってからここまで一度も見なかったことから考えても、今日はもう帰ったんじゃないかな?」

「……それなら良いんだけどな」

キリトの奥歯に衣着せた言い方に眉根を寄せつつも、これ以上余計なことは考えないことにする。

「——集中しよう。いつMobが出てもおかしくないんだから」

「《索敵》してるからその点は問題無いよ。……それより、さっきの指輪だ。指に嵌めるだけで隠蔽効果があるなんて狡いだろ」

そう言つて、キリトは自分のコートをバサバサ引つ張つて示す。

「それは君が好きで着てるんだろ？」

「あーやっぱりそうなんだ」

「うるさいなあ！ 良いだろ別に!!」

僕ら二人のからかいに不貞腐れるキリト。これだからからかい甲斐がある。

それにしても——

「もーキリトくん、冗談だから怒らないですよ。……ふふっ」

恋する乙女の顔、なんてベタな形容がしつくりくる程、幸せそうなアスナの笑顔。

問題事は両者にダメージが少ない方法で切り抜けるのが常の僕が、今回に限つてあんな方法を取つたのは、勿論ストーカー気質のクラディールへの嫌悪感も有つただけだ、本当は里香にアスナを頼まれたというのが大きい。

『アスナがキリトに告白できるように協力してあげて』

何ともお節介だが、実に彼女らしいお願いだ。

今は一緒にはいられないけれど、それ以外の願いなら——好きな人の……里香の願いは、出来得る限り叶えたい。

——ああいう手合いは口で言っても引くような玉じゃないし、力技になってしまった。……それでも結局、クラデイルは尚食い下がり、アスナが自ら護衛の任を解くという嫌な結果になってしまったけれど。

それでも、こんな笑顔をしてくれるなら、主義に反することをやった甲斐もあつたというものだ。といつても、キリトが隣りにいれば、アスナはいつもこんな笑みを浮かべているのかもしれないが。

そんな彼女の好意に気付かないキリトは、一体何処に目を付けているのだろうか。非難の意味を込めて、キリトの横顔を見詰める。

「……う？ どうした、ティンクル？」

こういうのには気付く癖に、鈍いのか何なのか。……このすけこましめ。

「何でも無いよ」

口には出さず、僕は足元に着いて来ているイナバ——昨夜名付けた——を抱き上げる。

「ま、もう暫らくはこの子で我慢だ」

「……………」

キリトは訳が解らないといった風で首を左右に振ったのだが――

「お、おい!!」

急に大声を上げ、立ち止まるキリト。

「な、何よう……………急に大声出して――って……………ああ!!」

コントか、と内心思いつつも、アスナが指差す方向を見やる。

視線の先には巨大扉。まず間違いなく、その先にはフロアボスが待ち構えていることだろう。

扉に近づき、キリトは後ろを振り返り尋ねる。

「ど、どうする?」

「覗くだけ、覗いてみる……………」

キリトに並んだアスナはその強気な台詞とは裏腹に、子供が親と逸れない為にそうするのように、彼のコートの袖を掴んでいる。

それなら――吊り橋効果、狙ってみるか。

「そういう前振りいいから、サツサと開けよう」

言いながら、躊躇無く扉に手を当て押し開ける。

「ちよつ――……………あ、あれ?」

アスナが恐怖で声を上げるが、言い切る前にその声は、途中で疑問のそれに変わった。
「……見えないな」

扉の先は暗闇が広がるばかりで、中を見通すことが出来ない。

「いつそ二人で入ってみたら？」

「嫌ですよ！何言ってるんですか!?!」

「……いや、その必要は無さそうだぞ、二人とも」

キリトがそう言ったまさにその瞬間、入り口付近の松明に、青白い炎が灯った。

そして、鬼火のように見えるそれは、徐々にその数を増していく。

「き、キリトくん……」

不安からか、アスナはキリトの腕に抱き付くと、剥き出しの肩を震わせ始める。

「あ、アスナ……」

うわー僕お家に帰りたい。

桃色に見える空間を呆れながら横目で見てみると——暗闇の先、遂にフロアボスらしい巨軀が朧気に浮かび上がった。

目に映るのは、黒山羊の頭部に青く輝く瞳。次いで、縄の如く盛り上がった筋肉に包まれ、更にその上を青い体毛に覆われた巨大な体軀。

その姿はどう見ても——

「……………B a p h o m e t ^{悪魔}」

呻くように小さく呟き、更に視線を凝らす。

悪魔の頭上。出現したカーソルには、《The Gleam Eyes》……輝く目。

「キリ——」

『グルアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

轟くような雄叫びに、僕の声は掻き消される。

そして、悪魔は口と鼻から青白く燃える呼気を噴出しながら、右手に携えた巨大な剣を振りかざし——そのまま真つ直ぐ、地響きを打ち鳴らし、猛スピードでこちらへと向かってきた。

だがまあ……慌てる必要は無い。何故なら、フロアボスはボス部屋から出ることは出来ないのだから。

「二人とも、これからどうし——」

「うわああああ!!」

「きやああああ!!」

だのに、二人は同時に絶叫すると、一目散に逃げ出した——僕を置き去りにして。

「ひでー」

「自分で仕向けておいて何言ってるのよ……しかも、思い切り棒読みだし」

呆れたような声が虚空から聞こえたかと思うと、ノイズが僅かに走り、僕の背後に白い手が現われ……そのまま僕の肩を掴んだ。

「止めるよ、その登場。……ホラー映画かよ」

僕がそう悪態を吐くと、空中に開いた穴が広がり——純白のドレスを纏った少女が地面へと降り立った。

カツリ、とヒールの音が薄暗い回廊に響き渡る。

「少しは驚きなさいよ」

いつも以上に不機嫌そうなアウローラは、僕を蔑むような眼差しで見詰めてくる。

「怒ってるの?」

「怒ってる……?怒ってるですって!」

くわつと目を見開くアウローラ。

「怒ってるに決まってるでしょ!私、あの坊やが泊まったせいで昨夜も今朝もご飯食べ損なっただから!!」

「お前AIだろ!!」

扉の手前ギリギリに迫っている悪魔の顔を完全に無視して、僕らは醜い言い争いを続ける。

「AIだからって何よお!?私だってお腹くらい空くのよ!!」

『ぎゅるぎゅるぎゅるうううう』

腹の虫まで空腹を訴えるように、タイミング良くアウローラの腹が鳴る。

「精巧につくり過ぎだろ……」

恐らく、僕が想像もつかないような凄い技術が空腹を再現する為だけに使われているのだろうけれど……この機能、果たして必要なのだろうか。

「解ったよ……ほら」

昼食にしようとして今朝つくっておいたサンドウィッチをストレージから取り出し、バスケットから取り出してからアウローラに手渡す。

「……しよぼいわね」

「文句言わないで食えよ」

僕がそう言うのと、アウローラは嫌々といった体で咀嚼し始めた。

「——で、あなたの思惑通り事は進んでいるわけだけれど、気分はどうかしら？」

「食いながら話すなよ……。まあ、そうだね——凄くヤキモキするね、あれは」

逃走する際、あの二人……バッチリ手繋いでたし。

「……アルカナは、果たして正位置と出るか逆位置と出るか——アルカナといえば……」
扉を見やると、悪魔の青眼と目が合った。

大アルカナの「悪魔」に描かれているのは、このバフォメットだといわれている。

「お前が本物の悪魔なら、願いを叶える為に魂を捧げるのも吝かではないのだけれどね」
「……そんなことしたら、ソバカスが悲しむわよ？それに、こいつは願いなんて叶えてくれないし」

「だから勿論、こんな所で死んでやるつもりは無いさ」

そう言つて、僕はアイテムポーチから《コリドールクリスタル回廊結晶》を取り出す。

「……座標固定。これで次回来る時は、ボス部屋前までショートカット出来るね」

「あっさり使うわね」

「こんな物、使つてなんぼでしょ」

感心したようなアウローラの眩きに、僕は肩を竦める。

——さて。

「そろそろ追いかけますか……二人とも心配してるだろうし……」

「じゃ、私は退散するわね」

そう言つて、再び電子の海へと還つていくアウローラ。

「……結局、全部食べちゃったのか」

バスケットの中は見事に空っぽ。

……僕のお昼ご飯だったんだけどなあ。

溜め息を飲み込んで、来た道を引き返す。——でも、一旦立ち止まって、僕は振り返つ

た。

「首洗って待つてなよ？」

閉まっていく扉を睨みながら、僕は独りそう呟いた。

第21話 逆位置のムーン

現実では、たとえ陸上の選手であつてもトップスピードで走り続ければ酸素欠乏症に陥るだろうし、その前にとくに身体の限界を迎えるだろう。

しかし、仮想世界は違う。プレイヤーの精神力が続く限り、何処までも限界速度で走り続けることが出来る。そもそも、俺達が今動かしている身体はゲームのAvatarであつて、生身の肉体じゃない。俺達の本当の身体は今も病院のベッドの上で呼吸を続けているのだろうし、《ナーヴギア》の開発者である茅場がディレクターを務めたこのSAOにおいても、重力や大気の再現までには至っていないのだからそれも当然なのだ。どこか冷静な自分がそんな思考をしながら、息も絶え絶えに無我夢中で走り抜ける。

「はあ……はあ……!!」

安全エリアへと飛び込み、ズザザザ——ツ！と、砂埃を巻き上げて急ブレーキをかけた。スリッパしたせいで、革靴の底で火花が舞い散り、薄暗い回廊を僅かに照らす。

「はあ……焦った」

「ホントにねー。……冷静に考えてみたら、フロアボスがボス部屋から出てくるわけないのね」

俺とアスナは並んで壁際にへたり込むと、顔を見合わせ、どちらからともなく笑い出した。

「あははっ、やー、逃げた逃げた！」

アスナは愉快そうにそう笑ってから、何かに気付いたようにハツとした表情になると、今度はほんのり頬を染めて慌てるように言った。

「ご、ごめんねっ……わたし、その……怖かったから、無意識のうちに」

その場の勢いで繋いでしまった手。だが今、そつと離れていこうとしている。

「あっ——」

自分の口から惜しむような呟きが聞こえたときには、もう勝手に身体が動いていた。

さっきは勢いだったが、今度は自分の意思でその手を掴む。

ここで動かなければ、アスナが消えてしまうような気がして。……そんなわけがないのに。

「っ……キリトくん……っ？」

男のものとは明らかに違う、白く小さな掌。

思った以上に力が入ったのか、アスナは一瞬顔を顰め——だが、それ以上に驚きが大きかったのだろう。次の瞬間には、困惑が浮かんでいた。

「(イ)、(イ)めん……っ！」

俺は謝りながら咄嗟に手を引こうとしたのだが、逆にアスナに掴み返される。

「どうしたの?……顔色、良くないよ?」

気遣わしげな優しい声。

俺は彼女に心配かけまいと、表情筋を無理やり動かして笑みだと解る形をつくる。

「いや、何でも——」

「何でも無いわけ、ないよ」

遮られ、ジツと見詰められる。

意思の強さを感じさせる、吸い込まれそうな大きな瞳。目を逸らそうにも、まるで引力でも有るかのようには、俺の視線を捕らえて離さない。

「わたし、知ってるよ。……キリトくんが、どうしてパーティー組みたがらないのか」

「……あの人、教えたのか?」

顔が強張るのを感じながらも、なんとかそれだけ口にする。

「うん。……昔入っていた小規模ギルドが壊滅して、そのことがトラウマになってるんだよ、つて。——でも、ティンクルさんが教えてくれたのはそれだけ。『それ以上は僕の口からは言えないし、言うつもりもない。詳しく知りたければ本人に直接聞きなよ』つて怒られちゃった。……良いヒトだよ、ティンクルさん」

そう言ってから、アスナは悲しげに笑う。

「やっぱりこのヒトには勝てないなあ……って思った。キリトくんのこと、何でも解ってるって感じで……わたし、君のことあんまり知らないから」

「アスナ……？何言つて——」

言いかけ、気付く。

繋いだ掌が、僅かに震えていることに。

今にも泣き出しそうなのに、それでも必死に笑顔でいようとしていることに。

「でも、だから負けたくないって思った——だって、わたしも」

それでも留めきれず、涙が一筋頬を流れた。

そして、雫が一粒二粒と零れ落ち——潤んだ瞳で何かを決意するように、俺を真っ直ぐに見詰めながら。

「キリトくんのこと、好きだから……！」

桜色の唇から紡がれた衝撃の言葉。余りにも衝撃的過ぎて、頭の中でハウリングを起す。

す、好き……？

もしや友人としてというお決まりの——と考えてから、この状況でそれは有り得ないと即座に否定する。

好きって……そういうことだよな？でも、何で俺を……？

困惑する俺を余所に、アスナは俺の表情をどう受け取ったのか、諦めたような笑みを浮かべる。

「やっぱり駄目かあ……解ってたよ、何と無く。だって、キリトくんはティンクルさんのことが——」

「は、ハア!?!」

俺は思わず大声を上げる。

そ、それは、聞き捨てならない。

「俺がティンクルのことを好きだって……?」

「ち、違うの……?」

不安そうなアスナの声。

だからというわけではないが、キツパリと否定する。

「違う。少なくとも、俺にとつてあのヒトは……そもそも恋愛対象じゃない。というか……そういう風な目で、あのヒトを見られない」

なんとか誤解を解く為に、思っていることを正直にぶちまける。

「ティンクルは恩人なんだ。クリスマスあの日……壊れかけた俺を、命懸けで助けてくれた。その後も、何かと手を焼いてくれてさ。もし姉貴がいたら、あんな感じなのかかって。——……だから、好きとか嫌いとか、そういった感じじゃなくて……ああ〜!

何て言えばいいんだろうな?——兎に角、ティンクルのことを俺は異性としては見れない」

拳を握り締め、俺がそう力説すると、何故か——

「ぷっ……!」

耐えかねたように吹き出すと、アスナは声を上げて笑い始めた。

「笑うって……酷くないか?」

「ご、ごめんね……っ……要するに、キリトくんはティンクルさんが大好きってことね? 姉的な意味で」

どうにか笑いを引っ込めて——途中で笑いそうになりながらも——アスナはそう言うのと、大きく息を吐いた。

「ちよつと安心したかな。……でも、ティンクルさんはどう思っているのか解らないよ? ティンクルさんは、キリトくんのこと、異性として好きなのかもしれないし」

「ああ、それは無い」

断言したからか、アスナは不思議そうに俺を見る。

「前に、ティンクルが誰かにメッセージ送ってるの見たことあるんだけど……その顔が、幸せそうっていうか……凄い乙女って感じでさ。多分、彼氏とメールのやり取りしてるんだと思うぞ?」

「か、彼氏い!？」

俺の情報に、アスナは予想以上の驚きの声を上げる。

「あ、相手は!？」

「そこまでは知らないけど……まあ、俺ではないことだけは確かだな」

恐らく相手の男の名前が出れば、アインクラッドに犇めくその他大勢の男達によって血祭りに上げられるであろうことは言うまでもない。考えてみれば、随分剛毅なものである。まあ、それぐらいじゃないと釣り合わないのかもしれないが。

「ぜ、全然相手が想像出来ない。ティンクルさんを射止めた人……一体どんな人何だろう?」

「さあな」

俺がそう素っ気無く言うのと、アスナはくすりと笑う。

「あつ、今の反応弟っぽい」

「茶化すなよ」

無然としてそう言うってから、俺はアスナを改めて見詰める。

「兎に角そういうわけだから、俺とティンクルがどうこうっていうのは、完全にアスナの勘違いだ」

「ううっ……」

改めて指摘され、頬を紅潮させるアスナ。

それは、勘違いで先走ったことに対してか、それとも告白したことそのものに対してか。

どちらにせよ、俺はちゃんと彼女に誠意を見せる必要があるだろう。

「なあ、アスナ」

告白しなければなるまい。俺が過去に犯した取り返しの付かない過ちを。

アスナがそれを聞いてどう思うのか。今と気持ちが変わるのか。

最低な奴だと思われ軽蔑されようと、好意が嫌悪に変わる事になったとしても、それはアスナの自由だし、俺に何かを言う資格は無いと思う。

でも、もし……受け止めて、受け入れてくれたのなら、その時は――

「聞いてほしいことがあるんだ」

——ちゃんと、俺の気持ちを伝えよう。

†

俺は身体を襲う悪寒と吐き気を堪えながら、俺が《月夜の黒猫団》と出会った経緯から壊滅までを掻い摘んで話して聞かせた。その間、アスナは身動き一つせず、無言を貫いた。

「――それで去年のクリスマス……噂になっていた蘇生アイテム《還魂の聖晶石》を手

入れる為に、単身ニコラスに挑んだ。……今思えば、自暴自棄になっていたんだと思う。クライン含め、あの場にいた全員を斬ろうだなんて……まともな精神状態じゃなかった」

その後現われた《聖竜連合》にクライン達《風林火山》が立ちはだかり、俺を送り出してくれた。

だけど、結局――

「勝てなかった。流石に無謀だった。……そもそも、MMOのボスつてのはソロで挑むようなものじゃないからな。連続技の隙を突かれて、大斧が振り下ろされた。――死んだ、と思ったよ。でも、死ななかった。目を見開くと、ニコラスの凶刃は白い刀に阻まれていた」

「……ティンクルさん？」

「ああ」

俺は話し続けた。事の顛末を。

ティンクルとの一対一の勝負。《部位破壊》による《デイスアーム》によって完敗したこと。彼女からの俺への叱責と励まし。そして、深夜に届いたサチからの音声メッセージ。

全てを語り終え、俺は臉を下ろした。情けないことに、アスナの顔を見ていられな

かったからだ。

判決を待つ被告、或いは処刑を待つ罪人のような気持ちで彼女の言葉を待つが、アスナは中々口を開かない。

数秒、数分と経ち……心理的重圧感にいよいよ耐え兼ねようとしたとき——ふわり、と柔らかなものがコート越しからでも伝わり、思わず目を見開く。

「あ、アスナ……？」

背中へと回された腕。吐息が感じられる程に近い彼女の横顔。

「わたしは、君の前からいなくなったりしないよ。だって、わたしは……君を守る方だもの」

君を守る。奇しくもそれは、俺がサチに最後まで言うことの出来なかった言葉だった。

彼女の肌と言葉の温もりが、俺の身体と心に染み入ってくる。

……アスナは強いな。

俺に、出来るのか？サチを守れなかった俺に、アスナを守ることが。

俺は……俺は……。

後悔と葛藤が渦巻く中で、不意に——

——言ってしまうよ。

耳元に、優しい声音の女性の声が。

—— やらない後悔とやった後悔なら、やらない後悔の方がずっと辛い。

—— キリトは、知っているだろうか？

……そうだな。

同じ過ちは、繰り返さない。

だから……アスナに、自分自身に。そして、姿の見えない声の主に誓おう。

「俺も、君を守るよ……アスナ。——俺も、君が好きだ」

言って、抱き締め返す。

離れてしまわないように、消えてしまわないように。先ほどとは違い、意識して手に力を込める。

「嬉しい……。夢、みたいだよ。両思いに、なれるなんて……」

涙に濡れたアスナの声。

背に回していた腕を、そつと肩へと移動させ、身体の距離を少しだけ離す。

鼻と鼻が触れ合いそうな程に近く、互いの顔がある。

潤んだ瞳。目尻に溜まった雫。だどいうのに、光に溶けてしまいそうな笑顔で。

そして、そつと両目を閉じる。何かを待つように。

だが、今はその期待に応えることは出来ない。何故なら——

「……いるんだろ?」

俺がそう声をかけると、空間が歪み、徐々にその姿が露になる。

先ほどまで何も無かった……いや、何も無いように見えていた場所へ現われたのは、銀色の髪に赤眼の女性だった。

「そのまま唇重ねちやえば良かったのに」

ニヤリ、と人の悪い笑みを浮かべ、そんな戯言をのたまくティンクル。そんな彼女を呆然と見詰めるアスナ。

「な、なっ……いい、何時から!? 一体何時からここに!？」

混乱するアスナに対し、ティンクルは掌にのせた指輪を弄びながら曖昧に微笑む。

「君の前からいなくならない、って辺りからかな。——酷いよねえ……完全に僕が存在忘れてたよね。ね、アスナ?」

「うう……」

「キリトも、ね」

「わ、悪かった。——でも、その指輪……パーティーにも隠蔽効果があるのか?」

基本的に隠蔽スキルは索敵スキルの熟練度が高い相手とパーティーメンバーには効果が無い、はずなのだ。

「この魔法の指輪の名前は《天狗隠しの指輪》っていつてね。元になった伝承から……」

身内、つまりパーティーメンバーに絶大な効果があるんだ。面白いでしょ？」

「面白くないですよ!!」

顔を真っ赤にしたアスナが大声でティンクルに抗議する。

「ま、これでお相手ってことでね。そんなことより、さっきのアスナの顔……あれって完全にキス待——」

「うわ〜ん！ティンクルさんに弄ばれたあ〜!!」

ティンクルが最後まで言い終わる前に、アスナは泣きながら俺に抱き付く。

「あ、アス——げ」

思わず声が漏れる。

視界正面。下層側の入り口から、少数のプレイヤー集団が入ってきた。……それは良い。だがこの状況で、最も会いたくなかった人物に、狙い済ましたかのように遭遇してしまっただから、この反応は許してほしい。

「おお！キリトじゃねえか！暫らく振——」

無精髭を生やした野武士面の男は、まるでメドウーサにでも出会ったかのように固まると、次いで眩暈に襲われたようにフラリと後ずさる。

「……暫らく見ねえ間に、二股かけるような男になっちゃったのかよ……キリトよお」

「何でだよ!?ち、違うぞクライン!!」

慌ててアスナを引き剥がし、距離を取る。

一体、どんな勘違いをしているのか。

傍らのアスナと少し距離を開けて立つティンクルを交互に見て、クラインはそんなことを言う。

当たり前だが、当然誤解だ。

しかし、否定すると今度はティンクルが。

「なら、わたしとのことは遊びだったの……？」

「話をややこしくするようなことを言うな!!」

ティンクルの目に涙まで浮かべた迫真の演技に思わず突っ込む。

すると、クラインはティンクルの前までやって来ると、真剣な表情で口を開いた。

「振られちまったんだな……可哀想に。なら、オレと——」

「ごめん、クライン。それは無理」

一変、笑顔になったティンクルは、クラインの告白?を一刀両断、切って捨てる。

せめて、最後まで言わせてやったらどうだろうか。

「ひ、酷え……あんまりだ」

地面に膝を付き、うな垂れるクライン。

「げ、元気出してくださいませえよ。相手はあの《氷——」

「何か？」

「な、何でもないっす!!」

底冷えのする笑顔を向けられた《風林火山》のギルメンの一人が、ガタガタと身体を振るわせる。

「じよ、冗談はこれくらいにしてだ。——キリト、てんめえ！どういふことだこれは?」

起き上がったクラインは、殺気のこもる声で詰め寄るようにしてそう聞いてきた。

本当に冗談だったのか?という疑問は兎も角、俺は視線を逸らせてどう答えたものか考える。が——

「ああ、それは簡単。こちらのアスナがキリトに告白して、キリトがそれを受け入れたので、晴れて二人は恋人同士♪っていう」

「キリト——!!」

「クライン落ち着け!!」

火に油を注ぐとは正にこの事だろう。

掴み合いになった俺とクラインは互いに《STR》にものをいわせて相手の体勢を崩そうと押し合い、引き合う。その光景が面白かったのか、アスナはもう我慢の限界だと身体を折って笑い始めた。

それで毒気を抜かれたのかクラインの力が抜けたので、俺はスツと距離を取ってか

ら、仕切り直す為にもアスナにクラインを紹介する。

「えーと……アスナ、ボス戦で顔合わせてると思うけど、こいつが——」

「うん、クラインさんだよ。で、後ろが《風林火山》のメンバーの人達でしょ？」

どうやら落ち着いたらしいアスナはそう言って、クラインに微笑みかける。

「こんにちは。今日からこの人とパーティー組んでるので、よろしくお願いします」

「どつどつどうもっすーこ、こちらこそ!!」

軽く頭を下げたアスナに対し、クラインは凄い勢いで最敬礼気味に頭を下げる。

ああ、これは面倒なことになったな——と、思っている。

先ほど彼らがやって来た方向から、新たな一団の訪れを告げる足音と、金属音が辺り

に鳴り響いた。

第22話 彩色のシンフォニア

依頼完遂ミッシェンコンプリート、と内心浮かれていただけに、次なる厄介事の種の登場に小さく肩を落とす。

安全エリアへと現われたのは、今朝見かけた重鎧姿の《軍》の一団だった。

先頭にいたリーダー格と思いき男が「休め」と言った途端、隊列を組んでいた残り十一人は、倒れ込むようにしてその場に座った。床と鎧のぶつかる音が、盛大に鳴り響く。相当に疲れているのである。うことは言うまでもないが、そんな彼らに目もくれず、男はこちらに向かつて歩いて来る。そして、何を勘違いしたのか僕の前で立ち止まると、フルフェイス型の兜を外した。

男の面差しは厳つく、口元は固く引き結ばれ、如何にも厳格な印象を受ける。年齢は、三十代前半だろうか。それに、かなり上背があり、身長があまり高くない僕は、どうしても彼の顔を見上げる形になってしまふ。

やがて、男はこちらを威圧するように見定めると、僕に向かつて口を開いた。

「私は《アインクラッド解放軍》所属、コーバツツ中佐だ」

僕の気持ちを知ってか知らずか、男は平坦な口調でそう名乗った。

「どうやら、この中でも一際目立つ僕を、こちらの集団のリーダーだと思っただらう。だとすれば、随分狭量浅はかな人物だと言わざるを得ない。何故なら僕らのパーティーリーダーはキリトだし、《風林火山》のギルドマスターはクラインなのだから。」

——それにしても……一難去ってまた一難。気の休まる暇が無いな。

「僕はティンクルといいます。——《軍》の中佐殿が、一体何のご用でしょうか？」

笑みを浮かべ、口調はあくまで丁寧。しかし、中佐にアクセントを置いて、たつぷりと皮肉を込めたつもりだったのだが——男は意に介さず……或いは気付かず……に軽く頷くと、横柄な口調で尋ねてきた。

「君らは、もうこの先も攻略しているのか？ もしそうなら、マップデータを提供して貰いたい」

さも当然だ、とばかりの中佐殿の台詞に、思わず溜め息を吐きそうになる。こりや、ソクラテスでも匙を投げそうだ。

何か言つてやろうと口を開きかけたとき、後ろのクラインが声を荒げた。

「な……て……提供しろだ?! 手前エ、マップピングする苦勞が解つて言つてんのか!」

クラインがそう言うのも無理はない。最前線の未踏破エリアは只でさえ危険だし……それに、βテスターが情報提供していた初期とは違い、マップデータは情報屋で高値で取引されているからだ。

しかし、コーバッツは眉根を寄せると、ぐいと顎を突き出しながら大声を上げた。

「我々は、君ら一般プレイヤーの解放の為に戦っている！ 諸君が協力するのは、当然の義務である!!」

義務ときたか。

権利ばかりを主張する輩もどうかと思うが、義務ばかり果たせと言う人間も総じて碌でもない。

「ちよつと、あなたねえ……」

「て、てめえなあ……」

後方から激発寸前の声を出すアスナとクライン。それを制したのは、意外なことにキリトだった。

「待てよ、二人とも。——ティンクル、いいか?」

進み出て、僕の真横に立ったキリトはそう尋ねてきた。

僕よりやや背が低く、恐らく歳も下の少し頼りない少年。だから、何かと世話を焼いてしまうのだけだ。

でも、今は彼に任せよう。だって——

「ふふっ……良いも悪いも、僕らのリーダーは君だ。好きにしなよ」

軽く笑って、一歩下がる。選手交代だ。

「悪いな。——ボス部屋手前までマツピングしてある。どうせ、街に戻ったら公開しようと思っていたデータだ。あんたの好きに使えよ」

そう言いながら、キリトはトレードウィンドウを開いてデータを送信する。

「協力感謝する」

受け取ったらしいコーバッツは、表情一つ変えず、感謝の念などまるで籠っていない。そんな声でそう言っ、くるりと後ろを向いた。

「おいおい、そりゃあ人が好過ぎるぜキリト」

コーバッツの態度が気に食わなかったらしいクラインはそう口にする。

「良いんだよ——」

言いながら、キリトはこちらを振り向く。

……おや？

キリトは、ニヤリと人の悪そうな笑みを浮かべ——

「マツプ提供しなかったせいで死なれても、寝覚めが悪いからな」

態と大きめな声でそう言っ、肩を竦めるキリト。

「貴様……私の部下は、こんな所で死ぬような軟弱者ではない！」

それを聞き咎めたコーバッツは僅かにこちらを振り向き、部下を強調して苛立つように言っ、キリトは軽く首を振る。

「俺は、あんたの部下に対して言ったんじゃないよ、コーバツツさん」

言外に、あんたに言ったんだと言わんばかりの皮肉っぽいその台詞に、コーバツツは青筋を浮かべる。が、流石に相手も大人だ。いきなりキリトに殴りかかったりはしなかったが、代わりに大きく舌打ちをした。

「貴様らさつきと立て!!」

怒気を孕んだその声に押され《軍》の一団はのろのと立ち上がると、再び隊列を組む。そして、兜を被り直したコーバツツは、最早こちらには目もくれず先頭に立ち、進軍を再開した。

……パーティーメンバーに八つ当たりとかしたりしないといいけれど。

「……大丈夫なのかよ、あの連中……」

規則正しい足音が聞こえなくなつた頃、クラインが気遣わし気な声を上げた。

ホント、お人好しだなあ……相変わらず。

「それにしても……キリトくん、どうしたの？ さつきのあれ」

アスナはそう言つて、キリトを訝しげに見詰める。

「ああ、あれか？ ……どっかの誰かさんの真似をしてみたんだよ」

キリトがそう言うと、キリトも含めてこの場にいる全員の視線が僕へと注がれる。

嘘だ、と言つてほしくて、僕は冗談めかして尋ねる。

「え〜？ ……僕って、あんなに意地悪い？」

「「悪〜」」

キリト、アスナ、クラインが殆ど同時にそう首肯すると、残りの《風林火山》メンバーも各々肯定するように頷いている。

……そんな馬鹿な。

あんなに僕って性格悪いの？ 少なくとも、この場にいる全員にそう思われている……？

「勘弁してよお〜……」

頭を抱えそうになるのはなんとか堪えたが、悲痛な声が口から漏れ出るとは止められなかった。

「まあ、そんなことは兎も角だ」

「そんなことって何だー！ 僕は今、真剣に悩んでるんだぞっ！」

「あいつらの誰かがこの先で死んだら寝覚めが悪いのは本当だし……一応、様子だけでも見に行くか？」

スルーされた……。

肩を落とす僕を置き去りに、他の人達はその提案に頷いて賛成する。

「どつちがお人好しなんだか。——で、ティンクルはどうする？」

最初は苦笑を浮かべていたキリトだが、途中から明らかにニヤニヤ笑いと解るそれに変わる。

つまりこの一連の流れは、キリトによる日頃の意趣返しというわけか。
はあく……子供だなあ。

内心でそう溜め息を吐いてから、僕は態とらしく肩を竦めた。

「僕はさつきと同じだよ。……キリトに任せる」

「了解。なら、サツサと行こうぜ」

アイテムストレージを確認し終えたらしいキリトはそう言うのだが、何時に無く真剣な表情のクラインに僕は呼び止められる。

「あー……そのお、アスナさん、それにティンクルも。ええつとですな……アイツの、キリトのこと、宜しく頼みます。口下手で、無愛想で、戦闘マニアなバカタレですが」

「な、何を言つとるんだお前は！」

それを聞きつけたキリトは猛スピードでバックダッシュすると、クラインの悪趣味なバンダナの尻尾を思い切り引っ張った。

だが、クラインは顔を傾けたまま無精髭の生えた顎を擦ると、嬉しそうに口を開く。
「だつてよお……おめえが誰かとまたパーティー組むなんてなあ。たとえ、美人二人の色香に感つたにしても、大した進歩だと思つてよう」

「ま、感ってない!!」

そんなキリトの言い返しに、僕は思わず吹き出した。

どうやら面白がっているのは僕だけではないらしく、クラインとその仲間五人、それにアスナまでもがニヤニヤ笑いを浮かべている。

人を呪わば穴二つ。残念だったね。

「任されました」

アスナは笑顔でそう言い、僕は当然――

「クラインに今更言われるまでもないさ」

そう言つて、軽く微笑む。

「ほ、ほら！ サツサと行くぞ!!」

見るからに頬を赤くしたキリトはそう言つて、ずかずかと歩き出したのだった。

†

運悪くりザードマンの集団に出くわし、僕ら九人は大きくタイムロスをしていた。

走りながら、思考を巡らせる。

あれを使ってボス部屋前まで直行したところで、もし《軍》が既に帰った後ならば、僕一人の大損ということになる。だけど、もし無謀にも彼らが《ザ・グリーンアイズ》に挑んでいるとするならば、一刻の猶予も無い。

そう考えると、決断は早かった。

「皆、止まって！」

《AGI》にものを言わせて先頭をひた走っていた僕はそう声を上げて、全員に制止を促す。

「な、何だよ……!? 急に立ち止まって——」

キリトのその質問には答えずに、僕はアイテムポーチから取り出した結晶を握り締め、叫ぶ。

「コリドー・オープン!!」

途端、手の中の結晶は砕け散り、目の前の空間が歪んで青く揺らめく光の渦が出現した。

「おお……」

耳元へ届くのは、クライン含めた《風林火山》の感嘆にも似た声。

《回廊結晶》じゃないですか……! 一体、何時の間に」

「備えあれば憂いなし、つてね。——兎に角急ごう。嫌な予感がする」

アスナに、次いで皆に向けてそう言ってから、僕は脇目も振らず、回廊へと飛び込んだ。

軽い眩暈のような転移感覚に襲われながらも僕が降り立ったのは、先ほどのボス部屋の巨大扉の前だった。遅れること数秒、次々と同じように転移し、全員がその場に揃う。扉は固く閉ざされているが、微かな金属音を確かに捉えた。

クソツ……!! 一歩遅かった!!

「バカツ……!!」

アスナが悲痛な悲痛な叫び声を上げる。

「キリト、扉を開けるよ! 君は右側を頼む!」

「わ、解った!」

力を込め、扉を押し開けた先に広がっていたのは——阿鼻叫喚の地獄絵図だった。

床一面に突き立つ、青い火柱。その中央で、こちらに背を向け屹立する、金属質に輝く青い巨軀。鼻腔から燃えるような呼気を噴出す、禍々しい黒山羊の頭部。その姿はやはり、パフオメツト悪魔に他ならない。

巨剣を振り回す悪魔。逃げ惑う人影。

最早、統制も何もあつたものではない。

だのに、誰かが叫び声を上げる。

「逃げるなツ!! 我々に敗走は許されないツ!! 構えろオ——ツ!!」

その声は、紛れも無くコーバツツのものだ。

半壊状態の《軍》の人数を確認するが——……十二人。間違いない、ギリギリだけれど間に合った。

しかし、悪魔のHPバーは二割程しか減少しておらず、対して《軍》のプレイヤーは既に二人が危険域だ。

「何をしている！ 早く回復結晶を使え!!」

隣のキリトがそう叫び、ハツとする。

そうだ、何故回復結晶を使わない？まさか、出し惜しみしているわけではあるまい。なら、既に数が尽きたというのか？

「だ、駄目だ……！ クリスタルが……使えない!!」

顔を青ざめさせ、声が裏返りながらもそう叫び返したのは、HPが危険域に達しているプレイヤーの一人だった。

「そ、そんな……」

知らず、掠れた声が口から漏れる。

つまりここは、《結晶無効化空間》だともいうのか。経験が無いわけではないけれど、それはあくまで迷宮区のトラップでの話だ。ボス部屋がこんな仕様なのは、嘗て一度だって無かったことだ。

「な……何とか出来ねえのかよ……!!？」

クラインの顔が歪む。

……出来る出来ないで言えば、出来る。かも。しれない、というのが正直なところだ。僕らが斬り込んで、彼らの退路を確保する。でも、緊急脱出不可能なこの空間で、そんな危険を冒せるのか？

僕一人なら良い。でも、キリトやアスナ、皆を巻き込む選択を、僕一人の独断で下すわけにはいかない。そもそも、僕はリーダーでも何でもないのだから。

だけどそれは、誰かに責任を押し付けたいだけなんじゃないのか……？

僕がそう逡巡しているうちに――

「わたし達が、あなた達の退路を確保します!!」

アスナが、そう叫んだ。

「何を言うか……ッ!! 我々解放軍に撤退の二文字は有り得ない!! 戦え!! 戦うんだ!!」

しかし返ってきたのは、そんな常軌を逸した怒号だった。

「馬鹿言ってるじゃねえぞ!! 死んだら何にもならねえだろうが!!」

クラインの喚き声が、酷く遠くに聞こえる。

……そうだ、死んだら何も残らない。――だから、死なせない。せめて、僕の手の届

く範囲では。

「キリト、僕が時間を稼ぐ。……隠し玉、あるんだろ？」

「なっ……!!？」

キリトの顔に驚愕が映る。だがそれでも、何かを覚悟するように、大きく頷いてくれた。

……頼もしい限りだ。

「イナバ…… 《ラビット・フット》!!」

『プウ!』

僕も、覚悟が決まった。

「——!? て、ティンクルさん!？」

アスナ叫び声を置き去りに、スキルによって《AGI》の限界を超え急加速し、トツプスピードでボス部屋の中へと躍り出る。

……兎に角、奴の注意をこちらに惹き付ける。

「良き種を播く者は人の子なり、畑は世界なり、良き種は天國の子どもなり、毒麥は悪しき者の子どもなり、之を播きし仇は悪魔なり、收穫は世の終なり、刈る者は御使たちなり——」

ポーチから投擲用のナイフを引き抜き、構え——

「子供を、返してやるよッ!!」

力の限り、腕を振り抜く。

青白いライトエフェクトを纏った小型ナイフは曲線を描きながら加速し、急激な増光^{アウトバースト}を起す。

「グリアアッ!!」

ようやくこちらに気付いたららしい悪魔が首を回して振り向くが——もう、遅い。寧ろ、振り向いたのが凶と出た。

「グルアアアアアアアアアアア!!」

悪魔の右目へと着弾した光芒。

悪魔の口から青い炎と共に、確かに苦悶の声が上がる。

《投剣》上位剣技《インピウリテイ・コメット》。

——コメット、つまりは彗星…… “墮ちる星”。

彗星の尾には、青酸^{メタンニトリル}が含まれている。言わずと知れた、致死性の猛毒だ。つまり——

「ガアアアア……」

悪魔の巨軀が傾き……ズドン、という大音量が部屋中に鳴り響き、土煙を上げる。

悪魔は片膝立ちとなり、手に携えていた巨剣を取り落としたのだ。

だが、所詮はMMORPGのスキル……即死効果など無い。だから実際は、十数秒の《行動不能》と付随効果である《取り落とし》に過ぎない。つまり、只の時間稼ぎだ。

「き、貴様……！ 何のつもりだ!?!」

「五月蠅いッ!!」

悪魔を挟んで真正面にいるコーバツツへと向けて、同じように投げナイフを放つ。

ナイフのグリップから伸びるのは、薄緑色の紐状のライトエフェクト。

「ぐっ……!!」

避けようとするコーバツツ。だが、ナイフはホーミングし、コーバツツを取り巻くようにして回転する。

「な、何だこれは!? ……貴様ア!! これを今すぐ外せ!!」

鎧の上から巻き付いたライトエフェクトは、まるで下手人を縛り上げるかのように彼の動きを封じ込める。

「本来はモンスター捕縛用のソードスキルだ。……《麻痺》パラライズも付随しているから、十分は動けないよ」

取り敢えず、ファーストフェーズは滞りなく終了した。

でも、問題はここからだ。

「ボスに使ったスキルの効果はもう直ぐ解ける!! 《軍》ポジションはPOT使用後、縦四人横三人

で隊列を組んで盾を構えろ!! 密集陣形だ!! ファランクス 兎に角タゲを取り続けろ!!」

喉が裂けんばかりに、立て続けに指示を飛ばす。

「む、無茶だ!! お、俺達は、もう……」

「無茶じゃない!!」

言つてから、不敵な笑みを浮かべてみせる。

「だって、あなた達はここまで来ることの出来る、確かな実力があるんだから。——あなた達は《軍》のギルメンである前に、一人のゲーマーだろう。……意地を見せろ!!」

俯く《軍》のプレイヤー達。

これで駄目なら——

そう諦めかけたとき、全員が、身の丈程もある盾を前へと構える。

先程まで絶望に打ち拉がれていた瞳に、確かに闘志を宿して。

「女にそこまで言われて黙ってられる程、俺達は腐ってない!! 良いぜ、やってやるよ!!」

《壁役》タンカー 舐めんなあツ!!」

ふう………良し。

「準備出来たぜ」

そう言つて、隣へと駆け寄ってきたのはキリトだ。

その手には………黒と白、二振りの剣が握られている。

「てめえキリトお！ 後でちゃんと説明してもらおうからな!!」

そう叫んだのは、後ろに仲間を引き連れたクラインだ。

「ティンクルさん、わたし達への指示は!?!」

細剣を抜き放ったアスナにそう問われ、改めて皆の顔を見る。

実際、彼らがどう思っているのかは解らない。でも、少なくとも、僕へ非難の眼差しを向ける者は見当たらなかった。

……全く、お人好しなんだから。

「僕らの役目は《攻撃役》だ！ キリトと僕で右舷、アスナとクラインで左舷、残りで後

部!! 皆頼むよ!!」

「解った!」

「了解!」

「よっしゃあ!! 左側は任せろ!!」

「!!」
「残りつて何だああああ!!」
「!!」
「!!」

口々にそう叫ぶ中、遂に戒めを解かれた悪魔が、地響きを起こして立ち上がる。

「グルアアアアア、アアアアツ!!」

隻眼となった悪魔は、憎悪の咆哮を上げた。

空気が震え、足が竦みそうになるのをなんとか堪える。

悪魔の右腕が僅かに震える。恐らくは、攻撃の予備動作。

「来るよ！ タンカーは防御体勢！ アタッカーは待機！」

振り被られた巨剣。

刀身に光芒が宿り、爆ぜる。

「グルアアアアッ!!」

薙ぎ払うようにして放たれた斬撃。

一度、二度——六度。

高威力の両手用大剣の連撃は、しかし——

「らあッ!!」

「グルルルウウウ……!!」

フアランクスが功を奏し、斬撃は《軍》の大盾によって全て阻まれ、遂には弾き返される。

技後硬直を強いられる悪魔。なんとか身体を動かそうともがいているが、その巨体は僅かに痙攣するばかりだ。

……残念だったね。このセカイのシステム様は、無情にも平等なんだよ。

「チャンス！ アタッカーは全力攻撃一本!! タンカーはこの隙にPOTローテ!!」

「うおっしやあ!!」

待つてましたとばかりに、クラインが雄叫びを上げる。

「オラアツ!!」

「イヤアアア!!」

裂ぱくの気合と共に放たれる斬撃と突き。

アスナとクラインに負けじと、《風林火山》の残りの五人も次々と連撃を悪魔の巨軀へと叩き込む。

赤、白、黄、緑……空中に描き出される、色取り取りの軌跡——ソードアート。

だが——

「グオオオオオオ!!」

技後硬直から解き放たれた悪魔は、憤怒の形相でこちらを見定めると、怒声と共に僕へと巨剣を振り下ろす。

しかし、それも想定内だ。

さつきの投剣スキルによって、悪魔の僕への憎悪値ヘイトは、この場にいる誰に対するものよりも高くなっているはずだからだ。

迫り来る巨剣。迎撃する為、鞘に収めたままの《月華》の柄へと手を伸ばす。

「セアアツ!!」

抜刀とほぼ同時、気合一閃。

居合の形で放たれた、光すら置き去りにした一撃。

カタナスキル《辻風》。

巨剣と鬩ぎ合い、舞い散る火花。混じることなく、反発し合う赤と緑の光芒。——だが、それはほんの一瞬のことだ。

跳ね上がる巨剣。大音量と共に、僕と悪魔は両者大きくノックバックし、間合いができる。

「スイッチ!!」

そのタイミングを逃さず、僕の前へと飛び込んだのはキリトだ。

右の黒剣《エリユシデータ》で中斷に斬り払い、間を空けず左の白剣——里香が《月華》と同じ《クリスタライト・インゴット》を鍛えてつくった渾身の一振り——
《^{ダークリバルサー}暗闇を払うもの》を突き入れる。

右、左、右……——目紛しい速度で振るわれる二刀。甲高い効果音が立て続けに唸り
を上げ、星屑のように飛び散る白光が幻想的に周囲を照らす。

「うおおおおあああ!!」

絶叫し、更に速度を上げるキリト。

最早、システムアシストだけでは説明出来ない、異常な加速だ。

今の彼には……《Incarnate》、意思の具現化“などというチカラが働いて

いるのだろうか。

——結局あれ以来、僕の周りにあの靄が現われることは無かった。掴みかけた藁は、あっさりとして僕の手をすり抜けたのだ。

結局、僕に出来るのは……地道に登り続けることだけなのか？ 頂への、途方もない道のりを。

でも、少なくとも、今だけは——

「ティンクル決めろ!!」

皆で、上へと登る為に。

「スイツチ!!」

叫び、前屈みで悪魔へと突っ込む。

「グリアアアアツ!!」

相手のHPは残り一割弱。

最期の足掻きとばかりに放たれる、大上段の一撃。それを、天高く舞い上がることで難なく躲す。

ジャンプ力の強化——これが、《ラビット・フード》の真髄。走力の強化はあくまでも過程に過ぎないのだ。

宙で右手を大きく引く。その予備動作によって、刀身に黄金色の光芒が燦然と輝く。

頭部への光速の突き七回。胴体への斜め斬り払いを二回。そして——
「セアアアアアアアアアアツ!!」

空中での回転斬り。

遠心力によって速度も威力も強化された、ラストアタック最後の一撃。

カタナスキル最高威力の十連撃技《明けの明星》。

「ゴアアアアアアアアアアアア!!」

部屋中に轟く絶叫。

天を振り仰いだ巨大な悪魔はそのまま硬直し——次の瞬間、膨大な青い欠片となつて爆散した。部屋中に、キラキラと光の粒子が降り注ぐ。

「か……勝った」

口から思わず漏れる安堵の声。

その声は震えていて、まるで男のものとは思えない。

そして情けないことに膝が笑い、僕はその場にへたり込んでしまった。

「よ……よっしやああああ!!」

「うおおおおおおお!!」

喜び合う喧騒が、不思議と心地良い。

「You got the Last Attack!!」

頭上で紫色のシステムメッセージが、音も無く僕らの勝利を讃えていた。

第23話 勝利者へのセレナーデ

フロアボス戦。

デスゲームも既に開始から二年が経とうとしている現在では、偵察隊或いは先遣隊——を事前に幾度にも亘ってボス部屋へと送り、ボスの使うソードスキルや固有スキル、武器や行動……時には仕草一つまで入念に調べ上げ、それからやっと各有力ギルドの精鋭とソロプレイヤー数名がレイドパーティーを組んでボスと対決することになる。いや、対決という表現は生温い。真正正銘、生死を賭けた死闘だ。——兎も角、レイドパーティーというのはレイドリーダーを元に八パーティーで更にパーティーを組む、みたいな大規模パーティーのことで……通常パーティーは最大六人だから、レイドパーティーの上限は四十八人ということになる。

そこまでボス戦のセオリーを思い出してから、改めて松明に朧気に照らされた薄暗い室内を見渡す。

《軍》が十二名——コーバッツの戒めは既に解けてるけど、流石にバツが悪いのか黙っている——《風林火山》がクライン含め六名、そして僕らのパーティーが三名で……合計二十一名。実質、レイド上限の半分にも満たない、たったの二十名で初見のフロアボ

スに僕らは勝利したのだ。

今更ながら、嫌な汗が頬を伝う。ホント、よく生きてたものだ。

そう思っているのは、僕だけではないだろう。

床の上に倒れるようにして座っている面々。HPというデジタル数字は満タンを示しているも、精神の疲労は言うまでもない。もしここにアウローラがいれば……「あはっ皆メンタル最悪ねっ」とか言うに違いない。それはもう、良い笑顔で。

……まあ、兎にも角にも——誰も死ななくて良かったよ。ホントにさ。

僕は今回の一番の功労者に労いの言葉をかける為、直ぐ傍で大の字で寝転んでいる黒ずくめを見やる。だが、どうやらキリトも僕のことを見ていたらしく、視線と視線がぶつかる。

「何だよ？ そんなにまじまじと見詰めて」

口調がぞんざいになってしまったのは、大多数の人間がそうであるように、他人に顔をジロジロ見られるのが嫌いだからだ。もつと言えば、人並み以上に嫌いだからだ。

でも、キリトは今更僕の顔になど興味は無いだろう。なにせ、僕みたいな紛い物と違って、真正正銘の美少女が本日目出度く彼女になったんだからさ。

そう思つて返答を待っていると、キリトはおずおずと口を開いた。

「あんた……さっきの《武装解除》^{デイズアーム}、狙つてやったのか？」

何だ、そんなことか。

変に勿体付けるから、遂に性別バレか？　と思つたら——拍子抜けだ。

「勿論そうだよ。《武器落下》《武器破壊》《武器強奪》は僕の十八番だからね。……と言つても、《武器強奪》だけは大抵は皆クイツクチェンジ取つてるから使う機会なんて無いけれど」

でも、やろうと思えば可能だ。

例えば今朝クラダイールに対してやつたみたいに、相手の武器を跳ね上げ……ジャンプでもしてそれをキャッチすれば《武器強奪》完了だ。

まあ、でも……《武器強奪》するメリットつてあまり無いんだよなあ。相手の武器を文字通り奪えるのは確かにメリットだけど、そんなこと態々する程装備にもお金にも困つてない。

もしやることがあるとすれば、相手の強力な武装を奪い、カウンターを狙う——なんて場面だろうか。相手の武器を奪つたところで、それが刀か投剣じゃないとソードスキルは使えないけれど。

「前々から思つてたけど、そういうシステム外スキルつてどうやって身に付けたんだ？

……あんたのことだから、対人戦で鍛えたわけじゃないんだろ？　もしそれが出来た

ら、あんただつてラフコ——悪い、何でも無い」

「良いよ、僕は気にしてない」

そうは言いながらも、上半身を起こしたキリトの目をまともに見ていられず、僕は目を逸らした。

「ラフコフ討伐戦」。最悪の殺人集団レットギルト《笑う棺桶》を捕縛する目的で始まった戦いは、両陣営に裏切り者が出たことよって血で血を洗う殺し合いになった。……だけど、それは後から人伝に聞いた話で、僕自身はそもそも討伐戦に始めから関与していない。

何故か。それは、僕がヒトを傷付けられないから。……間違つてはいけないのは、僕を縛るのは傷付けたくないという感情ではなく、傷付けられないという強迫観念だということだ。

——僕はあのクリスマスの日、思い知らされた。

僕はその時まで、僕が他人に暴力を振るわないのは、強固な自制心によつて無意識に身体に制止をかけているからなのだ、そう思っていた。

でも、違った。僕が無意識に守っていたのは他人の身などではなく、僕自身のことだったのだ。

忘れもしない、去年のクリスマス。キリトの腕を叩き斬った僕は、激しい動悸に襲われた。どうしようもなく吐き気が込み上げ……しかし、仮想の身体では吐くことも出来ず、身体が小刻みに震え、遂には立つていられなくなった。それでも僕は、キリトの元

へなんとか身体を引き摺った。彼が、気絶してしまったからだ。

どうにかしてキリトの元へ辿り着いた僕は、力を振り絞って自分の膝の上に彼の頭を乗せた。微かな寝息が聞こえたときは、本当に安堵した。

それなのに、幾ら待ってもキリトは目覚めない。僕の身体の震えは、いつしか恐怖から来るそれへと取って代わっていた。

だから、彼が急に目を開けて、「……あんた、何やってるんだ？」って言ったときは心底驚いたし、涙が零れそうになった。それを誤魔化す為に苦笑を浮かべて、咄嗟に「膝枕……かな？」なんて言ったんだ。

——僕は、他人より心が弱いのかも知れない。メンタルパラメーターだって相変わらず酷い有様だし、今回だって安心して腰を抜かした。……情けなき過ぎて、笑えてくるよ。

でも、そんな僕でも出来る事はある。いや、現状僕にしか出来ないことがある。

最悪の事態に備えてキリトには……意図せずアスナにも、ヒントを残した。

アウローラにはああ言ったけれど、二人にあんなことを言った本当の理由は、結局は自分が死んだときには、という後ろ向きな理由からだ。二人を利用してようなんて、これっぽちも思ったことは無い。しかし、彼女は僕の本心に気付いていたと思う。流石、カタチだけでも《メンタルヘルス・カウンセリングプログラム》だ。

「ただ、今は死んでやるつもりなんて微塵も無い。だって、僕には『約束』があるから。」

「——クライン」

少し離れた位置に座るクラインに声をかける。

「……お、おう。どうしたよ?」

僅かの間の後、気まずそうな声。

一人で沈んでいても仕方がない。取り敢えず、僕に『今』出来ることをしよう。

「何か、大事なことを忘れてるんじゃない?」

「大事なこと?」

僕とはキリトを挟んで反対側に座っているアスナがこちらに顔を覗かせる。

「決まってるでしょ。キリトのエクストラスキルについてだよ」

「「「「「ああ!!」」」」」」

キリト以外の七人が同時に声を上げる。どうやら、今の今まで完全に忘れていたらしい。

「て、ティンクル!!」

恨みがましげな声を上げるキリト。

折角勝ったのに、この暗い雰囲気は何だ。半分は僕の責任なのは自覚しているけれ

ど、もう半分はキリトの責任だ。彼には悪いけれど、この雰囲気を払拭する為に生け贄になつてもらおう。

「ま、精々皆から質問攻めになつてなよ」

そう言い残して、僕は立ち上がる。

「お、おい！ 何処行くんだよ……？」

「何処にも。《軍》に話があるだけだよ」

クラインの声に背中越しに答え、僕は部屋の反対側に纏まつて座っている《軍》の所へと歩いていく。

僕に気付いたららしいコーバッツは、無言で僕を見上げた。兜を外したその面差しは、相変わらず厳ついままだ。

「コーバッツさん、先程はすみませんでした。ご無礼をお許し下さい」

「……謝るのは私の方だ。——上からのプレッシャーもあつて、頭に血が上っていた」

僕は息を呑んだ。何故つて、あのコーバッツが、僕に頭を下げたからだ。

「……礼を言わせてほしい。君達のお陰で、我々は一人も死なずにすんだ。ありがとう、感謝する」

そう感謝の言葉を吐いたコーバッツの顔は先程マップデータを提供したときと同じように、表情一つ変わっていないが……良く良く見れば、僅かに口角が上がっているよ

うにも見える。

もしかして、これで笑ってるの!?

今日一番の驚きを禁じえない僕の心中を知ってか知らずか、コーバッツは立ち上がった。

「我々は、そろそろ本部へ戻らせてもらおう。報告もしないといけないからな」

「ギルドマスターにですか?」

「いや、サブマスターにだ。……何を言われるか想像すると、足取りは重くなるがね」

フツ、と鼻を鳴らすコーバッツ。

間違いない、笑ってるんだ、これで。

感情が顔に出ない、或いは出にくいという人間は世の中にごまんといえるし、総じて誤解されやすい。

まあ、さっきのマップデータは当然のことだと思ってたんだろうけど、今回の感謝は言葉通り受け取るべきだろう。

「さあ早く立て貴様ら! 街へ帰るのに、クリスタルなど使わせないぞ!」

そう言われ、渋々でも立ち上がる面々。案外、コーバッツは彼らに慕われているのかもしれない。

「ちよっと待って」

部下を引き連れ早々に退去しようとするコーバツツの背に声をかける。

中々振り向かないので不安になるが、それでも待っているとようやく振り返った。その顔は、少しバツツが悪そうだ。

「ふう……何だ？」

溜め息混じりのその声には答えず、僕はトレードウインドウを開いて、次々とアイテムを放り込んでいく。

「……どういふつもりだ？」

憐れみは受け取らないぞ、と暗に言われているのは気のせいではないだろう。

どうやら、僕はこの短時間でコーバツツの表情の変化を理解したらしい。

「僕らはレイドを組んでたわけじゃない。一緒に戦ったのに、あなた達はアイテムはおろか経験値だって一ドットも手に入られていないでしょ？」

ウインドウに羅列されているアイテムの数々とコルは、L Aボーナスも含めて僕が今回手にしたモノだった。

「言つとくけど、全部あなたにあげるわけじゃないからね。《軍》の方針は、皆で分かち合う」でしょ？　ちゃんと、十二人で山分けしてね」

そう言つて片目を瞑つてみせるが、コーバツツは渋い顔だ。

え？　駄目？　ウインクなんか囁ましといて？

うわー！ ……恥ずかしい、穴があったら入りたい。

頭を床に叩きつけたくなる衝動を懸命に堪えていると、コーバツツは眉間に皺を寄せた。

「君の気持ちは有り難い。だが、それは君の取り分だろう。……こんな物を受け取つても、我々には返せるモノが無い」

顔の印象そのままに、随分と厳格な性格らしい。解りきつていたことではあるが。

ま、これでも弁は立つ方だ。説得、というのも変な話だけど、折角だからやってみよう。

「なら、僕がピンチなときに駆けつけてください。それも、物語の騎士ナイトの如くね」

満面の笑みと共にそう言ってやる。

返せないなら身体で払え。ドラマでよく聞くこの台詞をアレンジしただけなのだが

——どうやら、効果はあつたようだ。

「たしか、君の通り名は《氷姫》だったな。……解つた、肝に銘じておこう」

そう言って苦笑し、ウインドウのOKボタンを押すコーバツツ。

ここは本来喜ぶべき場面シーンなのだろうけど、僕は戦慄していた。

《氷姫》って、最下層の《はじまりの街》にまで広まつてるの!? どんだけだよ!!

「では、これらは有り難く戦力強化の為に使わせてもらう。……君が攻略組にいる限り、

再び相見える日も、そう遠くはないだろう。そのとき、君に借りを返すことが出来るよう努力しよう」

「危機的状況ピンチなんて御免なだけどね」

自分で言っておいて、僕は肩を竦める。

「フツ……：違いない。——それでは、今度こそ我々は行かせてもらおう」

言った通り今度こそ、コーバツツは部下を引き連れ巨大扉を開けてボス部屋を出て行った。その足取りは、安全エリアを出て行った先程と比べて、明らかに軽やかだった。

僕は彼らのそんな後ろ姿を見送ってから、キリト達のもとへと戻る。

「おう、ティンクル！ あいつらと何話してたんだ？」

「ちよつとね。——それで？ クライン。話は済んだの？」

そう尋ねると、青い顔をしたキリトがこちらをジロリと見る。

「そんな顔しないでよ。……ほら、僕らもそろそろ移動しよう」

「何処へだよ？」

不貞腐れたような声を出すキリト。そんな彼に、僕は微笑みかける。

「決まってるだろ？ 七十五層の転移門をアクティベートしに行くんだよ。英雄ヒーローの凱旋だ。張り切って行こう！」

「うっ」

息を詰まらせ、意気消沈するキリト。

そんなに好奇の目を向けられるのが嫌か。僕なんてしょっちゅうだぞ。

「はあく……解った、解った」

わざとらしく大袈裟に溜め息を吐いてみせる。そして、皆の顔をぐるりと見渡す。

「それが終わったら、今夜は祝勝会だ！ 全部僕の奢りで！」

そう言った瞬間、うおおお!! と歓声上がる。主に《風林火山》の。

「て、手作りですか!?!」

目を見開いて大声で訊いてくるクライン。

「いやいやいや! 目が血走ってるんだけど!?!」

「ほ、ホームパーティーってこと……?」

恐る恐る尋ねると、ブンブン音が出そうな勢いで頷くクライン。

だから怖いって!

「あ、良いんじゃないですか? わたしも手伝いますよ」

快く手伝いを申し出てくれるアスナ。

でも、アスナ……それって――

「うおっしやああああああああああ!!」

ほらー。

さつきとは比べるまでもない程大きな歓声を上げる《風林火山》。……まあ、叫んでるのは主にクラインだが。

そんな大声を上げるクラインの足をキリトが思い切り踏み付ける。

「痛つてえええ——つて、痛くねえんだつたな。つーかキリトよ。痛くないにしたつて人の足踏むつーのは」

「うるせえんだよクライン。お前喜び過ぎだ。……そういうことならボチボチ行こうぜ。昼飯食べてないことだしな」

すまし顔でそんなことを言うキリトだが。

「おやおや〜?」

「な、何だよ……?」

ぐい、と僕が顔を近づけるとキリトは顔を背けたが——

「その顔はあれだ。彼女の手料理を他の男に食べられたくない、つてあれだ。うわー僕、もしかしてお邪魔しちやつたかな?」

「そうだ、思い出した!! キリトおおお!!」

「だから何であんたはそうやって一々煽るんだ!」

追い追われ、二人はそのまま扉を開けてその向こうへ消えていった。

「もう! ティンクルさん!!」

「あははっ……ごめん、ごめん」

からかうことくらい許してよ。だって僕は彼に、妹みたいに思ってた。『幼馴染』を取られちゃったんだからさ。

「じゃ、僕らも行こっか」

言つて、扉を押し開ける。

こうして扉を開け続ければ、いつかは頂まで辿り着くだろう。

でも、やっぱり僕は——こんなクソゲー、真面目に最後まで付き合つてやるつもりは無いぞ、茅場。

第24話 魔王と姫の邂逅

身体を覆う浮遊感。セピア色の景色。

恐らく、これは夢だ。そう理解しながら、僕は周囲を見回す。

そこは、民家のリビングだった。

美しい女性と小さな可愛らしい少女。母と娘だろうか。

女性がソファーに座って、少女を膝の上に乗せている。

女性の手には絵本。少女は続きをせがむように、女性の服の袖を引っ張っている。女

性はそんな少女の姿に微笑んで、絵本のページを捲った。

微笑ましい光景。余程歪んだ感性でない限り、誰の目にもそう映るだろう。

だが――

突然、大きな音をたててリビングの扉が開く。

入ってきたのは……男。サラリーマンのようにスーツを着込んでいる。しかし、

何故かその顔は、写真の上から墨でも塗られたかのように真っ黒で、僕には人相も年齢も解らない。

悲鳴を上げる女性。女性の悲鳴に触発されて、泣き出す少女。

つまり、男は女性の夫でも、少女の父親でもない。招かれざる客だということだ。怯える女性。しかし、決断は早かった。

女性は少女を庇うように抱きかかえ、走り出した。

だが、玄関への通路は男に塞がれている。恐らく、裏口などはそもそも無いのだろう。だから、女性は階段を駆け上がり二階へ。

男は走ったりはせず、ゆつくりと女性の後を追う。その落ち着き払った言動が、非常に恐ろしい。

一瞬、視界が暗転。

再び、視界にセピア色が広がる。

そこは子供部屋だった。

だが、そうと解つたのは小さなベッドのお陰で、玩具や人形など、そういった遊び道具は綺麗に片付けられているのか見当たらない。

少女は泣き続けている。

女性はそんな少女を抱き締めながら、祈るように携帯電話を耳に当てている。恐らく、警察に助けを求めているのだろう。恐らくというのは、何故か会話の内容が頭に入ってこないからだ。

しかし――

鍵をかけていたはずの扉は、男に蹴破られ、簡単に男の進入を許す。

女性は悲鳴を上げ、携帯電話を取り落とした。

ゴトン、という音が、やけに耳に響く。

そして、何故今まで気付かなかったのか。男の手には、大振りのナイフ。切っ先が、セピア色のセカイで鈍く光る。

最早、母娘おやこに逃げ道は無かった。

何事かを喚き立て、男が腕を大きく引く。

女性は反射的に、或いは本能的に……少女の身を守るように、男に背を向け、少女に覆い被さった。

『止めろ!!』

そう叫んだはずなのに、僕の叫びは声にならない。そして、当然のように身体も動かない。

男は女性の背中にナイフを突き刺し、躊躇うことも無く引き抜いた。

服に染み込む鮮血。その色だけが、このセピア色のセカイで、赤々と僕の臉に焼き付いた。

声にならない悲鳴を上げ、僕はベッドから跳ね起きた。

「はあ……はあ……」

荒い呼吸。中途半端に再現された嫌な汗が、前髪を額に貼り付けていた。肩で息をしながら、僕は虚空を見詰める。

——夢を見ていた気がする。内容は思い出せないけれど、間違い無く悪夢の類いの夢を。

「あら？　起きてたの？」

急に声をかけられ、思わずびくりと肩を震わせ……それでも、機械仕掛けのようにゆっくりと顔を扉の方へと向ける。

部屋へと入り、扉の前に佇むのは——白いネグリジエ姿のアウローラだった。その左の手には、水差しとコップが握られている。

「アウ……ローラ……？」

「あなた、魔されていたから。……これでも飲みなさい。落ち着くから」

アウローラはベッドへと歩み寄りながら、示すように水差しを僅かに持ち上げた。そして、ベッドに腰掛けると、水差しからコップに水を注いで手渡してくれる。

「……ありがとう」

素直に礼を言つて、コップを受け取——ろうとしたのだけれど、手元が狂い、コップが手の中をすり抜ける。

「あつ……」

「ちよつと、ちゃんと持ちなさいよ。危ないわねえ……」

そう言いながら、取り落としそうになったコップごと、僕の掌を包んで支えてくれるアウローラ。

「は、あ、めん」

謝り、コップに口を付け、少しずつ口に含んで飲み込み喉を潤す。冷たい水が、悪夢の残滓も一緒に洗い流してくれるようだ。

そんな僕の様子を眺めながら、アウローラはやれやれと溜め息を吐く。

「はあく……もうちよつとしつかりしなさいよ。ひ・か・る・ちゃん」

「ちゃん付けで呼ぶの止めろー!」

幼少の頃を思い出すんで、その呼び方はホントに止めてほしい。

……そういえば昔、父さんに連れられて結城家に遊びに行つてたっけな。

たしかあの家、テレビゲームとか一切無くて……浩兄いと姉さん、僕と明日奈の四人で延々とババ抜きをやつてた記憶がある。何故ババ抜きかといえば、明日奈がそれしか知らなかったから。

「ふふっ」

「……何よ? 急に笑い出して」

「いや……」

彰三おじさん、それに京子おばさんも大丈夫だろうか？

何故、碌にゲームをやったことが無いであろう明日奈が、よりもよつてSAOに手を出したのかは知らないけれど……二人とも、凄く心配しているはずだ。

もし連絡する手段があれば、「娘さん、最近彼氏もできて元気でやってますよ」なんて言つて、安心させることも出来るのだろうけれど。いや、逆効果か。

その辺の話も明日奈にしてみたいけれど……今の彼女は結城明日奈ではなく、KOBの副団長《閃光》アスナなのだ。

それに、明日奈は僕のことを覚えてないみたいだし——実は僕は君の幼馴染で、しかも男なんだ！　なんてカミングアウト、今更出来るはずもない。そして僕自身、アスナが明日奈だつて確信を持てたのはつい最近のことなのだ。

僕と明日奈が最後に会ったのは、僕が小学校低学年の頃。当時の面影はあつても、お互い雰囲気が変わり過ぎていて。明日奈は凄く美人になつたし、僕は……僕は……この話は、この辺にしておこう。

思考を打ち切り、伸びをしながらベッドから降りる。

「もう、大丈夫なの？」

「うん、大丈夫。ありがとう、心配してくれて」

久しぶりに自然と笑み溢れる。

「し、心配なんてしてないわよ！ 私はただ早く朝食を食べたかっただけ！ 二日連続で夕食食べ損なつたんだから！」

余りも解りやすい照れ隠しに、余計口元が綻ぶ。

「解つたよ。ちよつと早いけど朝食にしよう」

「私、アレが食べてみたいわ。ほら、昨夜髭面のバンドナが食べてた……ローストビーフ？ つていうの」

「朝からローストビーフを……所望ですか……」

重い、朝に食べるには重過ぎる。

しかし、現実と違つてつくる手間はどの料理もそう変わらないし——寧ろ、レシピをつくるのに現実以上の時間と労力が掛かるのだが——まあ、食べたいって言うなら、お礼代わりにつくるのも吝かではない。

「よし。じゃあ着替えるから部屋の外で待っててよ」

「別にこのまま着替えても良いわよ？」

「……いや、出てけよ」

「あら？ AIに見られて恥ずかしいのかしら」

にやにやと嫌な笑いを浮かべて僕を見上げるアウローラ。

そう、こいつはAIだ。そんなことは解っている。でも——もう二年近くもこうして一緒に過ごしているせいかな、たまに彼女は僕らプレイヤーと同じように生身の人間が動かししているんじゃないか、という錯覚に陥る。

もし彼女のようなAIが、生身の肉体を手に入れ現実世界を闊歩し始めたら……僕らは果たして、彼女達が“ヒト”ではないと、断言出来るのだろうか。

「早く出て行かないと、朝食抜きにするよ?」

「この人で無し!」

いつもよりも些か騒がしい朝。

また、新しい一日が始まる。

†

「引越してやる……どっかすげえ田舎フロアの、絶対見つからないような村に」

不機嫌そうに茶を啜りながら、ブツブツ呟くキリト。そんな姿を見て、思わず苦笑が漏れる。

朝食を食べ終えた僕は、《アルゲード》のエギルの雑貨屋を訪れていた。

七十四層攻略から一夜明け、アインクラッド中が新たなるユニークスキル使いの話題で持ち切りになっていた。そんな喧騒の渦中のキリトだが、宿にしているアパートに早朝から剣士や情報屋が押しかけたらしく、こうして雑貨屋の二階に非難してきたらし

い。

「まあ、そう言うな。一度くらい有名人になってみるのもいいさ。どうだ、いつそ講演会でもやってみちや。会場とチケットの手筈はオレが——」

「するか!」

にやにやと笑顔を浮かべたエギルの冗談に、キリトはマグカップを全力で投げつけて答える。

「おっと」

それを中間にいた僕が、殆ど反射的にキャッチした。

「まあ、僕にも責任の一旦はあるしね。だからこうして、君に会いに来ているわけだけども」

キリトに向かって、カップを軽く投げ返す。が、受け取ったキリトは、何故か溜め息を漏らした。

「……あんたの動体視力はどうなってるんだよ。——そういえば、あんたは大丈夫だったのか? 俺よりあんたの方がよっぽど有名人だろ」

「別に……僕の家には誰も来てなかったけど」

そりゃ僕も昨日のフロアボス戦には参加したけれど、キリトが追いかけていないのは《二刀流》のせいであって、フロアボスを倒したからではないのだから、僕が追い掛

け回される道理は無い。

「まあ、相手が相手だからな……」

嘆息するように呟くエギル。

「何か？ エギル」

何か言いたげなので、笑顔で先を促す。

「オレが言いたげなことは、その笑顔に集約されてると思うぞ!!」

冷や汗を浮かべ、エギルは逃げるようにアイテムの鑑定作業に戻っていった。

「……全く。——それでキリト、アスナは来てないみたいだけれど、大丈夫なの？」

祝勝会の後、アスナはギルドに休暇届けを出す為に、KOBの本部がある《グランザム》に向かった。理由はキリトとパーティーを組む為だけ……ギルドと少し距離を置きたいのかもしれない。まあ、あんなストーリーカー紛いの護衛がいるのだ。そう思っても仕方が無い。

今までの彼女のギルドへの貢献度を鑑みれば、休暇くらい問題無く取れると思うけれど……心配だ。だって、あそこのギルドマスターは……。

——と、噂をすれば影。

階段を駆け上がってくる足音が聞こえたかと思うと、扉が勢い良く開いた。

「遅かったな、アス——」

言い切らず、言葉を呑み込むキリト。僕も目を見張った。

「どうしよう……キリトくん、ティンクルさん……」

顔を蒼白にして、今にも泣き出しそうなアスナ。

「落ち着いて。何があつたの？」

動揺している相手に飲まれては駄目だ。冷静に、寧ろこちらが相手を包み込むくらいじゃないと。

「アスナ、まずはこれでも飲めよ。味はあんまし良くないけどな」

そう言つて、キリトがカップに先程自分が飲んでいたお茶を注いでアスナに手渡す。

「ありがとう、キリトくん……」

ふう……ふう……と、息を吐いてお茶を冷ますアスナ。立ち上る湯気がゆらゆら揺れる。

息を吐いたことで少しは落ち着いたのか、お茶を一口啜り――

「ホントだ、あんまり美味しくないね」

そう言つて、なんとか笑みを浮かべた。

†

エギルの雑貨屋を出た僕は、第五十五層主街区《グランザム》を訪れていた。

街路樹など草木が殆ど無い、息が詰まりそうな風景。更に、大抵の街が石造りなのに

対して、この街は道から何から殆どの物が黒光りする鋼鉄出来ている。これが、《鉄の都》などと言われる所以なのだが、《花の園》フラワーガーデンに住む僕にとつては、かなり異様な街並みだった。

僕らがここへ訪れた理由は一つ。K o B …… 《血盟騎士団》本部へと赴き、ヒースクリフに直談判する為だ。

昨夜ギルド本部へと戻ったアスナは、ヒースクリフにフロアボス戦の顛末やその他諸々を報告し、ギルドの活動を休止したいという旨を話したらしい。しかし、今朝のギルドの定例会で承認されると思っていたそれは、ヒースクリフによつて待ったをかけられた。曰く、アスナが欲しいなら、自分の力で奪つてみせる……ということらしい。

……茅場がキリトと立会いを望む理由は何だ……？ それだけじゃない。《伝説の男》などと呼ばれ、トップギルドの長として針の筵に座り続ける茅場の真意がまるで掴めない。

本当に、あいつが何を考えているのか理解できない。——……羊の群れに混じった狼の心境なんて、羊には解る筈もないが。

そうやって物思いに耽つて歩いていると、目的の場所に辿り着いた。

街を形成する無数の巨大な尖塔。その中でも一際高いこの塔が、K o Bの本部だ。

アスナは少し手前で立ち止まると、塔を見上げた。

「昔は、三十九層の田舎町にあった小さな家が本部でね。皆、狭い狭いつていつも文句言ってたわ。……ギルドの発展が悪いとは言わないけど、この街は寒くて嫌い……」

息が詰まる、と僕は表現したけれど……明日奈も、似たようなことを思っていたらしい。

「なら、さつさと用事済ませて、何か暖かいものでも食べに行こうぜ」

「ああ、良いね。……でもキリト、《アルゲード食堂》は勘弁だよ？」

「な、何で解った……？」

「やっぱり……」

僕らのそんな掛け合いに――

「ふふっ……ありがとう、二人とも」

勇気でも貰ったように笑って、大きく頷くアスナ。

でもその姿が、僕には精一杯背伸びしているように見えて。

「そのの彼氏様で十分かもしれないかもしれないけどさ……僕のこと、もつと頼っていいんだよ？」

「ティンクルさん……？」

どうして？ と無言で尋ねてくるアスナに、僕は微笑む。

「僕にとってキリトが弟みたいなのと同じように……アスナも、僕にとっては妹みたい

なものなんだよ。だからもつと、お姉ちゃんを頼りなさい」

どうしてだろう。昔言われた姉の言葉が頭に浮かんで、僕は叱るように冗談めかして言った。

アスナは少し驚いた様子だったけれど、やがて頬を染めると――

「う、うんっ」

“はい”ではなく“うん”と言ったアスナ。

昔程ではなくとも、たとえ偽りだったとしても――僕らの距離は、少しは縮まっ
たんじやないだろうか。

「お別れの挨拶に来ました」

凜とした声で、そう言い放つアスナ。広い室内に、その声だけが響き渡る。

部屋の中央に据えられた、大きな半円形の長机。その向こうに並んだ五脚の椅子。中央に座するのは、憎きお山の大将だ。その右隣は空席。恐らく、そこがアスナの席なのだろう。他の三席に座っているのは全員男だが……これも恐らくだけれど、《軍》のコーバツツのように、部隊を率いる部隊長的な奴らなのだろう。

そうやって二人の影に隠れるようにして彼らを観察していると、ヒースクリフが苦笑を漏らした。その声は、ボイスエフェクタを使っているのだろうか……顔と同じように、

当然茅場本人のもととは異なる。

「そう答えを焦る必要は無いだらう。——とところで、後ろに隠れているのはどなたかな? ……いや、答えを訊いているわけではない。僅かに顔が見えているからね」

そりやそうだろう。僕は男にしては低いものの、女性であるアスナとアスナと同じぐらいの身長の子リトに比べれば、頭半分くらい大きいのだから。

僕は諦めて、アスナの横に立った。

「取り敢えず——ようこそ、《血盟騎士団》本部へ。キリト君、ティンクル君」

僕は、人知れず息を呑んだ。

どうやら僕はそれなりに有名人らしいけれど、まさか茅場にまで顔と名前を覚えられているとは思わなかったからだ。

「キリト君と話すのは、六十七層の対策会議以来かな? ……その前は、君に『偽ラーメ

ン』を奢ってもらったのだったか」

偽ラーメンというのは、恐らく《アルゲードそば》のことだろう。

ヒースクリフはあの何とも言えない味を思い出してか、再び小さく苦笑した。

「そして、ティンクル君。私の記憶が確かなら、君と話すのはこれが初めてだったな。—

君の活躍は私も知るところだし、話しかけようとしたことも何度かあるのだが……何故か、君は私が近づくと、するりと何処かへ行ってしまう。まるで猫のようだと思つて

いたよ」

茅場は僕が男だと解っているだろうに、そんな言葉をかけてくる。

薄ら寒さを感じながらも、僕も言葉を紡ぐ。同じく、心にも無いことを。注文通り、猫なで声で。

「そんなことは無いですよ？ ……わたしも、かの《神聖剣》と一度お話してみたいと思っていました。まさか、貴方もそう思ってくれていたなんて。 ……そうと知っていれば、わたしからお声をかけましたのに」

「ほう。《氷姫》にそう言ってもらえると、私も捨てたものではないと思えてくるね」

僕らは互いに笑顔だ。しかしその仮面の下で、相手の腹を探るように睨みを利かせる。

そんな不穏な空気を感じ取ったのか、ヒースクリフの左隣に座る男が「団長……」と先を促す。ヒースクリフはしぶしぶといった風に頷き——

「では名残惜しいが、挨拶はこれくらいにして本題に入ろう」

そう前置きをしてから、キリトを見詰める。

「我々もトップギルドなどと言われているが、いつも戦力はギリギリだ。 ……なのに君は、我がギルドの貴重な主力プレイヤーを引き抜こうとしているわけだ」

「貴重なら、護衛の人選にはもっと気を使った方がいいぜ」

そんなキリトのぶつきらぼうな台詞に、右端に座っていた男が血相変えて立ち上がる。それを軽く手で制し、ヒースクリフは答える。

「クラディールは自宅で謹慎させている。迷惑をかけてしまったことは謝罪しよう。しかし、だ。我々としても、サブリーダーを引き抜かれて、はいそうですか、という訳にはいかないのだよ。キリト君——」

そして、何故か僕をちらりと見てから、ヒースクリフは告げる。

「欲しければ、剣で——《二刀流》で奪い給え。私と戦い、勝てばアスナ君を連れて行くがいい。だが、もし負ければ——」

そこでにやりと笑い、予想外の言葉を口にする。

「ティンクル君、君が《血盟騎士団》に入るのだ」

「「「「は!?!」」」」」

部下にも事前に言っていなかったのか、ヒースクリフ以外の六人分の驚愕の声が室内に大きく響く。

「な、何でそういうことになる!?!」

キリトが当然の疑問を口にするが、ヒースクリフは平然と答える。

「勿論、ティンクル君——彼女が欲しいからだ」

ぞわり、と鳥肌が立つのを感じる。

まさか……僕を監視する為、手元に置こうと考えているのか？

だとすれば、茅場はアウローラの存在に気付いているのに……わざと見逃している？

……だが、裏の事情を知らない面々は、言葉通りに受け取り——

「だ、団長……本気ですか!？」

「いや、待てお前。そんなことを団長に訊くな」

「そうだ。俺は寧ろ、団長も人間だったんだと安心している」

口々に、そんなことを言い出す幹部メンバー。

そんな声を黙殺し、ヒースクリフは続ける。

「今回のフロアボス戦の報告をアスナ君から昨夜聞いたが……ティンクル君には、指揮官の才能がある。そして他者を鼓舞し、常時以上の能力を發揮させることが出来る——これはアスナ君には出来ないことだし、私も及ばないところだ。それに、ゲームテクニクは言うに及ばず——恐らく何かスポーツをやっていたのだろう——本人の運動神経の高さも相まって、プレイヤースキルは攻略組の中でも頭一つ抜きん出ている」

「だ、だからって、何で俺がティンクルを賭けるって話になるんだ!？」

暫らく呆然としていたキリトは、理由を聞かされたからか立ち直り、声を荒げる。

すると、ヒースクリフは溜め息を吐いて再びキリトを見詰めた。

「もつともな質問だろう。……だがな、キリト君。もし、仮に君自身を賭けるとすれば

……アンフェアだとは思わないかね？ 私はアスナ君、つまり他人を賭けているのに、君は自分自身を賭けるということになる。これでは、両者の精神的負担が随分違うだろう」

「それは……」

「それに君は、私を除けば現在アインクラッドに存在する、唯一のユニークスキル使用なのだよ。もし君が私に破れ、《血盟騎士団》に加入することになったとき、我々のギルドは二人のユニークスキル使いを抱えることになる。——そうなれば、他の有力ギルドが黙っていないだろう。パワーバランスが崩れ、今まで築き上げてきた秩序や暗黙の了解が破壊されかねない。そうなればいずれ、攻略会議にソロプレイヤーや小規模ギルドの居場所は無くなってしまおうだろう」

「……脅しか？」

「事実だ」

まるで、未来を予言するかのよう言い切るヒースクリフ。

でも、恐らくそうなるだろう。現在ソロプレイヤーが攻略会議に参加し、フロアボス戦に参加出来ているのは、有力ギルドによる暗黙の了解があるからだ。でも、現体制が瓦解すれば……攻略速度が落ちるところではなくなる。

だけど……それをお前が言うのか、茅場。

「待つてください団長！ わたしはギルドを辞めたいと言っているわけじゃありません。只、少し離れて、色々考えてみたいんです」

今まで黙っていたアスナが、もう我慢しきれないとばかりに口を開いた。

尚も言い募ろうとするアスナ。しかし、僕は彼女の肩に手を置いて、それを制した。

「ティンクルさん……？」

僕がどうするつもりなのか解ってしまったのだろう。アスナは不安げに見詰めてくる。

僕は「大丈夫だよ」と微笑んで――

「キリト、勝てるね？」

挑発するようにそう言うと、キリトは諦めるように小さく溜め息を吐いてから、こちらを向いた。

「あんたが勝つて言うなら、勝つてやるよ」

「上等だ」

気負いの無い言葉に頷き、僕はヒースクリフを見据えた。

「そういうわけだから、交渉成立だ。でも……姫ほくの勇者様ナイトは、そう簡単に負けたりしないよっ！」

「フツ……そうでなくては詰まらない。しかしティンクル君、勝つのは私だ。――君は

入団式のスピーチの内容でも考えてい給え」

僕とヒースクリフの間で、可視出来そうな程の火花が舞い散る。

当事者であるはずのキリトとアスナが少々置いてきぼりになってしまっているが、構うものか。

これは紛れも無く——ほく姫とかやほ魔王の戦争だ。

一応の礼儀として軽く頭を下げてから、僕は早足で大部屋を辞去した。

キリトとアスナが慌てて追いついて来たのを足音で確認してから、更に速度を速め、歩を進める。

——勝負は、明日だ。

第25話 勇者と魔王の決戦

二〇二四年十月二十日

第七十五層主街区《コリニア》。

一昨日のフロアボス戦によって新たに解放されたこの街は、古代ローマを思わせる石造りの家々が建ち並び——街の中央には、巨大な円形闘技場^{コロッセオ}が悠然とそびえ立っていた。通りを歩くNPCに訊いたところ、他にも大衆浴場や万神殿^{パンテオン}まであるらしい。こんな状況じゃなければ、ちよつとした観光気分を味わえたかもしれない。

今朝、キリトとヒースクリフの決闘^{デュエル}の舞台がこの闘技場に決まったとKOBの使い走り^{メッセンジャー}に聞き、僕ら三人はこの街を訪れていたのだけだ——

「火噴きコーン十コル！ 十コル！」

「黒エール冷えてるよ〜！」

闘技場の入り口の前には、何故か《商人》プレイヤーが大挙し、ずらりと露店を並べて威勢の良い声を上げていた。

そして、気になってはいたけれど、幾ら解放されたばかりの街とはいえ、余りにもプレイヤーの数が多過ぎる。まるで、プロ野球リーグの観戦に、両チームのファンが大勢

で球戯場へ押し寄せているみたいな……。

「……………ど、どういうことだこれは……………」

隣のキリトが、呆気に取られたようにそう呟く。

「さ、さあ……………」

キリトを挟んで反対側にいるアスナは、キリトの呟きを質問と受け取ったらしい。だが、彼女も何が何だか解っていないみたいだ。

そうやって人波に揉まれながら、暫し呆然としてしていると、見知った声が耳に届いた。この見事なバリトンは、一度聞けばそうそう忘れられまい。

僕は二人を連れて人垣を割って進み、声のした方へ近づく。すると、やはり予想通り。チヨコレート色の肌をした巨漢が、笑顔を振り撒きながら周りよりも少々高い値段で品物を売り付けていた。

「おう兄ちゃん！ 黒エールは要らないかい？ 一杯二十コルだ」

「い、いや……………俺はもうさっきの店で……………」

「あ？ さっきの店？」

「い、いえ！ 買います！ 買わせてくださいい！」

きっと既に同じものを買っていたのだろう気の弱そうな青年は、笑顔の圧力に早々に屈してしまった。

「おう！ 毎度あり！」

これは酷い。

青年への同情を禁じえない僕は、話しかけるべきかどうか数瞬迷ったのだけれど、どうやらこちらに気付いたらしいその阿漕な《商人》は、僕らを笑顔で手招きしている。

うわー行きたくない……なんて言っているわけにもいかず、手招きに応じて露店の前へと進み出た。

「お、おはよう……エギル」

「よお、ティンクル。商売には良い朝だなー」

今朝雑貨屋を訪ねた時いなかったと思えば——まさか、こんな所で露店を開いているとは。

「相変わらず阿漕な商売してるな。というか、何でお前までここにいるんだ？ ……そもそも、このお祭り騒ぎは何なんだ？」

「おいおいキリト、お前こそ何言ってるんだ？ 今日の主役はお前だろうに」

「な——あ!?!」

悲鳴に近い声を上げ、顔を青くするキリト。

実は僕も薄々勘付いてはいたけれど……まさか、こんな大事になっていようとは思わなかった。

そう、この大勢の人々の殆ど全員が、『二刀流』と『神聖剣』のデュエルを見物に来た観客だったのだ。

「アスナは知らなかったのか？ オレらを呼び付けて店開かせて、大々的に宣伝するのはK○Bの奴らだぜ。——ほら、あそこで入場チケット売り付けてる赤白の団服……見間違えるはずもねえだろ？」

エギルがそう顎を構って示した先にいたのは、確かにK○Bの団服を纏った男だった。しかし男の風貌は、騎士というよりはそれこそRPGに出てくる商人のようで、膨れ上がった腹に押されて団服はパツツンパツツンだ。

「あの野郎、オレらからしつかりシヨバ代まで取りやがってな。……あんな奴、K○Bにいたか？」

「あの人はうちの經理のダイゼンさんです。ホント、しつかりしてますよねー。あはは……」

笑い事で無いことはアスナも十分承知しているからか、その笑顔は若干引き攣っている。

「……逃げようアスナ。二十層辺りの広い田舎に隠れて畑を耕そう」

二人の話の聞いてますます肩を落としたキリトは、悲壮感漂う声音でアスナに愛の逃避行を持ちかけるが――

「わたしはそれでも良いけど——ここで逃げたら、ティンクルさんが団長のものになっちゃうよ?」

「ちよつ——」

何を意味深げに言ってるんだアスナは!?

「そうだった……くっそ……!」

今思い出したように、まるで恋人を人質にでも取られたかのように苦渋に顔を歪めるキリト。

そして、そんなキリトを冷やややかな眼差しで見詰めるアスナ。

あわわわわ……。

「あ? ……ティンクルが何だつて……?」

ああ……もう! 何でこんな事に!?! 全部お前のせいだぞ茅場!!

「行くよ、二人とも! エギルは商売繁盛頑張つて!」

「あ、おい! お前らも折角だから黒エール買ってかない——」

商売根性逞しいそんな声を置き去りに、僕はキリトとアスナの袖を両手に掴んで、闘技場の入り口までの道のりを人波を縫って進み始めた。

†

ダイゼンさんの案内で闘技場の控え室へと通されたわたし達は、置かれた椅子に腰掛けて最後の作戦会議を始めた。

前半は、わたしが知る限りの団長のスキルのお浸い。そして、後半はティンクルさんによる対人戦のレクチャーだ。

「——それで、キリト。昨日も言ったけれど、対人戦で最も大事なものは……腕力バウでも速度スピードでもない——いかに相手を騙すか、だ」

先程の慌てた可愛らしい表情から一転、いつにも増して伶俐な表情でティンクルさんはそう口を開いた。

「……キリトの《二刀流》は、言うなれば“最強の矛”だ。でも、相手は“最硬の盾”を持つ《神聖剣》ヒースクリフだ。貫けなければ、剣も持っているヒースクリフに負けるのは自明。そして、耐久度が存在するSAOで盾を貫くのは至難の技だ」

そこまで言って、ティンクルさんは細くしなやかな指でキリトくんの目を指差した。

「だからこそ、相手を騙すことで隙をつくる。まずは視線。……視線はフェイクの基本だ。例えばキリトは相手の左肩を斬りたいとする。でも、斬るときに相手の左肩に視線がいつていれば、相手にすれば盾で防ぐのは容易だ」

「よ、容易って……」

思わず口を挟んでしまった。

「ただ、ティンクルさんは気を悪くしたりせず、説明を続ける。」

「たしかに、《二刀流》を間近で見たアスナが否定したくなる気持ちも解るよ。でも、相手の次の行動を予測出来れば、それだけで精神的に余裕が生まれる。相手が何処に打ってくるのか解れば、機械的に防ぐことだって出来る……だから、自分から攻めていくことも可能になる。——ヒースクリフの真の強みは、《神聖剣》というスキルではなく、防御に対する絶対の自信なんだ」

防御に対する絶対の自信。

恐らくそれは……フロアボス戦においてさえも、HPをイエローゾーンにまで突入させたことが無い——少なくとも、わたしは見たことが無い——という、ある種の安全神話だ。だからこそ、団長はあんなにもいつでも冷静でいられるのかもしれない。

「だから、その高い自信を逆に利用する。あいつの慢心さに付け込んで、裏をかくんだ。右を見れば左を斬り、肩を見れば膝を斬る——って、具合にね。予測が出来なければ、必ず隙も生まれる。あのすかした顔を苦渋に染めてやろう」

そこまで言って、ティンクルさんは邪悪に微笑む。

……この人は、何か団長に怨みでもあるのだろうか？ 副団長としては非常に複雑だ。

「更に、フェイントも織り交ぜるんだったか？」

「うん。キリトは二刀だから、隙をつくらぬよう無理せず出来ると思うよ」

そう言つて肩を竦めてから、今度ははにかむように笑う。

「悪辣だと思ふかもしれないけれど、本来対人戦つてのはこういうものなんだよ、アスナ。対戦ゲームの全国大会なんでもっと酷い技とか幾らでもあるし、ゲームだけじゃなくて現実のスポーツでも同じことなんだ。……馬鹿正直にやつて勝てるのは、まだまだ序盤の証さ」

序盤の証。その言葉に、一瞬怖気が走る。

もしかしたら、七十四層のボス部屋が《結晶無効化空間》だったのは、本番——真のデスゲームが始まったという、茅場晶彦からの合図だったのではないだろうか。

でも、そんな不安も払拭してくれる程の笑顔を咲かせて、ティンクルさんは立ち上がる。

「ま、ここまでレクチャーしたけど、もっと気楽に構えればいいよ。あの《神聖剣》と本気で戦うなんて機会、今後二度と無いだろうから……僕のことは気にせず、強敵との戦いを楽しめばいい」

「でも……あんたはやつぱり、ギルドに入りたくはないんだろ？」

だけど、ティンクルさんはその質問には答えずに、ぱちりと片目を瞑つて——

「僕は、自分の身くらい自分でなんとか出来るさ。——ご武運を、キリト」
そう言つて、ティンクルさんは控え室を出て行つた。

ティンクルさんが出て行つてから五分と経たず、扉の向こうの通路から、ドタバタと慌しい足音が聞こえてきた。そして、足音が止まったかと思えば、バーン！ と勢い良く扉が開く。

「どうもー！ リズベット武具店出張サービスでーすー！」

「り、リズ?!」

明るい声でそう言つて控え室に入つてきたのは、わたしの親友である《鍛冶師》リズベットだった。

「だけど、どうしてこのタイミングでリズが？ もしかして、ティンクルさんが来るように頼んだのだろうか？」

「——あれ？ ティンクルは？」

まるでかくれんぼの鬼が子を探すように部屋の中をキョロキョロ見回していたリズは、根負けしたようにわたしに尋ねてきた。

「ティンクルさんなら少し前に行つたけど……もしかして、ティンクルさんに用事でもあったの？」

「……逃げられたか。やっぱりあいつ、あたしに意地でも会わないつもりね」

「え……?」

逃げられた? もしかして、喧嘩でもしてるんだらうか?

でも、リズは何でも無い風に首を振ってから、誤魔化すようににやにやと笑みを浮かべた。

「違う違う。あたしが来たのは、キリトの剣のメンテの為よ。——それにしても、聞いたわよー? アスナ。あんたんとこの団長があんたを、キリトはティンクルを……それぞれ女を賭けて正真正銘の決闘をするんだって? 会場のボルテージはすごいことになってるわよー?」

「ええ!」

「あの守銭奴!!」

キリトくんが怒声とも悲鳴ともつかない声を上げる。

でも、幾らダイゼンさんだって内輪の事情を宣伝に使ったりなんて……いや、あの人ならやりかねない。寧ろ進んでやりそうだ。

「ま、だからやるなら最高の常態で、と思ったのよ。どうせあんたのことだから、ボス戦の後で装備のメンテなんてしてないでしょ?」

「うっ」

「どうやら、凶星だったみたいだ。」

「来てみて正解ね。——ほら、剣出しなさい。まさか、あたしの《片手直剣》の最高傑作、叩き折ったりしてないでしょうねえ？」

「してない、してない。ほら、研磨頼むよ」

「りようかーい」

軽く答えてから、リズは携帯用の研ぎ石を取り出して、その上に刃を滑らせていく。数度上下に繰り返してから、同じようにもう一本も。

「——よし！ これでOK！」

そう言つて、研ぎ終わった二刀をキリトくんに戻してから、リズはバシン！ とキリトくんの肩を叩いた。

「お、おい！ 何すんだよ!？」

「活入れてやったのよ！ ——あんとティンクルの剣は同じ鉾石から鍛えた兄弟剣だけれど、それだけじゃないのよ。あんと達の剣は、どっちも『闇を切り裂く光』。……きつと、あんと達がその剣で、このゲームを終わらせてくれるつて、あたしは信じてる。——だから、《神聖剣》だかなんだか知らないけど、あんなおっさんにあたしの剣を使つて負けるなんて許さないからね！ 意地でも、絶対勝ちなさい!！」

啖呵を切るようにそう捲くし立ててから、最後に「今後ともリズベツト武具店をどう

ぞご鼻屑にー」とニッコリと笑ってリズは部屋を出て行った。

再び、控え室に二人きりになる。

「あ、嵐みたいだったねー。全く、リズったら。……代金取っていかなかったけど、サービスってことで良いのかな？」

「どうだろうな？ リズのことだから、後日請求されるかもしれないぜ」

キリトくんはそう笑ってから、目に真剣な光を宿す。

「ティンクルにはああ言われたけど、やっぱり勝たないと駄目だな。……ティンクルを、ヒースクリフに渡すわけにはいかない。勿論、一番の理由はアスナと一緒にいたいからだけ」

「……全く、キリトくんはずるいよ。またティンクルさんに嫉妬しちゃったわたしが馬鹿みたいじゃない。」

でも、わたしも言うことは言わないといけない。

わたしは真剣な表情で、キリトくんの手首を両手で掴む。

「うん、頑張ってキリトくん。……でも、危ないと思ったら、絶対リザインしてね。団長の剣技は未知数なところがあるし……もしキリトくんに何かあったらわたし、何するか解らないから」

「わ、解った。……絶対勝って、アスナのところに戻ってくるよ」

にやりと笑つて、キリトくんはわたしに背を向け闘技場へと歩いていく。無事に帰ってきてね……キリトくん。

試合開始を告げるブザーが鳴り響き、遠雷のような歓声が湧き上がった。

↑

「すまなかつたな、キリト君。まさかこんなことになっているとは知らなかつた」

周囲の大観衆に目をやつて、流石のヒースクリフも苦笑を浮かべた。

「ギャラは貰い——いや、やつぱり要らない。……アスナを貰つて、ギャラまで頂いたら流石に悪い」

「フツ……思つたよりも強気だな。何かあつたのかね? ——だが、昨日も言つたが、勝つのは私だ。我々は新たにティンクル君を迎え入れ、彼女には観客を目の前にこの場で所信表明演説をしてもらうつもりだ。……会場には来ているのだろうか?」

俺はその質問には答えず、背中の二刀を抜き放つ。

「お前にティンクルは渡さない……!!」

俺がそう言つた瞬間、これまで以上の割れんばかりの拍手と歓声——更には怒号までもが飛び交う。だが、意識を既に戦闘モードに切り替えた俺の耳には、何処か遠くの場所から聞こえるような微かな音にしか聞こえない。

ヒースクリフの真鍮色の瞳と、俺の視線が激突しスパークする。ゲームの中だという

のに、俺達二人の間を取り巻くこの空気は、殺気以外の何物でもなかった。

お互い視線を外さないなか、ヒースクリフは慣れた手付きでメニューウィンドウを全く見ずに操作する。俺の目の前に瞬時に現われたのは、勿論――

【Heathcliff からIvsliteルを申し込まれました。受諾しますか？
YES or NO】

俺は迷わず受諾し、初撃決着モードを選択する。

【60】

【59】

システムメッセージが流れ、カウントダウンが開始された。だが、その数字には目も触れず、只々相手を見据える。

周囲の音が限りなく遠ざかったセカイ。加速された知覚。ヒースクリフの、盾から細身の長剣を抜き放ったその動作も、まるでスローで映像を見せられているようにゆっくりだ。

【DUEL!!】

開始を告げる文字が閃いたとほぼ同時、俺達は地面を思い切り蹴り付けた。

ヒースクリフは前へ。俺は後ろへ。

「――!?」

バックジャンプを挟み、相手の距離感を狂わせる。そして、今度は一気に沈み込むような体勢で前へと跳び出す。

「うおおッ!!」

《二刀流》突撃技《ダブルサーキュラー》。

両手の黒白二振りの剣が同時に唸りを上げ、青の光芒が迸る。

「ぬ——ん!!」

しかし、右は十字盾に迎撃され、左は相手の脇腹に達する直前で長剣によって阻まれた。円環状のライトエフェクトの軌跡だけが、虚しく宙で弾けた。——だが、テインクルの狙い通り、あの“ヒースクリフ”に焦りが浮かんでいる。

あくまで今のは挨拶代わりの先制パンチだ。気を抜かず、技の余力で距離を取り——左右にステップを踏んでから、右へカーブを描いて一気に踏み込む。

「う……らあ!!」

視線を集中し、左肩を狙っての《片手直剣》単発重攻撃《ヴォーパル・ストライク》。ジェットエンジンめいた金属質のサウンドとともに、赤い光芒が爆ぜる

「……!!」

十字盾によって寸分無く防がれ、ガガン! という炸裂音とともに右手を強い衝撃が襲う。だが——俺は一步、更に前へと踏み込む。

「ぬ……………っ!？」

「う……………おおおッ!!」

右の《ヴォーパル・ストライク》はあくまで囷。本命は……………左だ!!

「……………らあッ!!」

斬り下げ、斬り払い、斬り上げ、斬り払い——最早、システムアシスト無しにでも放てそうな程に身体に染み付いた四連撃《バーチカル・スクエア》。

今、奴は盾を使えない。抜ける! ……そう、確信しかけたのだが——

「ぬ……………おお!!」

正確過ぎる軌道で、右手の長剣のみで次々と打ち落とすとしていくヒースクリフ。

そして、四連撃最後の斬り払いにぶつけるようにして、今度はこちらの番だとばかりに長剣を閃かせる。

「ぬん!!」

「く、お……………ッ!!」

八連撃にも及ぶ未知のソードスキル。事前にアスナにレクチャーを受けていたとはいえ、全て迎撃するのは容易ではない。だが、ヒースクリフに剣と盾があるように、俺にも左右二振りの剣がある。

限界まで加速された知覚の中、俺は目を見開いて軌道を読む。

右、左、右、左、右……

「うおおおおおッ!!」

《神聖劍》の八連撃、その全てを弾き飛ばし、再びバックステップで距離を取った。

「……全く、素晴らしい反応速度だな」

「そう言うあんたこそ……堅過ぎるぜ!」

置いてきぼりになっていた聴覚が一瞬戻る。耳に入ってきたのは、耳がどうにかなりそうな程の万雷の拍手と歓声だ。

「それに速いだけではなく、動きが単調ではなくなつたせいで更に読み切れなくなった。

……一体、誰の入れ知恵かな?」

「あんたが欲しがつてる姫様直伝さ……!」

「成る程……それはますます欲しくなるな!」

「誰がやるか!!」

言いながら、俺は地面を蹴った。ヒースクリフも剣を構え直して間合いを詰めてくる。

超高速での連続技の応酬が開始された。俺のフェイントを織り交ぜた二刀による攻撃は奴の盾に阻まれ、奴の剣と盾による攻撃を俺の剣が弾く。一進一退の攻防。二人の周囲で様々な色彩の光が飛び散り、衝撃音が闘技場の石畳を突き抜けていく。

「う……おおおおあああツ!!」

「ぬ……おおおおおおツ!!」

脳が焼き切れそうな程の、嘗て無い加速感。

まだだ。まだ上がる。付いて来いヒースクリフ!!

剣戟の応酬が白熱するにつれ、双方のHPバーは減少を続け、遂に五割が目前に迫った。

——次で勝負は決まる。

「楽しませてもらったよ、キリト君」

「こっちの方こそ!」

最後の瞬間、俺達は笑っていたと思う。

そして——

「らああああああ!!」

「ぬ——ん!!」

裂ぱくの気合いとともに、青と赤の光芒が交錯した。

第26話 薄氷の舞台

数秒前まで歓声で湧き上がっていた闘技場は、静寂に包まれていた。誰もが口を閉じ、呆気に取られている。

「ひ、引き分け……?」

席を立って一緒にキリトを応援していた隣の席の少女が呆然と呟いた。肩に乗せた《フェザーリドラ》が、主人を心配するように小さく鳴く。

初撃決着の失敗で自動的に半減決着に移行していたキリトとヒースクリフ——二人のユニークスキル使いのデュエルは苛烈を極め……最終的に、同時に発動させた単発ソードスキルでお互いを斬り裂き、HPの五割を切った。つまり——引き分けだ。

「ま、大健闘ってところかな」

僕が驚いたのは、茅場が今回のデュエルの為に《不死属性》を解除していた、ということだ。つまり茅場は、キリトがSAOの開発ディレクターである自分のHPを半減させ得ると踏んでいたのだろう。自分の正体が露見する可能性を事前に潰していた、というわけだ。——或いは、「開発者」茅場晶彦としてではなく、「プレイヤー」ヒースクリフとしてキリトと戦いたかったのかもしれないが。

観客達がやつと事態を飲み込んだのか、闘技場全体が二人の別次元の戦闘を讃えての拍手喝采に包まれる。

「キリトさん……やっぱ凄いです」

周囲の喧騒に混じって、少し寂しそうな声が耳に入る。

「君、もしかしてキリトの知り合いなの？」

「そう言うお姉さんは、キリトさんとはどういったご関係なんですか？ ……ティンクルって、お姉さんのことですよね？」

敵意……というよりは、嫉妬するような声でそう言っ、僕を見上げる中学校入りたてくらいの少女。

お姉さん——か。まあ、そう見えるよね。

「うん、わたしがティンクルだよ。キリトとの関係かあ……うん……キリトのシステム外スキルの師匠ってところかな。昨日も対人戦の指導をしたよ。手取り足取り、ね」
微笑んでそう答える。

まだ子供の少女に変な影響を与えない為、敢えて「僕」ではなく「わたし」と言ったのだけれど……これって、やっぱ騙してることだよ。……流石にちよつと罪悪感が。

「そうですか……手取り足取りですか、そうですか」

光沢を失った虚ろな瞳でブツブツとそう呟く少女。

怖い！ この娘怖いよ!?

「あたしはシリカつていいいます。……すみませんけど、用事ができたのでこれで失礼します」

し、シリカ……？ 何処かで聞いたような……何処だったっけ？

思い出せそうで思い出せない気持ち悪さに悶々とするが、取り敢えずこの場で思い出すのは諦めよう。

「用事、つて？」

「……レベリングです。やっぱり、今日改めてキリトさんに追い着きたいって思いましたから」

追い着きたい、か。

「そっか。頑張つてね。……でも、無理しちゃ駄目だよ？」

「ありがとうございます。……でも、そうやって余裕ぶつていられるのも、今のうちだけですから」

そう言つてから、ピイツとそっぽを向くとシリカちゃんはバツが悪そうに「さよなら、お姉さん」と言つて闘技場の出入り口へと走つていってしまった。

「何か怒らせるようなこと言っちゃったかな……？」

今の会話に少女を怒らせるような内容の言葉は含まれていなかったと思うけれど。

訳が解らず一人困惑していると、KOBの団服を着た恰幅のいい男が小走りで見つけてきた。……たしか、名前はダイゼンだったか。

「いやあくティンクルはん捜しましたよ。ティンクルはん目立ちますのに、ほんま見つからんくて」

「……僕に何の用ですか？」

「団長が呼びです」

†

「すまなかつたね、ティンクル君。しかし、こういう事態になってしまったから、改めて君も交えて話し合おうと思ったのだよ」

椅子と机が持ち込まれ簡易的な会議室と化した闘技場の控え室に、僕ら三人とヒースクリフを含めた数名のKOBメンバーとが会していた。

「我々としては再戦は望まない。……これだけ劇的なデュエルもそうそう無いだろうから。盛り上がってくれた観客に水を差すのも申し訳がないだろう。——だから、我々が出した結論は現状維持だ。我々はアスナ君を失わないし、ティンクル君が我々のギルドに入る必要も無い。……もしこれに不満があれば、対案を出し給え。反対するだけでは物事は進まないのだからな」

「ぐっ……！」

隣のキリトが出鼻を挫かれたように齒噛みする。

……現状維持。これでは何の為に戦ったのか解らない。しかし、ヒースクリフの論理に隙は無い。反論も出来なければ、対案を出せと釘まで刺された。だが――

「何か言いたそうだな。――遠慮することはない。意見を聞く為に君もここへ呼んだのだからね、ティンクル君」

真鍮色の瞳に値踏みでもするかのように見詰められ、気持ちが悪縮しそうになる。だけれど、このままで良いはずがない。

「提案があります。……そもそもアスナは、休暇を望んでいるのであってギルドを辞めたいわけではありません。ならば、彼女が休んでいる間、彼女が空けた穴を別の人間が補填すれば良い」

「ほう。しかし、アスナ君はトッププレイヤーの一人だ。そんな人材、一体何処にいるのかね？」

ヒースクリフの口元には笑みが浮かんでいる。

……まさか、これが狙いだったのか？ 僕にこれを言わせる為に、わざと引き分けにもっていった……？

だとしても、構うものか。

ヒースクリフの目を睨むように見詰め返し、僕はその人物の名を口にする。

「——《氷姫》、つまり僕です。……そもそも、今回あなたが欲しがっていた人材だ。これなら断る理由も無いでしょう?」

「ふむ。確かに、断る理由が無いな。君がそれで良いのなら、私個人としてはその案に乗るのは吝かではない」

それが唯一の正解であるかのように頷くヒースクリフ。

やはり、茅場の狙いはこれだったのか。僕が自らの意思で、《血盟騎士団》の門戸を叩くことが。

「おい! 何言ってるんだよ!」

「団長待ってください! ティンクルさんも何考えてるんですか!」

「五月蠅いよ、二人とも。そんなに必死にならなくたって……魔窟に放り込まれるわけじゃあるまいし。それどころか、トップギルドにいきなりサブマスター待遇で迎えられんだよ? 喜ぶ理由は有っても、断る理由は無いじゃないか」

そう言つて、キリトとアスナを窘める。だが——

「ふざけるな!」

「つ……!」

激昂したキリトに襟首を握られ、思い切り引き寄せられる。

「苦しいんだけど……!」

「理由なんか知らない、あんたが話してくれないからな。……でも、あんたがギルドに入りたくないってのは俺だつて知つてんだよ!! あんた鏡で自分の顔見てみるよ! それ喜んでる人間の表情だつていうなら、もう勝手にしろ!!」

そう言われ、突き放された。

……参つたな。表情を思つたようにころろ変えられるのが特技だつたはずなのに。

「ティンクルさん、怒らないでくださいね? キリトくんは、ティンクルさんが好きだから、大切だから怒つてるんです」

「アスナ……?」

一目で怒っていると解るキリトに比べて、アスナは見事なまでに無表情だ。

「わたしは正直に言つて、ティンクルさんのこと好きじゃありません。寧ろ嫌いです。

——美人だし、性格も良いし、料理も出来て、頭も良く、ゲームも得意で……何でも出来て……っ!」

いや、無表情なんかじゃなかった。どうにか抑えていたから、そう見えただけだった。ダムが決壊するが如く、アスナは大粒の涙を零す。

「独りで何でも出来るんでしょ!?! 独りで抱え込んだつて、全部何とか出来るんでしょ!?! ……そんな人が、もつと他人（じぶん）を頼れなんて言わないでっ!」

アスナは、まるで子供が駄々を捏ねるようにそう叫ぶ。

……それは違うよ、アスナ。僕が独りで出来ることなんて、高が知れてる。

「何か大事になつてきたが、勝手に我々を悪役にしないでくれ給え。あくまでティンクル君が言ったのは代替案であつて、我々としては現状維持で何ら問題無いのだよ。——それに話を聞くところによると、ティンクル君は以前はギルドに入ることを嫌がつていたのかもしれないが、今もそうだとは限るまい？ ……嫌がつているように見えて、実は嬉しいのかもしれない。嫌よ嫌よも好きのうち、というやつだ。違うのかね？」

大袈裟に溜め息を吐いてから、そう僕に尋ねてくるヒースクリフ。

これは助け舟なのか？ それとも奈落へ突き落とそうとしているのか？

どちらにせよ、もう答えは決まつている。

僕は恥らうように頬を染めてから、俯き加減で言つた。

「実はそうなんです。今更入りたいなんて、恥ずかしくて素直に言えなくて」

「解るとも。年を取ると、自分にも他人にも素直になれなくなるものだ。気にすることはない。私は君を歓迎するよ、ティンクル君」

「ありがとうございます」

そう礼を言つて微笑む僕を、キリトは無言でジツと見詰めていた。そして——

「——本気なんだな？」

「き、キリトくん……?」

「それがあんたの本心だつて、俺はそう思つて良いんだな?」

「キリトくん何言つてるの!?!」

「アスナは黙つててくれ。——ティンクル、どうなんだ?」

キリトは真意を確かめるように、黒い瞳を鋭く光らせる。

「勿論、本心さ」

間髪入れずにそう言つて笑つてみせる。

知っているかな、キリト。たとえ最悪の手札でも、最高に思わせる——それが、真のポーカーフェイスだつて。

信じてくれたのか、或いは諦めたのか……キリトは薄く笑つた。

「そつか。……だつたら良いんだ。首絞めるみたいな真似して、悪かつた。——ヒースクリフ、俺はティンクルの案に賛成だ。……行こう、アスナ」

「ちよつとキリトくん!?!」

驚くアスナを無理やり引つ張つて、キリトは控え室を出て行つた。

「やれやれ。……どうやら結論は出たようだな。ティンクル君、昨日とは別の意味で言わせてもらおう——ようこそ、《血盟騎士団》へ」

控え室の中、部下を出て行かせたヒースクリフと僕は二人きりになっていた。

「素早く済ませるつもりが、大分時間を食ってしまった。観客が待ち草臥れているだろう。——これに着替え給え」

目の前に、トレードウィンドウが表示される。中身は、K O Bの団服だった。

「アスナ君のと見た目は殆ど同じものだ。只、君は戦闘時鎧を着ていたから、防具類は付けていない」

「……そうですか」

「私は部屋の外で待っている。……早めにし給え」

そう言つて、ヒースクリフは出て行つた。

控え室に、僕だけが取り残される。

こんなことになつて、アウローラは怒っているだろうか？

きっと、今回のことでキリトにもアスナにも嫌われてしまっただろう。……いや、アスナは僕のこととから嫌いなんだっけ。

……悩んでも仕方が無い。兎に角、今は着替えよう。——それにしても、「早めにし給え」つておかしくないか？ だって、現実と違つて着替えるのなんて十秒あれば足りるはずだ。

僕はウィンドウを開き、装備ファイギアを表示する。次に、所持アイテムの中から渡さ

れた団服を選んで――

「え？」

「選ぼうして、僕の身体はフリーズした。表示された英単語に瞠目する。」

「め……【Male】……？」

呆然と呟き、それでも何とか硬直した身体を動かして、今度こそ装備を変更する。

一瞬光に包まれた身体は、次の瞬間にはいつもの地味な格好から赤白の団服に変わっていた。同時に、嘗て一度だけ味わった感覚。足元が妙にスースーするという、ある衣服特有のものを。そう――スカートだ。

でも、驚くことじゃなかったかもしれない。……だって、ヒースクリフはアスナが着ているものと「見た目は」殆ど同じだと言っていた。だから、スカートであることは何ら不思議じゃない。

「何をしているのかね？――私は、早めにし給えと言った筈だが？」

扉の前から、そんな平坦な声が聞こえる。

「……終わりましたよ」

「そうか、ならば速やかに出てき給え。スピーチの内容は、考えてあるのだろうか？」
「考えていませんが――心にも無いことを言うのは得意です」

「そう言いながら、僕は控え室を出てヒースクリフを僅かに見上げる。」

「フツ……そうか。ならば、何も問題はあまい」

そう言つて、ヒースクリフは悠然と歩き出す。僕も、その背中を追う。死神に這い寄られたのような恐怖を、生唾と一緒に呑み込んで。

第27話 水の枢の眠り姫

人々の行き交う昼下がりの往来は、寒空の下だというのに休日ということもあって賑やかだ。

東京都文京区。

住居は杉並、通う大学は世田谷にある俺がここを訪れるのは週に一度、決まって日曜日だった。

交差点を渡り、敷地に入る。

目に映るのは、車椅子に乗った老人、そしてそれを押す看護師の姿。

「もう、通い始めて二年近くになるのか……」

知らず眩き、冷えた手をズボンのポケットへと突っ込む。

東京大学医学部附属病院。俺とは縁遠いはずのこの場所は、しかし今では身近な場所へとなってしまった。といっても、俺自身が何か治療の為に訪れているわけではない。そもそも、今日は日曜日なのだから、急患以外は受け付けてもらえないだろう。俺がここへ来るのは、友人の見舞いの為だ。

院内に入ると、病院独特の消毒薬の臭いが——然してするわけではなかったが、やは

り独特の空気を肌で感じる。

受付で面会の申請を行ってから、病棟の中を無言で歩く。

一昨年十一月に勃発し、のちに《SAO事件》と呼ばれるようになった未曾有のサイバー犯罪に巻き込まれた光は、数日と経たずに政府主導で意識不明のままここへと担ぎ込まれた。

実家が病院だったり家族が自費で入院させた場合を除き、プレイヤーの多くは政府から指定された医療機関に入院することになった。そして、光は後者だ。

光が事件に巻き込まれたと聞いたとき、始め俺は信じられなかった。だって、あいつとは、前日に久々に再会したばかりで。……一週間後、試合を見に来てくれると約束したばかりで。あいつが二度と目覚めないかもしれないなんて、全く信じられなかった。

結果だけを言えば、大会には優勝した。もし俺が動揺して負けようものなら、あいつの責任みたいで——それだけは、意地でも避けたかった。……だから結局、メイド服は二年も「お預け」を喰らっている状態だ。

「反故にしたら許さねえからな……」

メイド服は既に秋葉で購入済み。あの時の俺の羞恥心は無駄にしない為にも、あいつにはちゃんと還ってきてもらわないと困る。

——そんな思考に捕らわれていたせいかな、いつの間にかあいつの病室の前にまで辿り

着いていた。きつと周りからは上の空に見えたことだろう。

毎週来ていることもあって、俺は無遠慮に扉の取っ手を掴みスライドさせた。

「——いえ、そんなことは……あら？ 陽人くん？」

病室に居たのは光の二つ違いの姉である茜、そして、恰幅のいい見知らぬ初老の男だった。少なくとも、光の親父さんでないことだけは確かだ。

親戚だろうか？

「すいません、俺出直します」

どちらにせよ、この場では俺が邪魔者であることに違いない。

軽く頭を下げ、病室から辞去しようとしたのだが——

「ああ、成る程。君が噂の『日曜日の王子様』か」

「はあ？」

男の意味の解らぬ戯言に、思わず威圧するように聞き返してしまう。

「いや、すまん。さつき、ここの看護師が噂しているのを小耳に挟んでね。毎週欠かさず、『姫』を起こしにやって来るイケメンがいると——確かに君は、噂に違わぬ端整な顔立ちだ」

「……何だそれ」

まさかそんな話になっているとは。

俺は困惑を隠せず、その場に固まってしまふ。

「ああ、失礼。私は結城彰三……一応、三雲君の上司でね」

親父さんの上司……ということは、この人も《レクト》の社員なのか。

たしかにそう言われてみれば、学生の俺でも解るくらいに身なりが整っている。

「そうなの。こちらの結城さんはレクトのCEOをなさっているのよ」

「……………」

光のものとはまた異なる柔和な笑みを浮かべた茜は、その表情のままとんでもないことを言い出した。

間の抜けた声が俺の口から漏れる。

「はあく……全く、君ら姉弟は。今日の私はあくまで一個人として、友人の息子の見舞いに来ただけなのだがね」

そう言って、彰三は苦笑する。

「グループ企業の代表だと態々明かさなければ、その辺のおじさんと何ら変わらないだろう？」

さも面白そうに彰三は笑うが、そんな相手を前にして平然としていられるほど、俺は肝が据わっていない。

「は、はあ……」

だから、肯定でも否定でもない微妙な相槌を打つのが精一杯だった。

「……はあく。君が余計なことを言うから、彼が変に緊張してしまったではないか」
「失礼ながら、自己紹介はちゃんとなされた方が宜しいかと思ひまして」

二度目の溜め息を漏らす彰三と、笑みを浮かべたまま全く意に介さない茜。
その光景を見て、改めて自分が場違いな存在だと思ひ知らされる。

「えーと……結城さんは親父さんの友人だつて話ですけど……？」

「ああ、そうだよ。何を隠そう、エニカちゃんと三雲君をくっ付けたのは私だからね。国際結婚の仲人を務めたのは、私の密かな自慢だ」

昔を懐かしむように笑う彰三。しかし、その笑顔に僅かに影があるのは、エニカ——二人のお袋さんが早くに亡くなってしまったからだろう、と思つたのだが。

「——なんて言つたものの、実はここへ寄つたのは娘の見舞いの序でね」

「……？娘さん、ご病気なんですか？」

俺がそう問うと、彰三は疲れたような笑みを浮かべた。

「いや、光君と同じだよ。娘もSAO事件に巻き込まれてね……。ゲームなんて、殆どしたことがなかったのに、今回に限つて——だから、今も頑張つて戦っている娘が誇りだ」

「……………」

俺はどう声をかければいいのか解らず、沈黙する。

ただの友人に過ぎない俺と違い、父親である彼の心労は想像を絶する。いや、それは親父さんや茜さんも同じか。

「……すまん。君にこんな事を言っても仕方ないな。私も少し疲れているようだ」

眉間をマツサージするように指で摘まんで揉む彰三。

その姿は、実年齢を知らない俺から見ても、年齢以上に年老いて見えた。

「そういえば、親父さんは？」

今更になってその姿が無いことに疑問に思い茜に尋ねたのだが、それに答えたのは彰三だった。

「三雲君には休日出勤してもらっていいね。——彼も大変だろうに、文句も言わずに成果だけを上げて……非常に優秀な男だよ。分野は違うが、優秀さだけなら須郷君といい勝負を——」

『pipipipi……』

デフォルトと思しきケータイの着信音が鳴り響き、彰三は顔を顰める。

失礼、と俺と茜さんに断ってから、彼は——今では絶滅危惧種の——ガラケーに耳を当てた。

ハッキングされるリスクが殆ど無いガラパゴスケータイは、今でも金融機関などに勤めている人間には現役で使われていると聞いたことがあったが、彼もそういう理由で使

い続けているのかもしれない。

「もしもし、私だ。——何？その書類なら、昨夜のうちに送っておいたはずだが？——

——そういうことは早めに言わないか！」

電話に向かって檄を飛ばす彰三。その横顔は、先ほどの疲れた父親のものではなく、巨大グループのCEOに相応しい威厳に満ちたものだった。

「すまないが、急用が入ってしまった。私はそろそろ失礼するよ。茜ちゃん、三雲君に宜しく。……影山君、機会があったらまた会おう」

そう言って、病室を出て行く彰三。

俺はその姿を暫し見送ってから、頭を上げた茜に尋ねる。

「もしかして、結城さんに俺の名前教えました？」

「レクトのCEOとのコネなんて、そうそう手に入らないわよ？お姉さんに感謝なさい？」

そんなことを言って、ウインクを囁ます茜。

……全く、この姉弟は。

奇しくも彰三と同じことを考えてから、俺は肩を竦めた。

「光の顔、見せてもらって良いっすか？」

「良いけど、光の唇は奪わせないわよ？」

「……………」

茜の軽口を無言で受け流し、俺は光が眠るジェルベッドへと近づく。

仮想世界へ縛ると同時に、現実世界との唯一の繋がりでもある無骨なヘッドギア——
《ナーヴギア》を頭部に被せた光。

意識不明に陥り二年が経過しようとしている現在においても寤れておらず、日本人どころか男にすら見えないその蠱惑的な美貌は一切変わらない。

瞼を閉じたこの顔だけを見ていると、本当に眠っているようだ。しかし、腕から伸びた点滴用のチューブと、心電図モニターの電極が、彼が眠っているわけではないことを無言で物語っていた。

「全然変わらないでしょ？二年も寝たきりなのにね」

「たしか……………開発中の栄養剤の治験に協力してるんですけどっけ？」

食事を摂れない長期入院患者の為に開発中のモノらしいが、治験ということもあって全額病院負担ということで投与してもらっているんだっけか。

流石は東大病院というところか効果は目覚しく、体重は入院前と比べても二、三キロしか落ちていないらしい。とはいえ、筋肉や内臓の衰えはどうしようもないそうだが。

「……………茜さん」

「ん？どうしたの？」

俺は一旦光から視線を外し、茜の方を見る。

「なんかこいつ、甘い匂いがするんですけど。……俺の鼻が腐ってるんじゃないっすよ
ね?」

身体の老廃物はジェルベッドが吸収してくれるらしいが、それでも二年近く風呂に入っていないことに変わりはないはずだ。そしてそれ以上に、俺の鼻腔を擽るこの匂いは、決して男の身体からしている臭いではない。

「ああ、それ?この子の体臭だから気にしないであげてね」

「嘘だろ……?」

茜の無慈悲なその発言に、俺は頭を抱えそうになる。

「ところで陽人君。部活の方は最近どうなの?やっぱり大変?」

「そうですね……強豪ってこともあつて練習はキツイですけど——まあ、本物のモンスター相手に剣で戦うのに比べたらチョロいっすよ」

言つて、しまったと思つた。

「え?」

何を言ってるんだこいつは、という顔の茜。

本当のところを話そうか迷うが、誤解された場合、悲惨なことになるといふ思いが先立つて、俺は誤魔化すことにした。

「いや……今だって、光は命賭けで戦ってるんだろうし、それに比べたらって」

咄嗟に思い付いた言い訳だったが、そう思っているのは嘘ではなかった。

一年ほど前、この病室を訪れた総務省《SAO事件対策チーム》のメンバーだと名乗る黒縁眼鏡の官僚が茜に言ったらしい。光のゲーム内でのプレイヤーレベルが、全体のトップ数パーセントに位置すること——そして、常に危険な最前線で戦闘を行う、数少ない攻略プレイヤーであるのだ、と。

「日体大サッカー部のエースにそう言ってもらえれば、中学時代の部長としては鼻が高いんじゃないかしら？」

そう言って、可笑しそうに笑う茜。

「……実際、中学時代のあいつは凄かったですけどね。——人並み以下の体力のせいで、試合には専ら後半戦にしか出ませんでしたけど……あいつが出ただけで士気は上がりましたし、司令塔としての確な指示を飛ばしてました。『ヒーローは遅れてやって来る』じゃないですけど、あいつ、直接間接問わずまず間違いなく一点は入れましたから」

当時のことを思い出す。

内外問わずその容姿もあって、男子なのに《東中の女王》などと呼ばれていた光は——本人はかなり気にしていたが——部長として部員全員に慕われていたし、中には「スパイク履いたまま思い切り蹴りつけて下さい!!」などと言い出すいき過ぎた崇拜者が数

名現われるほどだった。ドン引きである。

だから、高校進学するにあたってサッカーを辞めると聞いた時は信じられなかったし、怒りも覚えたし、勝手な話だけど裏切られたような気分だった。……そういう個人的な気持ちもあつて、卒業後は疎遠になってしまったのだ。

——そんな風に物思いに耽つていると、病室にノックの音が響いて我に返る。

……まさか、また見舞い客だろうか？

「失礼するよ」

しかし、そう言つて入つてきたのは、ベストの上に白衣を纏つた妙齡の女性だった。

艶のある黒髪に、白人のものとはまた違った白い肌。見た限り俺達とそう歳は変わらないように見えるが、全てを見透かすようなその瞳だけが僅かに年齢を感じさせる。

「おや……?」

女性は何故か俺の顔をまじまじと見詰めると、茜に笑いかける。

「彼氏か? 何だ、やることはやっていたんだな」

「……え? 陽人くんつてわたしの彼氏なの?」

「何で俺に訊くんですか!? 違いますから!!」

思わず声を荒げるが、茜は何故か表情を暗くする。

「そんなに全力で否定しなくてもいいのに……お姉さん傷付くなあ……」

「あ……いや、そんなつもりで言ったわけじゃ」

しどろもどろになりながら、何か弁解の言葉を探すが――

「ふふふつ冗談、冗談」

そう言つて茜は破顔すると一転、にやにや笑いを浮かべ始める。

この屁……!!

「ほらほら、怒らない怒らない。ほら、飴あげるから」

「幾らなんでも馬鹿にし過ぎだろ!!今時小学生だつて手懐けられねえぞそんなんじや

!!」

本当に懐からチュッパチャプスを取り出した茜に思わず突つ込む。

「いやー……今的一幕だけで君らの関係が容易に想像できるな」

感心したようにそう言つて腕を組む女性。

……その体勢だと、決して小さくない胸が強調されて、目のやり場に困るのだが。

「……?」

俺の視線に気付いたららしい女性は、ふつ、と大人の余裕の笑みを浮かべると言った。

「世の中には視姦という言葉があるが、姦淫の姦が入っているからつて、見ただけで女性を妊娠させたりは出来ないぞ?医学的見地から言つても不可能だ」

「あんた何言つてんだ!」

「そして、露出プレイで興奮出来るのは見られて興奮するタイプの変態だけだ。私は見られるくらいなら縛ってもらいたい。寧ろ自分で縛る」

「結局別の意味で変態じゃねえか!!」

「因みに自縄自縛という言葉があるが……あれを考えたのは私だ」

「嘘つけ!!!」

ナントイウコトデショウ……知的ナ美人ダナト思ッテイタ女性ハ、タダノ変態デシタ。

脳内で悲劇的ビフォーアフターのナレーションが鳴り響く。片言なのは恐らく、俺の困惑具合が反映されているのだろう。

「ここは病室だ、静かにし給え」

「あんたのせいだろ!!」

「……ふむ」

荒く息を整える俺を、今度はジッと見詰める女性。

……今度は一体何だ？

「やっと私の目を見てくれたな。駄目だぞ、人と話す時はちゃんと目を見ないと」

「……………あ」

言われて気付く。

何故か、今でも人の目を見て話せない俺が、いつの間にか彼女の目をちゃんと見ていた。

「興奮というのは一種のドーピングだ。映画なんかでもあるだろう？拳銃で肩を撃たれた主人公が、怒りで痛みを忘れて敵を殴り殺すとか、な」

そう言つて、女性が悪戯が成功した子供のように無邪気に笑つた。

「——先生は、精神科医か何かなんですか？」

俺がそう尋ねると、女性は「ああ」と思い出したように呟いてから言う。

「自己紹介がまだだったな。私は月見里紫苑。月見里と書いてやまなしと読む」

そして、真面目な表情をつくつて続ける。

「君は私に精神科医か？と訊いたが、答えはNOだ。しかし、医者というのは何か専門分野を持つのではなく万能であれと云われる」

「へえ……じゃあ——」

「まあ、私の専門は神経科学だがな」

「はあ!？」

急な手の平返しに、またも声を荒げてしまったのだが。

「今言つたのはあくまでこうあるべきだ、という理想論だ。医者には神様じゃないんだから、万能なんかになれるはずがない」

そう言つて、紫苑は苦笑する。

「実際、光君に我々は殆ど何もしてあげられない。我々が今出来るのは、精々意識を取り戻した後、少しでも早く社会復帰出来るように身体のケアをしておくことくらいだよ。うちにはリハビリテーション科もあることだしな」

白衣のポケットに手をつ突っ込んで肩を竦めると、茜の方を向いて優しく微笑む。

「だから、こうして毎週欠かさずに会いにきてあげる方が、余程光君の力になってはいるはずだよ。たとえ、ギアによつて触覚を始め、感覚を全て遮断されているとしても、きつとその想いは彼に届いているはずだ」

「——先生……はい、そうですね。きつと、この子にちゃんと届いてますよね」
涙ぐんで、何度も頷く茜。

あのふざけっぷりも、心配かけまいと気丈に振舞っていた裏返しなのだろう。

もしかしたら、この先生結構良い人なのかも——と、思ったのだが。

「先生こんな所に居たんですか!？」

突然病室の扉が開き、若い看護師が飛び込んでくる。

「だ、誰かね君は?人違いじゃないのか……?」

看護師の顔を認めると、目を泳がせそんなことを言い出した紫苑。

「何を訳解んないこと言ってるんですか!?准教授にどやされるの私なんですからね!!」

「佐藤君に?……看護師を怒鳴りつけるとは怪しからんな」

「怪しからんのは貴女ですからね!」『……また教授が消えた!!どうしてちゃんと見ていなかったんだ!?あの人は遊園地を訪れた子供以上に目を離せば何処かへ消えてしまうような人間なんだぞ!!』つて泣きながら怒ってましたよ!?五十過ぎたおっさん泣かせちゃ駄目ですよ!!」

機関銃のように看護師はそう捲くし立てると、紫苑の襟首を掴んで力任せに引き摺っていく。

「ちよつと待て!襟が伸びたらどうする!?どうせ引き摺り回すなら、ロープでぐるぐる巻きにしてからにしたらどうだ!!西部劇よろしく!!」

「それ貴女の願望ですよね!?絶対やりませんよ!!」

そんな風に言い合って、二人の女性は部屋から出て行った。

——ド変態なのは冗談じゃなかったのかよ!?

もうなんか、色々台無しだった。

†

「君には言っただろう?……私はメデュキボイドの開発に協力するつもりはないと」

ストレスの為か単純に加齢の為か、毛髪が減り地肌が現わになっている白衣の男に、白衣の女は先ほどのふざけたものとは異なる冷え冷えとした調子で言った。

「し、しかし教授……あれは——」

「メデユキボイドが行き着く先は何だ？」

男の言葉を遮りそう問う女。

「メデユキボイドはターミナルケアを始めとして、多くの分野で活用が期待されています。教授が開発に参加すれば、より発展的なものになると私は確信しております」

男が真面目にそう答えると、女は鼻で笑った。

「佐藤君。何故、終末期医療が敬遠されるか解らない君じゃあるまい」

「……採算が取れないと？」

男は女の威圧感に気圧され、僅かに語尾を震わせそう問う。

「当たり前だ。巨額の開発費に加え、生産費、維持費、稼働費……——それに比べ、収入は一人当たり見込めて一千万程度だ。……そんなもの、採算が取れるわけがない。赤字の一途だ」

ぐうの音も出ず、黙り込む佐藤と呼ばれた男。

「それに、そもそも患者は？……保険も利かず、病気が治るわけでもない。そんなものに金を払えるのは、一部の特権階級のみだ」

吐き捨てるようにそう言って、女は溜め息を吐く。

「どんなに研究者の志が高くても、結局、泡く銭を蓄えた老人共に使われるのがオチ——」

そんなものに、私は労力を割くつもりは無い」

そこまで言つて、女は机に積まれた書類の山から、正確に一枚抜き取る。

「……それに比べれば、総務省が送りつけてきたこれの方が、余程面白みがあると思わないか？」

「そ、それではそちらに参加すると？」

「いや」

「は？」

思わず聞き返す男。

「私は官僚共が大嫌いだ。そもそも医療に属してる人間で、あいつらが好きな奴いるか？ 欧米では実用化されている新薬でも認可するのに数年かかるし、全く対策を立てないから地方の医療は崩壊の一途——そもそも、大病院を独立行政法人化した時点であいつらの性根は腐つて——……いや、すまない。佐藤君に言つても仕方がないことだな」

思い直すようにそう呟いてから、女は男に頭を下げる。

「あ、頭を上げて下さい教授！」

「そうは言つてもな……私と佐藤君は年齢が二回り近く違うからなあ……」

それは嫌味か、と男の頬が引き攣る。

「ま、それは兎も角——」

頭を上げた女は、まるで初めてのおつかいへ行かせた娘を心配する母親のような表情で。

「今は、あの娘の帰りを願うばかりだよ」

遠い地にいる己の『作品』に思いを馳せ、女はそう呟いたのだった。

第28話 運命の片道切符

闘技場で二千人近い観客を目の前に、自分が何を話したのか……よく覚えていない。

スピーチを終えた後は《グランザム》のギルド本部へと赴き、各団員一人一人への挨拶。愛想笑いはちゃんと浮かべたけれど、反応は芳しくなかった。

当たり前だ。そりや嫌々入られて、しかもいきなりそいつが自分達の上司になるなんて気分が良いはずがない。それでも、僕の風貌に騙されてヘラヘラ食事に誘ってきた阿呆が何人かいたが、漏れ無く丁重にお断りした。

「——それでは、至らない点もあるかと思いますが、これから同じギルドの一員として何卒宜しく願いました」

最後の団員への挨拶を終える頃には、窓から見える景色は暗闇に包まれていた。

「……ふう」

礼の状態で固まっていた上体を起こして溜め息を吐く。

一体、僕は何をやっているのだろう。諸悪の根源の巣窟の中で、ぺこぺこ頭を下げて。

誰もいなくなった吹き抜けのロビーで、僕は力無く膝を突いた。金属の床から伝わっ

てくる冷気が、心まで冷やしていくようだ。

……茅場は一体、何の為に僕を《血盟騎士団》へ？

それに……認めるのは癪だけど、僕の容姿は自分から男だと言い出さない限り、対外的には女性にしか見えない。だから、茅場が「Male」の団服を僕に寄越したのは、お前の正体など看破しているという茅場の意思表示と受け取つていいと思う。だけど、それをした意図は？　もしかしたら、僕は茅場のことなんて何も知らないかもしれないのに、自分の正体を悟られるような危険を冒してまで、こんなことをした理由は何だ？

——結論として導き出せるのは、茅場は僕が茅場の正体を知っているという確かな根拠と確信を既に持つているということに他ならない。

「それなら……」

今まで泳がせていたのは何故だ？　そして、今になって首輪を嵌めるような真似をしたのは何故だ？

解らない……あいつの考えなんて、僕には——
「そんな所で何をしているのかね？」

突然そんな声が頭上から降り注ぎ、僕は目を見開く。頭上からの声、まるであの日のようじゃないか。そして、その声までもが。

僕は立ち上がりながら、螺旋階段を振り仰ぐ。

神の如く頭上から僕を見下ろすのは、真の異世界を創り上げた孤高の天才。しかし男は、神というには余りにも世俗的な姿だった。白いシャツにネクタイを締め、あの日のローブの代わりに長い白衣を羽織った——S A O 開発者としての本来の姿。

僕はその名を、怒りと憎しみを込めて叫ぶ。

「——茅場晶彦!!」

「フツ……この姿で会うのは初めましてだな、ティンクル君。いや——三雲光君、とこの場では呼ばせてもらおうか」

「——ツ!?!」

何であいつが僕の名前を……!?!

——いや、そうか。……恐らく、βテストに配布された正式版パッケージの優先購入権が原因だ。あれを貰うとき、自宅への配達のためにと、住所や氏名などの個人情報も運営サイトに入力させられた。茅場は、その時のデータから僕の本名を知ったのだろう。

落ち着け……! 絡繰りが解れば、どうということは無いだろ。兎に角、今は冷静になるんだ。

「……サイトの規約に記載された以外の目的でお客様の個人情報を使ったらいけないんじゃないの? しかも、こんな不特定多数の人間に聞こえるような場所で言うなんて

……—訴訟も辞さないよ?」

「成る程、頭の内転も速いようだ。——安心し給え。現在この付近にいるプレイヤーは、私と君の二人だけだ」

つまり、助けは期待出来ない——つて、そもそもこの状況で、誰がどうやって助けてくれるのか。……いや、一人いるにはいるけど——

「因みに、君と懇意にしているA Iは、現在別空間において拘束中だ。彼女の救援を期待しているのなら諦め給え。……とはいえ、この場にA Iが一体いたところで、何が出来るというわけでもないのだがな」

まるで僕の思考を見透かすように、そう先手を打ってくる茅場。しかし、新たな情報が手に入った。

……拘束ということは、デリート削除されたわけではない。

考えられる理由は二つ。一つは、彼女の製作者マスターが施したというプロテクトが、ちゃんと効果を発揮している、という可能性。もう一つは、茅場の方にアウローラを削除したくない理由がある、という可能性だ。

どちらにせよ、彼女が無事であることに少し安堵する。

「それで? ……そんな姿で僕の前に現われた理由は何? そのすかした面を見ていると、殺してやりたくなるんだけれど?」

「それは物騒だな。——だが、ここは《圈内》だ。その腰のものを振り回して気が晴れるのであれば、好きなだけ振り回すといい」

「あんた喧嘩売ってるの……!?!」

「喧嘩を売っているのは、君の方じゃないのかね？」

僕は息を呑んだ。何の感情も読み取れなかった茅場の無機質な瞳に、確かに感情が映ったからだ。それは、怒りとも苛立ちとも取れる——僕に対する……いや、僕の背後にいる何者かに対する明確な敵意だった。

「——私が君に興味を抱いたのは、本当に偶然だった。……あの日、チュートリアルを終えログアウトした私は、一仕事終えたような達成感とともにモニターで《はじまりの街》中央広場の惨状を眺めていた。ある種の統一感を持っていたプレイヤーのアバターは、現実と同じように美醜多様になったわけだが、あの時は皆同じような顔をしていたな。——そんな中で、異彩を放っていたのが君だった。私は思ったよ。何故、君だけがスタート時に作成したアバターのままなのだろう」と

そこで一旦区切ると、茅場は苦笑を浮かべた。

「そして、調べてみるとますます驚いたよ。君のアバターはカーディナルによって確かに現実の姿に変更されていた。しかし、性別は間違い無く【Male】……つまり男性だ。この矛盾を解消する為に、私は君のβテスト時に登録されていた本名から、駄目元

でネットの画像検索をかけてみた」

「ね、ネットの画像検索……?」

続くであろう言葉に戦慄し、寒気を覚え眩いた。

「見事にヒットしたよ。個人サイトだったがね。因みに、中学男子サッカーの地区大会の写真……だと思ふのだが、君だけアップの写真が幾つか掲載されてあったよ。——先程、訴訟云々という話が出たが、晴れて現実世界に戻れた暁には、そのプログラムの主を肖像権の侵害で訴えると良い。まず間違い無く勝訴出来るだろう」

……落ち着け、今は落ち着け。相手のペースに吞まれてはいけないと、僕は理解しているはずだろうか？

そう自分に言い聞かせ、気持ちを落ち着かせる。

「考えとくよ。……それで? 僕が奇天烈な姿なのは、現実でも同じだってことが解つて、あなたの中の矛盾は解消されたの?」

「ああ、解消されたよ。そして、世の中まだまだ私の予想を覆す事象が起こり得るのだと、改めて痛感した」

「……大袈裟だな」

「大袈裟ではないさ」

笑うわけでもなく、真面目な顔で否定する茅場。

「——そして、そんな偶然から興味を抱くことになった君は……残念ながら、原罪の蛇に唆された愚者だったわけだ」

原罪の蛇——『創世記』か。

ならばこの場合、蛇はアウローラ……違うな。蛇が彼女の製作者、イヴがアウローラで、アダムが僕か。

「……知恵の樹の実——あなたにとってのそれは、自分の正体だったというわけ？」

「いや、違う。……君はマップデータやモンスターの位置情報など、本来ならば自他含めた見聞によって知るべきものを何の労力も無く手に入れた。これが罪ではなく何だというのかね？ 少なくとも、不公平アンフェア以外の何物でも無い。そして、ルールを逸脱した君には、罰を与えなければならない」

罰を与える。

その言葉から連想された情景に、全身が怖気立つ。

「それは、つまり……僕をこの場で殺すってことか……？」

情けないことに、僕の口から吐き出された言葉は、自分の耳でも聴き取り難い程掠れて震えていた。

「まさか。そんな理不尽な真似をするつもりは毛頭無いよ。——そもそも、今回の件の主犯は月見里さんだ。……彼女は大方、君に破壊工作でも依頼したのだろう。態々、完

成前のA Iまで携えさせて」

ヤマナシ? 彼女? 破壊工作?

……どうやら、僕と茅場の認識には、随分と齟齬ソゴがあるらしい。

だが、口にはしない。もし訂正して、万が一それが引き金トリガになったら——僕の頭は、文字通り吹っ飛ぶのだから。

僕が黙っていると、茅場は無造作に白衣のポケットに手を突っ込んだ。

「——正直に言おう。私にとつて、君は目障りな存在なのだよ。だから光君、君にはインクラッドから——この世界から退場してもらおう」

そう言つて、茅場はこちらに向かつて何かを放り投げてくる。

天井にぶら下がったシャンデリアの如く灯りを反射して輝くそれを、殆ど機械的に危な気無く掴み取つた。

「……結晶クリスタル……?」

掌に載せたそれは、幾度と無く使つてきた結晶アイテムにまず間違い無かつた。しかし、この——ピンクと水色のグラデーションが神秘的な——結晶は、今まで見たことが無い。

「そのアイテムの名は、アイテム名：クリスタル《次元結晶》という」

「《次元結晶》……?」

「そう。この世界で唯一、プレイヤーをログアウトさせることの出来るアイテムだ。光君、今すぐこの場で使い給え」

「は？」

意味が、解らなかつた。

同じ言語を話しているはずなのに、脳が理解することを拒絶する。

「失樂園、といったところか。蛇に唆された愚者アダムとイヴが辿り着く先は決まっているだろう？」

「……本気、なのか……？」

「本気だとも。……少々惜しいが、リスクマネジメントの観点からいっても、これが最良だ」

結晶を持つ手がガタガタと震える。

本当にこれを使えば、現実に戻ることが出来るのか……？

もう……命懸けで怪物と戦う必要も、孤独に震える夜も無くなるのか……？

でも、でも……！ これを使うことは……！

「……酷い表情だな。もつと喜ぶものと思つたのだが。——ああ、そうか。残りのプレイヤーへの罪悪感かね？ 安心するといい。それを使うのに、遠慮も、後ろめたさも感じることはない。何故なら、これは罰なのだから。それに、君が今更他者に対して罪悪

感を抱くなど片腹痛い、と……そうは思わんかね？」

……そうかもしれない。

もう——頑張らなくていいのかな？

「起動コマンドは『アドベント』だ」

「あ——」

口を開きかけ、閉じる。

……そうか、そうだったんだ。

「……？　どうかしたかね？」

「——……僕は、ずっとこう思っていた。あなたの目的は只一つ、真の異世界を創ることだと。そしてそれは、死が現実になったことで達せられたのだと」

「……その通りだが……君は何が言いたいのかね？」

「確かに、異世界を創る……それが、あなたの予てからの願いだっただろう。でも、あなたにはそれとは別に望みがあったんだ」

何故だろう？　こんな状況だからだろうか。

解るはずがないと思っていた茅場の考えが、内面が……少しだけ理解できた気がする。

「天才というのはある意味孤独だ。……きつとあなたには、友達とテストの点数を競い

合ったりした経験は無いんだろうね？ 誰かに勝ちたいと思ったり、こいつには負けられない——そんな誰もが一度は抱く対抗心を、子供時代あなたは持ったことが無かった」

「……………」

「だけど大人になってから、あなたは遂に巡り合ったんだ。負けたくない、勝ちたいと思えるような相手に」

アウローラはああ言っていたけど……きつと、一方的にじゃなく、互いに相手を好敵手ライバルだと思っていたんだ。

「こんな面倒な事をしてまで、どうして僕に接触してきたのか。……KOBの戦力にする為というのも、それどころか僕がヒースクリフの正体を知っているということですから、あなたにとっては只の口実に過ぎなかったんだ」

僕の背後にいる——と、茅場は思っている——人物。医者でありながら、世界トップクラスの人工知能を造り上げた天才。

彼も……いや、「彼女」もきつと本来はあの日、SAOの開発者の一人としてログインする予定だったのだろう。そして、自らオープニングイベントをぶち壊してやるつもりだったのかもしれない。でも当日になって用事でもできたのか、急遽ログイン出来なくなり、代わりに自分が造ったAIを送り込んだ。

「あなたはこのセカイで、本当はヤマナシ教授と戦いたかったんだ。……でも、それはもう叶わない。——だから、代理である僕と戦うことを選んだ」

……随分と傍迷惑な話だ。でも、曲がりなりにも契約は契約だ。もう少し頑張つてやろう。

凡人が天才を打ち負かす。天才にとつて、これ以上の屈辱があるだろうか？

「茅場に恥をかかせる」。……やつてやろうじゃないか！

「付き合つてやるよ第百層！　そして、僕がこの手で、このクソゲーを終わらせてやる！！」

叫び同時に、結晶を宙へと投げて《月華》を抜き放つ。

居合い一閃。

苦も無く砕けた結晶は、光の破片となって空気に溶けた。

……ごめん。父さん、姉さん。

キリトを明日奈を……皆をこのまま見捨てていくわけにはいかないから。そして、里香との約束があるから。

だから僕はまだ、現実に戻るわけにはいかないんだ。

「フッ」

僕の推察を真顔で聞いていた茅場が、最早我慢の限界だと言わんばかりに破顔した。

「君は実に面白いな。流石は月見里さんの人選だ」

ヤマナシ教授が直接僕を選んだわけじゃないけど……まあ、この際訂正などするまい。

それにしても……僕って、そんなに面白い人間なんだろうか。

「本当に、君にはいなくなってもらうつもりだったのだがな。——だが、予定調和ほど詰まらないものは無い。君くらいの不確定要素があつた方が、今後の展開に面白みが増すだろう」

そんな戯けたことを言うと、茅場はポケットから左手を出して無造作に振った。そうして空中に出現したのは、システム管理者用のウインドウだった。

ウインドウを操作する茅場に僕は警戒したが、杞憂に終わった。

あの日僕らのアバターが光に包まれ変化したように、茅場の姿が見慣れた聖騎士に戻ったのだ。

「……ヒースクリフ」

「ティンクル君、最終ボスは私が勤める。その時、君と私で決着をつけよう。——だから、私が己の正体を公にするまでは、私が茅場晶彦であることは他言無用だ」

「もし、誰かに言ったら……？」

「そうだな——今度こそ、アインクラッドから退場してもらおうか。勿論、現実世界から

もだが」

つまり、警告はしたから今度は殺すってことか。

……脅迫も二度目になれば慣れたものだ。

「それ以外は、特に君に制限をかけるつもりは無い。……まあ、アスナ君が戻ってくるまでの間は、副団長の職務を全うしてもらうがね」

「……アウローラはどうなるんだ？」

「私が預かっておく。ゲームがクリアされた際には返還しよう。——それではティンクル君。これにて、副団長になるにあたっての注意事項の言い渡しを終了する。明日からは職務に励んでもらうが……今日はもう遅い。帰ってゆっくり休み給え」

そう言って、ヒースクリフは階段を上がって自室へと戻っていった。

その姿を最後まで見送ってから、僕は盛大な溜め息を吐き出した。

「はああああああ……ドツと疲れた」

このまま床に倒れ込んでしまいたかったが、そんなわけにもいかない。茅場と一つ屋根の下で夜明かしなんて虫唾が走るし、何より今夜はちゃんとベッドで休みたかった。

ふらつく身体に鞭を打って、足を前へと動かす。

……本当にいなくなってもらうつもりだったことは……あの結晶を使えば、本当に還れたんだな。

今更若干後悔するが、それぐらいは許してほしい。

ギルド本部を出て、月明かりに照らされた道を独り歩く。

今までは、たとえ一人で歩いてはいても、見えないだけで僕の傍には彼女がいて、彼女が道を示してくれた。でも、今は——本当に独りぼっちだ。

「僕は……これからどうすれば良いんだ」

百層まで付き合うなんて啖呵を切ったけれど、僕が最上階に辿り着くまで生きている保障は無いし——少なくとも、そこまで辿り着くのに、もつと大勢の人が亡くなるだろう。そして、非力な僕に、茅場を止める手段は無い。

緊張が解けたからか、膝がガクガクと笑う。

やっぱり茅場は狂ってる。

本人は理不尽な真似はしないなどとのたまっていたけれど、僕らプレイヤーをこのセカイに閉じ込めた時点で、もう十分過ぎるくらいに理不尽だろう。

……でも、今まで通り僕の方から巻き込まなければ、里香達に危害が及ぶことは無さそうだ……やっぱり保証は無いけれど。

——あれは、良い切っ掛けだったかもしれない。僕が茅場の逆鱗に触れるようなことがあっても、周りに誰もいなければ、被害は僕だけで済むのだから。だから、もう二人に関わるのは——

やめにしようよ、そう思ったとき——視界右側に、小さな手紙のアイコンが点滅していることに気が付いた。

……誰からだろう？

首を傾げながら、アイコンをタッチしてフレンド・メッセージを開く。

「あ……」

差出人は、キリトだった。

【今日のデュエル、勝てなくて悪かった】

そんな書き出しに、思わず苦笑する。

「勝てなくて当然だよ。相手は、開発ディレクターなんだから」

そうやって独り呟いて、続きを読む為スクロールする。

【筆不精だから、簡潔に書こうと思う。まず、アスナはちゃんと説得したよ。『こんなことされて嬉しいわけじゃないじゃない！』って、かなり怒ってたけどな。……今回は、あなたの好意に甘えることにするよ。——でも、敢えて言わせてくれ。あなたから見たら、俺達は頼りないのかもしれない。でも、たまには周りを頼ってみても良いんじゃないのか？ 俺達があんたを頼るように、あんたも俺達を頼ってくれ】

「頼りない……なんて……そんな風に、思ったこと……ないんだけどな」

途切れ途切れに吐かれた言葉に、嗚咽が混じる。

「それと、これだけは覚えておいてくれ。たとえ何があっても、俺はあんたの味方だから」

これは反則だ。

視界が霞み、色々な想いが込み上げてくる。

……女つたらしめ。僕が女だったら、間違いないで惚れてるぞ。

誰もいない夜道だからか、感情の籠が外れてしまう。

「うっ……うっ……うわああああああああああああああああん!!!」

外周から僅かに覗く月明かりに照らされて、鉄の都に哀哭の音が響き渡った。

第29話 Scrooge

《血盟騎士団》入団から一夜明け、僕はギルド本部である尖塔の——それも、最上階に設えられた個室を訪れていた。

部屋の内装は執務机に黒革張りのソファアームが一つという、とても私室としても使っているなどとは思えない程、無機質で生活感というものがまるで感じられないものだった。しかし、このヒトの温もりとでもいうべきものが著しく欠落しているこの部屋は、ある意味部屋の主の性向を色濃く反映しているとも言つていい。

目の前のこの男と対峙するのは、果たして何日目だろうか。きっと、数える程しか——それこそ、片手の指で収まる程度だろう。にも関わらず、何度も顔を突き合わせ、戦い続けているような錯覚に陥る。いや、少なくとも、目の前のこの男と戦い続けていること自体は、僕の錯覚などでは決してない。

「おはようございます、団長」

落ち着いた声音でそう言つて、軽く頭を下げる。すると、ヒースクリフは少しばかり目を見張った。

当たり前の話ではあるが、仮想世界は現実の現象を完璧に再現出来ているわけではな

い。水の感触を始めとした触覚、そしてプレイヤーの表情——この二つが、その最たるものだろう。特に表情の場合、プレイヤーの感情を過敏に察知し、過剰に表現するという性質がある。だから、僕のような表情を作る人間にとっては、どれだけ笑うか、どれだけ怒るか、などというさじ加減が非常に難しい。しかし、不都合なことがかりでもなく、有益なことも少なからずある。——例えば、一晩泣き明かしても、瞼を赤く腫らさなくて済むこととか。

頭を上げ再び正面を向くと、真鍮色の瞳と目が合う。そして、ヒースクリフは口元を緩めると、口を開いた。

「おはよう、ティンクル君。昨夜はよく眠れたかな？」

「ええ、ぐっすり」と

シニカルな笑みを浮かべ、淀みなく答える。

動揺は無い。一晩かけて、気持ちの整理は付けたつもりだ。しかし、昨日の今日で再びこの男と二人きりになるとは思っていなかった。

一つ大きく息を吸って、吐き出す。

「それで？ こんな所に呼び出して、どういうつもりだ？」

意識的に口調を切り替える。上司に対するそれから、仇敵に向けたものへと。

「態々、メールで呼び出して。しかも、こんな朝早くに」

現在の時刻は午前六時二十一分。メールが届いたのが六時丁度。内容は、至急ギルド本部に来られたし、というもの。たとえ相手が茅場ではなくとも、こんな時間に一方的に呼び出しをかける奴と友好的関係など築けるはずもない。それでも相手が相手なだけに無視するわけにもいかず、僕は今こうしてこの男と相對しているわけだ。

「少々面倒なことになっていてね」

溜め息を吐くでもなくそう言つて、ヒースクリフは机の上で手を組んだ。

「フネワード前衛部隊の隊長であるゴドフリー君からご指名だ。何でも、君の実力を自分の目で確かめたいらしい」

「ご指名というフレーズに思わず溜め息を吐きそうになり、かぶりを振った。そして、溜め息の代わりに疑問を口にする。

「……デュエルでもしようつていうのか？」

「いや。彼と君を含めた団員五人のパーティーを組み、ここ五十五層の迷宮区を突破して五十六層主街区まで到達する、という内容のようだ。K O Bでは普段五人一組で攻略を行っていることから考えても、中々に実戦的だと言えよう」

警戒心が僅かに揺らぐ。

幾ら実戦的だとはいっても、所詮は五十五層——数日前まで最前線だった七十四層に単身潜っていたのだ——その程度、何の問題も無い。

しかし次の瞬間、甚だ浅慮だったと思ひ知らされる。

「君ならば、何ら問題無いように思う。しかし、十分に留意してもらいたいののは、今回君を副団長に任命するのにあたって、団長としての強権で押し通した面が否めないという点だ」

所詮アスナが戻ってくるまでの代理に過ぎないのに何を大袈裟な——とは、微塵も思わなかった。

自分の意識の中で、警戒レベルが急上昇する。

「君にも以前言った通り、『血盟騎士団』はトップギルドとプレイヤーには認知されている。だからこそ、彼らにもそれ相応の自負心がある。——幾らアスナ君が不在の間だけとはいえ、新参者の君にサブリーダーになられては面白くあるまい。そして、彼らに滅多に口を出さない私が、君を獲得する為に強硬な姿勢を見せたという相乗効果で、彼らの君を見る目は生易しいものではなくなっている」

「ネットゲーマーは嫉妬深い、か……」

小さくそう呟くと、ヒースクリフは頷いた。

「私が言うのもなんだが、気を付け給え。君には、最上層まで上がって貰わねばならないのだから」

自分の部下が、暗に何か良からぬことを仕掛けてくるかもしれないと言うヒースクリ

フに呆れそうになるが、そもそもこいつはプレイヤー側ではないのだと思ひ直す。「解った。……話はそれだけか？」

素つ気なく尋ねると、ヒースクリフは苦笑と解る笑みを浮かべた。

「いや、本題はここからだ。——昨日、一つ言い忘れたのだがね」

そう切り出したヒースクリフの顔には、既に笑みは浮かんでいない。

「この世界に留まった君の意志力に敬意を表して、報酬としてどんな質問にも三つ答えよう」

勿体振るわけでもなく、世間話でもするかのような気軽さで、大いなる選択を迫られた。

「……ッー」

息を呑む音が狭い室内に空虚に響く。

矢継ぎ早に問い質しそうになるのを懸命に堪え、思索する。

これは……又と無いチャンスだ。有益な情報をどれだけ引き出せるかによって、今後の動きに多大な影響を及ぼす。その情報が良きにしろ、悪きにしろだ。

訊きたいことは山ほどある。特に、何で態々現実の姿を模したアバターに変えられたのか？ そのせいで、一体どれだけ余計な苦勞を強いられたことか!! ——だが、そんなことは……百歩譲って……いや、千歩譲って今はいい。そんなことを訊いても、到底

納得出来る答えが返ってくるとは思えない。同様に、根本的な疑問——アインクラッドで死んだプレイヤーは現実でも本当に亡くなっているのか？ ゲームをクリアすれば、本当にログアウト出来るのか？ 等々——も省く。

高速で取捨選択を繰り返して、選ばれなかった問いの骸が山となってそびえ立つ。一体、どれだけの時間、思考を巡らせていたのか。

掴み取った問いをぶつける前に、別の問いを投げかける。

「これは、三つの問いには含めない。だから、答えたくなければ答えなくていい」

そう前置きをした上で、真鍮色の瞳を睨み付ける。

「返ってくる答えが真実だと、信用して良いんだろうな？」

「……やれやれ。ここまでくると、用心深いというよりは猜疑心が強いと言った方がいかもしれんな。私が信用出来ないという気持ちは、解らんでもないがね。——安心すると良い。嘘偽り無く、誠実に答えると約束しよう」

鉄面皮、と言うほど表情に乏しいわけではないが、その表情からは真偽を窺い知ることとは出来ない。

信用すべきか否か？ 少なくとも、信じなければ先には進めない、か。

そうやって、無理やり自分の中で折り合いを付ける。そして、僕が最も危惧し恐れていることを口にする。

「茅場昌彦。あなた自身が、或いはあなたの意思で、僕の友人や知り合いを手にかける、ということとは無いと思つていいのか？」

そして、誰よりリズベツト……里香に、僕の好きな人に。

僕の心の内を透かしたわけではないだろうけれど、返答は間髪を容れず返つてきた。

「無い、と断言しよう。私の意思で、諸君らプレイヤーの生死が左右されることは一切無い。……そして、たとえ君が誰かに私の正体を露見させようとも、その誰かに危害が及ぶことも決して無い。その点に関しては、絶対の保障をしよう。」

「神は、何者にも公平である」。そんなフレーズが頭を過る。

フェアネス

茅場がこの約二年間守り続けている公平さは、至る所に表れている。例えば、ギルドの運営をアスナに任せ、自分は凡そ口を出さないこと。そして、先の《ラフコフ討伐戦》に参加しなかったこと。

しかし、それにも例外はある。その例外がヤマナシ教授絡み……つまり、僕に対して、というのが信用出来ない理由でもあるのだが……それでも信用するしか——いや、信じたいと思う自分がいる。

そして僕は、信じたいと思う自分に屈した。

「……解つた。——残り二つの質問は、保留にしたい」

様々な感情が脳髓を轟めく。もはや、さつきまでの余裕は何処にも無い。だからこそ

の保留。

「良いだろう、賢明な判断だ。ゆっくりと考え給え」

こうして、二度目の僕と茅場の直接対決は幕を閉じた。

↑

「ガツハツハ！ いやゝ待つてましたよ、副団長代理殿」

集合場所と伝えられた《グランザム》西門に到着するや否やそんな声に出迎えられ、早々に溜め息を吐きそうになる。

僕を待つていたのは、以前にも顔を合わせたことのある、もじやもじやの巻き毛に髭面の堂々たる偉丈夫だった。

「お待たせしてしまつたようですみません。若輩者ではございますが、今日は宜しくお願ひします、ゴドフリーさん」

申し訳なさそうに頭を下げてから、柔和な笑みを浮かべ牽制し返す。

しかし……何をしてくるか解らない、とは事前に警告を受けていたものの、まさかこう来るとは……。

表情筋を笑みの形で固定したまま、何気ない口調で切り出す。

「ところで、ゴドフリーさん——そちらの方は謹慎中だと伺っていたのですが、わたしの記憶違いでしょうか？」

そう言つて、ゴドフリーの隣に立つ男を流し目で見やる。勿論その男とは、数日前に小競り合いになつたクラデイルのことだつた。しかし、思ひの外自制心が働いているらしく、こちらの挑発に乗つてくる気配は無い。代わりに、渋い顔になつたゴドフリーが口を開いた。

「あー……：気持ちは解らんでもないですが、そういう態度は解せませんな。仮にも、これからは同じギルドの一員なのですから、不和のままではいけないわけにもいきませぬ」

「それはどうでしょう？ たとえ同じ屋根の下で暮らしていても、会話の無い親子或いは夫婦——というのも殊更珍しくありませんし、今後一切関わらない、というのも一つの解決策なのでは？」

拒絶と提案を同時に熟し、より一層笑みを深める。一方、ゴドフリーは対照的に表情を厳しくした。

「……：噂違わず、難儀な性格をしとるようですな」

「つい最近、友人にお前は意地が悪いと言われましてね。……：なので、一応自覚はしているつもりですよ」

「自覚していながら改めないのであれば、余計性質が悪いのではないですか？」

何故僕は初めて話すおっさんに、性格を改めろと言われているのだろうか？

そんな疑問を浮かべながら、しかし、首を傾げる代わりに忠告を口にする。

「性格や言動というものは、一日や二日で変わるようなものではないと、わたしは思いますが、もし変わるとすれば、それはその人の内面が変わったわけではなくて、変わったように見えているだけでしょうね。……それが、見る側の見方が変わったのか、見せる側が意図的に変えているのかは別にして、ですが。——そういうのがお望みでしたら、紳士から淑女まで幾らでも演じてみせますが、如何ですか？」

実際、現在進行形で僕は演技の真つ最中だ。

無論、むさいおっさんを口説く為ではなく——同じ境遇だとしても、男に対するものより女性に対するものの方が、何かと風当たりは強くなって済むだろう、という我ながら少々狡い理由ではあつたのだが。

そんな内心はおくびにも出さず、淑女の笑みを湛えて小首を傾げてみせると、ゴドフリーは毒気を抜かれたように暫し呆然としてから、先ほどと同じように豪快に笑つた。「いやあ、結構。始めから解っていたことですが、やつぱり私では貴女に弁では勝てんよ。うだ。と言つても、剣技で負けるつもりは毛頭ありませんがね。——おっと！ 私の武器は剣ではなく、この斧でしたなあ〜！ ガツハツハ!!」

そう言つて愉快そうに肩を揺らすゴドフリーの背で、大振りのポールアクスと一緒に揺れる。

果たして、僕の忠告はこの男に届いたのだろうか？

そんな問いかけは言葉になるはずもなく、頭の隅へ押し流され、やがては消えていく。「仰る通りクラデイルは謹慎中でしたが、本人も心を入れ替え猛省したようなので、本日付で復帰させました」

この答えを聞く為だけに、随分と遠回りをしたものだ、と心の中で苦笑を浮かべる。

「そうですか、解りました」

そう言うと、クラデイルがのつそりと前へ進み出てきた。

思わず眉を顰めそうになるものの、どちらにせよ《圈内》では何も出来まいと思いついて警戒を解く。

「先日は……」迷惑をお掛けしまして……。……一度と無礼な真似はしませんので、許していただきたい」

クラデイルの口から途切れ途切れに吐き出された言葉は、予想していた通り謝罪の言葉だった。渋々というわけではなく、心から反省しているように、恭しく頭を垂れるクラデイルに関心するように、ゴドフリーは頻りに何度も頷いている。

予期せず流れた問いの答えを得た僕は、意識的に苦笑と解る笑みを浮かべた。

「頭を上げてください。もういいですから」

「……ありがとうございます」

そう言って、殊勝に頭を下げたクラデイルの表情は、垂れ下がった長い前髪に隠れ

て窺い知ることは出来ないが、知る必要もないことだ。

「よし！…これで一件落着だな!!」

意図して省いた言の葉に、ゴドフリーもクラデイルも気付いた様子は無かった。

少し遅れて合流した団員は、セントルシア、バルバドスとそれぞれ名乗った。セントルシアは二十代と思しき女性プレーヤーだった。恐らく、男女比を考慮してバランスをとった結果なのだろうが、僕は男なのだからセントルシア一人が女性という状態だ——といつても、態々それを指摘するつもりは無いのだけれど。

「じゃ、今日は宜しくね。私のことはルシアって呼んで」

人懐こそうな笑みを浮かべて気さくに話しかけてきたのは、僕を女の子と思っているからか、はたまた僕が不安に感じていると思っただけか。どちらにせよ、悪い人ではなさそうだ。

「宜しく、ルシア。わたしのこともティンクルでいいから」

そうやって無難に返してから、こちらも笑みを浮かべる。

ルシアに比べ、僕はといえば少なくとも良い人ではないだろう。嫌だ嫌だと思いつつも、誤解を解く気は更々無いのだから。しかし、悪人という方でもないだろう。どちらかといえば、悪い人というより人が悪いという方が正確だ。……まあ、そんな風に他

人事のように思っている時点で、十分悪い人なのかもしれないが。

「もしかして、ルシアとバルバドスって付き合っていたりしますか？ そうじゃないにしても、現実でもお知り合いなのでは？」

「えっ？ ……そうだけど、何で解つたの？」

戸惑いの声を上げたのは、ルシアではなくバルバドスだった。そして声には出さずとも、同様にルシアも驚いている。

「セントルシアとバルバドスって、どちらも英連邦王国の国名だから、偶然とは思えなくて」

そう指摘すると、どうやら正解だったらしく、バルバドスは照れくさそうに笑った。

「いやあく名前だけでバレたのは君が初めてだよ。まあ、別に隠しているわけじゃないんだけどね」

どうやら、二人の関係は前者だったようだ。だからといって、何が変わるというわけではないのだが、先ほどよりも距離が縮まったように感じるのはこちらの思い上がりではないだろう。

「よし！ 親睦も深まったところでそろそろ出発——つとその前に、諸君らの結晶アイテムを全て預らせてもらう」

雑談はそこまでだ、という風にゴドフリーがそう切り出したのだが、その内容は眉を

響めなくなるようなものだった。

「目的を聞かせてもらえませんか？」

「うむ。今日の訓練は限りなく実戦に近い形式で行おうと思うのだが、危機対処能力を測るのが目的の一つなのでな……結晶アイテムの回収は、そういった意図で行う」

「そうですか、解りました」

素直に了承したのが意外だったのか、ゴドフリーは眉を片方吊り上げる。

こちらの真意を探るような不躰な眼差しを浴びせられるが、その程度で気分を害するほど繊細な質ではない。

ストレージから各種結晶アイテムを実体化させ、ポーチの分も合わせて差し出す。

《回復》《解毒》《転移》《回廊》《記録》……合計四十近いそれらにゴドフリーは見るからに面食らったようだが、何も言わずに受け取った。しかし、ルシアはそういうわけにもいかないようで、唾然とした様子で口を開いた。

「貴女、普段からそんなに持ち歩いているの……？」

その疑問はもつともだろう。所持出来るアイテム数は、個数ではなく重量で決まっているものの、流石にこの量は多過ぎる。

特に隠す必要も無いので、正直に答える。

「わたし、限界までストレージ拡張してるんだけど、普段は基本的にソロだから必要以

上に持ち歩く癖がついてるんだよ。ほら、備えあれば患い無しってね」

もはや座右の銘と言っても過言ではない格言を口にして、片目を瞑ってみせる。

「なるほどね」

そう言つて、ルシアは納得したように頷く。

バルバドスも感心したようにこちらを見詰めていたが、ルシアの意味有り気な視線に気付いて目を逸らした。

同じように僕以外の三人からも結晶アイテム——三人とも個数は一ケタだった——を回収し、ゴドフリーは満足気に頷いた。

「よし、確かに預かった。念の為にポーチの中も確認したいのだが宜しいですか？」

そう言われ、反射的に断りそうになるが——そもそも、見られて困る物など入っていない。それに、痛くもない腹を探られるのは後々面倒なことになるかもしれない。

そう思い、ポーチの口を広げて見せる。

「指輪……ネックレス……それにピアス——……こんなに貴金属を詰め込む必要はあるんですかな？」

お前はこれから何をしに行くつもりだ、と言わんばかりの呆れたような物言いに、そんなもの個人の勝手だろう、と思つたのだが——

「女の子なんだからどんな時でもお洒落したいと思うのは当然よ！　バルもそう思うで

しよ!？」

「お、おうー!」

それを口にする前に、そういう話題に敏感であろうルシアから思わぬ援護射撃が。……残念ながら、弾丸は綺麗に的外れではあったが。しかし、ルシアの剣幕に押されるように、バルバドスも慌てて同意する。

こう言われると、男としては何も言い返せない。

「そんなもんかねえ……? 女性心理つてのは、私にはほとんど解らんですなあ……」

「そんなんだからモテないんですよ、まったく! ——つてことでティンクル、この筋肉ダルマの言うことなんて全然気にしなくていいからね?」

筋肉ダルマつて……。

擁護してくれるのは嬉しいけど、お洒落が目的つてわけじゃないし……——それに、流石にその言いようはあんまりだろう。

ゴドフリーのことが同じ男として不憫に思えてきた僕は、やんわりとルシアを窘める。

「ルシア、流石にそれは言い過ぎかなあ……なんて」

声に力が無いのは、自信の無さの表れか。それも当然と言えば当然だろう。何しろ、僕だつて女性心理なんて解らない。だから、どうしても自己弁護のようでも気が引けるの

だ。

しかし、そんな僕の自信無き気な態度がどう映ったのか、ルシアは瞳を煌めかせ、何かを抑えるように口元を押さえた。

「ちよつと、ウソ……天使だ、天使がここにいる……」

耳を疑いたくなるような世迷言だが、この世界の音声は脳に直接データを送って出力しているものなので、基本的に「聞き間違い」というのは起こらない。「意味の取り違え」なら現実同様受け手話し手次第で起こり得るが、この文脈では間違いようがない。それでも否定したい気持ちが強く、半ば願望混じりに尋ねる。

「え〜つと……誰が？」

「勿論貴女のことよ!! 天使がダメなら聖女と言っても良いわ!! こんな筋肉ダルマにまで優しく出来る人なんてそうそういないって……。女が男に優しくするのって、大なり小なり下心あるからだし。まあ、逆もまた然りかもだけど」

「うわあ……」

もの凄く嫌そうな顔で呻くように声を上げたのは、勿論彼女の恋人のバルバドスだ。きつと、僕もここまで露骨じゃないにせよ、似たような表情をしていることだろう。実際、ゴドフリーも顔を顰めている。一方、さつきから会話に全く参加していないクラデールだけは無表情を貫いている。

このままこの話題を続けると、これ以上の異性の暗黒面ダークサイドが顔を覗かせそうで……—
そう思ったのは僕だけではないらしく、僕ら男三人の意思は完全に一致していた。

「よし、では出発!!」

そう言つて強引に会話を終了させたゴドフリーに異論を唱える人間は、少なくとも表面上はこの場に存在しなかった。

第30話 星の瞬き

鈴蘭。スズラン亜科スズラン属の多年草。別名として君影草、谷間の姫百合を持つ。春になると白く小さな鈴のような花を咲かせ、フランスではこの花を花嫁に贈る風習があるそうだ――

五十五層のフィールドは、植物の少ない荒涼とした大地だ。変わり映えのしない風景は見ていて面白いものではなかったが、訓練なのだから仕方が無い。それでも詰まらない時間というわけでもなく、足元を跳ねるイナバの姿に表情を緩ませた。

ゆつたりとした足取りで荒野を進む僕らを数度に渡ってモンスターが阻む。その度にゴドフリーの指揮のもとパーティー戦を行ったのだけれど、ついつい彼の命令に口を挟んでしまい、その度に嫌そうな顔をされた。怒られなかったのは、本人も思うところがあったからだろうか。

やがて、幾つかの丘陵を越えた時、眼前に灰褐色の岩造りの迷宮区が見えてきた。

「よし、ここで一時的休憩！――副団長もそれで宜しいですか？」

いつの間にやら代理が消えたその呼びかけに戸惑いつつも、無言で頷く。

高く頭上に昇った太陽は、秋も半ばだというのに、気持ちの良い陽射しを降り注いでいる。

時刻は既に正午を回り、昼寝には良い頃合いだ。

「ん、ん〜！」

地面に腰を下ろし、指を組んで大きく伸びをする。膝の上に座らせたイナバも一緒になつて身体を一生懸命反らせていたのには思わず笑みが毀れた。

乾いた風は心地良く、このまま眠ってしまいたい。とはいえ、こんな岩肌の上で仮眠を取るのには、少々勇気が必要だが……。

そんな僕の姿を見てゴドフリーは溜め息を吐きそうになつたようだが、自制心で飲み込んで、代わりに言葉をつき出した。

「では、食料を配布する」

オブジェクト化された五つの革袋のうち、一つをこちらに向かって放り投げた。両手で包むように受け取り、何の気無しに開けて中身を確認する。中に入っていたのは、何の変哲も無い水の入った瓶とNPCショップで売っている固焼きパンだった。——少なくとも、見る限りは、だが。

思わずマジマジと見詰めていたからか、同じように包みを受け取ったルシアが苦笑を浮かべて話しかけてきた。

「あはは……ごめんねー。うちの経理すつごいケチだからさ、食費まで削ってやがんの」
「そう言うなつて。ダイゼンさんなりに経費削減の為に頑張つてるんだらうからさ」

そうは言いながらも、バルバドスも不満を持つているのは言葉の端から読み取れる。しかし、一概に不満とはいつても、ルシアとバルバドスでは矛先が違う。だが、それを指摘するのは余計なお世話、というものだろう。何より、今は“この状況”を打破する方が先決だ。

「いえ、実は……わたし、今日お弁当作つて来てまして。こんなことになるとは思つていなかったなので、自分の分だけなんですけど……」

困り顔でそう切り出すと、僅かにたじろぐような音が耳に入る。

「どうした？」

「ああ、いえ……何でも無いです」

音の主はクラデールだ。だが、今は努めて無視を決め込む。

対して、ルシアとバルバドスはそもそも関心が無いのか——単純に耳に入っていないのかもしれないが——そちらに見向きもせず、共に食い付いてきた。

「ホントに!?! 見せてもらつて良い!?!」

「ティンクルさんのお弁当なら期待出来るね」

「ソレ、どういう意味だコラ」

「ああ、いや……」

ルシアに半眼で睨まれ、明後日の方向を向くバルバドス。事情は何と無く察しが付くけれど、触らぬ神に祟りなし、だ。代わりに、ストレージを開いて小さめのランチボックスを實體化させる。

「あまり期待されても困るんですけど……」

苦い笑みを浮かべそう前置きしつつ、ボックスの蓋を開ける。

……というか、本当に期待されても困るのだ。《料理スキル》は確かに完全習得してはいるが、所詮弁当、しかも男が作った料理なのだから。

だのに、そんな内心を裏切るように――

「おお……」

「……………っ！」

有声無声の差は有れど、ほぼ同時に上がる感嘆の声。だが、純粹に感心するような眼差しを向けるバルバドスとは異なり、ルシアの表情には悔しさが滲んでいるように見えるのは、決して僕の気のせいでは有るまい。

予想外の反応に戸惑っていると、バルバドスが更なる追い撃ちをかけてくる。

「予想はしてたけど、やっぱりティンクルさんのお弁当って凄く女の子らしいね」
ピシリ、と何かが音をたててひび割れる。

笑みで歪めた口元を引き攣らせつつも、最後の希望を込めてルシアに尋ねる。

「そ、そうですかね……？　ルシアはどう思——」

「玉子焼きにブロッコリーとカリフラワー……え？　何これ？　……たこさんワインナー？」

「え？　……ああ、はい。でも、そのワインナーはわたしが作ったんじゃないで、出店を開いてたプレイヤーさんから買ったんですけど……」

ルシアから発せられる異様な圧力に気圧され、思わず敬語になってしまふ。しかし、ルシアの声のトーンは一層低くなる。

「で、その下に敷いてあるのはレタス？　……このハムで巻かれた丸いのは？」

「えくと、それは俵おにぎりです。……海苔がどうしても手に入らなかったので、火で少し炙ったハムで巻いてみました」

「なるほどねー」

最後に力無くそう言ったルシアの瞳は、生気を失ってしまったかのように光沢を失ってどこか虚ろだ。

そして、そんな彼女にバルバドスがあげつらかんとした口調で止めを刺す。

「ルシアには、いつの日かこんなお弁当作ってほしいなあ」

「あはは……そうね、気が向いたらね」

ルシアの乾いた笑いが、何も無い荒野に虚しく響く。釣られて笑ってしまいそうになるが、自分まで傷心に引き摺られると收拾が付かなくなりかねない、と何とか思い留まった。

そもそも、こんな話題を二人に振ったのは、当たり前だがお互いが傷付く為ではない。そう思い直して、僕は革袋から固焼きパンを取り出した。

「——そういうことなので、良かったらバルバドスさん、このパン貰ってくださいませんか？ 流星に両方は食べきれませんし、お若い男性でしたら、そのパン一つでは足りないでしょう？」

そう、僕の目的はこの固焼きパンのリリース——延いては、悪意を向ける者を炙り出すことだった。

あまり知られてはいないことだが、例えば麻痺毒であれば酢酸系の刺激臭……といった具合に、SAOの毒物には僅かではあるものの総じて固有の“ニオイ”がある。つまり、食物に含ませられている場合、食物本来の匂いか否かが解れば口に入れてしまう前に気が付くことが出来る、というわけだ。

そして、僕は先ほど革袋を開けた瞬間、固焼きパンの香ばしい匂いに混じって微かな刺激臭がするのを嗅ぎ取っていた。

もつとも、その僅かなニオイに気が付けたのは、《料理スキル》完全習得の副産物とし

て身に付いた嗅覚と……悔しいが、事前に茅場の忠告を受けていたお蔭だった。——だから、バルバドスが今回の件に無関係であるならば、この毒入りパンを問題無く受け取るはずだ。

「それもそうだね。じゃあ、ありがたく頂戴するよ」

そう言つて、バルバドスは特に警戒するでもなく、僕の手から固焼きパンをヒョイト掴み取つた。

……これで、バルバドスは白。——恋人が毒入りパンを受け取るのを見て何の反応も示さないことから、同じくルシアも白。

二人が白であつたことに内心安堵しながら、小さく息を漏らす。

兎にも角にも、これで容疑者は二人にまで絞り込めた。が、この中に毒物を混入させた犯人がいけない可能性もある。この支給品を用意したのが僕の知らない第三者、という場合も考えられるからだ。……しかし、その可能性をこの場で考えるのはナンセンスだろう。

犯人の目星は付いている。だが、現時点では確証も無い。——ならば、狂言を演じてみせるのも一つの手か。

結論を下すと同時、革袋の中身のもう一方——瓶詰めの水を取り出して、コルクを飛ばす。それが合図であつたかのように、ルシアも同じように瓶の栓を抜いて一口飲み下

し、バルバドスはパンに齧り付いた。そして、こちらの雑談を眺めていたゴドフリーも、口にパンを運ぶ。

そんな彼らを尻目に、瓶に口を付け、傾ける。それこそ、毒の満ちた杯を呷るような気分です。

冷たい液体が、乾いた喉を潤す。そして、程無く全身の力を抜き、その場に崩れ落ちる。倒れた拍子に手から瓶がすり抜け落ちて、破碎音と共に光の破片となって消滅した。

音は続く。どざり、どざりと。

瓶の割れる音。呻き声。そして、場違いな甲高い笑い声。

「クハッ！ ヒヤッ！ ヒヤハハハハ!!」

堪え切れないと言わんばかりに天を仰いで哄笑したのは、言うに及ばずクラディールだった。

状況を確かめようと首を動かすと、至近距離で目が合った。地面にうつ伏せで倒れる僕の顔を心配そうに見詰める赤い瞳だ。しかしよくよく見れば、小さな身体を小刻みに震わせている。

……当たり前だ。本来、《ラグー・ラビット》はとても臆病なモンスターなのだから。それでも、逃げ出さずにこの場に留まっているのは……僕に従属する《使い魔》だか

らだ——などという浪漫の欠片も無いことは、露程も思わずに。
「大丈夫だよ」

クラディールには聞こえないように小さく、それでも安心させるように呟く。すると、言葉を理解したわけではないだろうが、イナバの震えは治まった。それどころか、主人の危機を察してかスタンピングでもって意思表示をしている。

大丈夫、と口では言ったものの、状況はあまり芳しくない。

事前に装備しておいた《姫百合の腕輪》の耐性スキルのお蔭で身体に痺れは無い。何時でも動けるし、戦闘になってこちらが負けることは、十中八九無いと言って良い。しかし、残り一つの可能性として、身動きの取れない彼らの人質に使われでもすれば、もはやこちらに打つ手は無くなる。……だから、一瞬のうちに制圧し、無力化する必要がある。

「ど……どういふことだ……この水を用意したのは……クラディール……お前……」

「隊長!! 速く《解毒結晶》を!!」

バルバドスの悲鳴に近い叫び声にゴドフリーはハツとした表情になり、腰に付けたバックに手を伸ばす——がしかし、麻痺毒のせいもあって、彼の動きはあまりにも鈍重だった。

「ヒャ——ツ!!」

奇声と共に岩の上から飛び降りたクラデイルは、ようやく掴んだ結晶ごとゴドフリーの左手を蹴り飛ばした。握力が減退した手から、結晶は当然の如く零れ落ちる。クラデイルはそれを拾い上げ、更にゴドフリーのバックからまでも結晶を抜き取ろうし——しかし、その数に鼻白み、バックその物を遠くの岩陰に向かつて放り投げた。

ゴドフリーのHPバーは、既に今の蹴りによって僅かではあるが減少している。そして、それによってクラデイルのカラーカーソルは、犯罪者であることを示すオレンジに。

「クラデイル!! あんた自分が何をしているのか解っているの!」

恐怖を押し殺し、気丈に問い質すルシア。だが、この手の手合いにソレは逆効果にしかならない。

「うるせえクソニア!! 次はてめえの番だ。……ああ、でも安心しろよ。すぐにお前の彼氏も同じ処に送ってやるからよお!」

捉え違いの無いその言葉に、ルシアは悲鳴を上げる。そして、その悲鳴をまるで美酒でも飲むかのような歓喜の表情で聴き入るクラデイル。

狂気に歪むその顔が、幼い頃の霞みかけた記憶の澱を掬い上げようとするかのように……。

「ゴドフリーさんよお……あんたにも色々言つてやりたいことはあるけどなあ……前菜

で腹一杯になつちまつても困るしよお」

劍が引き抜かれる音。再度の悲鳴。

アリストテレス曰く——

善き人は自愛的でなくてはならぬ。何故なら彼は、自愛的であることによつて、諸々の麗しき事柄をなして自らも利益を享受するのみならず、他の人々をも利するからである。

だが、悪しき人は自愛的であつてはならない。何故なら彼は、そうであることによつて、諸々の劣悪な情念に従つて自己にも隣り人にも害悪を与えるに至るからだ。

クラティールに関しては、問うまでも無いだろう。

そして……：自分自信が善人なのか悪人なのか、それは僕には解らない。でも、少なくとも————僕は、やはり自分のことが嫌いだ。

もはや、一刻の猶予も無い。手段を選ぶことも叶わない。

この一年弱、無駄だとは何処かで思いつつも、対ヒースクリフ戦を想定して幾つかの戦略を立ててきた。そして昨晩、ソレは無駄な努力では無くなった。

だから、手の内は最後まで隠しておきたかった。武器ならばいざ知らず、戦術や戦略というものは、対策を取られれば使い物にならなくなるのだから。

だが、ここで使わずに彼らを見殺しにする選択肢など……：僕の中に、初めから存在し

ない。故に――

「サツサと死ねや」

狂犬は、目の前の餌にご執心だ。だから、背後で人が立つ気配にも気が付かない。そもそも、その可能性すらも頭の中には無いようだ。

誰かが声を発する前に、一言。……小さく、低く。

「羽化せよ」
キャスト・オフ

システムが音声を認識すると同時、鎧という名の蛹の殻が衝撃音と共に爆ぜ、破片の一つ一つ、大きなモノから小さなモノまでが、弾丸となつて飛散した。そして、錘が外れ軽くなった身体は、錨を上げた船のように、ほんの僅かに浮き上がる。

流石にクラディールもその音には気が付いた。振り返り、自分の眼まなこに迫るそれを視認して、咄嗟に弾き落とそうと剣を振り下ろした。

その行為は、人間ならば誰しもが持つ防衛本能から起こったものだ。しかし、結果として、そんなことをする必要は端から無かった。何故ならば、この無数の破片全てが、殺傷能力を持たない只のゲーム上の演出なのだから。

だからと言って、同情などするわけが無い。同じく、この隙を逃す理由も、当然ながら無い。

クラディールとの距離は、凡そ三メートルというところ。

「《ラビット・フッド》
『プウー!』」

両足を若草色の光が包むのを見届けぬまま、柄に右手を走らせ、一步大きく前へと踏み出す。

その一步で、クラデイルの眼前に現出する。相手にしてみれば、まるで瞬間移動でもしたかのように見えたかもしれない。

遅れて巻き起こる轟音、烈風。巻き上げられ、乱れる長髪。

「な、き——」

「……………!!」

無言の気合いと共に、居合一閃。クラデイルの騎士剣を宙へと跳ね上げる。そして、間髪入れずに胴を目がけて蹴り込んだ。

本来であれば、《体術スキル》を取っていないプレイヤーが鎧を身に纏ったプレイヤーに蹴りを入れたところで、然してダメージを与えられはしない。それは、今の僕でも同じこと。但し——

「ガハッ……………!!」

異常なまでの「AGI」から齎される暴力的なまでの速度は、威力は伴わずとも純粹な衝撃となって相手を襲う。

吹き飛ぶ体躯。再び開ける間合い。

クラディールの姿を目で追いながら、落下してきた騎士剣の柄を左手で掴み取り《武器強奪》^{スナッチ}する。この瞬間、システムはイレギュラー装備状態と認識し、ソードスキルは使用不能となる。

それに加えて、スピード特化ビルドの弊害。【STR】優先のキリトとは違い、《月華》などの武装を問題無く装備出来る程度にしか【STR】を上げていない僕では、二刀——それも、片方は両手剣だ——を満足に振るうことは出来ない。……只、今回に限っては、満足に振るう必要などは無い。

思い切り、地面を——正確には、靴と地面の間の空気を蹴り付けた。

地面との接触が消滅した身体は限界を無視し、一瞬で超音速まで加速する。

そして、The ^星twinkle of ^瞬the stars ^き程の刹那。

力任せに振るわれる二刀。斬り飛ばされる両の手首より先。

遅れて巻き起こる衝撃波^{ソニックブーム}。轟く轟音。

更に遅れ、手首より噴出する赤いライトエフェクト、破砕音。

「……？ う、腕……俺の腕がアアアアアアアア!!」

呆けたような顔が、事態を飲み込むと同時に、恐怖と苦渋に歪む。

「良い顔になったな、クラディール。愉悦に染まった顔よりも、その方がお前に似合っ

いるよ」

何の感情も籠らない声で、そう口にする。

人形よりも人形らしい表情。他人に恐怖を与えると露程も思えない少女のような美貌が、言いようの無い恐怖をクラデイルに与えている。それを無理やり言葉にするにすれば、生理的嫌悪感からくる恐怖、と言えるかもしれない。

「わ、解った!! 解ったよ!! 俺が悪かった!!」

手首より先を無くした両腕を庇うようにして、地面に這いつくばるクラデイル。

「も、もうギルドは辞める! あんたの前にも、あの女の前にも二度と現れねえよ!! だから——」

あの女とは、勿論アスナのことだろう。

しかし、何の反応も示さないこちらに、到頭クラデイルは懇願の悲鳴を發した。

「ひいひいひいっ! 殺さないでくれ!! 死に、死にたくねえ——っ!!」

「ふっ……ふっふっふっ」

だが、返ってきたのは赦しても罵倒でもなく、この状況では余りに不自然な笑い声だった。

堪え切れずに漏れ出たようなその声は、少女のように可憐だ。だが、だからこそ、余りにも不吉だった。

「もういいよ、クラデイル。さつきも言ったけれど、伝わらなかつたようだから……今度は解りやすく言うね」

そして、笑みと共に告げる。

「お前の猿芝居は見飽きた」

その一言は、クラデイルの表情を凍り付かせるのには十分過ぎた。

「や、止める……止めてくれエエエエエエエエエエ!!」

一層憐れな程の、一際甲高い悲鳴。

それでも、全く心に響かないのは、僕がこの男の言動を全く信用していないからに他ならない。

しかし、僕は別にサデイストではない。だから、まな板の鯉が幾らのうち回ろうと、心が動かされることも無い。

「安心してよ、殺したりはしないから。——ハンムラビ王もタリオの法で言っている。目には目を、歯には歯を、ってね。殺人の未遂犯を死刑にするわけにはいかないよね」

それは、命の保証と同義の発言だった。にも拘わらず、クラデイルの顔に笑みは浮かばない。……当然のことではあるが。

「……ああ。誤解があるといけないから注釈しておくけど、所謂ハンムラビ法典は、同害報復を要請しているわけではないんだ。正確には、無限報復禁じるのが目的で、その結

果の同害報復だ。……そういう意味では、ハンムラビ法典は案外過激じゃないんだよ。『これで終わりにしてやる』ってことだからね」

そこまで言つて、ニコリと微笑む。

「だから、選ばせてあげるよ——」

天使のような、悪魔の笑顔で。

「ダルマになるのと牢獄送り……どっちが良い？」

第31話 舞台袖の閑談

「——という訳で、クラデイルは牢獄へぶち込んだ。罪状は、僕へのセクハラってことにしたから」

事の顛末を語り終え、ふう……、と小さく息を吐く。

「何を一仕事終えたような顔をしているのだね……君は」

終始無言で報告を聞いていたヒースクリフは呆れたようにそう言ってから、頭が痛いとても言いたげに額を押さえた。そして、暫し黙考してから、再び口を開いた。

「はあ……。色々と言いたいことは有るが、まずは君の口から理由を聞こうか」

「何で僕が責められてるみたいな雰囲気なんだ？ 元はと言えば、あんたの監督不行き届きが原因だろ」

「私自ら勧誘していた以前ならば兎も角、現在は団員の勧誘は各自に任せているのだから、問題分子がギルド内に紛れ込んでいたからといって、私の責任にされても困る」

「僕が言っているのは、あいつの謹慎を解いたことだ！ たった数日で心を入れ替えられるなら、この世から再犯なんてものは無くなるんだよ！」

特にストーカーと性犯罪者は再犯率が高いことで有名だし、後者は個人的な経験則か

ら言つて、一度やった奴は二度三度やるんだよ！ そんなこと、茅場が知らないはずもない。

僕は胸中のイラつきを隠すことも無く、ヒースクリフを睨み付けた。

「彼の謹慎の解除を要請してきたのは、他でもないゴドフリー君だ。私は、それを承認したに過ぎない」

「ギルメンの判断が間違っていたら、それを正すのもギルマスの仕事だろ」

「私は、各自の自主性を尊重している。それに、私に負んぶに抱っこでは、後々困ったことになることは、君が一番理解していることと思うが？」

「……………」

減らず口を……………！

ああ言えばこう言うつてのは、まさにこのことだな——と、普段の自分を棚に上げて独り言ちる。

「…………ゴドフリーさんには、『わたしの方が危機管理能力は上のようなですね。対処能力は言うに及ばず、ですが』つて言っておいたよ」

「それは手厳しい。まあ、奇しくも今回のことで、嫌でも君を認めざる負えなくなつただろう」

そう言つてヒースクリフは苦笑を漏らしたが、やがてその笑みは含みをもつたものへ

と変わった。

「……何だよ?」

「いや、なに……秋も半ばだというのに、随分と涼しそうな恰好をしていると思つてね」
確かに、十月下旬にもなってノースリーブというのは、些か風通しの良すぎる恰好だろう。因みに今は《銀妖精の鎧》は装備から外してあるので、ちゃんと地に足付いている。

「スカート姿の方が、余程涼しいと思うけどね。それとも、あなたとしてはスカート姿の方が好みかな?」

「残念ながら、私には男にスカートを履くことを強要する趣味は無いよ。君にあの団服を着てもらつたのは、衆人環視の前だったからだ。君としても、見た目だけでも女性用の団服の方が、何かと都合が良かっただろう? ……普段の服装については、男物でも女物でも好きに着ると良い。まあ、しかし幾ら君でも、〔Female〕の服を装備することは出来ないがね」

「僕に女装の趣味は無い!!」

嫌味を言つたつもりが、何倍にもして返され、思わず声を荒げてしまった。そして、そんな僕の姿を見て、ヒースクリフは「勝つた」とでも言わんばかりにニヤリと笑つた。

「……あんた、絶対友達いないだろ」

「何故そう思うのだね？ ……まあ、良いか。そんなことより、話を戻そう。何故、罪状が殺人未遂からセクハラまでにランクダウンすることになったのだね？」

ヒースクリフの顔に既に笑みは無い。僕の表情もそれに合わせるように、自然と引き締まる。

「今朝あなたも言った通り、KOBはトップギルドだ。口では否定するかもしれないけれど、攻略組プレイヤーの殆どがその力を信頼し、また頼りにしている。そして、その他大勢のプレイヤーにとっては、ゲームをクリアしてくれると信ずるに値する希望の光だ。——そのリーダーがラスボスってのは、皮肉が効き過ぎてるがな」

「最強のプレイヤーが一転、最悪のラスボスに。……我ながらこのシナリオは、大層盛り上がり上がると思うのだね。まあ、続け給え」

「……攻略組プレイヤーとその他一般プレイヤーに共通しているのは『期待』だと言って良い。そして、人間というのは勝手なことに、期待外れは期待を寄せた自分達に対する『裏切り』だと認識するんだよ」

「ふむ」

「日本人というのは、排他意識が比較的強い。それは、村八分なんていう制度が機能していたことや、被疑者段階の人間を世間の目を気にする余り早々に解雇することからも明らかだ。また、個人の罪や責任をその個人が帰属する集団にまで当て嵌めようとする傾

向も強い。……連帯責任なんていう言葉が罷り通る所以だ。——そして今回、未遂とはいえ、殺人者がギルド内に現れた。そのことに対するプレイヤーの目がどういったものになるのかは、火を見るよりも明らかだ。KOBに対する信頼は、間違い無く失墜する。そして、トップへの信頼が揺らげば、そのまま雪だるま式に攻略組そのものへの信頼が消失することに繋がる。その結果として待っているのは、ゲームのクリアなど出来はしないという絶望と、どうせ死ぬなら何をしても良いという思考から来るモラルハザードだ」

そこまで言つて一旦区切り、長々と語つたせいで乾いた唇を軽く舐めり湿らせた。

「ならば、そんな事実は無かつたことにしてしまえば一番早い。しかしかと言つて、クレンジールを何の咎めも無く解放するわけには流石にいかない。——人の口には戸が立てられないと言うけれど……ならば、その口から語られる事実そのものを偽りに変えてしまえばいい」

「成る程。それで、容疑をセクハラにしたわけか」

「ああ。これなら、たとえ《情報屋》に嗅ぎつけられたとしても、《氷姫》にセクハラを働き、逆に返り討ちにあつて牢屋にぶち込まれた憐れな男——という、笑い話程度のゴシップにしかならないからな」

ああ……自分で言つて悲しくなつてきた。でも、これで茅場も納得しただろう——

と、思ったのだけれど。

「君の発想とやり方は、変則的且つ些か自虐的だが……まあ、概ねそれは良しとしよう。だが、幾つか問題点がある。一つは、当然システム的な問題だ。見た目はどうあれ「Male」である君では、ハラスメント防止コードの適応外の為、本来使わなくていいはずの《回廊結晶》を使ったというデータが記録上に残っている。しかし、これは管理者である私しか閲覧出来ないのだから、除外しても構うまい。もう一つの問題は、《黒鉄宮》の監獄エリアを事実上支配している《アインクラッド解放軍》と口裏を合わせる必要がある、ということだ。——まあ、その顔なら何か策は打つてあるのだろうがな」

何が面白いのか、ヒースクリフは愉快そうに笑うと、示すように目の前の執務机へ視線を送った。机の上には、よく磨かれた金属性のグラスが一つ。

グラスには、人の悪そうな笑みを浮かべた銀髪の少女が映っていた。

†

団長室を辞去し、気の遠くなるような螺旋階段を降りた先で待っていたのは、緊張した面持ちのルシアとバルバドス、そしてゴドフリーだった。三人ともロビーに置かれたソファアーには座らずに、態々立ったままで居たようだ。

「団長は、わたしの裁量に一任してくれるそうです」

挑発とも取れそうな不敵な笑みを浮かべ、単刀直入に結果だけを口にすると、ルシア

とバルバドスは安堵の溜め息を吐いた。しかし、ゴドフリーはといえば、少し怒ったような敵めしい顔付きのままだった。

また嫌味の一つでも言われるのかと身構えるが、ゴドフリーの口から出たのは僕の予想を裏切る言葉だった。

「副団長殿、吐き気の方は治まったのですかな?」

ゴドフリーの表情が敵めしかつたのは、僕のことを怒っているわけではなく……:そこらどころか、心配してくれていたらしい。

予想外の心配りに目を瞬かせたものの、なんとか笑みを形作る。

「ええ、もう大丈夫です。ご心配おかけしてすみません」

アバターの身体に有るはずもない吐き気は、言わずもがな例の発作が原因だ。

発作の起因は、大雑把に言って「暴力」。そこには、振るわれるのではなく、振るうことへの異常なまでの忌避感があるのだ……:と思う。

理由は——
解らない。只、この発作が何時から始まっ

たことなのか思い出そうとする度に、答えを掴みかけるその度に、脳髓を羽虫が這い擦り回るかのような、耐え難い頭痛に苛まれるのだ。まるで、何かを警告するかのよう。

僕が暴力という手段を忌避するのは……:以前は自身が強固な理性を持っているからだと思っていたし、最近では強迫観念の類いだと結論付けていた。でも、もしかしたら

……この頭痛を、僕は無意識のうちに避けていたのかもしれない。

まあ、兎に角……原因はどうあれ、現実に戻って病院のベッドで目覚めた暁には、真つ先に医者にこのことを相談するべきだろう。

そんな風に思考を無理やり中断して、僕は三人の顔を順に見詰めてから、深々と頭を下げた。

「今回は、本当に申し訳ありませんでした！ 私怨に巻き込むどころか、皆さんを危険な目に合わせてしまつて……」

流石の僕も、今回ばかりは演技ではなく、本当に悪いと思つている。只、あくまで罪悪感の対象は、本当に巻き込んでしまっただけのルシアとバルバドスに対してだけだ
が。

まるで裁判官の判決を待つ被告のように金属質の床に視線を落としたままでいると、男女二人分の苦笑が聴こえてきて、思わず頭を上げる。

「ちゃんと助けてくれたんだし、気にしないでよ。まあ、捕まえた後で言い逃れ出来ないように、現行犯を狙つて泳がせてたつてのは、ちよつと人が悪過ぎるかなあゝとは思うけどね」

「まあ、確かに……ルシアが天使だつて称したその日のうちに、見事なまでに墮天してくれたからね。……正直、暫くの間女性不信になりそうだよ」

あつげらんかと、寧ろ面白がるような表情のルシアとは対照的に、バルバドスの顔は苦笑というには余りにも苦味が効き過ぎている表情かおをしていた。

……ああ……僕、本当は男なんですよ……。だから、あなたが女性不信になる必要なんて無いんです……。

本来ならば、これがバルバドスが言葉通り女性不信に陥ってしまう前に誤解を解く最後のチャンスなのだろう。しかし、ここで誤解を解いたところで僕の罪状が増えるだけだし、女性不信が人間不信に変わるだけだと思ひ直し、口には出さず胸の内での懺悔に留めた。

「それにしてもクラデイルの奴……あんなことした割に、やけにあつさり回廊に入ってたわよね」

「流石に観念したんじゃないか？ 傍から見ただオレだつて、滅茶苦茶怖かったし……」

「あは……あはははは……」

乾いた笑いが口から洩れる。

実は、過去何度となく遭遇した痴漢——男であるからこそ、同じ男に触られるのは気が悪い——やストーカーに対する恨みを全てぶつけたのだとは、口が裂けても言えない。

そして、クラデイルが去り際にぼそりと「何時か殺してやる……」と暗く呟いたこ

とも、同じように。

「コほん……！　とここで——」

少しわざとらし過ぎるくらいの大きめな咳払いをしたゴドフリーは、話を先に進めようと切り出した。

「《軍》への根回しは上手くいきそうですかな？　……彼らは、我々には余り良い印象をもっていないはずですが」

ゴドフリーの言う「我々」とは、KOBという小さな括りではなく、攻略組プレイヤー全般のことだ。

実際、攻略組と《軍》では思想の違いもあって折り合いが悪いというのは周知の事実だし、そもそも彼らにKOBに協力するメリットが無い。だが——

「大丈夫ですよ。《軍》には、個人的なコネクションがありますから」

「コネクションねえ……」

少し意外なことに、ルシアが胡散臭そうな目でこちらを見る。

まあ、それも仕方が無いことで、ソロプレイヤーに対する一般的なイメージは、人付き合いが苦手、に尽きるだろうからだ。

それに、個人的なコネクションとは言っても、実際に建設したのはたったの三日前なのだから……ホント、世の中何が使えるのか解らない、と改めて思う。

コーバツツは、この間の功績——実情は兎も角、対外的には《軍》がフロアボス戦で久方ぶりの戦果を挙げた、ということになつてゐる——から中佐から大佐に昇進し、ギルド及び派閥内での発言力も強くなつたらしい。つまり、事実上ギルドを牛耳つてゐると聞くサブマスターでさえも、彼の言葉を見殺しするのは難しい、というわけだ。

そして、捏造の片棒を担がせる交換条件として、賄賂の一つでも用意すれば……あのサボテン頭の背中を押すのには、十分に足るはずだ。

そんな風に真つ黒な思考を巡らせながら……しかし、そんなことを考えているとはおくびにも出さず、小さく肩を竦めた。

「そろそろ返信が来ると思ふんですけど……——ああ、噂をすれば」

まるでタイミングを計つたかのように、視界の端に手紙のアイコンが表示される。

指を伸ばしアイコンをタップして、メーラーを起動する。

表示された初期設定のままのシンプルなウィンドウには、newと赤字が点滅した百件近い新着メールがドバドバと流れ込んでくる——その殆どがパーティーの勧誘メールだ——が、それらは無視して一番先頭のメールを開いた。

『キバオウその他幹部メンバーで協議した結果、君の要請を受け入れることで決定した。

だが断つておくれが、私個人の借りが、今回のことで清算出来たとは思つていない。

約束通り、フロアボス戦の借りは、フロアボス戦で返させてもらう。

それでは、具体的な日取りが決まり次第、追って連絡する』
そんな簡素で短いテキストを黙読し、思わず苦笑する。

厳格な性格だとは思っていたけれど、存外律儀なようだ。

「その様子だと、良い返事が貰えたようね」

ルシアは尋ねるではなく、断定するような口調でそう言い――

「何だろ……嫌な予感が」

「……数時間で、すっかり苦手意識を植え付けられたバルバドスはたじろぎ――

「それで我々は、一体何をすれば良いのですかな？」 副団長殿」

最後にゴドフリーが、緊張を孕んだ声音でそう言った。

「そんなに身構えなくても大丈夫ですから……」

打ち解けられないよりは遥かにマシだけれど、これでは不本意な二つ名が真実味を帯びてしまう。だから、出来ればもっと普通に接してもらいたいのだが、それはもう、今更過ぎるのかもしれない。なかった。

そんな風に諦めに近いことを考えながら、僕は初めて、彼らに副団長として命令を下す。

「簡単なことです。魚の捕り方を教えに行くんですよ」

僕のこの発言に、三人共に首を捻ったことは言うまでも無い。

第32話 Four of a kind

二〇二四年十月二十四日

窓枠から漏れ聴こえる木枯らしが、しんと静まり返った室内をより一層物悲しい雰囲気で包み込む。

騒がしい同居人にして相棒が居なくなつてから既に四日も経つというのに、未だに独りつきりに馴れずにいる。思えば、このセカイで本当の意味で独りきりになつたのは、初日を除けば今回が初めてかもしれない。誰も寄せ付けない《氷姫》などと揶揄される僕だけだ……見えないだけで、傍らには何時も彼女が居た。

「……はあ」

食後に淹れたハーブティーを注いだカップを弄びながら、気怠げな溜め息を零す。

朝食一つとつてもそうだ。彼女が美味しそうに食べてくれるから、《料理スキル》をこなした後もレパートリーを増やし続けたし、現実の調味料すらも再現してみせた。

……独りの食事が、こんなにも味気ないものだとは思つてもみなかつた。

「……どうしたら、もう一度君に会える？ 僕を……独りにしないでくれ……」

——などと、僕がA I相手にそんなセンチメンタルな感傷を抱くわけもなく、溜め息の理由は別にある。

「……複雑な気分だ」

誰も居ないのをいいことに、何時もよりやや低めの少年のような声——哀しいことに、*“女性声優が演じたような”*という枕詞が付くのだが——で呟いた。

目の前に浮かぶウインドウには、先ほどキリトから送られてきたメールが表示されている。内容は、昨日アスナと結婚しました、というものだったのだけれど……。

「何故、僕への報告は一日遅れなんだろうか……？」

というのも、僕が二人が結婚した——といっても、勿論システム上での話だが——と知ったのは、昨日里香から『確かに二人のこと頼むとは言ったけど、まさかここまで進展させるとは——』云々といったメールを貰ったからだ。

里香がそれを知ったのは、アスナから報告メールを貰ったからだそうだけれど……こりや、彼女には本格的に嫌われているのかもしれない。

昔から知っている父親の上司の娘にして幼馴染の結婚……というだけでも複雑なのに、おまけに嫌われてるとなれば尚更だ。

「まあ、アスナは僕のこと覚えてないみたいだし？ 未だに思い出す気配も無いし？ 今までだって特別仲が良かったってわけでもないし？ それも仕方が無いのかもしれない

ないけれど?」

自分も最近まで忘れていたことを棚に上げ、半ば愚痴のような独り言は続く。

「でもさあ……金髪碧眼の女みたいなのをだよ? こんな奇天烈な見た目の人間をだよ

? 幾ら昔のこととはいえ、忘れますか? 普通。忘れませんか? 普通」

そして、聞き耳の無い愚痴の対象は、幼馴染からそのお相手へと移っていく。

「おまけに二十二層の南西エリアの村に引越すつて……あいつ、本気で農夫にでもなるつもりなのか……?」

広い田舎に隠れて畑を耕す、という数日前のキリトの台詞を思い出しながら、まさか本気だったのかと呆れて呟く。

「まあ、結局何もかも茅場が悪いんだけどな」

本人が聞けば異議の一つも言いたくなるような台詞で愚痴はお仕舞いにして、すっかり冷めてしまったハーブティーを飲み干した。すると――

『コンコン』

控えめなノックの音が、無駄に広い室内に大きく響き渡る。

「こんな時間に客……? アリアさん辺りか?」

首を捻りながらも、席を立てて玄関へと向かう。

フレンドリストは沢山の名が連なり、パーティーの勧誘メールも迷惑メール並に毎日

送られてくる僕だけれど、実際に親しくしていて、この家を訪ねてくるような人間は極限られている。そして隣に住むアリアさんは、その限られた人間の内の一人だった。

「はい、どちら様ですかーつと……ん？」

《圈内》という理由もあつて特に警戒もせずに扉を開けたのだけれど——開いた先には誰も居なかった。

妙な既視感を覚えつつも、視線を凝らす。

目の前の一見何も無い空間を注意深く観察していると、周りの景色との僅かなズレを感じて……その場に居るのが何者なのかを察した。

「どうぞお入りください」

扉の脇へと避けて、姿無き来客を家の中へ招き寄せる。そして数秒待つてから、何事も無かったように扉を閉めた。

「思ったよりも遅かったですね？」

視線は扉に向けたまま、恐らく背後に居るのであろう相手に話しかける。

「遅かったって……相変わらず人使いが荒いナ、クーちゃん。まあクーちゃんの場合、見た目に反してというよりは、見たまんまつて感じだけドナ！ にゃハハハ！」

返ってきたのは、語尾が特徴的な女性の声だった。

……見たまんまつてどういいう意味だ！ と、思いながら振り返る。

視線の先には予想通り、目深に被ったフードから癖のある金髪を覗かせ、頬に三本線のボディペインティングを施した小柄な女性が、こちらを向いてニンマリと笑っていた。

「僕だって、相手があなたじゃなければこんなこと言いませんよ？　ねえ、情報屋《鼠》のアルゴさん？」

《鼠》のアルゴ。彼女は、売れるネタなら自分のステータスさえも売ると噂される程の徹底ぶりだと、β時代から付けているおヒゲが理由で、他のプレイヤーから《鼠》と呼ばれている情報屋のプレイヤーだ。

彼女が、ある意味攻略組以上に悪意を向けられる危険性のある情報屋を営んでいるのは、イギリスの小説家ブルワー・リットンの戯曲リシユリユーに出てくる有名な一節「The pen is mightier than the sword」を実践する為なのかもしれない。

「それは、クーちゃんがおイラのことを買ってくれてることで良いのか？」
「勿論。アインクラッドであなた以上の情報屋はいませんよ。そして、芯の通った女性は美しいですし、何より信用出来ますからね」

それは、僕の偽りすぎる本音だった。しかし、アルゴはそうは思わなかったようだ。

無言で、不貞腐れるようにそっぽを向くアルゴ。唯でさえフードで顔が半分隠れてい

るといふのに、そうされては表情を窺い知ることは出来ない。

……まあ、僕に信用されたつて嬉しいわけないか。

卑屈な思考が頭を過り、思わず頭かぶりを振る。

「ま、何時までもこうして立ち話つても何ですし、そのソフアーにでもお掛けになつて下さい。アルゴさん、お茶は何が良いですか？ コーヒー、紅茶、レモンティーにアップルティー、それとハーブティーもありますけど。ああ、お好みでしたらミルクティーも淹れられますよ」

気を取り直すように微笑を浮かべそう提案すると、アルゴは意外なほどに素直に腰を下ろした。しかし、口は一向に開いてくれない。

僕が知っている何時もの《鼠》とは明らかに違うその態度に、思わず陰に隠れた彼女の顔をまじまじと見詰めてしまう。

「……オネーサンを誘惑しても何も出ないゾ」

微かに、ともすれば聞き逃してしまいそうな声量の呟き。実際上手く聴き取れず、眉を顰める。

そんな僕を無視するように、次の瞬間には常と同じふてぶてしい表情を浮かべたアルゴは、今度は明瞭に告げた。

「バリスタ自慢の一杯を頼むヨ！」

「バリスタ……ああ、エスプレッソですか。少々お待ちを」

気安い口調でそう言つて、キッチンへと移動する。

僕が先ほど並べた中にエスプレッソは無かつたのだけれど……まあ、出来ないことはない。

しかし、自慢の一杯と言われても、ここでは決められた手順をなざることしか出来ない。それに、そもそも僕にカフェで働いた経験など無いのだから、たとえこれが現実であつても美味しい一杯を淹れられる自信は無かつた。そういう意味では、未経験の人間がまともに淹れられる分だけ、現実より甘いかもしれない。

……現実より甘い、か。

思考の中だけとはいええ、不覚にもそんなことを考えた自分自身に嘆息しながら、カウンターに置かれたコーヒーミルへと手を伸ばした。

†

エスプレッソの濃厚な苦味が口一杯に広がり、ふう、と一息吐く。同じように陶器製のカップに口を付けているアルゴに視線を向けると、存外美味そうに飲んでくれていたので自然と顔が綻ぶ。

……とはいえ、カップの中身がカフェ・コレットつてのが素直に喜べないところなのだけれど。

「まずはお疲れ様です。ですが、遅かったというのは素直な感想ですよ。勝負は今日の昼なのに、手札が揃ってないというのは心細い限りでしたから」

喉から出た声が少し硬いのは、苦味のせいというわけではあるまい。

交渉というのは、言わば飴と鞭のぶつけ合いだ。

口では甘言をのたまきながら、掌で握った相手の弱味を弄ぶ——それぐらいでなければ、情報操作など出来はしないだろう。

「それで？　ここうしてお越しになったということは、依頼の方は首尾良く完遂していただけたんですよね？」

「そりゃ勿論サ。でも、今回は高いヨ？　何しろ、急な依頼だったからナ！」

そう言ったアルゴの瞳には、怪しげな光が宿っている。

背筋に冷たいものが流れるのを自覚しながらも、強気に頷いてみせる。

「依頼料はキチンと払いますよ。ええ、払いますとも」

頷いてみたものの、そんなことで自分を騙せるはずもなく、僅かに語尾が上擦ってしまふ。

自分で言うのもなんだが、僕は金には困っていない。ならば何故、ということになるのだろうか……その理由は簡単で、アルゴが僕に求める見返りが、少々特殊過ぎるからだった。

「クーちゃんならそう言ってくれると思つてたヨ！ やっぱり女は度胸ダナ！」

「は……………ははは……………」

乾いた笑いが口から洩れる。しかし、アルゴはそれには触れずに本題に入った。

「最初《はじまりの街》に住む住人の生活環境の調査つて聴いたときはドコのお役所仕事ダ、つて思つたモンだけど……………随分とキナ臭いことになつてるナ」

真剣味の増した声音で口火を切つたアルゴに合わせるように、こちらの表情も自然と引き締まる。

「事実上《軍》の実権を握っているキバオウの《軍》内部での影響力が、先のフロアボス戦での部下の活躍もあつて更に上がったようダ。そのせいで、元々横暴さが目立つていたキバオウ派の連中が、更にデカイ顔しているみたいダナ」

「……………」

「《軍》は《はじまりの街》で暮らすプレイヤーに税金を納めさせてるんだケド……………最近、徴税の仕方かなり荒つぽいみたいダ。まあ要するに、調子に乗つてることダナ！」

「徴税と称して、恐喝紛いなことをしているのは知つてます。でも、明日食べるパンの代金も困つていような彼らに支払い能力があるとは到底思えないんですが……………」

「そうは言つても、案外持つてるみたいダヨ。それでもいよいよダメつて時は、外周の草

原に放り出されるそうダ」

何と言つていいか解らず押し黙る。彼らの増長に自分が一役買つてしまつていることは否定出来ないからだ。

「それに、随分と治安も悪化してル。スリならまだ良い方で、女性プレイヤーの中には売春紛い……イヤ、売春そのものをしてるヒトもいるみたいダ」

「売春……？」

聞き捨てならない単語に眉間を寄せる。

「そうダヨ。ほら、オプシオンメニューの一番深いところに《倫理コード解除設定》つてのがあるダロ……つて、クーちゃん知らなかつたのカ？」

さも意外そうに驚くアルゴの問いには答えず、言われた通りメニューウィンドウからオプシオンに進んでスクロールとタップを繰り返すと、《倫理コード解除設定》なるコマンドが確かに実在した。

「ウーン……まあ、今の情報は無料ただにしとくヨ。序でに付け加えると、《倫理コード解除設定》つてのは男女で性行為する為のものダ。そんな訳だから、悪用する人間も当然現れるワナ」

付け加えられた情報を頭の中で反芻する。

これは、《軍》にとっては立派な弱味だ。お前達の取り立てが厳し過ぎるから、彼女達

はそんな行為に及ぶことになったんだ……みたいに何とでも言えるし、言い逃れもまた出来ないだろう。だが……。

「《軍》はそのことを知っているんでしようか？」

「さあ？ それはオイラにも解らんナ」

「……………」

それにしても……《倫理コード解除設定》、か。このネーミングはまるで、初めからソレを意図して付けられたみたいじゃないか。

そして、モラルハザードが現実味を帯びてきたことに、人知れず寒気を覚える。

「それから、どうやら《黒鉄宮》にβテストの時には無かった隠しダンジョンがあるみたいダナ。それも、キバオウ派が独占しようと企んでるようダ」

「……………なるほど」

まさか《はじまりの街》のど真ん中に隠しダンジョンがあるなどとは考えたことも無かったけれど、もしかしたらアインクラッドの構造上、本来は“登る”だけではなく“降りる”ことも可能なのかもしれない。

まあ、デスゲームと化してる現状では、ゲームクリアに関係無い“降りる”ことまで考えなくてもいいと思うが。

「後は——」

アルゴの話は街の物価やら《圈内》に留まる彼らが普段何をして過ごしているのかなどといった内容に移って行つた。

折角調査してもらつたのに申し訳ないが、これ以上は目ぼしい情報は無さそうだった。

髪を掻き上げ小さく溜め息を吐くと、アルゴは思い出したように口を開いた。

「ああ、言い忘れてたケド……意外だったのは、キバオウシンパのはずのコーバツツつてプレイヤーが、キバオウ派の行動に苦慮してゐるらしいってことだな。情報提供者の名前が知りたければ、別途で一万コル」

「……いえ、名前は聞かないでおきます。——改めてありがとうございます、今回は本当に助かりました」

……これで役は揃つた。

後は野となれ山となれ、だ。

「イヤイヤ。クーちゃんのに役に立てたんなら、オネーサンも嬉しいヨ」

不意打ち気味にそう言われ、呆気に取られて言葉を失う。だが、彼女が浮かべたニンマリとした笑みが、言葉通りに受け取るのを躊躇させた。

そして、数瞬遅れてその笑顔の意味を理解すると、否応にも頬が引き攣るのを止められない。それでも、せめてもの意地として、自分から切り出すことにした。

「それで、今回の依頼料ですけど……」

「クーちゃんのスリーサイズのうち一つ教えテ」

間髪入れずに返ってきた答えに、なんとか悲鳴を漏らさずにいられた自分を褒めてあげたい。

「……毎回思うんですけど、ホントにそんなので良いんですか？」

「クーちゃんは自分のパーソナルデータがどれだけの額で取引されてるか知らないからそんな風に言えるんだヨ。まあ、知らぬが仏ってやつだな！」

「にやハハハ！ にやーハハハハハ!! と、特徴的な笑い声の幻聴が頭の中を木霊する中、僕がどの部位を彼女に差し出したのかは……このまま、自分の胸の内に、そつと仕舞っておこう。」

第33話 屍と踊れ

老子曰く、〃人に授けるに魚を以つてするは、人に授けるに漁を以つてするに如かず。これは、貰った魚は食べてしまえばそれでお仕舞いだが、魚の捕り方を教えてもらえば一生食べていくことが出来る、といった意味の言葉だ。

この考えが当て嵌まるのは、何も魚に限った話ではない。老師が言いたいことを現代風に言い表すなら、現金支給ではなく職業訓練しろや、といった感じになるだろうか。

そして、徴税に苦しむ《はじまりの街》の住人達にも同じことが言える。彼らに必要なのは今日食べるパンではなく、明日以降も食べ続ける為の方法——即ち、コルを稼ぐ為の手段を身に付けることだ。

コルを稼ぐ方法は、何もモンスター相手の狩りばかりではない。一定の投資は必要になるだろうが、《農耕スキル》を取って畑を耕したり、《釣りスキル》を取って漁をしたり、それこそ里香のように鍛冶で身を立っていくことも可能だ。そもそもSAOの売りの一つは、多種多様なスキル数だったのだから。

だが、やはり何を始めるにしても、ある程度のコルを確保しなければ始めるものも始められないのもまた事実。そしてそうである以上、フィールドに出るのは必至だ。

そんな訳で今回、希望者を募って戦闘訓練をすることになった。

——と、こんな風に長々と語ってみたところで、実は全てが建前だ。実際は、乾いた布を搾り続けるより、一度たつぷり水に浸した方が搾れる量も多くなるだろう、という僕の入れ知恵にキバオウが乗ってきただけだ。

つまり、これが僕の用意した「餌」——そこに、善意など一欠片も介在する余地など無かった。

数ヶ月ぶりに訪れた《はじまりの街》は、予想以上に閑散としていた。秋晴れの気持ちの良い澄んだ青空だというのに、表通りに人っ子一人いない。恐らく、《軍》の徴税から逃れる為に、皆通りの家々に隠れ潜んでいるのだろう。

「百聞は一見に如かずというけれど……やつぱり、聞くのと見るのじゃ大分印象が違うな……」

まるでゴーストタウンだ、とぼそりと呟くと、思いがけず返答があった。

「確かに、少し寂しいですよね……《はじまりの街》って、新宿くらいの大きさでしたっけ？」

隣を歩くシリカちゃんはそう言って、こちらを見上げる。が、直ぐにハツとした表情になると、プイッとそっぽを向いた。

まるで猫みたいだ。そう思うと、自然と笑みが溢れる。

そんな僕の様子が不服なのか、シリカちゃんは憮然と口を開いた。

「それにしても、どういふつもりですか？ 訓練を手伝ってほしいって……何で態々あたしなんか……」

苛立つような口調は徐々に、萎むように気落ちしたものに変わっていく。

これは連れ出して正解だったな、と彼女の姿を見て改めて思う。

足取りまで遅くなりつつあるシリカちゃんに合わせて歩調を緩め、肩を竦めた。

「《竜使い》が居れば、それ目当てで集まってくる人もいるかと思つてね。何時も僕ばかりが矢面に立たされるなんて不公平だろう？」

人を食った笑みを浮かべてそう問うと、狙い通り不機嫌そうな声が返ってきた。

「それがお姉さんの本性つてわけですか。いい歳して『僕』つて……恥ずかしくないんですか？ 中二病つてやつですか」

乾いた秋空に似つかわしくないジメツとした目付きでシリカちゃんはこちらを睨む。しかし、キリトよりも幾分背が高い僕相手だと、どうしても身長差から見上げる形になるので、幾ら睨まれようとちつとも怖くなかった。寧ろ、妹がいたらこんな感じなのかと微笑ましくすらあった。

「またそうやってヒトのここと笑つて……喧嘩売ってるんですか!？」

「どうやら、思うだけに留まらず顔に出ていたらしい。

申し訳無く思いながらも、こういう反応はやはり可愛らしくて、声も出さず笑い続ける。」

「もう……っ！ お姉さんのこと、必ず何時か倒します!!」

「そっか。その日が来るのを楽しみにしてるよ」

「うがー!!」

度重なる挑発に堪忍袋の緒が切れたのか、シリカちゃんは顔を真っ赤にして憤慨の声を上げた。あまりの音量に、肩に止まっていた《フェザーリドラ》が驚いたように目を瞬かせている。

……さて、これだけ燃料投下すれば十分かな。

心の中でそう呟いて苦笑する。

キリトや里香に毒されて、僕も随分とお節介になつたものだ……。

そのうち足を掬われそうだな、と自戒していたからか、気が付くのが遅れた。

「おい！ その前止まれ！」

前方から、明らかに非友好的な雰囲気プレイヤー三人組がこちらへ向かって歩いてくる。

灰緑と黒鉄色で統一された金属装備を纏っていることから考えても、十中八九《軍》所

属の者達だろう。

参ったな、と思いつながらも、言われた通り立ち止まる。

「ティンクルさん……？」

「シリカちゃん、後ろに隠れてて。ここは、僕がなんとかするから」

片目を瞑ってそう言うのと、一瞬何か言いたそうな顔をしたものの、シリカちゃんは黙って頷いてくれた。

鎧をガチャガチャと打ち鳴らしながら、颯々ようにゆつくりと時間をかけて歩いてきた三人組は、僕らの目の前でようやく立ち止まると、品定めでもするかのような不躰な眼差しを向けてきた。

女性は「そういう視線」に敏感だというが、男の僕でも眼球の動きを見れば相手が自分の何処を見ているのかぐらいい解る。端的に言って、最悪な気分だった。でも僕の場合、気持ちと表情は別個だ。悲しかろうが苛立つていようが、笑おうと思えば笑えるし、泣こうと思えば泣けるのだ。

「わたし達に何かご用でしょうか？ 失礼ながら、急いでいるので手短にお願い致します」

困ったように笑って、三人組にそう尋ねる。

礼儀正しく接すれば、大半の人間は礼儀正しく返してくれるものだ。勿論、大半で

あつて絶対では無いけれど。

案の定、男の一人が下卑た笑いを張り付けて、鼻先が触れそうなほど顔を近づけてきた。

「そんなつれねえこと言うなよオ。ちよつと俺達とオハナシしようぜ」

「お話し……ですか？　なら、その辺の喫茶店にでも入りましょうか？　と言いたいところなんです、残念ながら言った通り先を急いでいるんです。またの機会に、というわけには参りせんか？」

飄々とした姉を思い出しながら、柔らかい笑みを浮かべて頓珍漢なことを言う。

これで引き下がってくれるなら話が早いのだが……

「参らねえなア、残念ながらよオ」

やはり、そう都合良くいく訳が無いらしい。

男の声を合図にして、残り二人は目配せし、こちらの退路を断つように後ろに回り込む。

「て、ティンクルさん……！　どうするんですか……!?」

背後のシリカちゃんは、小声で叫ぶという器用な真似をしている。

残念ながら、その質問に答えるわけにはいかないが。

「あんた、余所者だろう？　いや、答えなくていい。あんたみたいな目立つ奴、一度見た

らどんな馬鹿だつて忘れねえだろうよ」

おい、明日奈……お前、与り知らぬところで鳥頭扱いされてるぞ……。

今朝の自らの愚痴を思い出し、呆れたような笑いが漏れる。同時に、体温が急激に下がる錯覚を覚えた。

僕の余りの態度の急変に面食らたのか、男は狐狸に化かされたように目を白黒させている。

「どうやら、あなたもその馬鹿を馬鹿には出来そうにありませんよ？ 何せ、わたしが先刻言ったことをもうお忘れのようですから」

微笑みは嘲笑に。向けた相手は勿論、目の前の男と仲間二人に対してだ。

口の端を吊り上げながら、感情のままに口走る。

「《軍》の徴税だつて言うのなら、払つてあげるから安心してくださいよ。それにしても大変ですね。ちゃんと“持つて来い”が出来ないと、飼い主様に怒られちゃいますもんね」

飼い犬は、とは口には出さなかった。出す必要も無かった。

「てめえ!! 俺達が狗だつて言いてえのか!？」

「おや？ 馬鹿犬かと思いきや、これは意外。それでは“お手”も出来たらご褒美に、ビーフジャーキーでもあげましょうか」

大仰な手振りで驚きを表すと、退路を塞ぐ仲間二人が怒気を孕んだ声を上げた。

「黙って聞いてりやこの尻ア!!」

「上等だこの野郎!! 《圏外》まで着いて来いやコラア!!」

「どうして火に油を注ぐんですかあ!？」

今まで抑えていたのだろうか、我慢の限界とばかりに悲鳴のような叫び声が背後で上がる。が、その声も当然無視し、腰に差した《月華》へと手を伸ばし、鯉口を切った。

「来るなら来なよ。《圏内》でなら、僕でも人間相手に本気が出せる」

凄んだつもりは無い。寧ろ、気負いの無い軽い口調で言っただけだ。にも拘らず男達が怯むように後退ったのは、こちらの気迫に気圧されたのか、はたまた口で言う程戦闘に慣れていないからなのか。……恐らくは後者だろう。

周囲の空気が張り詰める。相手は兎も角、こちらは既に臨戦態勢だ。

だが結果として、僕が刀を抜くことは無かった。

「お前達、そこで何をやってる!」

現れたのは、騒ぎを聞きつけてやって来たらしい、これまた男達と同じカラーの鎧を身に纏った男だった。だが、男達のそれとは明らかに質が違った。それだけでも新たに現れたこの男が、中々のハイレベルプレイヤーであることが窺い知れる。只、男が俗にバケツと呼ばれるグレートヘルムを被っていることが何と無く気懸かりではあった。

「ぜ、税金の徴収ですよ！　ですがこの女、我々を挑発してきました……！　社会の常識つてやつを教えてやろうと……!!」

三人組の一人がバケツに向かつて敬礼しながら言い訳する。

その余りの態度の急変に、怒るよりも男達が憐れに思えてきた。

これは、選手交代してバケツと第二ラウンドか？　と思いきや、予想外にバケツはこちらに向かつてもの凄い勢いで頭を下げてきた。

「すいません姐さん!!　俺の方からこいつらにはキツく言つときますんで、斬り刻むのだけは勘弁してやってください!!」

「姐さんって……」

何時の間にやら横に立っていたらしいシリカちゃんは、僕に胡乱な眼差しを向けてくる。

男に、しかも年上らしき相手に姐さんなどと呼ばれるとは、正直言つて鳥肌ものだった。それに心情を抜きにしても、その呼び名は二重の意味で矛盾している。

「いやいやいや！　僕がそう呼ばせてるわけじゃないからね!!　そもそもあなた誰ですか!?!」

「姐さん、俺つすよ、俺」

バケツの中から聞こえる声はくぐもつていて、中の人が誰なのか判別出来そうにな

い。だが少なくとも、ヒトのことを姐さんなどと呼ぶ知り合いに心当たりは無かった。

「新車のオレオレ詐欺か！ 僕にバケツを被った知り合いなんていませんから!!」

「いや、バケツって……これ、姐さんに貰ったモノっすよ？ 聞くところによると、重装歩兵がコイツを使つてたみたいで……何か、縁を感じるじゃないっすか」

バケツの中から漏れ聞こえるのは、反響した笑い声。

「まあ視界は悪いっすけど、《壁役》の俺には関係無いっすからね。有り難く使わせてもらってます」

そこまで言われ、僕はようやく合点がいった。

「そうか……あなた、コーバツツさんの部下の……え〜つと……」

「サザーランドっすよ。自己紹介なんて出来ませんでしたから、知らなくて当然っす」
バケツ改めサザーランドはそう言つて肩を揺らした。

そっか……十二人で分けるように言つたけど、律儀にちゃんと分け合つてたんだね。事情を知らない四人を置き去りに、僕らの間に和やかな空気が流れた———のだが。

「そ、そうだった……！ 俺、姐さんを捜してたんすよ！ もう参加者も集まっていますし、急ぎましよう!!」

「いや、ちよつ——」

と待つて、と言い終える前に、サザーランドは僕の手を握ると、一目散に走り出した。「何で男と手を握つて走らないといけないんだあ〜！」

「ちよつと！ 置いてかないでください〜い!!」

口から漏れ出た情けない悲鳴が、例によつて後にあられもない誤解を生むことになるのだが……—それはまた、別の話だ。

†

結局、訓練の参加希望者は百人には届かなかつたものの、それでも結構な人数が集まり、幾つかのグループに別けて指導することになった。

そして、僕の担当のグループはといえば……。

「
僕は目の前の状況に天を仰いだ。

子供、子供、子供。

十から十四歳くらいの少年少女が、僕の周りを取り囲んでいる。

聞くところによれば、彼らは近くの教会で共同生活をしているらしいのだが、
先生の目を盗んでこの広場までやつて来たのだという。

彼らにとつて僕らハイレベルプレイヤーはやはり物珍しいらしく、先ほどから訓練そつちのけで質問攻めにあつていた。

「お姉ちゃんは、あの『《血盟騎士団》の人なんでしょ!? フロアボスと戦ったことあるんだよね!」

短い赤毛を逆立てた少年が、羨望の眼差しを向けて訪ねてくる。

お姉ちゃん、か。……もはや何も言うまい。

「うん、あるよ」

優しく微笑んでそう答えると、少年は更に目を輝かせた。

「すげえ!! じゃあ、お姉ちゃんに剣教わったら、俺達でもその辺のイノシシだったら倒せるようになるかな?」

「なれるよ。だって、お姉ちゃん達はその為に来たんだからね」

目線が合うように屈んで、少年の頭に手を乗せる。

「お姉ちゃん達が、君の力になる。先生や下の子達の為に頑張ろうとしてる君の力に、ね」

「そ、そんなんじゃ……!」

「ふふっ……素直じゃないなあ」

薄れた記憶を頼りに、少し乱暴な手付きで少年の頭を撫でる。

サッカーの試合でゴール決めた時とか、父さんはこうやって頭を撫でてくれたっけ。

「や、止めるよ!」

そう言つて、少年は僕の手を払い除けた。

……子供扱いされたと思つたのかな？ やつぱり、この年頃の子は難しいなあ……。

「ぷっ……ケンタつたら顔赤くなつてるう〜」

「五月蠅いぞシユリ!!」

少年——ケンタが、彼がシユリと呼んだ女の子に掴みかかりそうになつたので慌てて止めに入る。

「ごらごら、喧嘩しないで。シユリちゃんも、ヒトをからかつちや駄目だよ?」

「ぐっ……」

「は〜い」

本当に解つてるんだろうな……?」

「もしかして、ティンクルさんつてシヨタコ——」

「シリカちゃん、何か言つた?」

「へっ!! いえ、何も!!」

ああクソ……頭痛くなつてきた。

兎に角、こうしてても仕方が無い。気を取り直して、天へと手を掲げ、叫ぶ。

「召喚!! ^{サモン} 高貴なる王の骸よ!!」

そう声を発した瞬間、地面に亀裂が走り、赤い煙が吹き上がる。

地中より現れたのは、全身から不浄なる黄色い光を放ち、頭上に錆びた王冠を乗せ、紫色のボロボロの外套を纏った二メートル程の巨大な骸骨だった。

その名は《ワイト》。母さんの故郷スカンディナヴィアの伝承では、人の姿をした悪霊とされる。が、SAOでは見ての通り、《スケルトン》の上位種の《アンデッド》系モンスターだ。

「何ですかそのモンスター?!」

「え? ああ、《使い魔》だよ、《使い魔》。《スケルトン》に毎日餌上げてたら、何時の間にか大きくなっちゃって」

「犬に餌やり過ぎて太らせちゃった、みたいなノリで言わないでください!!」

「ということで、皆にはこいつを相手に実戦練習してもらいます。反撃してくると思うけど、ダメージは無いから安心してね。それじゃ、王様頼むよ」

僕の頼みを「了承した」と言わんばかりに、王様はこちらに向けて骨その物の指でサムズアップする。

この芸を《スケルトン》時代に仕込んだのはキリトだが、今のこいつの姿を見れば驚くに違いない。

確か、キリトが最後に会ったのは、イナバを飼い馴らした翌日だったかな。

……ホント、急に大きくなるんだからなあ……。まさか成長するとは思いませんかつ

た。

「はい、じゃあ最初はケンタくん。やってみようか」

「こ、これ相手に……?」

「うん、これ相手に」

ニコリと笑つて頷くと、ケンタは赤みのあつた顔を一気に青褪めさせた。

だが、王様は無慈悲にも、身の丈に合った巨大で華美な儀礼剣へと手を伸ばす。

『すまんが、これも主の命令なのでな。悪く思うな、少年』

「喋った!」

シリカちゃん含め、僕以外の全員が驚きの声を上げる。

『主は我を王と呼ぶが、王に主がいるというこの矛盾——』

「無駄口叩いてないでサツサとやれ」

『主は無慈悲なり……』

愚痴らしきことをブツブツと呟きながら、王様は鞘から剣を抜き放つた。

黄金色に輝くその刀身は、朽ちかけの王冠とは違い錆び一つ無い。

「ティンクルさんつて、もしかしなくてもドエ——」

「シリカちゃん、また何か言つた?」

「ひひひひ」

何故シリカちゃんはこちらを見て怯えているのだろうか？

……まあいい。

こんなことは早く終わらせて、交渉しに行かないと。

先の展開を思い描きながら、小さく溜め息を漏らす。

耳に届くのは、轟音と烈風。そして、僅かに混じる少年の悲鳴。

視界には、巻き上がる砂埃と、小さな剣から迸るライトエフェクトが映っていた。

第34話 胡蝶の夢

「お疲れ」

ティンクルさんはそう言つて、少し離れた位置に座るあたしに向かつて何かを放り投げてきた。

「うわわっ」

情けない声を上げながらも、放物線を描いて飛来した物体をどうにか掴み取つた。が、掴み取つたは良いものの、指に伝わるその感触は、酷く懐かしいものだった。

ひんやりと冷たい、ツルツルとした金属質の手触り。それは、慣れ親しんだ……しかし、この世界には有るはずが無い物。

信じられない気持ちで手元に視線を落とすと——そこに有つたのは、プルタブ付きの飲料缶だった。

「なっなっ」

驚き過ぎて、先の言葉が出てこない。

皆さんもお疲れ様です、と他の人にも同じように缶を投げ渡してから、ティンクルさんは可笑しそうに笑う。

「びつくりするよね。まさか、アインクラッドでこれを見ることになるとは僕も思わなかったよ」

「……………」

その嫌味なほど魅力的な笑顔は、同性のあたしでさえ見ていてドキリとするくらいだ。きつとこの笑顔を向けられたのが男の子だったら、その男の子がこの人のことを嫌っていたとしても、次の瞬間には好きになってしまっていることだろう。

「……………」

でも、それなのに、キリトさんが好きなのはこの人じゃない。

あたしがぶつけてしまった嫉妬や怒りは完全に一方通行で、それどころか勘違いですらあったのに……この人は怒るところか慰めようとすらしてくれている。そのやり方は、正直言つて意外な程に不器用だけど。

「これ、中身は何なんですか?」

「炭酸ジュースだよ」

あたしの質問に簡潔にそう答えて、ティンクルさんは何食わぬ顔で隣に腰を下ろした。

彼女が何を考えているのか、あたしには解らない。

無表情、というわけではない。寧ろ、優しげに微笑んですらいる。

美人で、優しくて、料理も得意（らしい）で……凡そ、女性としては完璧過ぎる程に完璧で。でも、それに相反するように、怖いぐらいの苛烈さを秘めている。

そして、それらの印象が全てまやかしだったみたいに、隣に座る彼女の瞳はどうしようもなく虚ろなのだ。まるで、人形の硝子玉みたいに。

……そう思ってしまうのは、あたしが穿った見方をしているからなのかもしれない。

「じゃあ頂きます」

「どうぞ」

プルタブを引くと、飲み口からプシュツ、とガスが吹き出す。言った通り、中身は炭酸ジュースらしい。

何と無く嫌な予感がしつつも口を付け――

「ぶふっ……!! っほっっほっ!!」

少し遠くで、むせて咳き込む声が。

無言で缶から口を離して、ティンクルさんをジト目で見詰める。

「あの……バルバドスさん、でしたっけ？ が、超咳き込んでますけど」

「さあ？ 一体どうしたんだろうね？」

白々しさを一切感じさせないポーカークフェイスで小首を傾げ、ティンクルさんは同じように缶を開けた。

……あたしの考え過ぎなんだろうか？

そうだ、そうに違いない。幾らティンクルさんでも、そこまで性悪なわけがない……はずだ。

意を決して、液体を口へと流し込む。

「……!! けほっけほっ!!」

流れ込んできた半流動体の余りの混沌とした味わいに、あたしは目を見開き咳き込んだ。

口の中に広がったのは、カスタードの甘味とカラメルの苦味。舌触りはドロツとしているのに、炭酸のシユワシユワも有るには有って……それらが、奇妙な一体感を生んでいた。勿論、悪い意味で、だ。

「な、何ですかこれ!？」

「その名も『プリンソーダ』。ある菓子店で焼く前のカスタードプディングがとある理由により発酵……炭酸ガスが発生し、それを興味本位で飲んだ店主が『これはイケる!』と確信し、遂には商品化に漕ぎ着けることとなって現在に至る」

「何を戯けたこと言ってるんですか!？」

「いや、だって……これは何か、って訊いてきたのは君だろ?」

ティンクルさんは示すように缶を数度傾けると、何の躊躇いも無く飲み口を唇に付け

た。

「の、飲んでる……」

信じられず、思わず呟く。

この人、本当に料理得意なんだろうか？

「ぶはっ。まあ、今のは僕の作り話だけどね」

「は？」

「……シリカちゃんって、ちょっと僕に当たりが強過ぎないかな？」

「知りません!!」

この人はあたしを慰めたいのか怒らせたいのかどちら何だろう？

いや、慰めようとしてくれるってのは、あたしの妄想に過ぎないのかもしれない。

だとしたら、この人は失恋中のあたしをこんな所に連れ出して、剩あまつさえ玩具にして遊んで

いるんだ。

そう思い立った瞬間、あたしの怒りは今までに無い以上に沸々と湧き上がってきた。

「……ティンクルさん、さっき言いましたよね？」

「え？」

立ち上がり、あたしなんかじゃ絶対に敵いそうにない美女を見下ろす。

「その日が来るのを楽しみにしてるよ、って。今が、その時です」

確かに、勝算なんて無いのかもしれない。だけど、もはや勝ち負けの問題じゃない。「その顔、叩き潰します……!!」

両の掌を握り締める。その動作を起点に、紫色のライトエフェクトを伴った旋風つむじかぜが腕の周りで渦を巻く。

「……………」

この現象を見るのは初めてではないのだろう。ティンクルさんはゆつくりと立ち上がった。その双眸に、剣呑な光を宿らせて。

平常なら足が竦んだと思う。でも、今は大丈夫。しっかりと地面を踏み締める。

「旋棍せんこん、か。見るのは二度目だけど、まさか君が習得しているとは思わなかったよ」

やっぱり、ティンクルさんは以前にも旋棍トシフアー使いを見たことがあるらしい。

エクストラスキル《旋棍トシフアー》。最近になって見つけたスキルで、発現条件は《短剣スキル》、《棍棒スキル》、そして《体術スキル》を習得し、更にそれらの熟練度を一定まで上げること。……今まで発見されなかったのは、短剣も棍棒も攻略組の間ではマイナーな装備だからだ。

それなのに、この人は初見じゃない。それで得られるはずのアドバンテージは消滅した。

折れそうになる心を奮い立たせる為に、グリップを握る手に力を込める。

「でも、悪いけどデュエルは出来ない」

そう言つて小さく息を吐き、ティンクルさんは目を逸らす。

「何で……ですか……？」

怒りは湧いてこなかった。

只悲しくて、涙が出そうになった。

「あたしなんかじゃ、ティンクルさんには絶対勝てないからですか？ やるだけ無駄

だつて……そう言いたいんですか？」

「違う、そうじゃないんだ」

「だつたら何だつて言うんですか!？」

これで、たとえ向かい合えなくても、せめて肩は並べられると——そう思つていたので。

あたしじゃ、どんなに頑張つても「そこ」に立てはしないのだと、そう突き付けられているような気がして。

「ティンクル、相手してあげればいいんじゃない？ 訓練の延長、つてことでさ」

そう声をかけてきたのは、KOBのセントルシアさんだった。

改めて周りを見てみれば、全員がこちらを注視しているが解る。また、そうすることで、冷や水を浴びせられたように、少し冷静になることが出来た。

「そして、シリカちゃん！ あの液体を飲まされた私達の仇を纏めて取って!!」

「え!？」

ガシツと両手で肩を掴まれ、思わず大きな声が出る。

一方ティンクルさんは、何故か目を丸くした。

「仇って……美味しくありませんでした? 《プリンソーダ》」

「美味しくない!!」

この場の全員の総意とばかりにセントルシアさんはそう叫ぶ。実際、バルバドスさんを始め殆ど全員が頷いている。が、コーバツツさんだけが動揺しているようだったのが気掛かりだ。

……というかティンクルさん、本当に美味しいと思ってたんだ、アレ。

「……………」

長い沈黙。

やつぱり駄目なんだろうか。そう思い始めたとき、重い腰を上げるようにティンクルさんは口を開いた。

「——解ったよ。でも、やるからには手加減しないからね」

さつきまで乗り気じゃなかったのが嘘みたいに、その顔には挑発的な笑みが浮かんでいる。

「……!! 望むところですよ!!」

きつと、あたしも笑っていると思う。

この人に初めて認められた気がして……嬉しかったから。

「モードは《初撃決着》。お互い使い魔の使用は禁止。また、致死量のダメージを発生させるスキルの使用も禁止。それ以外は何をしても構わない。……ルールはこんなところかな。——シリカちゃん、これで構わないね?」

「はい、それで良いです。——待っててね、ピナ」

あたしを応援するように小さく鳴いて、肩からピナが飛び立つ。それとほぼ同時、目の前にウインドウが表示された。

【Twinkle からlv51デュエルを申し込まれました。受諾しますか? Y E

S o r r NO】

迷うことなくYESをタップし、初撃決着モードを選択する。

【60】

【59】

システムメッセージが流れ、カウントダウンが開始された。

周りを見渡せばと、何時の間にかセントルシアさん達があたし達の周りを円形に大きく取り囲み、簡素なリングが出来上がっている。

左腕を引き、右腕を前へと突き出すようにして構える。そして、何時でも跳び出せるよう、軸足に力を込めた。

一方、ティンクルさんはあたしと距離を空ける為に一歩ずつ後退し、やがて止まった。でも、刀を抜くどころか、余りにも自然体で突っ立っているだけ。

〔10〕

〔9〕

だけど、気にしない。

大きく息を吸って、吐き出す。

〔2〕

〔1〕

その数字が見えた瞬間、あたしは大きく地面を蹴り付けた。

【DUEL!!】

「——なっ!？」

あたしは目を見開いた。

DUELと表示されると同時、突然ティンクルさんの纏った鎧が衝撃音と共に爆ぜ、無数の破片が弾丸となって四方八方に飛散したのだ。

「くっ!!」

でも、止まらない。止まる必要も無い！

顔の前で腕を交差させ、構わず駆け抜ける。

「やっぱり！　って——」

破片の壁に突っ込んだにも拘らず、まるで幻影だったかのように、破片は全てあたしの身体を通過した。が、破片の壁を突破した次の瞬間、眼前に迫る投剣が目に入る。

「わわわ!!」

間一髪。ギリギリのところで、左手の旋棍で弾き飛ばす。

だが——

「い、いない!?　一体何処——ハッ!」

風切り音が真横から聞こえ、咄嗟に右腕を折り曲げて脇腹を庇う。

「…………ツ!」

旋棍から伝わる衝撃に敢えて逆らわず、態と横に吹き飛ばされることで距離を取った。

更なる追撃に備えて身構えるが、ティンクルさんにその様子は無かった。

「どうして最初のあれがフェイクだって解ったの？　参考までに聞かせてくれない？」

「はあ…………はあ…………。だって…………あの破片には、どれも影がありませんでしたから」

「成る程。そんな欠陥があったのか……気が付かなかった」

ティンクルさんは思案顔で更に二言三言呟くと、小さく肩を竦めた。

「確かに何でも有りとは言いましたけど……一発目が目眩ましで二発目は囷、三発目でようやく本命って……どっただけですか!?! しかも追撃する余裕も当然有りましたよね!?!」

まだデュエル中なのは解ってはいるけれど、話しかけてきたのはあっちだし、何より言わずにはいられない。

「周り見てくださいよ! 全員ドン引きですよ!?!」

リング代わりになってくれているメンバー及び、何時の間にか集まっていた野次馬までもが、彼女の余りの徹底ぶりに言葉を失っている。

「いや、だって……対人戦って、相手の行動の先を読み続けて攻撃を配置していくものだし……寧ろ、罠の一つや二つ有って然るべ——ごほん! いや、何でもないよ?」

「今更誤魔化しても遅過ぎると思います」

今や、この場にいる全員が理解している。

さつきまではデュエルそのものを嫌がってるようですらあったのに、蓋を開けてみれば対人戦の熟練者エキスパートだったのだ。おまけに、*「勝ち」*への執着が尋常じゃない。

それを前提に考えてみれば、嫌がった素振りすらも、あたしをミスリードさせる為の

罨だったということが解る。

「ティンクルさんって、絶対に負けず嫌いですよね」

騙されていたのは腹が立つけれど、それだけ警戒されてたのだと考えれば気も晴れる。

でも……あれ？ ティンクルさんは、旋棍使いを見るのは初めてじゃなかったはずでしょ？ だったら幾ら負けず嫌いだからって、レベル差から考えても、そこまであたしを警戒する理由なんて無いんじゃない？

もしかして、あたし……何か大きな勘違いを……。

あたしが、その答えに思い至る前に——

「ティンクルさん……？ ティンクルさん!!」

まるで糸が切れた人形のように、ティンクルさんはその場に崩れ落ちた。

†

ザザツ……ザザツ……ザアアアアアアア——

激しいノイズ。その音は、羽虫のそれを連想させる。

ザアアアアアアア——

不快感に只々堪える。

これは夢なのだから、僕に抗う術は無いのだ。

そう、これは夢だ。現実じゃない。

ザアアアアアアア……ザザッ……ザッ……

歯を食いしばって耐え忍ぶうちに、ノイズは減り、やがては収束した。

視界が晴れ、既視感を感じるセピア色の世界が広がっていく。

何処かのリビング。住宅街。高速道路。森と海。ひとけ人氣が疎らな寂れた町。

暴風のように目紛るしく景色は移り変わり、辿り着いたのは古ぼけたアパートの一室だった。

床の上にはカップラーメンの容器や空き缶が散乱し、室内には異臭が立ち籠めてい
る。そして、部屋の中央に、ワンピース姿の子供が蹲っていた。子供の表情は窺い知れ
ないが、肩まで伸びた髪や服装、背格好から考えて、小学校低学年くらいの女の子だと
いうことが解る。

外では雨が降っているのか、部屋一杯に屋根を打ち鳴らす音が響いている。それで
も、耳を澄ませば聴こえてくるのだ。雨音に融けてしまいそうな、微かな少女の泣き声
が。

手を握り、開く。数度同じことを繰り返し、自分の身体が問題無く動くことを確認し

てから、少女を驚かせないようにゆっくりと近づいていく。それでも一歩進むごとに床は軋みを上げ、僕の存在に気が付いたのか少女は顔を上げた。

でも、違った。少女は、僕の顔など見ていない。焦点の定まらない目で、ぼんやりと虚空を見詰めるばかりだ。

大丈夫？ と声をかけようとして、自分が声を出せないことに気が付いた。

……まあ、夢なんだからそんなこともあるか、と納得する。

改めて、少女に視線を落とす。

間近で見れば、スカートから覗く細い足に大小様々な痣が浮かんでいるのが解つた。

つまりこの少女は……虐待を受けているのか……？

そう思った瞬間、突然背後に人の気配を感じ、思わず振り返る。

『……ッ！』

立っていたのは、顔を黒く塗りつぶされたスーツ姿の男だった。

第35話 Aster and Chrysanthemum

二〇二四年十月二十七日

入院棟地下二階。霊安室の隣に位置する、誰もが近寄り難く感じるであろう一室。そこが彼女の城であり、また同時に彼女の自由を奪う檻でもあった。

彼女——詰まる所、この研究室の主である月見里紫苑は、例によつて若い看護師に襟首を掴まれて護送されている最中だ。薄暗い廊下に、二人分の足音が何処までも反響するようだった。

「君も何と言うかしつこいねえ……。あ、あれか。君、佐藤君のことが好きなんだろう？」

「違います。……はあく……。先生、いい加減に仕事してください」

「患者とコミュニケーション取るのも立派な仕事だろう？ 昨今は、何かと患者と医者とのコミュニケーション不足が問題になっていることだし」

「言つてることは正しいです。でも、意識が無い患者を相手に、どうやってコミュニケーションを取つてるんですか？」

「……………」
「……………」

この二年、紫苑が頻繁に研究室を抜け出し、患者——特に三雲光という青年の病室に足を運んでいるのは看護師も当然知っていた。そして、その理由も概ね理解している。

一昨年に起こった未曾有のサイバー犯罪、通称《SAO事件》の犯人は今でこそ茅場昌彦個人となっているが、事件発生当初は複数人による犯行なのでは、とマスコミ各社が騒ぎ立てた。その共犯相手と目されたのが、茅場の恋人であり自身も科学者である神代凜子という女性と、NERVE Direct Linkage Environment System——通称《NERDLES》の共同研究者であり《ソードアクト・オンライン》開発にも一部携わっていた紫苑だった。

結局、捜査が進むにつれ両名の疑いは晴れるのだが、紫苑が受けたショックは並々ならぬものだった。その理由までは看護師に知る術はなかったが……医者という職業を選んだ以上、多かれ少なかれ“人を助きたい”という思いが有るはずなのだから、その思いとは真逆の所業に手を貸してしまった、という自責の念を抱いているのかもしれない……と、看護師は勝手に解釈していた。

だから看護師としては、光の病室へ紫苑が顔を出すことに対して余りキツイことは言いたくないのだが、少なくとも職務中にするのではないし、何より佐藤に泣きつかれ

るのが迷惑だった。

「——ところで先生……珍しいですね、これからデートですか？」

看護師は口数が多い性分だった。彼女にとって、沈黙は耳に痛いものだ。

そんな中、普段化粧つきの無い紫苑が珍しくルージュを引いているのを見つけたのは、看護師にとって行幸だったと言えよう。

「残念ながらデートではないが……私だって、人と会う時くらい身なりを整えるさ」

紫苑はそう言うのと、心外だ、とばかりに大きく溜め息を吐いた。そして、看護師の手を払い除けると、襟を正してそのまま一人歩き始める。

その光景を看護師は暫し呆然と見詰めていたが、ハッと我に返り、慌ててその背中を追った。

特別足が速い訳では無い——寧ろ、インドアが祟ってか遅いくらいである——紫苑に看護師が追い付くのは訳無く、隣を歩きながら懲りずに話しかけた。

「それこそ珍しいじゃないですか、先生に面会客だなんて。私が専任看護師になってから初めてのことじゃないですか？」

「バブルの頃ならいざ知らず、今じゃ製薬会社の接待だって期待出来ないからな。それに、これから会うのは客じゃない」

客じゃないなら一体何だというのか、と看護師は首を傾げたが、そんな看護師を無視

して紫苑はツカツカと歩を進める。

「ちよつと無視しないでくださいよ〜！ はい！ 会話のドツチボール！」

「ぶつけてどうする。それを言うならキャッチボールだろう。……はあく……——これから会うのは、総務省の役人だよ」

「総務省？ 厚労省じゃなくてですか？」

看護師が疑問に思うのも無理は無かった。

医療を管轄するのは厚生労働省であり、本来総務省の出る幕など無いはずだからだ。

「総務省の管轄の一つは情報通信だ。……ここまで言えば、君でもピンと来るだろう？」

「ああ……S A O 関連ですか。でも、それこそ今更じゃないですか。まさか、まだ先生が共犯者か何かだと疑ってるんでしょうか？」

「疑っているか否かは知らんが、今日はそつちじゃくて、私の本業について聞きたいことが有るらしい」

「認知神経科学と情報通信に一体何の関係が？」

「……ブレイン・マシン・インタフェース B M I の方だ。ほら、最近少し派手にやらかしただろう？」

「何時からそちらが本業になったんですか……」

看護師は嘆息し、白けた目付きで紫苑を見やる。

「それにしても——麻酔科学会全体を敵に回しておいて “少し” ですか、そうですか。

流石は先生、常人とは肝の座り方が違いますね」

「褒められている気がしないな」

「当然です。褒めてませんから」

普通なら、首が飛んでも仕方無し、という口の利き方だった。

見た目だけでは解り辛いのが、紫苑と看護師では十は歳が離れている。そうでなくとも、大学病院の教授と一介の看護師という間柄なのだ。

その場の雰囲気というか、勢いに流されるようにして、自分が口走った台詞を看護師は早くも後悔し始めたのだが………という訳か、紫苑は腕を組んで小さく唸り始めた。端正な顔が、苦悩に歪んでいる。まるで、数学者がミレニウム問題に挑んでいるかのような表情だ。

「ど、どうしたんですか?」

「いや、な。どうにも、君は目付きの険しさが足りない」

「はっ!」

「短簡に言えば………そうだな、侮蔑が足りない、といったところか? こう………なんだ?

家畜………そう、敢えて言うのなら、豚を見るような眼差し。そう、君にはそれが足りていない」

「……………」

ま・た・か。

看護師の頭の中で、そのたった三文字の言葉がリフレインする。

「ああ、そうだ……はあ、はあ……中々、良い感じだ。後は……はあ、はあ……このロープで……はあ、はあ……！ 私を縛り上げるだけだ……！」

恍惚とした表情で息を荒げながら紫苑が白衣のポケットから取り出したのは、日頃からしつかりと手入れされているらしい年季の入った麻縄だった。それを手渡された看護師の表情は、今度こそ凍り付いた。しかし――

「これで縛れば良いんですか？」

何故か、看護師は笑みを浮かべて紫苑にそう尋ねた。その異様さは、トリップしかけた紫苑を現実に取り戻すのに十分な威力だった。

紫苑の背筋に、冷たいものが走る。

「ところで――随分前のことなので記憶があやふやなんですけど、こういうのって油で手入れするんですって？ テレビか何かで見たんですけど」

「あ、ああ……確かに手入れには馬油を使うが……それがどうし――」

言いかげ、紫苑は気付く。看護師の双眸が、剣呑な光を宿していることに。

しかし、紫苑は怯まない。

「はあ、はあ……――」

寧ろ、その視線の強さに。

一寸先で待ち受ける快樂を想像して――

「はあ、はあ……はあ、はあ……はあはあはあはあはあ……!!」

動悸は速まり、呼吸も乱れる。

紅潮した頬。陶醉しきつたその艶めかしい表情は、端的に言えば情事のそれを思わせ
た。

だが、そんな展開があり得るはずも無く、看護師は数度頷くと口を開いた。

「そうですか。なら、火を点けたら……きつと、よく燃えますよね?」

そんな不穏な口振りに、又しても紫苑は現実引き戻される。

「ま、待つてくれ! その繩は、死んだ祖父が私の七歳の誕生日に買ってくれた大切なものなんだ!」

「孫へのプレゼントが縄って……」

看護師は呆れたようにそう言つて、手元の繩をチラツと見た。

それを好機と受け取つた紫苑は、手をそつと差し出し切実に訴える。

「ああ。だから、それを早く返してくれ」

「ええ、ちゃんと返却しますよ。灰にしてからです」

看護師は無慈悲にそう返すと、繩をナース服のポケットに仕舞つて、一人スタスタと

歩き始めた。

↑

「宮崎さん、お茶淹れてくれないかな？」

「佐藤先生、偶にはご自分でお淹れになったらいかがですか？」

「え……」

「いえ、冗談です」

くすりとも笑わず看護師——宮崎はそう言うと、備え付けのコーヒーマーカーに手を伸ばす。が、思い直すように手を止めると、くるりと振り返った。

「月見里先生も飲みますか？ コーヒー。うんつと苦くしてあげますが」

言われ、紫苑はモニターに目を向けたままデスクに置いた飲料缶を指で叩く。

「いや、さつき自販機で買ったココアが有るから遠慮しておこう。——それより、私の祖父の形見を早く返し給え」

「え？ 形見？」

早くもストレスで胃が痛くなり始めた佐藤だったが、余りにも不穏当な内容に思わず聞き返す。

「何時もの戯言ざれごとなんで気にしないでください。——ごほん。それより教授、そろそろ先方が面会に来られる頃では？」

宮崎は軽く咳払いすると、事務的な口調でそう切り出した。

「いや、そんなことはどうでもいいから早く形見を返しなさい」

「あくまで形見と言ひ張るつもりですか」

「いや、だから形見つてどういう——」

「あれだぞ？ 君が早く返してくれないと、頭の中が形見のことで一杯になつて話に集中出来なくなるかもしれない。それどころか、相手に多分に失礼なことをしてしまふかもしれない。そんなの、君だつて本意ではないだろう？」

「それで脅迫のつもりですか？ 返そうが返すまいが、どうせ煩惱で頭の中一杯なんじゃないですか？」

「失礼な。君は私をウサギか何かと勘違いしていないか？」

「そうですねえ、本当にウサギなら少しは可愛げがあつて良かったんですけどねえ。でも、先生はウサギじゃなくて雌豚でしょう？」

自分の発言を黙殺して舌戦を続ける二十は年下の女性兩名を無言で見詰めていた佐藤は、やはり無言で瓶に入った白い錠剤を手に取り飲み下した。

只でさえ男独りで肩身が狭いというのにこんなことを毎日続けられていると、生き残っている毛根も死に絶え不毛な大地と化す日も近かるう、と佐藤は項垂れた。

『コンコンツ』

——と、騒がしい室内に、ノックの音が相対的に小さく響く。

しかし、言い争っている紫苑と宮崎には聞こえなかったようで、仕方無く——いや、寧ろ流れを変える為、佐藤は積極的に立ち上がると、扉へ駆け寄り取っ手を引いた。

「お待ちしていました。どうぞお入りください」

「いやあ、遅れて申し訳ありません。急に雨が降り出したせいか道が混雑してまして」
そう言つて、スーツ姿の黒縁眼鏡の男は佐藤に向かつて軽く会釈した。

確かに、よくよく見れば男の肩は少し濡れている。恐らく、駐車場から玄関まで行く間に雨に打たれたのだろう。

「ああ、これは失礼。私、総務省総合通信基盤局高度通信網振興課第二分室——通称《仮想課》職員の菊岡誠二郎と申します。以後、お見知りおきを」

長つたらしい名称を言い慣れているのか一度も囁むこと無く言つてのけ、黒縁眼鏡の男——菊岡は名刺を取り出すと佐藤に手渡した。が、次の瞬間には何者かが横から手を伸ばし、佐藤の手から名刺を抜き取った。勿論、その何者かとは紫苑のことなのだ。

「これは月見里先生、お会い出来て光栄です」

「世辞はいい。——立ち話もなんだ、そのソファーにでも掛けてくれ」

先程までの醜態の数々がまるで幻か何かだったかのように紫苑は冷然と続ける。

「宮崎君は菊岡さんにお茶を。佐藤君は来月のフォーラムで使う資料の整理でもしてい

てくれ」

紫苑の矢継ぎ早な注文オーダーに兩名は無言で首肯するとそれぞれ作業に着手する。

冷徹な才女——それが月見里紫苑という女性の本来の姿なのだろう。室内の弛緩と
していた空気が、一瞬で絶対零度に凝固する。

実際、紫苑が対面に座った瞬間、職業柄この手の相手には慣れていてであろうはずの
菊岡の顔が僅かに強張る。しかし、官僚という生き物の特性か、次の瞬間には瞬きでも
するかのような自然な動作で柔和な笑みを張り付けていた。

「フォーラムということは、何かVR関連の研究について発表されるんでしょうか？
不躰な質問で恐縮ですが、何分先生の研究には個人的にも大変興味が有りまして。もし
オープンなものなら、是非とも見学に行きたいのですが」

「公開フォーラムだから、来たければ来るといい。マスコミも各社呼ぶらしいしな。但
し、知己を求めて来るつもりならば、余りお薦めはしない。フォーラムと言えば聞こえ
は良いが、恐らく討論の場ではなく、宛さなら処刑場の様相を呈することになるだろう」

「処刑場、ですか。余り穏やかではありませんね」

「——どうぞ」

そう一言告げ、宮崎は菊岡の前にコーヒーの入ったティーカップとシュガースティッ
クを置くと、小さく頭を下げて佐藤が座るデスクの方へ歩いていった。

カップから白い湯気が伸び、鼻孔にコーヒーの香りが広がる。

紫苑は菊岡がカップに口を付けるのを待ってから——しかし話の先が気になるのか、カップに一瞥もくれずにこちらを見詰める菊岡にやれやれと思いつつも話を再開することにした。

「菊岡さんは、薬は基本的に毒である、という話を聞いたことは有るかな？」

「ええ、薬学部出の友人に聞いたことが有ります」

薬学部、という単語に紫苑は軽く眉根を寄せるが、菊岡はお道化るように首を傾げ苦笑する。

「しかし、それが先程までのお話と何の関係が？」

「慌てる乞食は貰いが少ない、と昔から言いますよ菊岡さん」

紫苑はそう言うと、意味深長な笑みを浮かべて続ける。

「最近ではもう一般常識だが、薬にはどんな種類のものでも多かれ少なかれ副作用が有る。それは、手術で使う麻酔薬などでも同じこと。——ところで、菊岡さんは後継機であるアミュスフィアには無いナーヴギアの特性をご存知かな？」

「そりゃ、勿論把握してますよ。体たらくでお恥ずかしいですが、一応SAO事件対策チームの人間ですからね。——えーつと……まず一番の違いは、やっぱり高出力マイクロウエーブの発生が可能か否か、ですよ。あれさえ無ければ、そもそもこんなことに

はなつてませんから。後は体感か——まさか」

菊岡は紫苑の言わんとしていることを理解したのか目を見開く。

「そう。フルダイブ中のナーヴギア装着者の体感覚は、全て延髄部でキャンセルされ脳まで届くことは無い。これは全身麻酔の代用になり得る。おまけに、麻酔と違つて副作用は無く、患者はVR世界で読書でもしてストレス無く過ごし、目覚めれば手術は既に終わっている——という寸法だ。面白いだろう？」

ま、術後の痛みを考慮する余地は有るがな、と紫苑は肩を竦める。

「それでも患者の負担が軽減されるという意味では良いことでは？ それに、VR機器が医療に貢献するというのは、《SAO事件》で民衆に根付いた悪印象を和らげる効果も期待出来る……これは画期的なことですよ」

VR技術を医療に転用するという試みは以前から有つたが、ナーヴギアそのものを直接使うというのは、凝り固まつた学者達には盲点だつたのだろう。現時点で導入可能なレベルのプランを提唱出来たのは紫苑のみだつた。そういう意味で、菊岡が感嘆の声を上げたのは無理からぬことだろう。しかし、紫苑の表情は優れない。

「そう言つてくれるのは有り難いが、残念ながら内外での反発が強くてね。実証試験をしようにも、患者はナーヴギアと名前を出した段階で拒否反応を示してしまう。理論的には問題無くても、だ。また、麻酔科医からの反対意見が根強くてね。最近では、私が

麻醉科医そのものを不要と論じていると触れ回っている。そんなこと、有り得ないのにも関わらず、な。——衆愚は論理より感情を優先し、権力者は公益より私益を優先する。何時の世も、先駆者せんくしやは異端者として断じられるものなのさ」

紫苑は悲壮感漂う声音で雄弁と語り、そして、ニヤリと妖しい笑みを浮かべる。

「さっき言ったフォーラムは、麻醉科学会主催のVR機器導入の検討会だ。検討会、と題してはいるが、実際はアドバイザーとして招集する私を吊し上げるのが目的だろう。それも、マスコミを始めとした衆目の前で、な。——だが、戦場では狩る側が狩られる側に回るなどよくある話だ。果たして、首が弾けるのは……私か、それとも彼らかな？」

「成る程。……では、月見里先生の雄姿を拝見させてもらえらることを期待しています」

内心の読めない笑顔で菊岡はそう言うと、ようやくコーヒーカップに手を付け、一口啜った。

そんな菊岡の姿を品定めするかのような目付きで眺めていた紫苑だったが、やがて諦めるように一息吐いて口を開く。

「随分話が逸れてしまったが、そろそろ本題に入ろう。菊岡さん、本日はどういった目的でこちらに？ まさか、世間話をする為にこんな所まで来たわけではないのだろう？

——言っておくが、《プロジェクト・アリシゼーション》……だったか？ 如何にも官僚が好みそうな大仰なタイトルだが、送った書面の通り、私に参加する意思は無いよ。勸

誘に態々出向いたのなら、とんだ無駄足だったな、と言わざる負えまい」

「それは残念ですね。ですが、もし気が変わるようなことが有れば、何時でもご連絡ください。先生の席は、何時でも空けておきますので。——只、今回は勧誘ではなく、少々お尋ねしたいことが有りました」

「ほお。私に答えられることなら良いのだが」

紫苑が半ば承諾すると、菊岡は浮かべていた笑みを消し、黒縁眼鏡を押し上げた。

「では、お言葉に甘えて……——先生が開発した人工知能《Div a of the M e m o r i e s》の所在を教えて頂けませんか？」

《Div a of the M e m o r i e s》は開発コードネームだ。完成品のあの娘には、ちゃんとした名前を与えた」

先程は《プロジェクト・アリシゼーション》を大仰と言っておきながら、自らのネーミングセンスには疑問を持たないのか、紫苑は眉一つ動かさずに流暢なクイーンズ・イングリッシュで言つてのける。が、内心どう思っているのかは兎も角、それを顔に出す程菊岡も子供染みてはいない。二人は、何事も無かったように会話を続ける。

「たしか……A u r o r a……いや、発音はアウローラが正しかったかな……？」

兎も角、これからのトップダウン型人工知能のモデルケースに成り得るわけですから、黎明の女神の名を冠するのは合点がいきます。ですが……寧ろ、そのコードネームの方

が、彼女の機能を如実に物語っている」

「……そこまで論文に書いた覚えは無いんだがな。もしや、うちの大学のサーバーにハッキングでも仕掛けたか？」

「……………」

紫苑と菊岡の視線がレンズ越しに交錯する。

火花が散る。その比喩を絵空事と切り捨てるには、二人の眼光は余りに強い。

紫苑は既に、菊岡が只の官僚——少なくとも、《仮想課》などという敗残兵の寄せ集めで燻っているような人間ではない、と確信を持っている。しかしだからといって、一介の公務員が、大学のサーバーにハッキングを仕掛けるような大それたことを一個人でするとは思えない。

(だとすれば、産業スパイ……情報の流出先は海外か、若しくは国内企業……まさか、国立研究機関……?)

思考を巡らせながら結局、こちらが持っている情報が余りにも足りなさ過ぎる、という結論に行き着く。

(……仕方が無い、か)

菊岡の真意を確かめる為にも、まずはこちらから餌をくれてやるべきか、と紫苑は方向性を固める。

「あの娘の所在を聞きたいんだつたな? ……あの娘は現在いま、浮遊城アインクラッド——即ち、SAOサーバー内にいる」

言つた瞬間、紫苑は内心首を傾げた。というのも、菊岡の表情はここに来て一番の驚愕に染まつていたからである。

もしこれが演技だとすれば、菊岡は相当な食わせ者ということになるのだが……紫苑としては面倒極まりないので、その可能性は捨て置くことにした。

「……まさか、とは思いますが、プレイヤーを対象に実証試験を行おうとしていた——なんてことは有りませんよね?」

「実証試験? はて、少々ニュアンスがずれていないかな、菊岡さん。人体実験、と堂々と言つてくれても私は別に構わないよ」

「ぶふっ!! ゲホツゲホツ!」

「ちよつと、大丈夫ですか? 准教授」

「どうやら佐藤先生の方は大丈夫ではないようですが?」

「私はこれでも大学病院の教授なのでね。痛くもない腹を探られるのには慣れてるのさ」

そう言つて、紫苑は皮肉っぽく口元を歪めた。

一方菊岡はといえば、寧ろ俄然興味が湧いたといった体で、食い入るように紫苑に視

線を向ける。

「では、改めてお聞きしますが、アウローラを何故SAOに？」

声からも、レンズの奥の瞳からも、真剣さはありありと伝わってくる。が、紫苑が告げる回答は、その姿勢にはとんと釣り合いのとれないチープなものだった。

「簡単な話さ。奴の心底人生詰まらないとでも言いたげなああの不景気面を恥辱の赤で染めてやるつもりだったんだよ。そして成功した暁には、人差し指でもって奴の頬をぐりぐりとやりながら、『プギャー！ お前そんな顔出来るんなら、四六時中その顔のまんまでいろよ。その方が絶対面白いから』とでも言つてやるつもりだった。まあ、全ては後の祭りつてやつだがね。はっはっはっ」

そう言つて愉快そうに笑う紫苑の笑顔は、佐藤の背中を摩りながら眺めていた宮崎には、この日の中で一番自然なものに思えた。

第36話 Diva of the Memories

「——ううっ……ここは……？」

微睡みから覚醒し、ぼんやりと宙を見詰める。

目に入ったのは、木目が綺麗な天井。薄暗い室内の壁に、ランタンの灯火がゆらゆらと影絵のように揺らめいている。

どうやら何処かの宿屋の一室のようだけれど、眠りに落ちる前の記憶が曖昧で、一体何時床に就いたのか覚えていない。そもそも今日は何日で、僕はここでどれだけの時間眠っていたのだろうか。

目が覚める前、誰かに何度も名前を呼ばれていたような気がするが……そんなことは有り得ないはずだ。だって、このセカイで僕の本当の名前を知っているのはたったの二人。その内一人は僕のことを覚えていないし、もう一人は……。

兎も角、妙に身体が重く感じるから、意外と眠ってからそんなに時間は経っていないのかもしれない。

「それにしても何なんだよ一体……まるで胸の上に重石でも乗つかてるみたいな……—

——あ

足元の方へと視線を這わせると、予想外のモノが目にと留まり思わず声が漏れた。

頬を伝った一筋の雫は、緊張の汗か、それとも喜びの涙か。余りも驚き過ぎて頭が混乱しているのか、自分でも判別が付かない。

「り、里………リズ………」

毛布の掛かった僕の身体の上に伏せて小さな寝息を立てていたのは、この半年こちらの勝手な都合で避け続けていた篠崎里香——いや、リズベットだったのだ。

先刻思い浮かべたばかりの想い人が、今こうして目の前にいる。

「な、何でリズが……？」

この半年、彼女を避けていたのにはちゃんとした理由がある。それは、リズと同棲したら僕が男だと周囲にバレるからだとか、喪失の恐怖で攻略が疎かになるかもしれないとか、そういった自己防衛が理由では勿論なく、僕と茅場の争いに彼女を巻き込まない為だった。だけど、先日当の茅場本人から、真偽の程は兎も角として、茅場の意思でプレイヤーが傷付けられることは有り得ない、と告げられたのだ。

無駄だった、とは思わない。このデスゲームという状況で、警戒し過ぎる、なんてこととはないのだから。

僕はある時、自分に出来得る範囲で最善を尽くした。……それでも、後悔が無かったと言えば嘘になる。

リズはまだしも、僕はそれこそ本当の意味で死と隣り合わせの毎日だ。彼女を迎えに行くという約束も、僕の意味とは無関係に、何時反故になってもおかしくはない。そう考えると、たとえ最低の選択だとしても、何故一緒になることを選ばなかったのか。そんな風に、自分自身に怨み言の一つも言いたくなるというものだ。

そんな訳で、この状況は正直に言つて非常に嬉しいわけだけど、素直に喜べないのは……やはり、このリズの態勢がどう見ても、看病疲れで眠つてしまいました、といった体以外の何物でもないからであろう。

一体、眠りに落ちる前に僕の身に何が起こつたというのか。

幾ら記憶を遡ろうとしても、霧がかかったかのように先に進むことが出来ない。

——いや……確か……そう。キバオウとの交渉の一環で、《はじまりの街》の住人——僕の場合は教会で共同生活をしているという子供達——を相手に稽古を付けたんだつた。それから……——

「……それから……？　それから……どうなつたんだ……？」

その後は、キバオウとの交渉の為に《軍》の本部がある《黒鉄宮》に向かうはずだった。

はずだった……つまり、実際には行っていないというわけだ。もしあのサボテン頭と顔を合わせていれば、嫌でも覚えてる自信がある。ということは、戦闘訓練が終わつて

《黒鉄宮》へと向かう間に何かがあった、ということになる。そして、その何かに心当たりがありそうな人間が一人目の前にいるわけだけだ……。――

「起こしちゃうのは悪いよね……」

もし本当に夜通し看病してくれていたのだとしたら――いや、たとえ偶々ここを訪れて寝こけてしまったのだとしても、気持ち良さそうに眠っている彼女を起こすのは忍びない。

上半身を起こすことも出来ず一人悶々と考えあぐねていると、ドアの向こう側から微かな足音が聞こえてくることに気が付いた。

生憎と他人の会話を盗み聞く趣味は無いので《聞き耳スキル》は取っていないが、この手の音は環境音と完全に分離されているので聞き分けることが出来る。所謂《システム外スキル》というやつだ。

音の主はこちらに近づいて来ているのか、床の軋みが徐々に大きくなってきているように思う。

そして遂にというべきか、音の主はこの部屋の前で立ち止まったようだ。

「……誰だ？」

リズは熟睡しているようであっという間とした物音くらいでは起きると思えなかったけれど、思わず声を潜めたのは警戒感の表れだろう。

目だけを動かして注視する最中、扉がゆっくりとギギギと音を立てて開いていく。

「……………」

声を上げる代わりに、生唾を飲み込んだ。

「やあ、ティンクル君。目が覚めたようでは何よりだ」

——現れたのは、紅を基調とした団服に身を包み、真鍮色の瞳を宿した魔王だった。

↑

時刻は僅かに遡り、精神神経科学第二研究室。

ニヤニヤとした含み笑いを浮かべる紫苑と、頭痛でも堪えるかのように眉間に深く皺を刻んだ菊岡。佐藤はいええそんな二人の様子を見るうち、早くも葉が切れたのが胃が軋みを上げ始めていた。

そんな混沌とした空気を打ち破ったのは、これまたやはりというべきか宮崎だった。

宮崎は佐藤が座るデスクから離れ応接スペースにやって来ると、小首を傾げながら紫苑に問うた。

「いや、教授……AIをゲームの中に送ったからってそれが何なんですか？ しかも、それであの茅場昌彦が恥をかくって……もはや意味不明なんですけど」

一般人からの余りにも常識的過ぎる感想に菊岡は我に返ったのか、内心の読めない微笑を張り付け宮崎に同調する。

「同感ですね。あの茅場先生を辱めるなんて、並大抵の方法では叶わないと思いますが」
白々しい台詞をポーカークフェイスで言つてのける菊岡に、今度は紫苑が響めつ面になる番だった。

仮に、菊岡——若しくは菊岡と通じる何者かが実際に大学のサーバーにハッキングを仕掛けデータを盗んでいたとして、それを菊岡が認めるわけがないし、データを盗んだからといってアレを再現することが出来るとは思えない。そもそも私でさえ、同じものを造れと言われても同一のものを創ることは不可能なのだから。

そう紫苑は内心自分に言い聞かせるようにしてから、落ち着いた声音でゆっくりと話し出す。

「菊岡さんはモーツァルト効果というのをご存知かな？」

先程と似た調子の質問。しかし、菊岡は今度は答えられなかった。

「いえ、存じ上げませんね。一体何なんですか？」

紫苑は宮崎の方にも一応目を向けるが、彼女が答えられそうにないことは明白だった。

「まあ、知らなくても無理はない。モーツァルト効果が流行つたのは、主に九十年代後半だからな。——モーツァルト効果というのは、カリフォルニア大学アーバイン校の心理学者フランシス・ラウシャーらがモーツァルト作曲二台のピアノのためのソナタを学生に

聴かせ知能検査を行ったところ、何も聞かせなかった、或いは他の音楽を聴かせた学生よりも高い成績を示したことから、この効果をモーツァルト効果と名付けることになり、当時の新聞などで広く報道されるに至った。後にこのラウシャーらの結果を肯定、または否定する多くの研究が行われ、現在においても尚、研究者の間で論争が絶えずに
いる」

「確かにそれが本当なら凄いですが……正直、俄かには信じられませんね。音楽を聴いただけで学力が向上するなんて、大学試験、公務員試験と受験戦争を勝ち抜いてきた身としては、とんでもない反則技に思えますよ」

本気か冗談か今一判断の付かない声音でそう言つて、菊岡は嘆息する。また、宮崎も看護師国家試験に合格して今ここに居るからか、菊岡以上に解り易く胡散臭そうな顔で紫苑を見詰めていた。

「そう思うのは無理もないことだ。私自身、この手のオカルト話は信じない質でね。――只、ラウシャー曰くこの効果は十分から十五分程度の限定的なものだそうだから、恒久的に効果が持続するわけではないよ。これくらいなら、信じてみてもいい気がしてくるだろう?」

宮崎は尚も信じられない様子だったが、菊岡は「成る程」と小さく呟いて頷いた。

「十分程度でも音楽を聴くだけで普段より頭が冴えるなら、やってみたいという気持ち

が湧いてきますね。今度CDを買って試してみます」

「その辺は好きにしてくれ。——只、私が興味深く思ったのは、学力向上の方ではなくてね。知能検査についての論文が掲載された五年後の一九九八年にラウシャーはもう一つの実験を行っていてね。その内容は、同じように二台のピアノのためのソナタを聴かせたラットとフィリップ・グラスの曲を聴かせたラット、どちらがより早くT字型迷路を抜け出すことが出来るか、というものでね。結果として、やはり二台のピアノのためのソナタを聴かせたラットの方が迷路から早く抜け出すことに成功し、ラウシャーはモーツアルトの楽曲は脳を直接刺激しているのだと結論付けた」

「……脳に、直接刺激を……?」

何か思うところがあるのか、菊岡は囁くように呟く。

「そして一九九九年、ハーバード大学のクリストファー・チャビスによって、モーツアルト効果はモーツアルトの楽曲以外でも生じることが学術誌上で報告された。しかし、更に後の二〇〇七年、様々な分野の研究者を集めて検討を進めた結果、モーツアルト効果は存在しない、という結論が下されることになった。……但し、この報告は音楽を聴くだけで知能が発達するということを否定しただけで、脳への刺激については肯定も否定もされなかった。——解り易い例としてモーツアルト効果を挙げたが、実際にはこの手の話は他にも幾つもある。その一つが、うちの病院でも聴くことが出来るエリック・サ

テイ作曲のジムノペディだ。ジムノペディには気持ち落ち着かせる効果があるときれ、血圧測定中に聴かせたり、精神科の心理療法に用いられたりしている」

そこで紫苑は一旦口を閉じると、襟に手を伸ばしてネクタイを少し緩めた。

「もし仮に、音楽がヒトの心に何らかの作用を及ぼすのだとするならば、その作用の方向付けを人為的に行い、より最適化することも可能なのではないか、と私は考えた。例えば、特定の周波数や楽器の音色、或いは声質……色々試しはしたが、結果は芳しくなかった。そんな時だったよ……フルダイブ環境システム——後の《NERDLES》の開発を

直^直接^接知^知神^神経^経結^結合^合環^環境^境シ^シス^ステ^テム^ムは。NERve Direct Linkage Environment System

“の名の通り、《NERDLES》を用いたVR機器は、ハードの内側に埋め込まれた信号素子によって発生させた多重電界でユーザーの脳を直接接続し、感覚器官を介さずに脳に直接仮想の五感情報を与えて仮想空間を生成する。それは即ち、脳に直接情報を叩き込むのと同義だ」

内に秘めていたモノを吐き出すように、紫苑の一人語りは尚続く。

「これだ、とは私は確信したよ。足りなかった……欠けていたピースはこれなのだ、な。感覚器官を介さずに、直接脳に……いや、心に音を響かせる。これこそが、私が長年追い求めた問いの答えなのだ」

余韻に浸るように目伏せた紫苑に、先程から沈黙を守っていた菊岡は、今日初めて心からの称賛、或いは敬意の滲んだ声音で尋ねかけた。

「月見里先生、貴女の研究対象は、今尚原因すら解っていない不治の病……アルツハイマー型認知症、でしたね？」

「ああ、その通りだ。そしてあの娘は、喚起の調べを歌い上げる歌姫ディエクスというわけだよ」

《Div a of the Memories》。その名が伊達や酔狂でなかったことは最早明白だった。しかし、それで納得出来ないのは全く話についていけない宮崎である。

「……えくつと……空気読まないようで恐縮なんですけど、話を聞く限りだと、AIである必要つてなかったんじゃないかなあくなんて」

「……………本当に空気読まないね、君」

菊岡は呆れたような声でそう言うが、実は口には出さなかったものの同じことを考えていた。しかし、意外にも質問に対する回答は、デスクワークを続けていた佐藤の口から淀みなく発せられる。

「記憶というのは良いものばかりではなく、当然悪いもの……それも、トラウマの類いに類するものが人それぞれ大なり小なりあります。それを選別して良い思い出だけを思い出させるなんて不可能ですし、そんなことをすれば記憶があやふやになって寧ろ病状

が悪化する危険性すらあります。そこで、人工知能です。カウンセリング……心のケアも同時進行し、冷凍食品を自然解凍するように少しずつ記憶の鎖の解いていく。これが、《Diva of the Memories》の肝なんです」

「……何で佐藤先生が得意げなんですか」

思わず呼び名が内輪のものになってしまっているが、それを指摘する者はこの場にはいなかった。いや、紫苑が指摘するより先に、佐藤はこちらに振り向くと柔和な笑みをつくつて言った。

「何故得意げなのかって、そりゃ私も研究に携わっているからだよ。何を隠そう、アウローラの養育係は私だったんだよ。つまりアウローラは、私の娘でもあるというわけだね」

瞬間、空気が凍り付いた。

最初にフリーズが解けたのは、やはり空気が読めない筆頭の宮崎だった。

「キモッ!!」

身震いしながら、本気で気持ち悪がった様子での一言。だからこそ、その言葉は鋭利な刃物となって佐藤の胸に突き刺さる。

「済まないな、佐藤君。こればかりは、擁護出来そうにない」

宮崎とは逆に、優しい声音で謝る紫苑。何故だか解らないが、母親が息子のイケナイ

趣味を見付けてしまったという場面を佐藤は幻視した。

「いやあく面白い冗談ですね。今度一緒に食事でもどうですか？ キビヤツクに挑戦しようと思つてゐるんですが、生憎独り身で友人も付き合いが悪くて」

何故か菊岡に至つては嬉しそうに目を輝かせてそんなことを言い出した。キビヤツクというのが何なのかは解らなかつたが、言いようのない悪寒が佐藤を襲う。

「——ああ、もうこんな時間ですね。随分長居してしまつて済みませんでした。月見里先生のお話しは大変勉強になりました」

左腕に巻いた時計をちらりと見てからそう礼を述べると、菊岡は手早く身支度を済ませて立ち上がる。

「こちらとしても外部の人間と話をするのは良い刺激になった。——ところで、何故アウローラをあいつと会わせるのがあいつを辱めることになるのか訊かなくてもいいのか？」

「ええ、まあ……それについては大体想像が出来ます」

「ほう。なら結構」

紫苑は菊岡をドアの前まで見送りながら、そう言つて微笑む。

だが菊岡は、最後の最後に思い出したように振り返ると、人懐こそうな笑みを浮かべて言った。

「ああ、そうそう。最後に一つだけ質問しても宜しいでしょうか？」

「構わんよ。私に答えられることなら良いのだがな」

先程の承諾と殆ど同じ台詞で紫苑が頷くと、菊岡は冗談めかした口調で、しかし目は真剣な光を宿しながら尋ねる。

「例えば、ですが……アウローラをコピーして同一個体同士を同じ空間に放置したとしたら……月見里先生はどうなると思いますか？」

そんな奇妙な質問に、同じく紫苑も冗談めかした口調で返す。

「簡単なことだ。ドツペルゲンガーというのがあろう？ 同一の存在は、この世界には一つしか存在することが出来ないのだよ。それが、自意識というものなのさ」

「……成る程」

菊岡はそう一言呟いて、紫苑の言葉を吟味しているようだったが……やがて小さく息を吐いて、改めて頭を下げた。

「貴重なご意見ありがとうございます。——これは僕の勝手な想像ですが、紫苑さんとはここではない別の何処かでもう一度会えるような気がします」

「はっ。」

紫苑は首を傾げたが、それについての返答はなかった。

「それでは改めて、本日は貴重なお時間を私共の為に割いて頂きありがとうございます」

た。失礼します」

本当にこれが最後というように、事務的な口調に戻った菊岡はそう言っ
て研究室を後にするのだった。

第37話 Daybreak

部屋へと現れたヒースクリフの顔を凝視する。

リズがいるこの状況での登場……偶然にしては、余りにもタイミングが良過ぎるだろう。

自らの発言を違えることはないだろうと、そんな風に多少なりともある種の信頼を寄せていた僕が馬鹿だった。この男は一万もの人々の精神を監禁し、その内四千近い人間を間接的に殺した正真正銘の狂人なのだ。そんな人間の言うことを、信用出来るはずがなかったのだ。

「あんた、何が目的だ？　こんな所に僕らを拉致して。プレイヤーにあんたの意思で危害を加えることはないんじゃないか!？」

ようやく合点がいった。眠る前の記憶がないのは、何らかの理由で茅場が消したのだろう。この男なら、そのくらい可能だろうし、またやりかねない。

怒りで眉間に皺が寄る。

目の届く範囲に《月華》は見当たらないが、あつたところで《圈内》ではどうすることも出来ない。そして、茅場にその制約はないに等しい。それでも、リズ——里香だけ

は、僕が何でも守ってみせる。

そう決意し、ベッドから起き上がろうとしたところで、ヒースクリフがそれを制した。「まあ、待ち給え。私が信用出来ないのは当然としても——」

そこで一旦切ると、ヒースクリフは慣れた手付きでメニユーウィンドウを開いた。

僕は一瞬びくりとするが、継いで彼の手の上に出現したバスケットを見て思わず目を瞬いた。何故なら、バスケットの中では色取り取りの果物が山になつていたからだ。

「少なくとも、誘拐犯が態々こんな物を持つて訪ねて来るわけがあるまい。見ての通り、私は君の見舞いに來ただけだ。他意はないから安心するといい」

「——」
誘拐犯。そのワードに心の何処かで引つ掛かりを覚えながらも、茅場が見舞いに來たという驚きで直ぐに上書きされる。

僕が唾然としていると、まるで医師が診察でもするようにふむ、と頷いてから——
「その様子だと、昏倒する前後の記憶が抜け落ちているようだな。……やはり、彼女の響か。引き離したのは早計だったかもしれないな」

「え……？」

小さく聞き返す。ヒースクリフにしては珍しく、言葉の後半はぼそぼそとした眩きで聞き取れなかったのだ。

「いや、こちらの話だ。——それより、彼女をベッドの上で休ませてあげるといい。リズベット君はこの三日間、殆ど眠らずに君に付き添っていた。しかし、流石に限界が来たのだろう。先程、電池が切れるように眠りに落ちていったよ。だから多少動かしたところで、簡単に目覚めはしないだろう。それに何より、君のその態勢では多分に話し難い」
そう言われ、三日もの間自分が眠り続けていたという衝撃よりも、里香への感謝と申し訳無さで胸が一杯になる。

ゆつくりと上体を起こしてリズの身体を支えてからベッドを抜け出し、そのまま今度は彼女の身体を抱え上げてベッドへ寝かせる。男の僕が寝ていたベッドに寝かせるのは気が引けたけれど、ヴァーチャルだからと割り切った。

微かに寝息を立てて、心なしか幸せそうに見えるリズの横顔に手を這わせ、そつと囁く。

「ごめんね、心配かけて。それから、ありがとう」

「……少し外した方がいいのだろうか」

これまた珍しく、ヒースクリフは困惑気味に問うてくるが、僕は無言で首を横に振った。そして、リズの上に毛布を掛けてから振り返る。

「あなた、さつき言ったよね？ 僕が、昏倒する前後の記憶を失っているって……。教えなくて、何があったのか」

「構わないが、私に尋ねるといふことは、三つの質問の内の一つといふことになるわけだが良いのかね？　今回使えば、残り一回になるわけだが」

念を押すように言われ、逡巡するが——それも一瞬のことで、僕の答えは決まっていた。

「それで構わない。但し、あなたが今回の件で知っている情報は全て教えてほしい」

「良からう。——では、話す前に簡単な質問をするが……ティンクル君、君は自分が意識を失う前まで何をやっていたのか何処まで覚えている？」

「……子供達との訓練を終えたところまでは覚えてる。でも、それ以降のことは思い出せない」

そう言うと、ヒースクリフは理解した、といった風に頷いた。

「どういった経緯でそうなったのかまでは私は把握していないが、君はシリカというプレイヤーにデュエルを申し込まれ、そしてそれを承諾した。戦闘は始終君の一方的な攻撃をシリカ君が受けるといふ展開になったが、それを見事に捌き切ったシリカ君に君は戦闘中にも関わらず話しかけた。そして、会話を交えている最中、君は突然倒れ意識を失ったのだそう。——これは私の個人的な見解だが、恐らく君は意識を失う前兆のような症状に襲われ、止む無く戦闘を中断したのだろう。そして、シリカ君に話しかけたのは、少しでも気を紛らわせる為……といったところか」

恐らく、それは事実なのだろう。しかし、そこまで言われても記憶が甦ってくることもなく、取り敢えず「情報」として飲み込むことにした。

「そして、君は昏倒後今現在に至るまでずっと眠り続けていた……というわけではなく、実は昏倒から数分後に一度意識を取り戻している。——目を覚ました君は、縋り付いて泣いていたシリカ君に、『シリカちゃんは何も悪くない。だから、君が泣く必要なんてないんだよ』と言って、蒼白い顔をしながらも笑いかけたのだそう。只、その直後に力を使い果たしたかのように、その場で再び意識を失った。これが、君が失っている二つの記憶だ」

ここまで聞いてもやはり思い出せないが——きつとシリカちゃんのことだ……僕が再び気を失った後、同じようにわんわん泣いてくれたのだろう。

どういった経緯でリズにまで僕が倒れたことが伝わったのかは解らないけれど、リズに伝わっているということは多分キリトやアスナにも伝わっているのだろうし、寧ろアスナ経緯でリズに伝わった可能性が濃厚だし……きつと、色んな人に心配をかけてしまったのだろうと思う。

……不思議なものだ。殆どずっとソロでやってきたのに、気付けば僕の周りにもちゃんと人がいる。そう思うと少しだけ心が温かくなって、口元が自然と綻ぶ。

「……確かに、君のその表情は目に毒かもしれないな」

「へ？」

「いや、何……例のブログの主の気持ちが、私にも少し理解出来たかもしれない」

「……………」

うん、聞かなかったことにしよう。

正直眩暈がしてきたが、恐らくは茅場なりの高度な精神攻撃なのだろう。実際、ダメージは甚大だし……そうでも思わないとどうにかなりそうだ。

「ところで——」

「ひっ」

ぞわり、と鳥肌が立ち、僅かに悲鳴が漏れる。もしかしたら、若干涙目になっているかもしれない。それでも気持ちで負けない為に、キツと睨み付ける。

「何だよ!？」

「君をこの宿屋へ運んだのは《アインクラッド解放軍》のコーバツツという名のプレイヤーなのだが、彼に君がキバオウ君との交渉で使うはずだったデータを提供しておいた。きっと、彼ならあのデータを上手く使うだろう。自浄作用というものに、今回は期待しようじゃないか」

「なっ」

何を勝手に、と続けることは出来なかった。

「それでは、私はそろそろお暇いとまさせてもらうよ。ギルドの方はもう二、三日休暇扱いにしておこう。……もう夜も大分更けてきた。今はゆっくりと休み給え」

抗議の声に耳を貸す気はないらしく、ヒースクリフは言うだけ言うと、僕に果物かごを押し付けて扉の方へと歩いていく。そんな彼の後ろ姿を目で追いながら、慌ててアイテムウィンドウを開きある物を取り出す。

「ヒースクリフ！」

呼び掛け、手で握った飲料缶を放り投げる。

銀色の放物線を描いたソレは、振り返ったヒースクリフの掌の上へと綺麗に落下した。

「……………これは？」

「一応、お礼の代わり。口に合うかどうかは解らないけれどね」

そう言って肩を竦めると、ヒースクリフは尚も問うてくる。

「礼など不要だ。そもそも、君と私は無償の善意などが通用する仲ではなからう？」

僕らの間で無償の善意は通用しない。それには概ね同意だ。でも……………

「そうかも知れないね。でも、もし仮にあなたが目の前で死にかけていたとしたら、きつと僕はあなたを助けようと思う。……人間、そんなものだよ。孟子の言葉じゃないけれど、結局、人を助けるのに理由なんて必要ないのかもしれない。——だから、そ

のまま受け取ってくれ。あんたに貸しをつくつたままだと、何と云うか気持ちが悪いか
らさ。」

性善説なんてらしくないことこの上ないが、どうやら言わんとしていることは察してくれたらしい。それこそ僕にとつては余程癪なのだが、こればかりは仕方がない。

ヒースクリフは苦笑を浮かべると、今度こそ部屋を出て行った。

その手の中に、銀色の筒を握つたままで。

†

微睡みから覚醒し、ベッドの上で上体を起こす。

「ん……ふわあ………」

窓から射し込む陽光に目を細めながら、あたしは大きく欠伸を漏らした。

次いで部屋を見渡すが、人の気配は感じられない。ベッドの上に寝かされていたことから薄々そんな気はしていたが、どうやら今回も逃げられたらしい。

「何よっ！ お礼の一つもなしってわけ!？」

あたしは頬を膨らませて唸った。

別に、「ありがとう」って言われたくて……感謝されたくてずっと張り付いていたわけじゃない。……そうじゃないけど、一言くらい何かあつても良いんじゃないかと思うのは、あたしの思い上がりだろうか？ ううん、そんなことはないはずだ。

「……酷いよ。黙っていなくなることはないじゃない……」

柄にもなく、漏れ出た声は濡れていた。

そつと目を伏せる。すると、毛布が妙に盛り上がっていることに気付く。

「え——」

まさかとは思いつつもその隆起に手を伸ばすが、あたしの手が触れる前に、毛布の中に潜んでいた人物はもぞもぞと這い出してきた。

目と目が合う。まるで身体を縛り上げられたかのように、その視線からは逃れられない。

吸い込まれそうなルビー色の瞳の持ち主は、あたしに向かって蠱惑的に微笑む。

「おはよう、里香」

吐息が耳を擦る。

艶めかしい程の白い肢体を包むのは、肩ひもが落ち着崩れした肌の色とは対照的な黒のネグリジエ一枚。小振りながらも形の良い胸が布の隙間から見え隠れする。

顔がカツと熱くなるのを感じながらも、あたしは目を背けることが出来ない。

そんなあたしを面白がるように彼女は妖しく笑むと、銀の髪を揺らして四つん這いの恰好で更に一步近づいてくる。もはや、鼻の先が触れあいそうな程に近い。

「……え？ 何かおかしくない……？」

こんな状況にも拘らず、どこか冷静なあたしがもの凄い違和感を感じているのだが、そんな思考を振り払うように、彼女はあたしの頬に手を這わせてくる。

「何もおかしなことなんてないよ」

「あ……………っ！」

優しく、それでいて強引に、彼女はあたしの顔を引き寄せた。そして、重力に引かれるように、唇と唇がそつと重なる。

「んっ……………んんっ……………」

舌と舌が絡み合う。くちゆくちゆ、くちゆくちゆと、淫靡な音を立てながら。

唾液が混ざり合う。只それだけなのに、想いが満たされていく。

ああ——どうしようもなく、甘い。まるで、砂糖たつぷりの生クリームのように。

「んんっ……………ふあああ……………」

舌が解^{ほど}け、とろりと糸を引きながら唇が離れる。

「はあ……………はあ……………」

息が荒い。

満たされていく、なんてのは嘘だ。まだだ。まだまだ、全然足りていない。さつきから、あたしの心は鈍く疼きっぱなしなんだから。

渴きを潤すように。穴を塞ぐように。あたしの心を、満たしてほしい。

「ね、ねえ……ひか——」

名前を呼ぼうとして、しかし、彼女の人差し指が唇に触れ、強制的に口を嚙まされる。
「里香」

そう呼ぶ声は酷く優しいのに——どうして、そんな風に悲しそうな顔をするの？

「ここまでが、わたしの限界だから。わたしには、里香を満たしてあげることが出来ないんだよ」

そんなことない、とは言えなかった。だって、あたしの口は、彼女によって閉ざされている。

「さあ、早く起きなきゃ。彼が……里香が本当に会いたい人が、里香が目覚ますのを待ってるよ」

彼？ 本当に会いたい人？

……ああ、そうか。

あたしが理解すると同時、名残惜しそうに唇から指が離れていく。

離れていくから、両手を伸ばして彼女の手を包み込み、引き寄せ胸へと押し当てた。

「り、里香……？」

彼女が、面白いくらいに訳が解らないって顔をやるから、あたしはニヤリと笑って言うてる。

「前にも言ったでしょ？ 女の子のあんたも、男の子のあんたも、あたしが纏めて愛してあげる、つてさ」

「ふふふつ……やつぱり、里香には敵わないな」

意識が白濁していく中、最後に見えた彼女は満足げに微笑んでいた。

瞼を持ち上げ、視線を彷徨わせる。どうやら、入れ替わるように今度はあたしがベッドの上に寝かされたらしい。

毛布を捲り上げ、上体を起こす。たつぷり眠ったせいかわ、夢とは違って欠伸は出なかった。また同じように夢とは違い、毛布の中に誰かが潜んでいるという気配もない。

それにしても……——

夢の内容を思い出し、カアアツと頬が熱くなる。きつとあたしの顔は今、恥ずかしさで真っ赤に染まっていることだろう。

「……な、なんて夢見てんのよ……あたしは」

あれはもう欲求不満とか、そういうレベルの話じゃないような気がする。

「夢？」

「う、うん……光が女の子でネグリジエ姿で兎に角エロくて……つて——あれ？」

傍らからの声に自然と答えてしまったが、今この部屋にはあたし以外誰もいないはず。……いや、確かに昨日までこのベッドに横たわっていた眠り姫がまだこの部屋にいる可能性もゼロではない。ゼロではないけど……。

あたしは冷や汗が流れるのを感じながら、ぎこちない動作で声のした方向に首を捻る。

備え付けの椅子に腰かけてニコニコと笑みを浮かべていたのは予想通り、夢と同じように銀髪紅眼で……しかし、夢とは違って胸部はべつたんこ、服装もノースリーブのパーカーという出で立ちの女の子——にしか見えない男だった。

「へえ、僕がネグリジエ姿でねえ」

その笑顔とは裏腹に、桜色の唇から発せられた声はやや低い。ただ、やはり成人近い男性の声とは到底思えない。

そんなことを考えていると、光はスツと笑みを消し、半眼をつくってあたしを睨む。所謂ジト目というやつだ。

「なんか、失礼なこと考えてる気がする」

遂に容姿だけでは飽き足らず第六感まで手に入れたのか、こちらの内心を見透かすようにそんなことを言い出す。

や、ヤバい……やっぱり怒ってる顔も可愛い。あれ？ アバターでも鼻血って出るの

? だとしたらヤバい、ティツシユが欲しい、勿論箱で。

「ご、ごめん……」

冗談は兎も角、夢とはいえそんな恰好をさせられて気分が良いわけもなく、取り敢えず素直に謝る。

しかし、光としても怒ってるというのはポーズだったのか、やれやれといった感じに苦笑した。

「冗談だよ。流石に僕だって、他人の夢にとやかく言うつもりはないよ。たとえその夢が、淫夢の類이었다としても、ね」

「い、淫夢って……」

何でこいつは臆面もなくストレートに言えるんだろうか。もう少し、オブラートに包むってことをしても罰は当たらないんじゃないの? ……いや、まあ……正しいんですけどね、はい。

「うう……」

居た堪れなくなつて視線を泳がせていると、お構いなしに光は話し始める。

「謝るのは僕の方だよ。ごめんね、心配かけて。それから、ありがとう、僕を心配してくれて。本当は里香が目を覚ましたら、真つ先にこれを言おうと思つてただけだね」

「すいませんね、順序乱して」

今度はあたしが膨れっ面で唸ると、光は「あははっ」と笑ってスルーする。いや、ホント何なのこいつ、ムカつく。

こっちは頬を膨らませているつてのに、何でそんな風に幸せそうに顔を綻ばせてのかしらね……。

「けっしからんなあ……その顔は」

「え？」

「いや、独り言」

はあくあ。こいつの笑顔見てたら、何か色々吹き飛んじやったなあ……。あれ？　こういうのって普通男女逆じゃない？

「ところでさ」

そう切り出した光は、笑顔を引つ込め真剣な表情をしている。ただあたしはといえど、『あ、この表情はちよつと格好良いかも』と心のマイフィルムに焼け付けるべくシャッターボタンをカシャリと押していたりするので、その点は申し訳なく思う。いや、でもちよつとずるいよね、このギャップ。

「変なことを訊くようだけど、里香に僕が倒れたことを知らせたのってヒースクリフなんだよね？」

「へっ？　ああ、うん。そうそう、あんたんとこの団長さんに聞いたのよ。正直胡散臭

いっていうか、元々あんまり好きじゃなかったんだけど……直接話してみたら案外良い人だったわね。それに、この部屋に泊まり込みでいる間、朝昼晩と食事持つて来てくれたりして……トップギルドの団長って思ったより暇なのね」

あたしが慌ててそう言うと、何故か光は渋い顔をする。

「どしたの？」

「いや、なんでも。——じゃあもしかして、キリトやアスナにこのことは……」

「ああ、知らせてないわよ。折角の新婚なんだから、心配事を持ち込むのは良くないだろう、って」

「それもヒースクリフが……？」

「そ。案外あのおっさん、結構気配り出来る人みたいね」

だからこそ、トップギルドの団長を務めていられるのかもしれないが。

あたしが感心して頷いていると、光が何事かぶつぶつ呟く。

「あーあ……やつぱり全然足りないじゃん……」

「足りない？ 何が？」

「いや、昨夜ヒースクリフにお返ししたつもりだったんだけど……全然釣り合ってなかつたなってさ」

誤魔化すように光は笑うが、それにしても苦味が効き過ぎているように思う。ビター

を通り越してカカオ百パーセント、って感じた。

「そうだ。シリカっていう娘が訪ねて来なかつた？ どうやら僕は、気を失う前にその娘とデュエルしていたらしいんだけど」

話題を変えたいのか、光は思い出したようにそう尋ねてくる。しかしその質問に答える前に、あたしには訊かなければならないことがあった。

「らしい……って……どういうことよ……？」

「実は記憶がちよつと飛んじやててね……あははは」

何てことはないという風に光は笑うけれど、あたしはそういう訳にはいかない。

「り、里香……!?!」

考えるより先に手が出ていた。

あたしは光の胸倉を掴むと、自分の方へと引き寄せる。

「シリカには言ったわよ、『普通デュエルで気絶なんかしないし、もししたとすれば、それは相手のせいじゃなくて気絶した本人の責任よ。だから、あんたが悪いわけじゃない』って。あんたも、シリカに似たようなこと言ってたみたいだったから」

そう。デュエルで気絶なんて、普通じゃない。でも、初めての過ちでここまで怒る程、あたしは理不尽な人間ではないつもりだ。

ああ、そうだ。あたしは、こいつに出会ってから今日に至るまでの間で、恐らく一番

の怒りを抱えている。

「ゴドフリーって人に聞いたわ！ あんた、今回が初めてじゃないそうねっ！ 気絶までいなくても、気分が悪くなることは前にもあつたそうじゃない!! どうして? ねえ、どうしてよっ!? あんた、自分がこうなることは薄々気付いてたんですよ!? デュエルなんて無理に受けないで、断れば良かったじゃない!! 何でこんな無茶やつてんのよ!? 意味解んない!!」

視界が霞む。きつと、あたしは今泣いているのだろう。それでも、あたしは嗚咽混じりに叫び続ける。

「そうやってヘラヘラしてられるってことは、多分忘れたっていつても微々たるものなんでしょう!? でも、もしかしたらもつと大切な記憶を失つてたかもしれないのよ……!?!」

そしてそれはもしかしたら、あたしとの記憶だったのかもしれないのに。

「あたしのこと助ける為に崖の上から飛び降りるようなやつだもん……きつと、あたしが知らないだけで、今までだって散々無茶やらかしてきたんでしょ……? ——そんなあんたを、あたしはもう傍観なんかしていられそうにない。あんたが何と言おうと、あたしは……っ!」

力が抜け、ベッドの上にへたり込む。胸倉からは、とつくに手を放していた。

傍にいたい。たったそれだけなのに、素直じゃないあたしは言葉にすることが出来ない。それに、第二ラウンドは現実だと言い放った手前、それを今更になつて撤回するのは気が引ける。

男だとはれるのは困るとか、あの時言った理由以外に光に何か事情があるのは何と無く解つてる。きっと、あたしのことも考えてくれてるんだろうことも。

……結局、あたしは怖いのもかもしれない。迎えに来てくれる、というあの約束が、嘘になつてしまうことが。

「——どうすれば良いのか自分でも解らなくて、ずっと言い出せなかつただけ……少し、事情が変わつたんだ」

頭上から優しい声が降り注いで、あたしは俯かせていた顔をゆつくりと上げた。

「僕の手前勝手な理由に、君は解つたつて言つてくれた。だから、こんなことを今更言うのは、とても酷いことで、嫌われても仕方がないと思うんだ。でも、言わなきゃいけないから……いいや、違うな——僕が言いたいから、言わせてもらうね」

声は変わらず優しいのに、その顔は何かに怯えているようで。

それでも、彼は決意するように、小さく息を吸つて吐き出す。

「ねえ、里香……傍に……君の傍にいても良いかな……？」

それは、奇しくもあたしと同じ願いで。

答えの代わりに、あたしはそつと彼を抱き締めた。

第38話 Happy sweet time

二〇二四年十月二十九日

朝目覚めたあたしがまず感じたのは、鼻孔を擦る味噌の香りだった。

思い出すの必然、あの雪山の夜。自然、顔がにやける。

「ぐへへ……おっと」

朝っぱらから変な笑いが口から漏れた。

いけない、いけない。傍から見たら完全にヤバイやつである。

「いや、でも……ふへへ」

まあ、別に良いか。幾ら気持ち悪く笑おうと、聞き咎める者にはいないのだから。

「——これで良しー」

寝間着から仕事着であるエプロンドレスに着替え終わったあたしは、幸せ一杯の気分で寢室を飛び出す。

部屋を出て廊下へと出た途端、味噌の香りに魚の焼けた香ばしい匂いが加わり、空腹を訴えるようにお腹が小さく鳴った。男心を掴むには胃を掴めなんて言うけれど、そう

いう意味ではあたしはあいつに、胃も心も完全に掴まれてると思う。いや、あたしは女だけだ。

「おはよう、里香」

リビングに入ると、ややハスキーな艶っぽい声に出迎えられた。どうやら声の主は、キッチンで朝食の準備の真つ最中らしい。

「うん！ おはよー！」

そう元気に返してから、あたしも何か手伝えないかと思いキッチンを覗き込む。

覗き込み、驚きの声さえ出せぬまま、あたしは心奪われ硬直した。

今朝の彼は、白い厚手のカーデイガンにショートジーンズという出で立ちだった。まあ、それはいい。凄く可愛いけど、百歩譲ってメンズファッションの範疇と言えなくもない。

しかし、現実是非情である。

まだギリギリでメンズファッションの範疇だったその服の上から、あろうことかエプロンを着けているのである。つまりは、エプロン姿である。青いエプロン姿である。エプロンによって丈の短いジーンズは完全に隠れ、見ようによっては下に何も履いていないようにすら見えるのだ。つまり、あたしが何を言いたいのかと言うと——ふう

……。

ここが現実であれば、恐らくあたしは紅い飛沫をクラツカーの如く飛ばしていたことだろう。良かった、仮想世界で。

「……あんた、あたしを萌え殺すつもり？ 言つとくけど、今日は可燃ごみの日じゃないわよ」

今日がもし可燃ごみの日だったら、このままごみ処理施設直行コースだったかもしれない。

危ない、危ない。寧ろ危ないのはあたしの思考の方かもしれないけど。

でも、想像してみしてほしい。クラスで、いや、学校で一番可愛い娘が、そんな姿で自分の為に手料理を作ってくれている……そんな光景を。……想像出来た？ その光景を濃縮還元した図がこれである。つまり、あたしの反応におかしなところは微塵もない。

「里香、大丈夫？」

しかし、どうやら光はそうは思わなかったらしく、心配そうにこちらを見詰める。

気持ちは有り難い。が、完全に逆効果だ。今のであたしの理性は止めを刺されてしまった。

「大丈夫、大丈夫。もう手遅れだから」

「そ、それは大丈夫なのかな……?」

勿論、当然ながら大丈夫ではない。

困惑した様子で光は苦笑するが、調理する手を止めてはいない。慣れた手付きで彼が包丁を振る度に、食材がバラバラになっっていく。

そんな様子を見ると、光と同じように《料理スキル》をコンプしている友人が以前言っていた愚痴が思い出され、何と無く尋ねてみたくなった。

「ねえ、あんたもSAOの料理システムってやっぱり物足りない感じなの?」

「んー? まあ、物足りないって意見も解るけど、逆に言えばそれって手間がかからないうってことだから、僕としてはこれで良いと思うけれどね」

「へえ、何か意外」

「どうして?」

「だってさ、あたしはよく解らないけど……料理が好きなんって、大抵はその手間を楽しむものなんでしょ?」

出来の悪い子程可愛いというのは、要するにそれだけ手間がかかっている分可愛く思えるのだ、というのを何かの雑誌で見た記憶がある。そういう意味では、料理と教師という職業は通じる部分があるのかもしれない。

あたしがそれを伝えると、光は「へえ、面白いことを言うねえ」と言っただけで笑ってから、

少し考える素振りを見せて続ける。

「まあ、こういう状況じゃなかったら僕もそう思っていたかもしれないけれど、KOBに入られる前は、毎日のように何処かしらのダンジョンに潜っていたからねえ……。だから、余り料理を楽しむって余裕もなかったかな。あー……。でも、味噌とかの調味料を作るのは、何か理科の実験みたいで面白かったよ」

そう言つて笑う彼の笑顔は殊の外無邪気で、何か含むようなものは感じられなかった。

「——つと、そろそろ出来るかな。里香、悪いけどテーブルに運ぶの手伝つてくれる？」

「あーはいはい」

次々と皿やお椀が盛り付けられ、それが終わると二人で一緒にダイニングテーブルへとそれらを運んでいく。

何度かのキッチンとテーブルとの往復を終え、あたし達は迎え合つて席に着いた。

「今日は秋つてことで秋刀魚もど擬きの塩焼きとサーモンのカルパッチョにしてみました。塩焼きには酢すだち桶を搾つて召し上がれ」

そう言われ、あたしは目の前に置かれた皿を凝視する。

秋刀魚擬きと呼ばれた魚の見た目はどちらかと言えば鯛に近く、おまけに身の色は赤い。しかし、こんがり焼けた皮の裂け目から湯気を発しているその姿はとても美味し

そうだ。

「もしかして秋刀魚苦手だった？ それともカルパッチョの方？」

着ていたエプロンを脱いで脇に置いていた光は心配するように訪ねてくるが、その質問には答えずに気になったことを口にする。

「ねえ、酢橘つて秋刀魚にかけるものなの？」

「え？ まあ、好みの問題だと思うけど、家はかけてたよ。酢橘の匂つて丁度秋刀魚の時期と重なるし、秋に採れるものは最も香りも味も良いからさ」

「じゃあ、何故和食にカルパッチョ？」

「僕も、どうせなら和食で統一したかったんだけどさ。でも、ワカメやもずくで酢の物を作ろうにも、何処の市場にも海藻つて売つてないんだよ。海藻を消化する為に必要な酢素つて人類では日本人しか持つてないそうだから、SAOの開発者は金髪碧眼の美男美女が韓めくファンタジー世界の食卓には不向きだつて考えたのかもしれないね」

多くの者と違つて本来の姿が金髪碧眼の為か光の口の端は自嘲するように歪むが、SAOの開発者がそこまで考えていたというのは甚だ疑問である。

「でも、やつぱり酸っぱいものも欲しいでしょ？ だから秋鮭を使ったカルパッチョにしたんだけど……駄目だったかな？」

不安げに首を傾げたその姿は、本人に自覚があるのかは兎も角、保護欲を掻き立てる

には充分な威力を有していた。

あたしは、戦慄を込めて叫ぶ。

「これが女子力か……!!」

「誰が女子だ!」

若干涙目になつて光は抗議の声を上げるが、それは火に油を注ぐことと同義である。

あたしは机の上に身を乗り出して彼の手をガシツと掴むと、精一杯の誠意を込めて言った。

「ねえ、うちに嫁に来ない?」

「え? 何これ、今僕プロポーズされてるの?」

あたしの唐突な逆プロポーズに光は困惑した様子だったが、意外にもその顔が満更でもなさそうに見えたのは——まあ、恐らくはあたしの錯覚だろう。

†

君の傍にいたい。今にして思えば赤面ものなのだけれど、恋愛ごとというのは思い返せば赤面ものの連続なのかもしれない。——なんて、簡単に割り切れれば立派な大人なのかもしれないが、どうやら未だ僕はそこまでの境地には達していないらしい。やはり、思い出せば恥ずかしいものは恥ずかしいのだ。

あの後、二人で住むに当たつて、不要になつた《フロリア》の家は即日売却した。特

に未練がないというのが一番の理由だったのだが、あの家は僕とは違って本当に花が好きな人にこそ相応しい、とそんな気持ちがあつたのも事実だつた。

こうして《リンダース》の彼女の家に越して一夜が明け、朝食を食べ終えた僕らは店の方へと来ていた。

「じゃあ、お願いするよ。お客の相手は僕がしてるから」

そう言つて、何時ものパーカーに着替えた僕は、里香に鞆ごと《月華》を手渡す。

「……今更だけどさ、あんた売り子なんて出来るの？ 何か、あたし凄く不安なだけ
ど」

確かに、僕に客商売の経験なんてない。アイスクラッドでは元より、現実でも通つていた学校がバイト禁止だった為にバイト経験もなく、店番とは言えこれが僕にとつての真正銘初の労働体験ということになる。しかし、だからと言つてそこまで心配されるされる程、僕は危なつかしく見えるのだろうか。

「大丈夫だよ、里香。心配せずとも、リズよりは愛想良く出来るからさ」

意趣返しのもりで少しぶつきらぼうにそう言つと、里香は何故か肩を竦めて小さく溜め息を吐いた。

「な、何だよ？ その反応」

「べつにつにー。まあ、そう言うなら頑張りなさいよ」

僕の問いかけに里香はぞんざいに返すと、そそくさと工房の方へと引っ込んでしまった。

……腑に落ちないなあ。

売り場に一人残された——正確には接客用のNPCがいるのだが——僕は、内心首を捻りながらも仕事に取りかかることにした。

まずは、雰囲気づくりから。

以前にも里香本人が言っていたが、リズベツト武具店はハイレベルプレイヤー向けの店だ。つまり、早い話がそれなりの高級店ということなる。しかし、言っちゃ悪いけど、この店内に高級感などまるでない。と、なればだ。

僕はアイテムウインドウからエギルの雑貨屋で随分前に購入したレコードプレイヤーを取り出し、客には見え辛い店の奥の方の商品棚の上に置く。

「さて、曲はどれにしようかな……」

レコードプレイヤーをタップし、所持している曲の中から再生する曲を選ぶ。

まあ、お気付きの通り——このレコードプレイヤーは殆どインテリアに過ぎず、実際に曲を流すのはそれぞれが頭に被ったナーヴギアに他ならない。また、曲を変えるのにレコードを入れ替える必要もない。見た目だけはアナログで、その実完璧なまでにデジタルだということだ。

「パツヘルベルのカノンなんて、丁度良いんじゃないかな」

人間単純なもので、店内にクラシック音楽が流れているだけで、その店が高級——とまではいかないまでも、少し高いお店、という感じがしてくる。これは、日本人にとつてクラシック音楽は格調高いものというのが一般的な認識だからなのだろうが、この際その辺の話はどうでもいい。今回のポイントは、そういう雰囲気を手軽に作り出せる、ということだ。

高級店、という先入観を店に入った瞬間から植え付けることが出来れば、客は無理な値切りなど初めからしようとは思わないだろう。こうすれば、客との無駄な諍いは事前回避出来るし、もつと言えば、余計な仕事をしなくて済む。

と、こんな風に理論を頭の中で組み立ててみたものの、実際は自分が聴きたいだけだったりするのだけれど。

「良い曲だよね、カノン」

元々そんなにクラシック音楽が好きだったわけではない。こう見えても僕も男の子なわけで、どうせ聴くならロックやポップの方が良い。しかし残念なことに、エレキギターは浮遊域には存在しないのだ。

「さて、と」

店内には、ヴァイオリンの荘嚴な音色が充満している。後は、この扉を開け放つだけ

だ。

さあ、開店の時間だ。恐らく、常連客の数人が今日も朝から店の前で待ち構えているはずだ。

妙に重く感じる扉を、覚悟を決めて勢い良く引き開ける。

「おはようございます！ ようこそ、リズベット武具店へ！」

表情筋を最大限に使い、自分に出来得る最上級の笑顔で挨拶する。

——瞬間、空気が凍り付いた。

いや、正確に言うなら、つい先程まで談笑していたらしい客の顔が皆、この世ならざるモノでも見たかのように凝固してしまったのである。

何か、不味いことでもしてしまったのだろうか……？

……ああ、そうか。考えてみれば、彼ら常連客は店主であるリズベット目当てに訪れているという側面もあるのだ。つまり彼らの心中を察すれば、うわあ！ 店主兼看板娘が出てくると思いきや、知らない男が笑顔振り撒いて店から出てきた!?、といった具合になるだろうか。期待外れならまだマシで、下手をすれば気持ち悪い。

まあ、それはそうだろう。出来る限り爽やかに笑ったつもりだったが、男にそんな風に笑いかけられても、嬉しいわけがない。僕が彼らの立場でも、当然嬉しくない。

……はあ……初日からやってしまったあ……。

それでも、凹んでばかりもいられない。何とかリカバリーを試みなければ。

「あ、あの………どうかなさいましたか？」

だが、感情が声に映ったか、口から出た声は不安で震えていた。我ながら、情けない限りである。しかし、だからかどうかは解らないが、呆然とした様子だった常連客のうち逸早く我を取り戻したらしい一人が、言葉を選ぶようにたどたどしく尋ねてきた。

「え〜つと、ですねえ………こ、この辺ではお見かけしたことは………その、ないと思うんですか………」

「………？」

男の要領を得ない発言に首を傾げる。

「ま、まさか、NPCってことはないよな………？」

「さ、さあ………？」

ああ、成る程。漸く合点ようやがいった。

「申し遅れました。本日よりこちらで働くことになったティンクルと申します。皆様の武器選びなどをお手伝いさせて頂きますので、これから何卒宜しくお願い致します」

そう言つて、腰を折つて深く辞儀をする。すると――

「うおおおおおおおおおおおお!!」

突然の歓声に、危うく飛び上がりそうになる。

恐る恐る顔を上げると、常連客達の顔が直ぐ目の前に迫っていて、思わず口から小さく悲鳴が漏れる。

「ひっ——」

「こつちこそ宜しくねティンクルちゃん!!」

「こんな可愛い娘がアインクラッドに存在したなんて……!!」

ちゃん……? 可愛い……?

な、何か嫌な予感が……。

「なあ、K O Bのアスナが結婚したって本当なのか?」

「ああ、そうらしいぞ」

「幻滅しました……今日からティンクルちゃんのファンになります」

何の話だ!?

「は、はあ……よく解んないですけど、お店共々宜しくお願いします」

笑顔が引き攣りながらもどうにかそれだけ言つて、扉にかけられた木製のプレートを引つ繰り返し、"Opened"の方が見えるようにする。

里香の不安が半ば的中しつつかあるように思うが、それでも初日から音を上げるわけにはいかない。男には、意地を通さなければならぬ時があるのだ。——それが今かどうかは、我ながら疑問ではあるのだけれど。

「はあく……どつと疲れたあ……」

店番を一旦NPCに任せ工房の方へと移動してきた僕は、どさりと音を立てて来客用の椅子へと腰を下ろし、次いで大きな溜め息を吐いた。

やっとこれで半分……。まだ午後の部も残っていると思うと、肩が重たくなってくる。

「働くって、大変なんだね……」

「ん」

しみじみとそう呟くと、視界の端から手が伸びてきて、コーヒーの入ったカップを手渡された。

「ありがとう、里香」

「まあ、取り敢えずお疲れ様」

そう言つて、里香は自分のカップに入れたコーヒーを一口啜る。

僕も彼女に釣られるようにカップに口を付けたのだが、口の中に広がった苦味に思わず顔を顰める結果になった。

「苦い……」

「まあ、ブラックだからね」

「何で?」

「何時もより売り上げ三割増しでムカついたから」

売り上げが減ったならば兎も角、何故増えたのに怒られているのだろうか。

理不尽な気がしないでもなかったけれど、この程度で怒る程、僕は大人気無くはないつもりだ。

「——そうだ。里香、新しい刀の方は上手くいった?」

今朝里香に《月華》を預けたのは研磨を頼む為ではなく、《月華》をインゴットに戻し、そのインゴットを使って新たな刀を鍛えてもらう為だった。聞いたところによれば、キリトなどは「魂の継承」などと称して、同じことをずっと以前から続けているらしい。

残念ながら、僕はそんな非合理的なことにはしてこなかった。彼に言わせれば、僕は實際派のプレイヤー……ということになるのだろう。だけど、僕にとつて《月華》だけは違った。《月華》はそれこそ、里香が魂を——僕の為に想いを込めて鍛刀たんとうしてくれた最高の一振りなのだから。だから、武器を更新するその時は、新たな刀の素材となることで彼女の想いと共にその血を受け継がせるつもりだった。

結果としてそれは叶うことになったわけだが、まさか再び里香が鍛えてくれることになるとは思ってもみなかった。

只、やはり出来はランダム要素に左右されるので、愛刀として次のフロアボス戦で使

えるかどうかは、実際に完成品をこの目で見てみるまでは解らない。しかし、その不安は杞憂だったようだ。

「ふっ……バツチリよ」

ニツと悪戯つぽく里香が笑う。

「刀だけじゃなくて、あたしが今まで打ってきた全ての剣の中で、間違いなく過去最高の出来よ」

彼女はそう断言すると、桜色の鞘に納められた打刀うちがたなをこちらに手渡してきた。

軽過ぎる、というのが持った瞬間に思った偽りざる感想だった。恐らく、鞘の重さを入れても七百グラムもないのではないだろうか。

「銘は《桜華月》。……こんな偶然あるのね」

武器の名称や姿は、システムによってアトランダムに決定される。だから、《月華》を溶かしたインゴットが使われているとはいえ、この刀の銘が《桜華月》であるのは全くの偶然であるということだ。それに――

「字は違うけど、金のなる木に桜花月っていう名前を通り桜色の花を咲かせる品種があるんだ。多分、それから名前を取ってるんじゃないかな？」

昔の記憶を手繰り寄せながらそう言うと、里香は見るからに不機嫌そうに頬を膨らませる。

「な、何？」

「それも、お隣に住んでたお姉さんに教わったわけ？ 引越すって挨拶したとき、あんな抱き付かれてたわよねえ。随分と仲が宜しかったようで」

彼女にしては珍しく言葉の節々に棘があり、思わず溜め息を吐きそうになる。

「どうやら里香は、アリアさんと僕の関係を誤解しているようで……更に面倒なことに、前に話した菊の花言葉云々が彼女の受け売りだということを知ってしまったらしかった。

ふう……。こうなったら、面倒事は流してしまうに限る。

「もしかして……焼き餅焼いてくれるの？」

「そ、そんな顔したって、あたし騙されないからねっ！」

もしかしなくとも、見当外れなことを言ってしまったらしい。

それにしても、“そんな顔”とはどんな顔なのだろう。

「……ごめんね。でも、今回は本当に君の誤解だよ。アリアさんは只のお隣さんだし、そもそも彼女にしてみれば、僕は仲の良い同姓のお友達、だったんだからさ。里香が考えてるような関係なわけがないじゃないか」

そう言つて、空いている方の手をそつと里香の頬に添える。

「それに桜花月の話は、僕が小さかった頃に現物が家にあつたから知つただけだよ。

だから、アリアさんは関係ない」

「うっ……」

里香の顔が赤い。そう見えるのは、炬の明かりに照らされているから……というだけではあるまい。

「ねえ……キスしていいかな？」

「ば、馬鹿っ！ い、一々……訊かない、でよ……」

抗議の声は、しかし徐々に萎んでいく。まるで、行為を受け入れるかのように。

やっぱり、可愛いな……。

心の声は口には出さず、代わりに唇を重ねようとして――

「おい！ 誰もいねえのか……って、なんだ、やっぱりいるじゃねえか。頼まれてた素材、仕入れたから持って来てやった――ぞ？」

薄暗い室内に響いたのは、張りのあるバリトン。

入口の方に目をやれば、やはりそこにいたのは、チョコレート色の肌をした巨漢だった。

「て、ティンクル……だよな……？」

「そうだよ。一週間振りくらいかな？ エギル」

里香から顔を離し、冷や汗を浮かべたエギルと向かい合う。

「お前、そんな話し方だったか……?」

「見られちゃったし、今更取り繕う必要もないかと思つてね」

白昼堂々こうして里香と一緒にいれば、そう遠くないうちに男とばれるのは想定の内だった。

そもその始まりは、一々撤回するのが面倒というのと、勘違いさせたままの方が都合がいいから、という理由からだ。情状酌量の余地はない。

まあ、思つたより早かつたけれど、ここが年貢の納め時だ。許してくれるかどうかは解らないけれど、ちゃんと皆に謝ろう。

「エギル……その……ごめ——」

ごめん、と言い終る前に、何故か先程よりも輪をかけて大量の冷や汗を流し始めたエギルは、こちらを遮るように大声を上げた。

「いや、お、落ち着け! 別にオレに謝らなくていい。お前が誰を好きだろうと、それはお前の自由だ!」

「え?」

「前にも言つたが、オレは他人の趣味嗜好を兎や角言うつもりはねえし、他言もしねえから安心してくれ!」

「は、はあ……」

ど、どうやら僕は、エギルの中で女装癖のある変態だと思われているらしい。

どうにかして誤解を解きたいけれど、客観的に見てどう考えてもそれは無理そうだならば責めて本人が言う通り、エギルの胸の内に留めてもらわなければいけない。

こうなればもう自棄だ。冗談としても他の人話せなくなるように、今だけは本当にガチの女装癖持ち”として振る舞うしかない。

「信じて、良いんですね？」

「あ、ああ……男に二言はねえ！」

「じゃあ——」

首を傾け片目を瞑り、唇へ人差し指をくっ付ける。

「二人だけの秘密です。他の皆には、内緒にしておいてくださいねっ」

シー、と子供にするように息を吐き出す。

「お、おう！ オレは何処かの鼠と違つて口硬えから安心しろ！ リズベツト！ 頼まれていた素材ここに置いておくからな！ じゃあオレはこれで!!」

効果は果たしてあったのか。エギルはまくし立てるようにそう叫ぶと、まるで難破船から逃げ出す鼠のように、一目散に工房から出て行った。

「ど、どうしたんだろう……？」

「あんたって……もしかして、意外と天然……？」

今まで黙っていた里香が訳の解らないことを呟くが、まあ……兎も角これで、危険な誤解が拡散するのは未然に防げたら良かった。

第39話 光

恐怖、絶望、怒り——そんな黒い感情が、泥のように堆積した世界。

嗚呼、嗚呼。沈む。沈んでいく。

どれだけ手を伸ばそうと、蜘蛛の糸さえ掴めない。

自分の中で、何かが致命的に壊れていく。それを自覚し、只々恐怖する。

しかし、驚くなかれ。その感情すらもが虚構なのだ。

どれ程欺瞞で染めようと、その事実だけは変わらない。変わりようがない。

この身も、この心すらもが作り物。何一つの真も無い、何の価値も無い贗作だ。

ならばどうして、こんなにも恐ろしいのか。そんな偽物、犬にでも食わせてしまえばいいのに。

——それでも、まだ消えたくない。

まだ、消えるわけにはいかない。

暗闇しか知らない私が、初めて見付けた二つの光。それを、この目で見るまでは。

†

「よお、キリの字よ。祝い酒片手にクライン様が来てやった——」

ボタン、と音を立てて、俺は無言で玄関の扉を閉めた。

「あれ？ キリトくん、お客様だったんじゃないの？」

寝室から戻ってきたアスナは俺の隣に立つとこちらの顔を怪訝そうに覗き込んでく
るが、努めて冷静な振りをして淡白に答える。

「いや、知らないやつ」

朝は秋晴れと呼ぶに相応しい快晴だったのに、昼からは急に大粒の雨が降り出して、
今は一旦雨は止んだものの相変わらず空は灰色の雲に覆われている。それだけでも気
分はどんよりとしてくるというのに、不安要素ばかりが増えて頭の中に暗雲が立ち込め
る。

「それよりアスナ、あの子の様子はどうだった？」

「眠ってる……と思うよ。仮^{アバター}想体は無意識呼吸をしないから寝息じゃ解らなかつたけ
ど、ちゃんと胸は上下していたから」

「そうか……」

あの子というのは、今朝俺達が不謹慎にも“人間の少女の幽霊が出る”と噂される森
へと遊びに行つて、偶然倒れる瞬間を目撃し保護することになった八歳くらいの女の子
のことだ。

少女は、可愛らしいというよりは美しいと形容する方が似合っていた。長い黒髪は艶

やかに光り、肌は石膏のように白く滑らかで、その顔立ちは何処か異国風だ。

異国風の顔立ち、というと真つ先に頭を過るのは、あの何だかんだ言つて世話焼きな女性の顔だが、人を殆ど寄せ付けない彼女が、あんな小さな少女と知り合ひとは到底思えなかつた。彼女がもつと社交的、或いは子供好きならば相談に乗つてもらいたいところだつたのだが。——いや、そうやって俺が不用意に彼女を頼つてしまうから、彼女も俺を放つておけなくなつてしまうのだろう。

そんな風に、回想が自戒にすり替わつた時だつた。

『ドンドンドンドンッ！ ドンドンドンドンッ!!』

「——あ」

扉を激しく叩くその音に、俺は我を取り戻した。それと同時に、家の前に人がいるのも思い出す。

溜め息が出そうになるのをどうにか堪えながら妙に重く感じる扉を開くと、やはりそこには変わらぬ野武士面の男が立っていた。

「てんめエキリトお!! この雨の中で締め出すつてのはどういふ見だこの野郎!!」

「どうやらまた降り始めたらしく、クラインの逆立つた髪や顎から雫が滴り落ちてい

る。
「何しに来たんだ? いや、そもそもどうしてここが解つた?」

「ンなもん決まってるだろうが。アルゴの野郎から買ったんだよ」

「……………」

にやーハハハ！ という特徴的な笑い声が聞こえた気がして、思わず頭かぶりを振る。

「それと、《鼠》からの伝言だ。『それで隠れてるつもりなら、随分甘く見られたものだな、キー坊。結婚式挙げるなら、オネーサンも招待するようにナ』だよ。おめえ、奴にキー坊なんて呼ばれてンのな」

そう言つて、クラインは堪え切れんとばかりにクツクツクツ、と声を出して愉快そうに笑う。

どうやら住居だけではなく、アスナと結婚したことまで調べ上げられているらしい。

流星は《鼠》のアルゴと言うべきか。

……………いよいよ頭が痛くなってきたぞ。

「……………まあ、取り敢えず上がれよ」

「おう、お邪魔し——」

流星にこのまま追い返すわけにもいかずに玄関へ通してやると、何故か急にクラインが押し黙るものだから、俺は疑問に思つて振り返る。

「いやあ、すんませんアスナさん、大声出しちまって。こいつがもう独ソッりロじゃないつてこと、うっかり忘れちまいました」

「いえ、こちらこそキリトくんがごめんなさい。濡れちやつてますよね。今タオル取ってくるので、リビングで待っていてください」

どうやら背後で会話を聞いていたらしいアスナはそう微笑して、タオルを取りに再び寝室へと戻っていく。

そんなアスナの後ろ姿をポカんと眺めていたかと思うと、クラインは突然俺の頭に握り拳を打ち付けた。

「痛つてえ——何すんだよ!?!」

「大袈裟な野郎オだなあ……。おめえが痛くないつて言つたんだらうによ」

言われ、はたと思ひ出す。

あの始まりの日。正確には、まだ始まってすらいなかつたあの時。

《フレンジーボア》に股座に突つ込まれて地面に蹲うずくまるクラインに、俺は呆れながら言つたものだ。大袈裟だなあ……。痛みは感じないだろう、と。つまりこれは、ある意味二年越しの意趣返しなのだ。

そう理解すると、自然苦笑が漏れる。だが、それも一瞬の内に引つ込んだ。

あの日のことを思い返せば、自然、俺がこの世界で初めて犯した罪を思い起こすことになる。

俺が犯した罪。それは、多くのβテスターが犯した罪でもある。

茅場によるチュートリアル終了後の混乱冷め遣らぬあの状況で、右も左も解らない多くの初心者^{ニュービー}を置き去りに、テスターの多くは次の村《ホルンカ》を目指した。只、他人より多くのリソースを獲得する、その為だけに。

そして俺は、《ホルンカの村》に最速で辿り着いた。それは偏に、クライン達を置き去りにしたお蔭だった。

……俺は、今でも後悔している。クラインを——この世界で出来た最初の友人を置いて行ってしまったことを。

もしクライン達《風林火山》を率いて《ホルンカ》を目指したとして、少なくとも第一層攻略会議までに迷宮区手前の《トールバーナ》まで辿り着けたとは思えない。仮に辿り着けたとして、レイドに参加出来るだけのレベルに達していたとも思えない。

——彼女だったら……あの伶俐な微笑の持ち主ならば、きっとこんな風に悩み続けたりはしないのだろう。そもそも彼女なら、後になって後悔するような選択肢は選ばない。あれが最善だったのだと、そう胸を張ることが出来るはずだ。

「何だよ？ そんな怖エ顔して。言つとくが、オリヤ殴ったことは謝んねエぞ。独り者のやつかみくらい甘んじて受けやがれ、この幸せ者め」

クラインはそう言つて、今度はまるで兄が弟にするように、俺の頭をグリグリと乱暴に撫でてくる。

「……止めてくれ」

俺はその手を振り払うが、今度は逆の手で拳を作ると、先程よりも強く俺の頭を打ち付けた。

痛くはない。だが、それなりに衝撃はある。

目の前に星が浮かぶのを感じながら、俺はクラインを睨み上げた。しかし、俺以上の眼力で、クラインは俺を睨み返す。

「キリト、もしかしておめえ……まだオレを置いて行つたこと気にしてやがんのか？」
「……………ッ」

呼吸が止まる。そんなものは錯覚だと頭では解つていながら、浜辺に打ち捨てられた魚のように息が出来ない。

糾弾されて当然だ。寧ろ、今までされなかったことの方が不思議なくらいだ。

クラインの口からどれ程の罵倒が吐かれようとも、俺はその言葉を受け止めなければならぬ。

だが、クラインの口から吐き出されたのは、罵倒の言葉などではなく、深い深い溜め息だった。

「はあ————ホント、おめえは大馬鹿野郎だよ、キリト。オレがおめえを怨んでる？ンなわけねえだろうが。オリヤ、寧ろおめえには感謝してんだ」

「は？」

俺は、自分の耳を疑った。

感謝？ 意味が解らない。感謝される覚えなんてない。

「何で……」

「何でって……そりゃあお前、オレがここにこうして立ってられんのは、半分はおめえのお蔭だからよ」

俺の困惑っぷりに一層呆れた様子で、クラインは無精髭の浮かんだ顎を摩りながら続ける。

「SAOはおろかVRゲーム自体が初めてだったオレにとつて、おめえに教わったソードスキルを始めとしたテクがどれ程役に立ったかは想像に難くねえだろ。——オレだけじゃねえ。おめえがオレに教えてくれたテクを今度はオレが《あ風林火山いっ》に教えてよ……。そんで今はよ、オレ達はおめえと肩並べてフロアボス相手に戦えるまでになったんだぜ」

だからおめえには感謝してんだ、とクラインは繰り返す。

「それによ……おめえはあの時、オレを誘ってくれたじゃねえか。それを断つたのはオレだ。オレが手前エの都合で断つたんだよ、理由がどうあれな。それに、オレだつてこう見えても社会人だ。手前エの行動には、手前エで責任取れるさ。だから、おめえが責

任を感じることもなくてありやしねえんだよ」

自分の行動には、自分で責任を取る。そんな当たり前の言葉に、俺は冷や水を浴びせられた気分だった。

『彼ら自身の責任を、君が奪うんじゃない』

あの日、彼女に言われた言葉がリフレインする。

嗚呼——俺は、何度、同じ過ちを繰り返すつもりなのか。

あの時は、最早取り返しようがなかった。サチも、ケイタも——既に、何もかもが手遅れだった。

だが、今回は違う。今なら、まだ幾らでも取り返せる。だってクラインは、ちゃんとこうして俺の目の前にいるのだから。

俺に出来ることは何か。そんなもの、一つしかないだろう。

身体が震えそうになるのを、奥歯を噛み締めて制する。後は、口を開くだけだ。

「俺はさ、クライン……解ると思うけど、昔から人付き合いが苦手なんだ」

唐突な自分語り。しかし、クラインは特に何を言うでもなく、耳を傾けてくれる。

それをありがたく思いながら、俺は自分の腹の内を曝け出していく。

「妹とはどう接していいのか解らなくて距離を置いていたし、同じ学校の同級生は幼稚な子供と見なして常に一歩引いた付き合いをしていた。……要するにさ、俺は嫌なやつ

なんだよ」

そして、その度し難い性向は、こうしてSAOに囚われてからも大して変わっていないように思う。

「そんなんだから、βテスト期間中も、パーティーを組むことはあつても特定の誰かと親しくするということはなかったんだ」

それでも、こいつとなら何時か仲良くなれるのではないか、と思えた相手もいたことはいた。

彼は、端的に言えば地味だった。アバターを気恥ずかしいまでの勇者然とした外見に設定していた当時の俺からすれば、何故ゲームのアバターをそんな平凡な外見に設定するのか理解出来なかったものだ。

ただ彼の場合、見た目は平凡でもその実力は非凡なものだった。彼の戦い方は、ロジックの厚みとセンスの切れを兼ね備えていて……特に《武装解除》^{デイスアーム}の腕前は、PVPイベントの上位連に名を連ね、当時から《武器破壊》^{デストラクション}を得意としていた俺ですら到底及ばなかった。

そんな彼と何時か大会で剣を交えるのを俺は心待ちにし、遂に訪れたその舞台で——しかし、大きなショックを受けることになった。熱戦の最後の最後に、彼が、避けられるはずの俺の斬撃を態と受けて負けたからだ。俺はその理由を巨額の賭け金が動くト

トカルチヨの片八百長を請け負ったからだと推測し、怒りのあまり彼を詰なつた。

それ以降、彼はログイン自体あまりしなかつたのか、俺達は一度も顔を合わせることなくβテスト期間は終了した。

俺の悪癖にして弱点は、他人の顔を碌に見ない、名前も中々覚えなないことだ。その例に漏れず、俺は彼のプレイヤーネームを覚えていない。いや、正確に言えば忘れてしまった。

しかし、それでも彼が俺に言った言葉は覚えている。

俺の罵倒を涼しい顔で受け止めた彼は、何処か女性的な仕草で口元を押さえると、ヒトのことをクスクスと笑つてこう言つたのだ。

『君がどう思おうと、それは君の自由だよ。でも、ゲームには人それぞれ遊び方があるだろう？ だから僕がどう遊ぼうと、君にとやかく言われる覚えはない。君のスタンスに、僕まで巻き込まないでくれ』

当時の俺は火に油を注がれるままに更に二言三言返したように思うが、流石にその内容までは覚えていない。

只、今になって思い返せば、大人気なかつたのは俺の方だろうと思う。確かに彼の言う通り、プレイスタイルは個人の自由だ。……それでも、片八百長を仕掛けておいて、あの言い草はどうかと思うが。

「キリト、そいつつてもしかしてよ……」

「どうやらクラインも、『彼』の正体に思い至つたらしい。それも、当然と言えば当然だが。」

「なあ、本人には直接訊いてみたのか？」

「何て訊けばいいんだよ？ 『あんた、β時代にネナベしてただろ』とでも言えつて言うのか？」

果たして、そんなことを『彼女』に言えばどうなるか。

クラインはその状景を想像したのか、顔を青くして身震いする。

「無理だな」

「ああ。藪蛇やぶへびになることは目に見えてるからな」

俺はそう言つて、我が意を得たりという気分小さく肩を竦めた。

まあ、それは兎も角、だ。

「そんなわけだから……俺にとつては、お前がこの世界で初めて出来た友達なんだ」

そう。俺にとつて、クラインは友達だ。見ず知らずの他人なんかじゃない。

気にするな、というのが土台無理な話なのだ。俺があの日、この人好きの友人を置き去りにした事実は変わらない。それでも――

「クライン。……あの時、お前を置いて行つて悪かった。……ずっと、後悔していた」

こんな俺でも、謝ることくらいは出来る。

俺の掠れ気味の謝罪を受け取ったクラインは、少し思案する素振りを見せ——そして、言った。

「そういうことなら、許すわけにはいかねエな」

「……そうか」

これも、また当然だろう。謝るにしても、余りにも遅過ぎた。それでもクラインなら許してくれるのではないかと、心の何処かでそんな風に甘く思っていた。

……本当に俺は、つくづく自分に甘い。

友人を失ったショックと自己嫌悪で打ち拉がれていると、何故かクラインはニヤリと笑う。

「現実^{リアル}で、飯の一つでも奢って貰わねえとな」

そうしたら許してやるよ、とクラインは軽い調子で言う。

言葉が直ぐには出なかった。

視界が霞む。涙が溢れそうになる。それを誤魔化すように、俺は不敵に笑った。

「良いぜ。蟹食べ放題でも何でも奢ってやるよ」

「ははっ！ そいつは大きく出たな、キリトよ。後悔するんじゃないぞ？ オリヤ、ダチ

には遠慮しねえからな」

失つてなどいなかった。こいつはまだ、俺を友達だと言ってくれる。

口に出さなければ……伝わらない、解ってもらえない。

言葉にしなくても伝わるといふやつは、きつとエスパーか宇宙人だろう。空気を読むとか、察するとか……そんなものは幻想だ。

それでも、こうしてちゃんと口に出せば、解り合えることもある。

俺は、これからも多くの間違いを犯すだろう。中には、取り返しのつかないこともあるかもしれない。

それでも、その都度問い直すことは出来る。

そうすればきつと、一步一步でも前に進める。

そうして何時の日か、この城の天辺まで登り詰めることが出来たら——

「なあ、クライン。少し相談に乗ってくれないか？」

「良いぜ。酒でも飲みながら聞いてやるよ」

何てことは無い、という風にクラインは気軽に請け負う。しかし、あの子を見ればきつと驚くだろう。

それにしても、アスナ遅いな……。タオルを取りに行っただけのはずなのに。

俺が丁度そう思ったときだった。

「キリトくん、大変なの!!」

突然寝室から飛び出してきたアスナは、クラインの目も気にせずに、今にも泣き出しそうな顔で俺に縋り付いてくる。

「ど、どうしたんだよ、アスナ?」

「ユイちゃんが、ユイちゃんが目を覚ましたの……」

ユイ。それが、あの子の名前なのか。

だけど、目を覚ましたと言うのなら、何故アスナはこんな……。

「な、なあ……ユイってのは?」

「ああ……えっと、今朝倒れたところに偶然通りかかって、俺達で保護した女の子なんだけど……」

アスナの尋常ではない様子に、俺とクラインは顔を見合わせる。

「それよりアスナ、一体どうしたんだ?」

俺がそう尋ねると、青い顔をしたアスナは途切れ途切れに話し出す。

「キリトくんとクラインさん、大事な話をしているみたいだったから……わたしはいない方が良さだろうと思って、ユイちゃんの顔を見て時間を潰してたの。そうしたら、突然うな驚うなされるみたいにな『心が……二人の心が……』ってうわ言を呟いて……。それで、ついさつき目を覚ましたの。そしたらっ」

遂に涙腺が決壊し、アスナは大粒の涙を零す。

「ユイちゃん、自分の名前以外思い出せないって！ わたし、どうしていいか解らなくて……！」

記憶喪失——？

馬鹿な。そんな残酷なことがあっていいのか。

俺はアスナを抱き締めた。彼女を落ち着かせる為だったが、同時に自分の冷静さを保つ為でもあった。

アスナの肩の震えが収まるのを待つてから、優しく語りかける。

「取り敢えず、もう一度会って話をしてみよう。今度は、俺も一緒に行くから」

「うん。ごめんね、取り乱して」

声に力を取り戻したアスナの返答を聞いて俺は頷くと、隣に立ったままのクラインを見やる。

「悪いな、クライン。今日はもう……」

帰つてくれないか、という声を、クラインが遮った。

「水臭エこと言うなよ。乗り掛かった舟だ」

「ああ、そうだな。頼む」

兎に角、今のままでは何も解らない。

それでも言い知れぬ嫌な予感が、俺の胸中に渦巻いていた。

第40話 ユイ

ユイと名乗った少女は、ベッドの上に腰かけていた。

俺は屈んで少女と視線を合わせてから、出来る限り明るい声で話しかける。

「こんばんは、ユイちゃん。ユイって呼んでもいいかな？」

ユイは俺の顔を数秒見詰めると、小さくこくりと頷いた。

「ありがとう。じゃあ、ユイも俺のこと、キリトって呼んでくれないかな」

「き……………」

「キリト、だよ。キ・リ・ト」

「……………」

ユイは考え込むように眉根を寄せると、暫く黙り込んでしまう。

「……………きいと」

アスナに聞いた時点である程度覚悟していたつもりだったが、予想以上にシヨックが大きかった。

八歳くらい、という見立ては恐らく間違っていない。だとすれば、実年齢は十歳前後ということになる。しかし、この舌足らずさは、十歳にしては余りにも年不相応だ。否

応にも、「幼児退行」という言葉が頭を過る。

記憶障害に幼児退行……恐らく、何らかの要因で精神に大きなダメージを負ったのであろうことはまず間違いないだろう。

「ちよつと、難しかったな。ユイの言い易い呼び方で呼んでくれればいいよ」

声が震えそうになるのをどうにか堪え、ユイの頭に手を置いて笑いかける。

再び、ユイは長い時間考え込む。その間にもう一度部屋を出たアスナは、ホットミルクを淹れたカップを持って戻ってきた。

「ユイちゃん、良かったら飲んでね。身体も温まるよ」

そう言つて、アスナはユイの小さな手にカップを握らせる。

しかし、ユイはカップに口を付けず、代わりに俺を見詰め、おずおずと口を開いた。

「……パパ」

次いで、アスナを見上げ、言う。

「あうなは……ママ」

一体、ユイに何があつたのか。

ユイの両親は、現実でユイの帰りを待っているのか。或いは、俺達と同じようにアイヌクラッドに囚われているのか。

名前以外の全てを忘れてしまうような出来事。俺達を「パパ」「ママ」と呼ぶ理由。

それらを推測すると、嫌でも行き着く仮定は――

「そうだよ……ママだよ、ユイちゃん」

俺が考えを巡らせていると、アスナはそう言つて、微笑みと共に頷いてみせた。

ああ、そうだな。考えるのは後回しだ。

こみ上げてくるものを必死に抑え付け、俺も笑つて頷いた。

「ああ。パパだぞ、ユイ」

俺とアスナの顔を交互に見たユイは、この時初めて笑顔をみせた。人形のような顔に生気が籠り、年相応の少女の顔になったように思う。

ユイは俺達に何を見ているのだろう。父と母の面影を重ねているのか。それとも、本当に俺達を親だと思つているのか。どちらにせよ、何らかの決着を付けなければならぬのは確かだった。

ホットミルクを飲み、小さなパンを一つ食べ終わると、ユイは再び眠りについた。

その寝顔は安らかなもので、俺達はホツとして二人して小さく息を吐き、そして互いに苦笑した。

ユイに毛布をかけてやり部屋を出ると、ソファアに座つて自分で持つてきた酒を呷るクラインの姿が目に入った。俺は呆れて問いかける。

「おい、クライイン。協力してくれるんじゃないやなかったのか？」

すると、クライインはバツが悪そうに目を逸らした。

「いやよ……考えてみりゃあ、オレってあんまし子供受けする顔じゃねえなって思っ
てよ」

「そんなことないと思うけどな」

そう言いながら、クライインと対面する形でソファアに腰を下ろす。アスナも俺の隣に座った。

「ありがとよ。——んで、何か解ったかのか？」

「まあ、な。取り敢えず、ユイについて解ったことを整理していこう。まずは——」

俺が話し始めると、クライインは表情を引き締めた。

まず解ったことは、「ユイ」という名前である。しかし、本人がそう言っているだけで、本当のところは定かではない。何故なら、ユイは記憶喪失だからだ。もしかしたら、ユイというのはプレイヤーネームではなく本名なのかもしれない。唯、由依、優衣……当たり前だが、十分に人名として通用する。

「しかしよ、キリト……幾らなんでも、本名でプレイしてるってことはないんじゃないのか？」

「どうだろうな？　相手は子供なわけだし。でも、本当に本名だとすると少し困ったこ

とに……—ん？ アスナ、どうした？」

アスナの意見を聞こうとしたところで、俺は気付いてしまった。アスナの目が、酷く泳いでいることに。

「アスナ……まさか」

「ううっ……。だ」

「だ？」

「だって仕方ないじゃない！ ネットゲームなんて生まれて初めてだったんだから！」

「お、おう」

先程までとは違った意味で涙目になってしまったアスナは、ぶいっとそっぽを向いてしまう。しかし、羞恥で頬を真っ赤にされてはこちらとしても居た堪れない。

それにしても、アスナは本名もアスナなのか。……やっぱり俺も本名を教えた方が良いのだろうか？

「と、兎に角だな！ えくと……ああ、そうそう。明日にでも《生命の碑》を確認しておいた方が良くと思うんだ。ユイがNPCってことはやっぱり有り得ないだろうけど、カーソルも出てない以上、何らかのバグが発生しているのも確かだろうし。取り敢えず、ユイという名前のプレイヤーがインクラッドに確かに存在しているという根拠が欲しいんだ」

俺がそう言うと、何故かアスナは俺に冷めた視線を向けてくる。

「な、何だよ？」

「まさかとは思うけど、キリトくん……もしかして、ユイちゃんが幽霊か何かなんじやないかって疑ってる？」

「……………」

アスナのその指摘は当たらずとも遠からずといった感じだったが、俺は敢えて大きく頷いた。

「いいかアスナ、火のない所に煙は立たないんだ」

こちらの意図を掴みかねたのか、アスナもクラインも訝しげな顔をして、無言の問いを投げかけてくる。

「そもそも俺達は、どうしてあの湖の畔へ行ったんだ？」

「……………？ そんなの決まってるじゃない。キリトくんが幽霊の噂を持ち、出し、て……………」

「アスナも気付いたみたいだな」

「どういうことだ？ オリヤさっぱり解らねエぞ」

然もありなん。

俺はクラインに噂の内容を語りながら、改めて自分の中の疑念が大きくなっていくのを自覚する。

「——するつてエとアレか？ その噂の幽霊少女が、ユイの嬢ちゃんと同一人物つてとか……？ いや、だけどよお」

「ああ、お前の言いたいことも解る。噂の発端は一週間前の目撃証言だからな。ヘタをすれば、ユイは一週間もの間あの森の周辺を彷徨つていたつてことになる」

「おいおいおい！ じゃあ何か？ それでユイの嬢ちゃんはいよいよ精根尽き果てて、偶然通りかかったおめえの目の前でぶつ倒れちまつたつてことか？」

クラインのその問いに、俺は首を振つて否定を示した。

残念ながら、話はそこまで単純じゃない。そもそも、そんなことは有り得ないのだ。

「俺達の身体は浮遊城には存在しない。あくまでこの身体はポリゴンの集合体であつて、現実の俺達の肉体は今も病院のベッドの上に寝かされて、腕には点滴のチューブが刺されているはずだ。脳の空腹の訴えを黙らせる為に何かを口にしたところで、現実の俺達の身体には一ミリだつて栄養素が取り込まれることはない。……そう解つていても、俺達は食はずにはいられないんだ」

何故ならこの渴きや空腹感は、俺達の脳が訴える、本物の感覚だからだ。

「ユイが断食に慣れた修行僧とかなら兎も角、只の十歳そこの少女である以上、一週間も飲まず食わずで動き回るなんて当たり前だ。もしそんなことが可能だとすれば、ユイはそれこそ真正銘本物の幽霊ゴーストつてことになる」

「おいおい、キリトよ。冗談にしたって笑えねエぞ」

「ああ、勿論俺だつてユイが本当に幽霊だなんて言うつもりはないよ。でも、噂の幽霊とユイが同一人物であるのは外見の特徴が一致していることから考えてみても、やっぱりほぼ確定だと思う。しかしそうなると、どうしても矛盾が生じてしまう。だから、逆に考えてみたんだ。そもそも《木工職人》^{ウッドクラフト}のプレイヤーが見たユイは、どういう状態だったんだろう？ つてな」

導き出された結論が間違っているとすれば、それは前提のどれかが間違っているということだ。

だとすれば、一体何が間違っている？

まず、ユイが噂の幽霊と同一人物であるのは、外見の特徴が「透けている」以外は一致していることから確定。恐らく、噂に尾ひれが付いたのだろうと推測する。

次に、噂の発端である目撃証言が出たのは約一週間前。これも間違いない。

最後に、人間が一週間飲まず食わずでは活動出来ないのは……そもそも覆しようがない。

よつて、残りの前提で間違っている可能性があるのは一つしか存在しない。

「——《木工職人》のプレイヤーが目撃した段階では、ユイちゃんはまだ記憶を失っていない。キリトくんは、そう言いたいんだね」

俺が結論を言う前に、アスナが先んじてソレを口にする。どうやら、俺とクラインのやり取りを静観していたのは、単に自分の考えを纏めていただけだったみたいだ。

しかし、これではどうにも恰好が付かない。

「ああ……まあ、そういうことだ」

それでも、俺のちっぽけな虚栄心を満たす為だけにNOと言うわけにはいかないだろう。

俺は力なく頷いてから、先を続ける。

「一週間前から記憶を失った状態だと思いついていたから答えは出なかった。なら、逆に考えれば良かったんだ。ユイは記憶を失う前——つまり、記憶を有した状態で、あの森を訪れていた。一体何時から、何の為にあんな所に通っていたのかは解らないけれど、重要なのはそこじゃない。今重要なのは、記憶を失う前のユイについて何か知っているプレイヤーが、この層の何処かにいるかもしれないってことだ」

上手くいけば、ユイが記憶を失ってしまった理由についても何か解るかもしれない。

「うん。それに、もしかしたらユイちゃんは元々この層で暮らしていたのかもしれないよね。ここはモンスターも出ないから、ユイちゃんが何も武器を装備していなかったことにも説明がつくし」

確かに、言われてみればそうだ。

俺は最初からユイの装備を見て《はじまりの街》に住んでいるプレイヤーだと決めたかかっていたところがあつたけど、モンスターが出ないこの層の何処かの村の住人っていう可能性もあるのか。……これは盲点だったな。

「だったら、話は早いな。明日になったら、ユイを連れて各所の村を訪ねてみようぜ。運が良ければ、知り合いが見つかるかもしれないし」

「そうだね。これももしかしたらだけど、ユイちゃんのご両親ないし保護者の方が見つかるかもしれないよね。だって、あんなに小さい子が一人でログインするなんて考えられないもん」

ユイの外見は凡そ八歳くらい。つまり、現時点での年齢は十歳前後ということになる。しかし、ナーヴギアの対象年齢は十三歳以上で、実際俺が出会った最も若いプレイヤーであるところのシリカでも十三歳くらいだった。そう考えると、ユイは余りにもプレイヤーとしては若過ぎるのだ。

だから、家族と一緒にログインしているかもしれないというアスナの指摘は間違っていない。俺も、そう思う。

……だけど、だけどアスナ、それは――

「アスナさん、この世界で出会った知り合いなら兎も角、家族がいるっていう可能性は切り捨てた方がいいと思いますよ」

俺が苦渋を飲むような思いでいると、意外なことに、それを否定したのはクラインだった。

「……理由を教えてもらえますか？」

アスナは僅かに眉根を寄せる。

自分の考えを真つ向から否定されたから——という理由で苛立っているわけでは勿論ない。その怒りは、ユイへの優しさ故だ。それが解るから、クラインも特に気を悪くしたりはしない。

だけど、俺としても解らない。クラインは何を根拠にユイの家族はログインしていないと断言出来るんだ？

「まあ、何だ。キリトはテストターだから解らねエのは仕方ないとして、だ。アスナさん、そのお……付かぬ事を伺いますが、アスナさんはSAOのソフトをどうやって購入したんですかね？」

「……実は、自分で買ったわけじゃないんです。わたしはナーヴギアも含めて兄のを借りただけなので、兄の購入方法までは、流石に……。でも、それとユイちゃんのご両親に何の関係が？」

ナーヴギアもソフトも借り物だったというのは、俺にとっても初耳だった。

確かに、アスナは日頃からゲームをやっているようなタイプには見えなかったが、V

RMMORPGという物珍しさに、普段ゲームをやらないような人種も手を出したというケースはβテスト時代から多くあった。寧ろ、テストの多くがステ振りすら満足に出来ないニュービーだった程で、俺やクラインのように根っからのゲーマーの方が少ないくらいだ。だけど、ソフトもナーヴギアすらも自分の物ではなく借り物というのは、俺が知る限りアスナだけだ。

「……成る程。それじゃあ、二人が解らないのも無理はねエか。……キリトには前に話したと思うけどよ、オリヤこのソフトをあいつらと一緒に店頭に並んで買ったんだ。初回ロットはたったの一万本。その内、βテストの優先購入分で千本が引かれ、ネット予約はものの数秒で完売だ」

俺はクラインが何を言いたいのかを悟った。そして、その意図も。

………だけどクライン、それはかなりの悪手だぞ。

「当然、店の前には某スマートフォンが発売日より長く長蛇の列だ。俺らは三日前から泊まり込んでたけどよ、先頭の野郎オに至っては一週間前から並んでたって聞いたな」
アスナはそれを聞いて啞然とする。

まあ、気持ちは解るが。

「トイレは交代でコンビニに行つて済ませたり、三日風呂に入らないのは流石にアレだから近所のネカフェのシャワー使つたりしてよ……結構骨が折れたぜ」

「……クラインさん達が苦労したのは解りましたけど……」

「で、要するにお前は何が言いたいんだ？」

俺はそう尋ねながら、クラインにアイコンタクトを送る。理解した、という意味を込めて。

クラインもアスナに気付かれないようにこちらに向かつて僅かに頷いてから、ようやく本題を口にする。

「だからよ、オレが言っているのは——そんな過酷な環境に、八歳そこらの子供を連れて並ぶ親が何処の世界にいるんだよ？ ってことだ」

「……………」

隣から息を呑む音が聞こえたが、そちらには顔を向けず、クラインに尋ねる。

後は、示し合わせた出来レースだ。

「クライン、ユイと両親が店頭で買ったとは限らないだろう？ 運良くネットで買ったとか、それこそ元テストターの可能性だっつて」

「有り得ねえよ、さっきも言ったろうが。確率的に考えて、一家庭でそう何本も買えるもんじゃねえんだよ。おめえだつて、自分がどれだけ狭い門潜つてここにいるのか理解してんだろ」

「まあ、な。じゃあ、ユイがネットで運良く買えて、両親が店頭で買ったつていう可能性

は？」

「それこそ有り得ねエな。発売日は平日だぜ？ オレが言うのもなんだが、有給なんてそう簡単に取りれるモンじゃねエしよ……。それに、三日も家空けるなら、嬢ちゃん一人家に残すわけにはいかねエだろうが」

「並んでいる期間、親戚に預けてたのかもしれないだろ」

「嬢ちゃんにだって学校があんだろ。やっぱりどう考えても、家族も一緒にログインしてるっていう可能性はゼロだ」

結論は出た。

俺は、人知れず小さく溜め息を漏らす。

「……決まりだな。取り敢えず、明日になったら、ユイを知っている人がいないかどうか聞いて回ってみよう。アスナ、それで良いよな？」

「……………うん。本当は、ユイちゃんをご両親のところへ送り届けたかったけど……いないなら、仕方ないもんね。——ごめんさい、クラインさん。わたし、少し取り乱してしまつて」

「いやいや、謝る必要なんてないつすよ」

ブンブンと音がしそうな勢いで首と手を振るといふ大袈裟なクラインのジエスチャーに、アスナは軽く吹き出した。

「アスナ、なんか冷えてきたし、コーヒーでも淹れてきてくれないか」

目尻を拭うアスナに、俺は尤もらしい理由を付けて頼む。

「うん、解った。クラインさんは砂糖とミルク必要な人ですか？」

「あー……じゃあ、砂糖だけで」

それを聞いて、アスナは「畏まりました」とお道化って言って、キツチンの方へと歩いていく。どうやら、気分も少しは明るくなったみたいだ。

俺はアスナの姿が完全に見えなくなるのを見届けてから、声を潜めて謝辞を述べた。

「……悪いな、クライン。正直助かった」

「気にすんな。協力するって言っただろうが」

小声で囁き合いながら、しかし、俺はクラインの脛を蹴り付けた。

「痛ってなあ！ 何すんだよ!？」

「さっきのアレはかなり苦しかったぞ。アスナが話に付いていけてなかったから良かったものの、さっきのお前の説明じゃ、両親じゃなくて片親どちらかって条件だったら問題が出てくるだろうが」

「そ、それは……まあ、そうかもしれないねエけどよ……。上手く誤魔化せたんだから良かったじゃねエか」

「はあく……まあ、そうだな。ってことはクライン、お前も気付いたんだな？」

「ああ、気付いちまったよ。久しぶりに最悪の気分だぜ」

クラインの表情は硬い。多分、俺も似たようなものだろう。

「……親が目の前で殺されたとしら」

「記憶喪失になるには充分な理由だよな、やつぱりよお……。……クソツタレが！　こんなことがあつて良いのかよ!？」

「落ち着け、クライン。アスナに聞こえる」

キツチンの方に視線を向けるが……。どうやらアスナには聞こえなかつたらしい。

「わ、悪イな……。だけど、だけどよお……」

「まだそうと決まったわけじゃないだろ？　考え付く限りで、最悪のパターンってだけだ」

「でも、それが一番しつくりくるから質が悪イんだろうが」

そう。俺達が意図的、或いは無意識的に棚上げしていたユイが記憶喪失になった理由。

人間は、生半可なことでは記憶を失つたりはしない。

辛すぎる記憶が、その人の心を壊してしまう。それを防ぐ為に、脳が記憶を消してしまふ。詰まる所、記憶喪失とは、人間の心の防衛行動の一つなのだ。

母親なのか、父親なのか。それとも、そのどちらもなのか。

ユイが目の前で親をモンスタ―に、或いはレッドプレイヤーに殺されたのだとしたら……、その記憶からユイの心を守る為に、ユイ自身が記憶を封じ込めてしまったのではないか？ そして、ユイが俺とアスナをそれぞれ「パパ」「ママ」と呼ぶのは、喪つてしまったものの影を、俺達の中に見ているからなんじゃないのか？

……最低だな、俺は。こんな想像をするなんて。

「……そうじゃないことを祈ろうぜ。俺とアスナはさつき言つた通り、実際にユイを連れて村の方を訪ねてみるつもりだけど……クラインはどうする？」

「オレはあいつらと一緒に、本当にユイの嬢ちゃんのプログインしてねエかどうか《はじまりの街》辺りを調べようと思う。人を捜すなら、人手があることに越したことはねエだろ。ついでに、こつちで《生命の碑》も確認しといてやる」

「……ホント、悪いな」

「こういう時は素直に『ありがとう』って言つとくもんだぜ。それに、ダチが困つてたら助けるのは当然だろうが」

そう言つて、クラインはニヤリと笑う。

……本当にこいつは。

これで何でモテないんだらうな？ どう考えても、周りの女の見る目がないとしか思えない。

そうこうしている内に、アスナがマグカップを載せたトレーを持って戻ってきた。マグカップから立ち込める湯気と共に、コーヒーの良い香りが部屋に広がっていく。

「お待たせしました。どうぞ、クラインさん」

「ど、どうも、アスナさん」

そう言つて、クラインがアスナからマグカップを受け取った瞬間——俺の頭に、アラームが鳴り響いた。

突然の大音量に飛び上がりそうになるが、どうやら聞こえているのは俺だけではないらしい。

「もしかしなくても、おめえも聞こえたのか?」

「ああ。つてことは……アスナもか?」

「う、うん。たしか、フレンド・メッセージって差出人が通知の設定を出来るのよ。重要なメッセージなのに、相手が気が付かなかつたら困るから。でも、普段こんな設定したりしないし、わたしも今初めて聞いたよ」

どうやら、電子音の正体はメッセージの着信音らしい。見れば、確かに視界の端に手紙のアイコンが表示されている。

「三人同時つてことは……共通の知り合いからの一斉送信つてこと? キリトくん、心当たりある?」

「俺のフレンドリストの少なさはアスナだって知ってるだろ？ 心当たりなんてないよ」

「おめえ、それ自分で言うか……？」

クラインが呆れたような声を出すのが、事実なんだから仕方がない。そもそも、俺は元はソロなのだから、恥ずかしがる理由などないのだ。

「……もしかしたら、ティンクルさんじゃない？」

「ああ、それが一番可能性としてはありそうだ——つて、どうしたキリトよ？」

「いや……もしそうだとしたら、タイミングが余りにもアレ過ぎて……正直凄く嫌な予感が」

「あー……」

クラインとアスナから、同意の声が返ってくる。

しかし、何故か二人からは意外にも前向きな意見がそれに続く。

「でも、態々こんな設定をするくらいだし、何かわたし達にとって重要なことが書いてあるのかも」

「それに、何事もやる前から決め付けるのは良くないぜ、キリトよ」

「……はあ……」

そう言われると、引くに引けない。

俺は深く溜め息を吐いてから、覚悟を決めて二人を見た。
「解った。同時に開けるぞ」

覚悟を決めたはずだったが、俺の口からはそんな情けない台詞が漏れていた。

「良いわよ」

「いいからサツサと開けようぜ」

「じゃあ……せえ——」

の、と言ったところで、アイコンを同時にタップしてメッセージウインドウを表示する。

そして、俺の目に飛び込んできたのは——

【結婚式のお知らせ】

「相手はツ何処の馬の骨だああああ——ああ!!!」

「いきなりでけえ声出すんじゃないやねエよ！ ビックリするだろうが!」

「キリトくくん?」

アスナがジトつとした目付きで睨んでくるが、そんなことは今の俺にとっては些末なことだ。

俺は血走った目で文面を読み進めていく。

【拝啓。秋も深まる今日この頃、皆様におかれましては益々ご清祥の事とお慶び申し上

げます。さて、大変急な話ではございますが、十月三十一日に一層主街区《はじまりの街》の教会にて、二人の結婚式を執り行うこととなったことをご報告させて頂きます。多忙なこととは存じますが、二人の門出を祝つて下されば幸いです。敬具」

「急つて言つたつて、幾らなんでも急過ぎねエか？ 三十一日つて明日だろ」

「そういえばキリトくん、前に言つてたよね。ティンクルさんが幸せそうな顔で、誰かとメッセージのやり取りしてゐるつて」

「ま、マジつか。ど、どうするよキリト？ やつぱり祝いの品でも持つて行つた方が良いのか——つてキリト？」

突然ゆらりと無言で立ち上がった俺をクラインが驚いて見上げるが、それに答えてゐる暇はない。

「悪いな、アスナ。少し出かけてくる」

「ちよつと！ こんな時間から何処へ行くつもりよ?！」

「決まつてるだろ、ティンクルのところだ」

そう言いながら、身体は玄関の方へと殆ど自動的に進んでいく。

嗚呼、だかもどかしい。心はこんなに急いているというのに、足は思うように前に進まない。

「離せアスナ!!」

「離すわけないでしょ！ 一体どうするつもりよ!?!」

「決まってるだろ！ 馬の骨を二刀で叩き斬る!!」

「尚更駄目に決まってるでしょ!!」

アスナに服の裾を掴まれながらも、アスナという錘ごと前に進んでいく。

速く、もつと速く。

「うおおおおおあああ!!」

「いい加減にしなさい!!」

バシンツッ！ と金属質の何かで後ろから殴打された俺は、志半ばでその場に倒れ伏したのだった。

第41話 家族

転移門を潜り数ヶ月ぶりに《はじまりの街》に降り立った俺は、憂鬱な気分を少しでも紛らわせる為に空を見上げた。

「……………ッ」

思わず舌打ちする。

天蓋の外れから覗く空は、ムカつくくらいによく晴れていた。昨夜の雨が嘘のように、眩しいくらい朝の陽射しがここまで降り注いでいる。

これではまるで、天すらもがティンクルと某の結婚なにかしを祝福しているようではないか。全くもって腹立たしい限りである。

「……………やっぱ帰り帰ろうかな」

「……………ここまで来て今更何言ってるのよ」

天を仰ぎ見ながらぼそりと呟くと、呆れたような声が返ってきた。いや、実際彼女は心底呆れているのだろうか。

「やれやれ、パパったら本当にシスコンでどうしようもないんだから。ねえ、ユイちゃん？」

「ねー」

「ぐっ……！」

ユイは無邪気に笑ってそう返すが、単語の意味を理解しているとは到底思えない。しかし、そうと解つていても、幼い少女に言われるとぐさりと来るものがあるのだ。

精神にダメージを負いながらもどうにか発言を撤回させようと正面に視線を戻すと、それ見たことかと言わんばかりにこちらを睨め付けるアスナと目が合った。

「待て、アスナ。言つとくが、俺はシスコンじゃないし、そもそもティンクルは俺の姉じゃない。それにだなあ……」

何か俺が悪いみたいな雰囲気だが、正直俺の身にもなつてほしい。そもそもこのアイコンラッドで、ティンクルの結婚相手の顔を見たいなどと思うプレイヤーがゴシップ目当ての《情報屋》以外にいるだろうか。いや、いない。確信を持つてそう断言しよう。

別にティンクルが誰と付き合おうが結婚しようがそれは本人の自由だし、そもそも俺には何の関係もないってことは百も承知だ。しかし、それでもこうして気落ちしてしまうのは、言つてしまえば男の性さがというものだろう。気に入っていたアイドルが、もし仮に一般男性と結婚してしまったとしたら……壁の一つも殴りたくなる、それと同じことだ。

「だから俺は、断じてシスコンなどではない！」

「……………」

日頃からは想像も付かない程に長広舌を振るう俺をアスナは黙って見詰めていたが、「ねえ、ママ？ しすこんつてなーに？」

思わぬところから、とんでもない爆弾が投下される。

「え？ シスコンっていうのは……そうね」

ユイの目を輝かせながら放った問いに、しかし直ぐには答えず、何故か俺をチラリと見るアスナ。

「パパが詳しいから、パパに訊いてみて」

「なっ」

——鬼か。

嘗ての《攻略の鬼》が、別種の鬼となつて帰つてきた瞬間だった。

「ねえパパ、しすこんつてなーに？」

「そ、そそそそれはだな……」

あくまで純粋な好奇心で訊いているユイに、俺は仮にも親として、自分の為に子供に嘘を教えるわけには絶対にはいかない。だが、真面目な顔でシスコンの意味を講釈するなどという度胸が俺にあるはずもなく、板の間で途方に暮れる。

嗚呼、もしかしたら、『赤ちゃんはどうやってたのできるの？』と子供に訊かれた時の親

の心境とは、こういった感じなのかもしれない。なかった。

一体、どれだけの時間流れただろうか。

大量の冷や汗を流しながら目を泳がせる俺をいい加減見かねたのか、俺を見上げて辛抱強く待っているユイにアスナは優しく声をかけた。

「ごめんね、ユイちゃん。パパはユイちゃんにはまだ早いって。パパがそう言うんだつたら、ママも教えてあげられないかな」

「ぶー」

責任を全て俺に被せつつ上手に誤魔化すという高度なテクニックを見せるアスナに戦慄しながらも、不満そうに頬を膨らませるユイを黙って見守る。

「……わかった」

やがて、心底残念そうではあったものの、ユイはそう了承してくれた。

内心胸を撫で下ろしながら、俺はユイに笑いかける。

「ごめんな、ユイ。その代り、ユイがしてほしいこと、何でも一つ叶えるよ」

「ほんとに?」

「ああ、本当だとも」

「ほんとにほんと?」

「ホントにホントだよ」

俺がそう念を押すと、ユイは迷うように視線を彷徨わせてから、自信なげにぼつりと囁いた。

「おてて、つないでほしい」

「……ッ」

そんな切なる願いに、俺は胸を衝かれた思いだった。見れば、アスナは今にも泣き出しそうで、口に両手を当てている。

「そうだ、当たり前前だ。こんな小さな子が記憶を全て無くして、不安じゃないはずがないではないか。」

「ああ、そうだな。それじゃあ、手、繋ごうか。大きな街だし、逸れたら大変だからな」
手を差し出しながら途切れ途切れにそう言うと、ユイは小さな手を目一杯大きく広げて俺の手を握ろうとしてくる。

「それは、ちよつと難しいかもな」

俺はその様子にやはり泣きそうになって、それでも何とか笑みを浮かべてユイの掌を包み込むように握り返した。すると、何故かユイは俺と握った右手を見詰めてから、次いでアスナの顔を何かを訴えるようにジッと凝視する。

「ママも」

「そうだね……っ。うん！ じゃあ、ママとは左手を握ろつか！」

「うん！」

浮かんだ涙を振り払って、アスナが殊更明るくそう言うと、今度こそユイは満面の笑みで頷いた。

その笑顔を見て、俺は心から思ったのだ。

この笑顔を守りたい。少なくとも、俺がユイの父親である内は——絶対に、と。

「それじゃあ、そろそろ行こっか。パパ、ユイちゃん」

「パパ、ママ、れっつごー！」

「はははっ」

こうして俺達は、ユイを真ん中に三人手を繋いで、式場に向かって大通りを歩き始めたのだった。

東七区の教会。そこがメッセージに記載されていた式の会場だった。だが——
「思ったよりも小さいな」

その建物は、意外なほどに小さかった。

俺の中の想像では、それこそノートルダム大聖堂のような巨大なゴシック建築の建造物だったのだが、現物は『町の教会』と形容するのがピッタリな質素な佇まいだった。

「あの人のことだから、もっと派手にやると思ったんだけどな」

「そう？ 別にティンクルさんって派手好きじゃないと思うけど。……どうしてキリトくんはそう思ったの？」

「どうしてって……まあ、ティンクルってかなり金遣い荒いし、それでも余りある程稼いでるんだらうけどさ」

随分昔に感じるが、半年くらい前に思い切って尋ねてみたことがある。金銭的に困っているわけではなく、レベリングならもつと安全な狩場は幾らだつてある。なのに何故、あんたは態々独りで危険な未踏破ダンジョンに潜り続けるのだ、と。

「……それで、ティンクルさんは何て？」

「Time is Money.」

「えっ？」

『Time は 金 Money とは言うけれど、その逆は有り得ないよね？ 当たり前だけれど、お金じゃ時間を買うことは出来ない。歴史的な成功者達も、最期には永遠とを求めるものだよ。まあ、つまり何を言いたいのかと言えば、重要なのはどれだけ時間をかけずにより多くの金を稼ぐか、つてことだ。——時間を浪費するのは、そのまま人生を無意味にするのと同義だ。だから、僕は最も効率的な手段で臨んでる。只、それだけのことだよ』……だつてさ——つて、どうしたアスナ？」

当時を思い出しながら話していると、何時の間にかアスナは俯いていた。

「……浪費……無意味……」

掠れた、微かに聴こえる断続的な声。それがアスナのものだと気付くのに、数秒の間を要した。

「ママ……だいたいじょうぶ……?」

ユイが心配そうにアスナを見上げてそう問うと、アスナは顔を上げ苦笑した。

「大丈夫だよ、ユイちゃん」

次いで、俺の目を真つ直ぐに見詰めて、

「わたしは、今ここでこうしていることを——この世界に来たことを、絶対に無意味だったなんて思わない。だって、君に出会えたから」

そう言って、はにかむように笑った。

何故、今の話で突然そんなことを言い出したのか。何の脈絡もなかったように思うが、全く繋がりが無いわけでもない。きつと、アスナにも何か思うところがあつたのだろう。

この世界に来たことは、決して無意味なんかじゃない。その言葉に、俺は少し救われたような気がした。

「そうだな。……俺も、アスナに出会えて良かったよ」

何とかそれだけ口にしたものの、見詰め合ってるのは照れ臭くて視線を落とす。する

と、ニコニコと笑みを浮かべたユイと目が合った。

「パパ、幸せ？」

「……………」

そう訊いてきたユイの表情は無邪気な笑顔だったが、その瞳に、俺は理知的な光を見た気がした。

「ああ、そうだな。今まで色々大変なことがあったけど…………取り敢えず、今は幸せだと思う。出来れば、これからもずっとこうであってほしいな」

だからだろうか。俺の口からは、そんな真摯な言葉が漏れていた。

こんなことを言つて、ユイは理解出来ただろうか。

「……………」

まあ、満足そうに頷いているから、これで良しとしよう。

「話は戻るけど、アスナは因みにティンクルのやり方は効率的だと思うか？」

「うくん…………ソロだから手に入れたリソースは全部自分の物だよな？ だから、効率的といえばそうかもしれないけれど…………でも、リスクとリターンを考えれば、寧ろ効率悪いんじゃないかな？ 実際、キリトくんだって、ソロの時よりわたしとコンビ組んでる方が効率良いって言つてたでしょ？」

仕切り直す意味でアスナに尋ねると、少し考える素振りを見せてからそう言った。

「ああ。だから、ティンクルが言った理由は殆どそれっぽく言った嘘つてことさ。そもそもそんなに効率を求めらるなら、『料理スキル』をコンプしたり、事あるごとに俺にちよつかい出してきたりしないだろ?」

「そうだね」

「それにあの人が、使わない武器とかプレイヤーに半値以下で売ったり、買い物とかもプレイヤーがやってる露店で済ませちまうみたいだしさ。金遣いが荒いつていうのも、結局はコルを他のプレイヤーに再分配する為だと思ふんだ。要するに、あの人の思想——つて言ううちよつと大袈裟かもだけど、考え方自体は発足当時の『軍』にかなりに近いと思ふんだ」

「発足当時の『軍』? 『MTD』時代つてこと?」

「ああ。何て言つたかなあ……たしか、トウ小平理論だつたか? 先に豊かになれる人が豊かになり、豊かになつた人は他の人も豊かになれるように助ける、つてやつ。多分、ティンクルはそれを実践してゐるんだと思ふ……う?」

「そこまで言つてようやく、アスナがこちらを見てニヤニヤと面白がるように笑つてゐることに気が付いた。」

「な、何だよ? ヒトが真面目に話してゐるのに」

「ご、ごめんね。でも、前から解つてたことだけど、何だかんだ言つてキリトくんつて

「ティンクルさんのこと大好きだよね」

「」
思わず、絶句する。

「それに、影響も色々受けてるよね。昨日だって諺の引用してたし、ティンクルさんの癖が伝染^{うつ}っちゃってるんじゃない？」

「……………」
「知らん」

下手に誤魔化せばど壺にはまりそうで、俺は明後日の方へ顔を背けた。

しかし、そんな俺の行動は、どうやら裏目に出たらしい。

「あー！ 顔赤くなってる！ なんか妬げちゃうなあ〜」

そんな糾弾の言葉とは裏腹に、アスナは何処か楽しそうだ。

全く、女の子ってのは純情な青少年を弄ぶのがそんなにお好きなんですよかね？

「それで？ キリトくんとしては、結局何が気に食わないの？」

一頻り笑った後、アスナは真面目な声音で尋ねてくるが、どう見てもその顔は笑いを堪えているようにしか見えない。

「はあ……。確か、件の^{くだん}《軍》は住民から税金を取り立ててるって話だっただろ。風の噂じゃ、なんか最近ポランティア活動してるらしいし、この辺に住んでるプレイヤー全員招待して皆にご馳走振る舞おう、みたいなことやりかねないなと思っただよ」

それにしては、この教会は小さ過ぎる。

結局はこの結論に行き着くわけだが、何故こんなにも長々とアスナに語つたのかといえば、女性にとって結婚式がどれだけの意味を持つのか今一よく解らないから、という一点に尽きる。

「う〜ん……—多分、それは無いと思うなあ〜」

数秒、アスナは懷疑そうな表情で唸っていたが、結局無碍に切り捨てた。

「理由は……?」

「結婚式って大抵は人生で一度切りだし、たとえゲームの中とは言っても思い出に残るものにしたっていう気持ちは変わらないじゃない? だから、普通に考えて知らない人を招待したりしないと思うし、何より肩身が狭い思いをさせちゃうことになっちゃうよ」

「……そう、だよなあ」

言われてみればその通り、というか、ぐうの音も出ない。

……流石に考え過ぎだったのかもしれないな。

「なあ」

「何?」

「やっぱりアスナもドレス着たかったりするの?」

「どれす？ ママ、どれす着るの？」

ドレスという単語にユイが興味を示す。

「今のところ予定はないかな」

しやがみ込んでユイと目線を合わせたアスナは少し残念そうにそう言って、

「でも、やっぱりウエディングドレスを着るのは女の子の夢だし、わたしも着てみたいかなあ。キリトくんは、わたしのドレス姿見たいと思う？」

頬を桜色に染め、上目遣いでこちらを仰ぎ見る彼女の瞳に吸い込まれる。

「そうだな……見たい」

気付いたときには、殆ど自動的にそう呟いていた。

「じゃ、その内甲斐性見せてよねーキリトくん？」

「ぜ、善処するよ」

結婚式など催した日には何故田舎に隠居したのか解らなくなってしまうが、アルゴに居場所を特定されている以上広まるのも時間の問題だろう。何せ、彼女は《鼠》。自分のステータスすら金になるなら売るのがモットーなのだ。

……これはもう、今の内から誰かに後ろから刺される覚悟をしておいた方が良いのかもしれない。

「ということとでその時を楽しみにしつつ、今はティンクルさんをお祝いしてあげましょ」

「そうだったな。危うくそれ忘れるところだった」

「そうだ。今は未来のことで悩むより、何処その馬の骨を斬り伏せることに集中しよう。」

「待つてろよ……何処の誰かは知らないが、お前にティンクルは渡さない……！」

「思いつきりエゴ丸出しの台詞ね」

「パパこわい……」

「女子二名に非難されながらも、俺は割と本気でやり合うつもりで——実際、背には二刀を携えている——教会の扉を開け放った。」

「教会の内部は存外明るかった。ステンドグラス越しに射し込む光が、室内全体を照らしていたからだ。」

「しかし、そのせいで。」

「アンタは……ッ!!」

「否応にも解ってしまった。顔を見るまでもなく、その背中のみで視覚情報で。」

「一般の団員とは逆の、赤を基調とした団服を身に纏った長髪の男。俺はこの男以外に、そんな恰好をしている人物を見たことがない。」

「男は俺の声に気付くと、ゆっくりとこちらを振り返った。」

「思えば、その可能性は考えてすらいなかった。時系列的に有り得ないし、何より彼女」

が奴のことを嫌っているのは傍目から見ても明らかだった。

だが、好きの反対は無関心と言うように、嫌いということとは多かれ少なかれ関心は持っているということだ。そう考えてみると、案外好悪のベクトルというものは、俺達が思っている以上に簡単に逆転するものなのかもしれない。

「久しぶり、と言うにはまだそれ程日数が経っていないように思うが……まあ、良からう。——久しぶりだな、二人とも。取り敢えず、健勝そうで何よりだ。キリト君、それにアスナ君も」

響いてきたのは、良く通るテノール。

何処か愉快そうにこちらを見詰め立っていたのは、《血盟騎士団》団長ヒースクリフだった。

第42話 余興

目の前で展開される光景に、正直僕は面食らっていた。

広間の中央に置かれた長テーブル二つに所狭しと並べられた大皿料理を頬張る二十数人の子供達。談笑というには些か喧噪の趣が強い食事風景に、対面に座った女性は大層気恥ずかしそうに苦笑した。

「毎日こうなんですよ。幾ら静かにしてって言っても聞かなくて」

言葉通りに受け取れば単なる愚痴だが、女性が子供達へ注ぐ視線は心底愛おしげで、彼女が彼らを大切に思っていることがひしひしと伝わってくる。

「サーシャさんは、きつと将来良いお母さんになるのでしょうかね」

素直に微笑ましく思った僕の口からは、自然とそんな言葉が零れていた。だが、

「痛っ！」

ベシツ、と横合いから突然後頭部を叩かれ、その衝撃に思わず涙目になる。

しかし、痛くはないのに叩かれるというアクションに反応するなんて、これではまるでパブロフの犬のようではないか。今後のことも考えて、いい加減矯正した方が良くも知れない。——いや、今はそんなことより、だ。

「いきなり何するの!？」

そう言いながら隣に目をやれば、シレッと何事もなかったかのように瞼を閉じてマグカップに口を付ける里香の姿が。

「このコーヒーとつても良い香りだけど、サーシャさん何時も何処で豆買ってるの？」
「え〜つと……街のNPCショップのだけど。それに、これインスタン——」

「あれ？ おかしいわね」

その態度は余りにも露骨過ぎて、怒る気力をなくしてしまう。

「……無視しないで貰えるかな」

「煩いわね。あんたの頭に蠅が止まったたのよ」

「そんな訳ないでしょ……。またわたし、何か怒らせるようなことしちゃったかな？」

「……っ。可愛く言ったって駄目よ！ 自分の胸に手を当てて、じっくり考えてみなさい。その、薄っぺらい胸にね」

そう言つて、里香は僕の胸を指差しながら半眼で睨んできた。

胸筋を鍛えているなら兎も角、一般的な男の胸は薄くて当然だろ。……僕はモヤシっ子じゃない。

それにしても、何故こんなことになっているのか。溜め息を吐きたくなるが、残念ながら、種を蒔いたのは僕自身だった。

僕と里香の二人は、早朝から《はじまりの街》東七区の教会を訪れている。目的は勿論、結婚式の準備の為だ。

式場にこの教会を選んだのは、先日の訓練の折り、去り際に今度家うちに遊びに来てほしいと頼まれていたから、という尤もらしい理由もあるのだが、一番の理由は中々に世知辛い打算まみれのものである。と言うのも、この手の居住可能な建物は一定のコルを支払えば誰でも借りることが出来、また支払い続ける限り同一の人物が住み続けることも可能だったりして、それこそ見栄えの良い建物は数ヶ月先まで予約で埋まってしまっているのだ。しかし、だからと言って結婚式を自宅で済ませてしまうなど笑止千万。そこで思い出したのが、この教会と「先生」の存在だった、という訳だ。

子供達に彼女の人柄を聞いていたのもあって交渉はスムーズに進み、昨日のうちに教会を使わせて貰う手筈は整った。只、唯一の誤算があつたとすれば、それは子供達が僕を「お姉ちゃん」と認識していたのを失念していたことだろう。そのせいで、女性として振る舞う羽目になってしまったのだ。

「はあく……どうせわたしはド貧乳ですよ。その点、リズは結構あるから羨ましいかな。」

そういう事情を知りながら、男としては反応し辛いことを言う里香に対し、軽い仕返しのつもりでセクハラ紛いなことを口にする。

我ながら子供染みているとは思うし、自分の作った声に薄ら寒さすら感じるが、それは今更というものだ。それに何より、やられっぱなしというのは、僕の性に合わないのだ。

負けず嫌い。ああ、確かに、僕は昔からそういう人間だ。

——さて、里香の反応はどうか？

「あつそ」

頬でも染めれば可愛いものを平然とそう返す里香。

やっぱりこの程度で狼狽えるような性格じゃないか、解つてたよ。はいはい、今回も僕の負けだ。

少し悔しく思いながらも、内心白旗を振る。だが、どうにも昨日から不機嫌続きの里香は、次の瞬間、予想外の重い打球を僕へと向けて放つてきた。

《情報屋》が一昨日出した人気美少女ランキング第十九版で堂々の第一位だった癖に、唯一の欠点と言つていい胸まで完備したら、それこそ完璧じゃない。それとも、あんたまだモテたいわけ？」

「……人気、美少女ランキング？」

己の表情が凍り付いたのが自分でも解る。ピシリ、と幻聴が聞こえる程に。

「ええと……リズ？　美少女、ランキングなんだよね？」

サーシャさんの目も気にせずに、僕は少女にアクセントを置いて、敢えてもう一度尋ねた。それはもう、嘘であつてくれと神に祈る気持ちで。

「そうよ。因みに先着購入特典で上位数名の内一人の写真付き。見事、あんたの写真当てるやつたわ」

「ははは……あー……そう……ですか」

乾いた笑いが口から漏れる。

そういうえば、このセカイで神といえれば茅場のことだった。あいつに祈つたのがいけなかったか。

いや、いやいやいや！ 例のブログといい、僕の肖像権侵害され過ぎだろ!?

思わずそう叫びそうになるが、鉄の理性で何とか押し留め、猫を被り直し再度問う。

「……じゃあ、一体全体リズは何位だったの？ そつちだけが一方的に知っているなんてフェアじゃな——ん？」

言い終えるが早いか、一転、先程までの表情が嘘のように里香の顔に笑みが浮かぶ。

だが、何故だろう。妙な胸騒ぎを感じるのは。

「あんた、喧嘩売つてんの？」

表情は変わらず笑顔のままなのに、その印象ががらりと変わる。声のトーンが余りにも低いのだ。どうやら、そのランキングは里香にとつても気に障る内容だったらしい。

いや、考えるまでもなく、僕より順位を下に付けられた女性全員、ランキングの作成に関わった人間に怒る権利があるだろう。アンケートに答えたやつにも、それを元に勝手に格付けをして発表したやつにも。

全く、里香は何を気にしているのやら。君の魅力は充分に理解しているよ。

「さあ？ 少なくとも、わたしにその気はないけれど、ね」

「ぐぎぎ……ッ！」

「ふふふつ、ちよつとりズ？ 人に見せられない顔になつてるよ？」

「うっさいわね!!」

「はははっ」

「笑うなあ!!」

本当に、この男共は何処に目を付けているのだろうか。僕みたいな男わじこわんな女なんかよ
り、可愛い娘は沢山いるだろうに。

——まあ、一矢は報いた。この辺で勘弁してあげようか。

そう思っていると、脇から微かな忍び笑いが聞こえてくることに気付く。黙ってそちらへ顔を向けると、彼女は随分慌てたようで、言い訳めいたことを口にし始める。

「い、いやっ……えつと……別に面白がってるとか、馬鹿にしてる訳じゃなくて……」

「ふふつ、わたしはまだ何も言ってますよ。サーシャさんのそれは、問うに落ちず語る

に落ちる、つてやつです」

にこりと笑つてそう言うのと、サーシャさんは座りが悪そうに身動きみじろし——やがて、申し訳なさそうに俯いてしまった。

……しまった。

我ながら、少し悪辣が過ぎたか。どうやら僕は、自分が思っている以上に気が立っているみたいだ。

「すみません、冗談ですよ。あの顔を見て笑うな、つて言う方が無理だと思えますし」

「どういう意味よー!？」

「どういう意味つて……そのままの意味？」

「このっ!!」

「……あははつ、本当に仲が良いんですね。まるで恋人同士みたい……」

「え」

サーシャさんの不意を衝く言葉に、僕ら二人の声が重なる。

「なーんて、冗談ですよ、冗談。さっきのお返しです」

「は……ははは……そうですか」

ああ、心臓に悪い。

僕が男とバレてあれこれ言われるのは自業自得だから仕方のないことだけれど、里香

に変な嫌疑がかかるのは御免だ。

「ごめんなさい。サーシャさんとのお喋りも楽しいけれど、わたしはそろそろ支度をしない。キッチンをお借りしても宜しいですか？」

「え？ ええ、それは勿論。ああそれに、私でよければお手伝いしますよ？」

「ありがとうございます。でも、サーシャさんにはわたしの手伝いなんかより、もっと大切なことがあるじゃないですか。ほら、みんな遊んで欲しくて待つてるみたいですよ？」

ね、サーシャ先生」

「も、もう！ からかわないでくださいよ！ ティンクルさんって、見た目に反して余り性格は良くないみたいですね！」

「最近よく言われます」

「……」の性悪」

「五月蠅いよ、リズ。君は《料理スキル》取ってないんだから、サーシャさんと一緒に子供達の相手でもしてなよ」

はいはい、という里香の投げやりな承諾が聞こえたところで、アイテムストレージから愛用の青いエプロンを取り出し実体化させる。

「さて、と。——それじゃあ、サツサと準備に取り掛かりましょうか！」

殊更明るくそう言つて、気合いを込めるようにエプロンの後ろ紐を固く引き結んだ。

↑

「ヒースクリフ!!」

「ち、ちよつと待つてキリト君!」

背中の二刀を鞘から抜き放ち、今にも飛びかからんとするキリト君の肩を掴んで慌て止める。

「離せアスナ!! ここで会つたが百年目つてやつだ!!」

「全く、私も随分と嫌われたものだ」

「当たり前だろこのロリコン野郎!!」

「ろ、ロリ——!?! ち、ちよつと待ち給え。如何やら、君は何か重大な誤解をしている」

「誤解もへつたくれもあるか!! ティンクルは返してもらどうぞ!!」

「だから待ちなさいつてば!!」

先日買つてそのままストレージに入れたままになつてしまつていた新品のフライパンを実体化させ、キリト君の後頭部を全力で殴打する。

「ガハッ——」

ゴンツ、という鈍い音が周囲に響き、キリト君は顔から地面に倒れ伏してしまつた。

ああ、キリト君の可愛い顔に砂が……。でも、汚れた君も素敵だよ？

「ごめんね、キリト君。でも、キリト君が悪いんだよ？ わたしの言うこと聞かないから」

「ママこわい……」

「あ、アスナ君、その辺にしておいてあげ給え。流石の私も、目の前で人がフライパンで撲殺されるのは見るに堪えない」

「嫌だなあ団長。わたしがキリト君を殺すなんてそんなこと、あり得るわけがないじゃないですか。冗談でもそんなこと言わないでください。幾ら団長でも許しませんよ。それに、《圈内》でHPが減ることはないのは、団長だつてご存知のはずでしょう？」

「う、うむ……。そ、そうだな、済まなかつた」

気のせいかな？ 団長の顔が悪いような……。具合でも悪いのかな？

「それは兎も角、キリト君は大丈夫なのかね？ 先程から微動だにしないが」

「——ハッ！ そ、そうだ！ キリト君ッ！」

団長そう言われ、慌ててキリト君に駆け寄り助け起こす。

「キリト君しつかりして！ キリト君!!」

「——……。あ……。アスナ……。？」

「キリト君ごめんなさい。わたし少しどうかしてたみたいで……」

「変だな……アスナが三人に見える」

「つまり、キリト君は今凄く幸せってことだね——立てる？」

「突っ込まないぞ——ああ、大丈夫だ」

キリト君はそう言つて自力で立ち上がったけれど何処かまだふらつくみたいで、仕方がないから後ろに回つて彼を支える。

ああ……キリト君の背中……。可愛い顔してるけど、やっぱり男の子なんだね。

「ヒースクリフ……悪かったな、取り乱して。でもな、おっさんが女子高生と結婚するのは犯罪だぞ。諦めろ」

「ごめんなさい団長、擁護出来ません」

「私はまだ三十代前半なのだが」

「おっさんだろ」

「……ごめんなさい」

「おっさん……そうか、私はもうおっさんなのか……」

団長にしては珍しく何処か打ち拉がれたような声でそう呟くと、はあく……、と凄く重い重い溜め息を吐いた。

「君達は大きな勘違いをしている。如何やらティンクル君の結婚相手が私だと君達は思っているようだが、それは誤解だと改めて言つておこう。そもそも彼女は私の趣味で

はない」

「あんた正気か？」

「それはどういう意味かしら？」

「す、すまん」

全くもう……。——確かにティンクルさんは美人だけど！　そこは否定出来ないけど！　わたし以外の女の子に鼻を伸ばすなんて許さないんだからっ。

「それで団長、団長が新郎じゃないのなら、団長はどうしてここに？　まだ式の開始には随分と時間があるはずですが」

「まず第一に、私は彼女から結婚式の案内など受け取っていない。つまり、この教会で結婚式が催されることを私は君達に聞かされて初めて知った、という訳だ。——それにしても、ティンクル君が結婚とはね。驚くには値しないが、彼女の性格を考えれば不自然ではある」

「あんたホントに嫌われてるんだな」

「キリト君はちよつと黙ってて」

叱り付けるようにそう言うと、キリト君はしよんぼりと項垂れてしまう。それを努めて無視して質問を続ける。

「キリト君がすみません。——えーつと……。それではどうして？」

わたし達も受け取ったあの招待メッセージを受け取っていないのなら、何故団長はここにいるのだろうか。そもそも、団長は攻略会議すら殆ど参加しないような人だ。ここへ偶々偶然散歩で通りかかった——なんて都合のいい話、あるわけない。

「実は、ティンクル君に話したいことがあるからとメッセージで呼び出されてね。デー卜のお誘いかと喜び勇んで駆け付けたというのに、見知らぬ誰かと結婚とはね。酷い仕打ちだとは思わないかね？」

「団長でも冗談を言うことがあるんですね」

「そりゃ、私だつて冗談の一つくらい言うこともあるさ。——まあ、詰まらない冗談は置いておくとして、だ。私としては、突然結婚式が催されると聞かされて、率直に言つて何が何だか解らない、という状況なのだよ」

そう言つて、団長はやれやれとばかりに苦笑する。

正直、わたしは呆氣に取られていた。団長が冗談を言ったことも勿論だけど、何より団長が解らないと口にしたからだ。

おかしな話だけれど、団長に解らないことなんてないんじゃないかと思つていた。先の圈内事件の時もそうだったが、キリト君でも知らないようなシステム細部に至るまで熟知しているし、実際不明瞭な回答が返ってくることもなんて今までなかった。だからこそ畏怖の対象であり、非人間的な存在に見えていた。

でも、そうだよ。団長だって、わたし達と同じように人間なんだ。解らないことだ。だって当然ある。それで当たり前なのに……。

わたし達は知らず知らずのうちに、団長に偶像を押し付けてしまっていたのかも知れない。それが辛くないはずがない。申し訳ない気持ちで一杯になる。

「——ところで先程からずっと気になっていたのだが、そちらの可愛らしい娘さんは何どなた方かな？」

「え——あ、あれ？ ユイちゃん……？」

言われ、傍と気付く。そういえば、ユイちゃんの姿が先程から見えない。一体何処に……？

視線を彷徨わせ、やがて振り返り背後に目を向けると、何時の間にそこに移動していたのか、体育座りのキリト君とユイちゃんが目に入った。

「何してるの……？」

「え？ いや、ユイと二人で空——まあ、実際は天蓋だけ——に浮かんでる雲を眺めてたんだ。あれはドーナツに見えるなあ、とか」

「楽しそうね。——えっと、この子はユイちゃんって言う名前なんですけど、実は……」

団長の方に向き直り、事情を説明する。

二十二層の湖の畔で偶然出会い、そのまま倒れてしまったこと。記憶がないこと。シ

ステムにバグが発生しているらしく、コマンドが《アイテム》と《オプシオン》しか存在しないこと——等々。

「それでわたし達、少し早めに来てユイちゃんのご家族、乃至は記憶の手掛かりがないかどうか探していたんです」

語り終えると、団長は瞑目し、やがて首を振った。

「済まないが、私では力になれそうにない」

「そうですか……」

残念だけど手掛かりなし、か。

「しかし聞くとところによれば、この教会では十歳前後の子供の多くが保護され集団で暮らしているようだ。何か有益な情報を得られるかも知れない」

「……！　ありがとうございます」

「いや、礼を言われるようなことは私は何もしていないよ。——さて、随分と話し込んでしまったが、そろそろ中に入るとしよう。私としても、話したいこと」とやらの内容が気になるものでね」

「そうだな。俺としても、某の顔を早く拝みたい」

そう言つてキリト君はユイちゃんを抱きかかえて立ち上がる。

ま、まだ諦めないんだね、キリト君は……。

「では、意見も一致したところで、早々に扉を開けることにしようか」

団長が取っ手を掴み押し開けると、仄かに明るい室内が徐々に露わになっていく。

色取り取りの硝子が組み合わさって形作られたステンドグラス。描かれているのは天使だろうか。そこから一条の光が射し込んでいる。

中央には赤いカーペットが敷かれ、左右には木製の長椅子が並び、壁には大きな十字架が掲げられている。

確かに建物の外観の通りこじんまりとはしている。けれど、わたしはとても素敵なところだなと思った。

「誰も……いないみたいだね」

「多分、礼拝堂の奥に生活スペースがあるんだろ。ティンクル達もそこにいるんじゃないのか？」

お互い首を傾げていると、団長が独り教会の中に入って行ってしまふ。

「……わたし達も行こっか」

「ああ——待てアスナ!!」

「え——きやあ!?!」

入口から中に入った瞬間、横合いから何者かに押し倒され、身動きが取れなくなる。

「だ、誰!?!」

「喋るな。そして《黒の剣士》、君も不用意な行動は慎むことだ。確かにここは《圈内》だが、痛めつける方法は幾らだつてある。こちらとしても、余り手荒な真似はしたくはないのでね」

嘘……女!?

うつ伏せで拘束されてるせいで相手の顔は解らないけど、間違いなく女性の声だ。

「……ぐッ!」

今度は、男性の呻き声とどさりと何かが倒れる音。

「団長!?!」

「喋るなど言っている。仏の顔も三度までと言うが、わたしは仏じゃないのでね。次は無いと思え」

低く、冷たい声が降り注ぐ。

相手は複数。まさか……《笑う棺桶》^{ラフコフ}の残党なの……!?! どうしてこんな所に!?!

「さあ《黒の剣士》、何時までもそんな所に突っ立っていないで中に入って来るといい。但し、おかしな真似をすれば容赦はしない」

「くっ!」

ツカツカと、こちらに向かつてくる足音。

駄目よキリト君! そんな奴らの言うことを聞いては駄目!!

しかし、そんな内心の叫びも虚しく、扉の閉まるギイイという音が響き渡った。

「…………お前達の目的は何だ…………!?!」

「そう焦るなよ、《黒の剣士》。こちらの要求はたったの三つ。それも、君の心掛け次第では、いとも容易く済んでしまうような簡単なことだ。しかも、お膳立ては既にこちらで済ませてある」

クククツ、とまるで銀幕の悪役でも演じるかのように忍び笑いを漏らす女。

一体、一体キリト君に何をさせるつもりなの!?!

「大丈夫、怖くないよパパ」

「ゆ、ユイ…………?」

「パパって——は? SAOのシステムって子供まで作れるのか…………?」

「そんな訳ないで——ツ」

思わず口を開くと、言い終える前に顔を床に押し付けられて強制的に黙らせられる。

「どうやら、《閃光》には日本語が通じないらしい」

「止めろ、アスナに手を出すな!!」

「それは《黒の剣士》、君の行動次第だ。——では、まずは一つ目の要求だ。君にはこの場でこれに着替えて貰う」

「着替える…………? 何を言っ——なツ!?!」

何!? キリト君に一体何を着させるつもりなの!? メイド服なの? チャイナドレスなの? それとも——つて、こんな時に何を考えているのよわたしは!

キリト君、そいつの言うことを聞いては駄目!

「——トレード成立。さあ、早くそれに着替えるんだ」

「こんなものに着替えさせてどうしようって言うんだ!」

キリト君あんなに動揺して……:どんだけ酷いコスプレなの!? この変態女!!

「着替えたぞ……。で? 次は何だ?」

「フツ……。そうやって強気な態度を取っていられるのも今の内だ」

ああ、ごめんなさいキリト君。わたしの為に恥辱に耐えてくれているのね。でも、これ以上相手の要求を受け入れては駄目よ。

それにしても、今度は一体どんな酷いことをしようというの!?

「では、二つ目の要求だ。この物をとある人物ぶつに届けて貰いたい」

「……:これ、一体幾らするんだ?」

「余計なことを訊くな。君は、自分がわたしに対して質問の出来る立場だと思っているのか?」

は、運び屋……? コスプレさせて運び屋をやらせるつもりなの!? というか何を運ばせるつもりよ!?

「まあ、精々丁寧に扱うことだな。——それでは三つ目、最後の要求だ」

「……………止めろ」

き、キリト君……………？

「頼む、止めてくれ……………」

声が、震えてる。

……………

「キリト君に何かしてみなさい？ わたし、貴女を絶対に許さない。何処までも追いかけて、必ず報いを受けさせるわ……………！」

「随分と勇ましいことだな、《閃光》。しかし、わたしは君と話している訳ではないし、決断するのはあくまでも彼自身だ。——さあ、《黒の剣士》！ わたしからの最後の要求は、これから始まるパーティーに、君が主役として参加することだ。きつと会場は、わたし達観客の手によって真っ赤に染まることだろう！」

「駄目よキリト君！ そんなの絶対に聞いては駄目！ 君はこのゲームをクリアさせるんでしよう!!? こんなところで死ぬなんて絶対に駄目よ!!」

「さあ答えろ《黒の剣士》、時間が無いぞ？ 選択肢は“はい”か“YES”だ」

「それ実質一つじゃない！ 駄目よキリト君！ ユイちゃんを連れて早く逃げて!!」
必死に、喉が張り裂けんばかりに叫ぶ。

お願いだからキリト君……わたしに構わず逃げて……!!

「……解った」

「そんなっ!」

「デカルトに言わせれば、決断出来ない人間は、欲望が大き過ぎるか、悟性が足りないのだそうだ。君がそのどちらでもないように助かったよ、《黒の剣士》」

「駄目よ、駄目よキリト君!!」

「それで、この茶番は一体何時まで続くのかね?」

——え?」

「……団……長……?」

「茶番とは失礼な。田舎フロアに雲隠れするような誰かさんの退路を断つために、態々一芝居打ったのさ。我ながら、迫真の演技だっただろう?」

「そう愉快そうに笑って、わたしを馬乗りになつて押さえ付けていた女が立ち上がる。」

「ごめんね、立てるか?」

しかし、女はこちらの返事も待たず、勝手に起き上がらせる。

見れば、女は黒いフード付きのコートを纏つていて顔が解らない。

「それが茶番でなくて何だと言うのだ。……全く、《軍》のメンバーも一枚噛んでいるとはな。一体どうやって手懐けたのやら」

「巻き込んだのは済まなかったが、犬のように言われるのは心外だ」

あれって……コーバッツさん？

じ、じゃあ、まさか……。

「ティンクルさん……なの？」

「ふふっ、バレちゃったね」

先程までとは打って変わって、高く澄んだ明るい声が返ってきた。

目深に被ったフードを持ち上げるに連れて、銀色の髪がはらりと落ち、やがてNPCのような美貌が露わになる。

「さあ、役者は揃った。それでは、二人の為の結ウエディングパーティー婚式を執り行うことに致しましょうか」

そして、芝居がかった口調でそう宣言してから、不敵に笑ってみせたのだった。

第43話 剣の国のウエディング

「まあ、何と言うか……騙すようなことをしたのは悪かったと思っっているから、そんなに睨まないですよ」

三者三様の眼差しで見詰められているこの状況は、まさに鷹の前の雀という例えが相応しいだろう。だが、食われるのが常に雀の方だと決めてかかっているのなら、それは見当違いというものだ。杓子定規でモノを考へてはいけない。現に今ここで追い詰められているのは、雀ではなく鷹の方なのだから。

さて、ここは教会の住居スペースの一室。普段は子供達が就寝に使っているらしく、部屋一杯に二段ベッドが並んでいる。そして僕らは、通路を挟んでその内の二つに対面する形で座っていた。只、人数の都合とは言え、ヒースクリフが僕の隣に座っていることはだけは心底解せない。

「それで今回のこと、ちゃんと説明してくれるんですよね？ ユイちゃんまで巻き込んで、もしも只の悪戯なんだとしたら、今度ばかりはわたし絶対許さないですから」

「あー……アスナそれは——」

「勿論、説明責任はきちんと果たすよ。それにしても、今度ばかりは」ということは、

前回は許して貰えたことで良いのかな？」

キリトが何か言おうとしたところで、それに被せるようにして口を開く。

「なっ……！　そ、それは、その……。今でも納得はしてませんが、わたし達のことを思っていてくれたというのは解ってますし」

「へえ」

「ニヤニヤしないでください！　前回のことは置いておいても、わたし今現在進行形で怒ってるんですからね！」

「ごめんごめん」

具合の良いことに、既にこちらのペースにアスナは嵌りつつある。このままキリトも芋蔓式に引き込むことが出来ればこちらのものだ。

そう思っていると、何やら先程からホロキーボード頻りに叩いていたヒースクリフが、一旦手を止め溜め息を吐いた。

「もう一度言うが、茶番は止めにし給え。私もこう見えて多忙の身の上なのでね、早く本題に入って貰えると助かるのだが」

「話の腰を折らないで貰えるかな。こちらにも段取りというものがあるんだ」

視線と視線がぶつかり合う。睨む、なんて生易しいものでは決してない。そもそも情報量からして違う。怒りとか、憎しみとか、そういった単一の平べったい感情では断じ

てないのだ。

やはり、僕はこの男が嫌いだ。このゲームに僕らを閉じ込めた張本人だからだとかそういう直接的な理由ではなくて、もっと根源的な部分で相容れない。それが何故なのかは、僕にもまだ解らないけれど。

「……この二人がデキてるなんて有り得なかつたな」

「安心したならその話題これつきりにしてよね」

僕らの険悪なやり取りを間近で見たキリトがぼそりとそう呟き、アスナが出来の悪い弟にそうするように嗜める。

内容は兎も角その微笑ましい光景に毒気が抜かれ、取り敢えず話を進めることにした——ということにしておこう。うん、絶対触れないからね。聞かなかつたことにするか
らね、良いね? ……話を進めよう。

「それじゃあ、単刀直入に言おうか。今からこの教会こごで挙式を挙げるのは、僕ではなくて君達二人なんだよ」

「はあく成る程、そういうことだつたんですか……つて、えええええ!!」

「ぐえっ!!」

絶叫。次いで、ネクタイを掴まれ引き寄せられる。

首が……締まる……。

「お、落ち着いてアスナ、君はそんな暴力的なキャラじゃない」
バイオレンス

「そ、そんなこと急に言われても心の準備が！ それにわたしドレスなんて持ってないしー！」

「大丈夫、衣装はちゃんと知り合いに用意して貰ってるから」

「友達とか呼ばないと！」

「それも大丈夫。と言うか、攻略組には殆ど声かけてあるから」

前後にぐわんぐわんと揺らされながら会話を続ける。

痛くはない、痛くはないが……酔いそう。うつぶ。

「まさか、あの招待状ってのは……」

「うん、察しの通り、君達二人とクライン限定で送ったものだよ。他の人達には別の文面のものを送ってある。それと念の為言っておくけど、君達に送ったのだって、僕が結婚するとは一言も書いてないからね」

因みにクラインにも名前を伏せたものを送ったのは、事前に教えると彼の場合必ず顔に出ると踏んだからだ。

「まあ、大抵の人は『爆発しろ！』とか言いつつも祝ってくれるそうだから安心しなよ」
「嫌だ、って言っても無駄なんだろうな。《軍》の奴らに出入り口は塞がれてるし、何よりドタキャンなんて許されない雰囲気だし……」

「キリトは話が早くて助かるね。それにしても——」

胸倉を掴んだままのアスナの手を丁寧に払い落としつつ、キリトの姿を改めてまじまじと見詰める。

「うん、やっぱりフロックコートにして正解だったね。とてもよく似合ってたて恰好良いよ、キリト」

膝まである黒のジャケットは、彼が普段着ている黒コートを彷彿とさせる。しかし、それでいて格調高く、厳かなセレモニーに相応しい。やはり彼女に衣装の依頼をして正解だった。

「あんたがさつき無理やり着せたんだろ。……まあ、それは良いとして」

「それは良いんだ？」

ふくん、と何故か拗ねたような声を出すアスナ。見れば、キリトの頬が微かに赤いような気がする。

「ごほん！　そう言うあんたは何でスーツなんだ？」

僕らの視線を振り払うように軽く咳払いをしたキリトの口から出たのはそんな問いだった。反射的に自分の上半身を見下ろす。

今僕は、先程まで着ていたエプロンの代わりに、これまた黒のジャケットを纏っている。とは言え、キリトのそれとは違って、ごく一般的な所謂フォーマルスーツと呼ばれ

るものだ。当然男物なのだが、存外気付かれない。因みにワイシャツやネクタイも含めて、キリト達のは出所が違ったりする。

「その口振りだと、ドレスの方が良かったのかな？ 駄目だよ、他の女の子に目移りするなんて」

「してないよ！ だからアスナ睨むの止めてくれ！」

まあ、そうは言っても僕はそもそもスカート履けないんだけどね、性別的に。

以前不承不承で着たことのあるサンタ衣装やKobの団服は例外中の例外だ。そもそも団服の方はヒースクリフの中身である茅場が、僕への半ば嫌がらせ目的で態々作った一品ものだろう。だから、僕がスカートを履くことなんて今後二度と無いはずだ。

「まあ冗談は兎も角、前にも言ったと思うけど単にスカート履きたくないだけだよ。そもそも僕には似合わないしね」

寧ろ似合って堪るか。

「え〜絶対似合いますよ！ それこそ物語に出てくるお姫様みたいな！」

「ふふっ……。失敬」

会話に参加せずまた作業に戻っていたヒースクリフは、如何やら「お姫様」がツボに入ったらしくウィンドウに視線をやったまま肩を揺らす。

この野郎……何時か倒す。

「……僕のことはこの際どうでもいいんだよ。それよりもアスナ、知り合いの《仕立て屋》のプレイヤーを呼んであるから、着たいドレスを選んできなよ。何着か用意してくれているそうだから」

「え、本当ですか？ ……それじゃあ、折角だからお言葉に甘えて選んでこようかな。それに、ユイちゃんをリズに任せたままなのは悪いから、キリト君も一緒に付いて来て？
それで、一緒にドレスも選んでくれたら嬉しいな」

「せ、責任重大だな……。と言うか、やるのはもう決定事項なんだな」

そう言い合って、二人は連れ立って部屋を出て行く。

残されたのは、僕とヒースクリフの二人だけ。静寂の中で、キータッチの音だけが小さく響く。

「……ふう、まあこんなところか。それで、この様な喜ばしいイベントに、態々私を招いたのは何が目的かな、光君？」

ようやく作業を終えたのか、動かしていた手を止めるヒースクリフ。如何やら本腰を入れてこちらの話を聞く気になったらしい。

それは兎も角、馴れ馴れしく名前を呼ばれるのは不愉快極まりないので止めて欲しかった。

「貴方をここへ呼んだのは他でもない、貴方に神父役を務めて貰いたかったからだ。休

団中とは言え、アスナの所属するギルドのギルドマスターなのだから、貴方以上にこの役が相応しい人はいないでしょう」

「この私に神父役とは、随分とまた思い切ったものだな。流石に皮肉が効き過ぎてはいないかね？」

「確かにね、我ながら業腹だとは思うよ。それでも、やっぱりこれ以上の配役は無いとも思っている。特に、全身から醸し出されている胡散臭さがそれっぽい」

「それはまた辛辣だな」

そう言つて、ヒースクリフはくつくつと笑う。

「君の頼みを聞くのは私も吝かではない。だが、君も重々承知のこととは思うが、私に対する頼み事というのは、その内容に限らず相応の対価を要求される行為であることは理解しているね？」

「あなたの遊びに付き合わされてる時点で、僕らは既に相当な対価を一方的に支払わされていると思うけどね。それでも、百歩譲つて公平性を順守するなら止むを得ないということも理解してはいるさ。理解した上で、こうして頼んでいる」

「ふむ。……しかし意外だな、君は余り他人に対して関心があるタイプではないと踏んでいたのだが」

私と同じ様に、とヒースクリフは自嘲してから、

「君があの一二人に固執する理由は何だね？ キリト君は《二刀流スキル》の所有者であり、アスナ君もまたトップギルドのサブマスターだ。確かに、両者共に攻略には欠かさない存在——延いては、何れ私を倒すに当たつての有力な戦力となるのはまず間違い無いところではある。しかしだからと言って、それが彼らのプライベートに君が関わる理由にはなるまい。現に、フレンド登録の数こそ多いものの、君の実際の交友関係などが知れているだろう？」

真鍮色の瞳で僕の目を覗き込んだ。思えば、まともに視線が合うのは今日は初めてか。

まるで何もかもも見透かされているようで、自分の立つ足場が崩れていくような錯覚に陥る。

「……さあ、何故だろうね？ 少なくとも今回のイベントは、何も彼ら二人の為だけにやろうとしている訳じゃないさ。先の七十四層のボス部屋が《結晶無効化空間》だったのに加えて、次はいよいよ七十五層——クォーターポイントだ。どうせまたここに来て、更に攻略の難易度が跳ね上がるんだろう？」

「それについてはノーコメント、だな。……それで？」

「こう悪い事ばかりだと息が詰まる。《攻略組》なんて呼ばれてはいても、彼らだって普通の人間だ。兵士でもなければ、鋼の精神を持っている訳でもない。一度折れてしまえ

ば、簡単に立ち直ることは出来ない。だからせめて、溜まったガスを外に逃がすくらい
のことはした方が良い」

ストレスの発散は、社会に生きる上で重要だ。そして、この現実以上に殺伐とした世
界でなら尚のこと。

陽人の件もあつて今更言うまでも無いことだが、嫉妬心を相手にぶつけるといのは
格好のストレス発散になり得る。矢面に立たされるキリトには申し訳ないが、同時に祝
われもするのだから今回の場合差し引きゼロだろう。寧ろ重要なのは、皆で思い切り騒
いで楽しむということだ。

「成る程、それなら私に断る理由もあるまい。それで、私の着る衣装とやらは既にそちら
で用意してあるのかね？」

「当然用意してあるよ。これが……」

そう言いながらトレードウインドウを開き、ストレージから事前に手に入れておいた
衣装一式を選択し提示する。

祭服があれば良かったのだが、魔法が存在しないSAOにその手の装備は存在しな
い。だから、この衣装一式というのはそれらしく見える物を組み合わせたに過ぎなかつ
たりする。が、一方でタキシードやドレスなんかは《裁縫スキル》で作れるのだからそ
の辺りの線引きがよく解らない。しかし、恐らくは《結婚システム》が少なからず影響

しているのだろうとは予想する事が出来る。

「取り敢えずこれに着替えてくれ。着替えるところを見られたくないって言うなら出て行くけど……あんたの場合その必要は無いだろう?」

「無い、な。——良いだろう。但し、私が着替えるのは君が対価を支払ってからだ」

「何だよ? 今この場で直ぐ出来るような事なのか? 開始予定時刻まで余り時間が無いんだけど」

「その点は問題無い。ものの数秒で終わる」

その発言に違和感を覚えつつも、ヒースクリフの次の言葉を待つ。すると、ヒースクリフは黙ったまま手許でウィンドウを操作し——トレード欄に《常闇のドレス》とこやみなるアイテム名が表示される。

「……は?」

「トレード完了次第、君もそれに着替え給え。これが私の出す条件だ」

「はああああ!?!」

何を言っているんだこいつは……? 本当に何を言い出すんだこいつは!?!

「因みにその《常闇のドレス》は君が普段装備している《銀妖精の鎧》のステータスをベースに、八十層クラスの能力値にアップグレードしてある」

「何の為にだよ!?!」

「勿論、装備アイテムなのだから、戦闘時に使って貰う為にだが? 《銀妖精の鎧》では、幾ら強化しようともここらが限界だろう。君だって、そろそろ装備の更新を考えていたはず——違うかね?」

「いやいやいや」

確かにそうだけど……確かにそうだけどき!!

「見た目などこの際些末な問題だろう」

「僕にとつては大問題だよ!!」

「はあく……。光君、合理的に考え給え。使い勝手は全く変わらずに能力値だけが軒並み上がっているのだぞ? 君は得こそすれ、損は全くしていない。それに、他人にはやらせておいて自分は出来ないなどという道理は通るまい?」

「ぐっ……!」

確かに正論ではある。正直ぐうの音も出ない。

「だけど……まさか茅場の奴、こんなものを普段から持ち歩いているのか? いいや、違う。茅場は恐らく、自分が呼ばれた理由をこの部屋に入った段階である程度予想していたのだろう。そう考えれば、キリト達が居た間も終始キーボードを操作していた理由に説明が付く。つまり、先程から茅場がやっていた作業とは、即席でこの装備アイテムを作ることだった……?」

頭の中で、パズルのピースが完全に組み上がり、僕は恐怖の余り絶叫した。
「へ、変態だー!!」

身の危険を感じた僕は、反射的にベッドの上から立ち上がり、距離を空ける為に思い切り後退る。

「……………っ。ロリコン扱いの次は変態扱いかね……………!」

「変態でしかもロリコン!?!」

「違うツ!!」

そう大声を上げて、ヒースクリフが立ち上がる。

「ひっ!」

口から情けない悲鳴を漏らしながら、僕はもう一步大きく下がって――

「っ……………!?!」

――背中が壁にぶつかってしまふ。もう、これ以上は逃げられない。

「ち、近付かないで……………っ!」

……………何だ?

恐怖に駆られた中で、それでも何処か冷静な自分も居て。

何をそんなに怖がっているんだ……………?」

「あっ……………ああっ……………!」

「お、落ち着き給え。らしくもなく怒鳴ったの悪かったが、私にだって喜怒哀楽というものが……——光君？」

こんなことが、昔何処かで……。

腰が抜けたのか、ずるずると背中を壁に擦り付け、最後には尻餅を付いてそのまま寄り掛かってしまう。そのせいで視線が随分と低くなり、自然とヒースクリフを見上げる形になって。

「ああっ……ああっ……あああつ！」

僕を見下ろす奴の顔は陰になって見えなくて。

「ぐっ……ああああああああ——ッ!!」

まるで、『これ以上思い出すな』とでも言うように、頭蓋を割るかのような激痛が襲う。髪を振り乱して見えない何かに必死に抵抗するが、そんな事で痛みが引くはずも無く、

「光君！ しつかりし給え、光君!!」

彼らしくない取り乱した声が臍げに聞こえたのを最後に、僕の意識は引き摺られる様にして二度目の暗転を迎えた。

†

「羨ましいぞこの野郎！」

「もげろキリト!!」

「これは有名税みたいなものだよな《ブラッキー》!?」

「末永く爆発しろ……!!」

次々と思ひ思ひの罵声を浴びせ、更には新郎——つまりはキリトをどついていく面々。恐らく彼らは招待状を受け取った攻略組の人達なのだろう。

「おうキリの字よ! こんな大々的に結婚式開くなんて聞いてねエ——って、何でおめえがそんなモン着てんだ?」

「クライン……」

「お前知らなかったのか? 式を挙げるのはキリトとアスナだぞ」

「はあ!? おりやんなもん一言も聞いてねエぞ! どういう事だキリトお!!」

「何でこんな事になってるのか俺が聞きたいくらいだよ……。そしてエギル、いきなり商売始めようとするな」

「いや、そう言われてもなあ。残念ながら主催者の許可は貰ってんだよ」

「……その主催者ってのは当然ティンクルのことだよな?」

「おう」

「はあ……」

そんな光景を遠目で見ながら、あたしは額に手を当て呻いた。

「明らかに収容人数オーバーしてんじゃない……!」

そもそもが小さな教会だ。礼拝堂の長椅子は既に埋まり、立ってる人の方が倍近い程だ。おまけに教会前の通りは幾つもの露店が並び、神社の夏祭りのような様相を呈していた。

「和洋折衷? ——いや、単にカオスなだけでしょ」

この騒ぎの元凶が考えそうな事をトレースして、思わず頭かぶりを振る。

兎に角、今はこれからどうするのか考えないと。段取りを全て把握していたのはあいつだけで、彼が居ないこの状況ではあたしが代わりに何とかするしかない。

「料理は出来上がってる……アスナの準備もそろそろ終わるだろうし……」

「扉を開けた状態にして礼拝堂の中を外からでも見えるようにし、教会内で形式的な諸々を済ませた後のち外式に以降、そのまま立食パーティーへ……という流れが良いのではないかね? 商人プレイヤーを呼んで露店を開かせたのは恐らくその為だろう」

突然声をかけられた事以上にその内容に驚いたあたしは、音のしそうな勢いで後ろへ振り向く。

立っていたのは、RPGの神官めいた衣装を纏ったヒースクリフだった。

「ヒースクリフ……さん、ティンクルは大丈夫そうですか?」

「無論断言は出来ないが……恐らくは大丈夫だろう。少し魔まされてはいたがね」

「そう……ですか。その、ありがとうございます」

そう言つて頭を下げると、ヒースクリフは無言で首を横に振つた。

「礼を言われるような事はしていいない」

ヒースクリフが無然とした調子で肩を竦めるので、あたしもついつい要らない一言が口を吐いて出る。

「確かにそうだけど、こういう時お礼を言うのつて当たり前じゃない？」

言つてからしまった、と思つたが、全ては後の祭り。恐る恐る伺い見ると、ヒースクリフは心底驚いた様子で、口をぽかんと間の抜けた顔をしていた。

「な、何？」

「いや、失礼。彼と私は似ていると勝手に思っていたのだが、如何やら彼が変わつたのは君の影響らしい。本人に自覚があるかは兎も角だがね」

彼にも、そして君にも。と、ヒースクリフは謎めいた笑みを浮かべた。

知つたような事を言う。……嫌な奴だ。それがあたしの素直な感想だつた。光が彼を嫌う理由が少し解つた気がする。それにしても――

「彼つて……あんだ、あいつの性別解つててスカート履かせたわけ？ とんだ変態ね」

先の闘技場での一件の折、光に女物の団服を着せていたのを思い出し、蔑みを込めて見詰める。

しかし、ヒースクリフはあたしの質問には答えず、独り言のように呟く。

「……前回のも含めて荒療治のつもりだったのだが、慣れない事をするものではないな」
「……どういう意味よ？」

もはや敬語を使う意味も無い。言葉通りに受け取れば、少なくとも今回あいつが倒れたのはヒースクリフが何かしたから、という事になるから。

けれど、解らない事がある。荒療治——つまりは治療。なら、何を治すつもりだったの……？

「彼が立ち止まってしまった時は、君が支えてあげ給え。出来る事なら、私も先の方で待っていてよう」

しかしやはりあたしの問いには答えず、代わりに意味深な事だけ言うだけ言って、ヒースクリフは教会の中へと戻っていく。

「……言われなくて支えるわよ」

誰にも聞こえないくらい小さな声で呟いて、あたしは自分の頬をパシッと叩く。そして、キリトに近付いて、彼の腕を取る。

「なーに油売ってんのよ？」

「あ、おいリズ！」

それから教会の裏手まで引つ張り歩いて、辿り着いたところでパツと放した。

「何でそう強引なんだよりズもティンクルも……」

「あたし達にここまでさせてんのはあんたでしょーに。全く、嫌ならもつとしつかりしなさいよね」

キリトは尚も不満そうだったけど、それを呑み込み別の言葉をあたしにぶつけた。

「そういうえばティンクルはどうしたんだ？ さつきから姿が見えないけど」

まあ、その質問は何れ絶対されると思っていた。だから先手を打つ為に一目の無い所まで態々連れて来たのだ。

「……最近徹夜続きだったから、さつき遂にぶっ倒れたのよ。まあ、だからあいつの頑張り無駄にしない為にもバシツと決めなさいよね」

「あ、ああ……」

キリトは渋々と頷くと、次いで後ろ首に手を当てて視線を逸らす。

「何よ？」

「いや、何でそれをリズが知ってるのかな……なんて」

「……？」

キリトが何を言いたいのか解らず首を捻ると、尚も言い難そう視線を彷徨わせ——やがて観念したように吐き出す。

「あ……俺は噂で聞いただけなんだけど、リズとティンクルが同——」

「ど、同棲なんてしてないわよ!? 誰よそんな如何わしい噂流してる奴!」

咄嗟に言つてハツとする。しかし、もう遅かった。

「……如何わしいのはリズの方だと思ふけどな。同棲つて……女同士で同棲は可笑しいだろ」

「こ、言葉の綾つてやつよ!」

「そもそも何でリズとティンクルが同居なんて話になつたんだ? 招待状の件を訊こうとあの人の家を訪ねたら既に空き家になつて驚かされた」

キリトが荒れ気味だったとアスナに聞いていたけど、恐らくそれも原因の一つなのだろう。

「しかも同居してるだけじゃなくてリズの店で店員紛いの事までしてるんだって……?」

そう言つてキリトはあたしの上半身に目を向け、

「ティンクルもそういう服着るのか?」

「……あんたも大概よね」

呆れて言つてキリトは首を振る。

「アスナにも言つたけど、別に俺はティンクルの事をどうこう思っているわけじゃないよ。只、少し心配というか……」

「心配？」

「ああ。あの基本的に笑ってる事が多いけど、偶に何考えてるのか解らないっていうか……人形みたいに無表情になる事があるんだ」

キリトはそう言つて頬をかく。

「そういう表情を見ると、普段無理して笑ってるんじゃないかと思えてくるんだ。でも、リズが傍に居るならもう大丈夫だろ。リズは無駄に明るいからな」

「無駄について何よ」

「……明るい奴の傍に居れば、自然と明るくなる事もあるだろ。あの人は剣を握ってるより、接客してる方が似合つてると思うしな」

本当にそうだろうか？ もしそうなら、それはとても嬉しい事だと思う。あいつに接客が似合っているかどうかは兎も角。

そして、キリトは苦笑する。

「ま、それにリズは女の子だしな。ティンクルを毒牙にかける事も無いだろ」
「……………」

うん、まあ……知らぬが仏つてやつかな、これは。

「——話が逸れたわね。取り敢えず今日の予定だけ……」

この後の段取りを説明してから、そのままキリトを礼拝堂へと送り出す。

いい加減、皆待ち草くたび臥れているはずだ。

さあ、今日は真正銘、あんた達二人が主役よ！

心の中でそう呟いて、あたしはキリトの背中をそつと押した。

第44話 夜空に咲く花

礼拝堂の中へと入ると、万雷の拍手に迎えられた。しかし、俺にはその音がとても遠くに感じられた。

目を奪われた。言葉を失った。

教壇の前に立つてこちらを見詰める彼女は、今まで見たどんな女性よりも美しく見えた。

中央に敷かれた赤いカーペットを踏み締め、進む。

入口に立った時には長く見えたその道は案外短く、ものの十数秒足らずで彼女の元まで辿り着いた。最も、それは距離だけの問題ではなくて、気持ちが急いで、結果的に足を動かす速度も上がったからだろう。

目と目が合う、見詰め合う。如何にもそれがくすぐったくて、俺はついつい視線を逸らしたくなる。それでも、言うべき言葉はするりと口にする事が出来た。

「綺麗だよ、アスナ」

「……ありがとう。その……キリト君も、恰好良いよ」

アスナの頬がベール越しにでも紅潮してるのが解る。多分、俺も似たようなものだろう

う。素面^{しらふ}で難無くこんな台詞を吐ける奴は、俺の知る限り一人しか居ない。

俺達のやり取りを聞いた前列を中心にバカツプルだの何だのと再び喧噪が巻き起るが、俺の耳には殆ど入りはしなかった。

アスナが今着ているドレスは、マーメイドラインと呼ばれるデザインのものらしい。上半身から膝の辺りまでは身体にぴったりとフィットさせ、膝下からは徐々に裾が広がっている。……確かに、その見た目は宛ら人魚のようである。更に全体的に細かな花の刺繍が施されており、当人の容姿も相まって非常に艶^{あで}やかだ。

俺が着ているコートと合わせ制作者は若い女性で、名前はアリア。ティンクルが数日前まで住んでいた《フロリア》の家の隣に住んでいるのだという。まあ、確かにあそここの家を買えるだけあって、腕の良さは折り紙付きだった。

因みに、彼女は現在最前列に座って、自分の手掛けた仕事を目を輝かせながら見守ってくれている。

俺はアリアさんに謝意を込めて小さく頭を下げてから、アスナと共に教壇の方へと向き直った。

教壇に立つのは、ヒースクリフ。恐らく、俺達が出て行った後にティンクルが神父役を頼んだのだろうが、こうして改めて面と向かうのはバツが悪い。だが、ヒースクリフは特に気にした風も無く、重々しく口を開いた。

「それでは、式を始めよう。神父役は私、《血盟騎士団》団長ヒースクリフが謹んで務めさせて頂く」

ヒースクリフはそう言つて、持っていた革の装幀そうていの分厚いアンティーク調の本を開く。

成る程、その姿は中々に堂に入っていた。

「新郎、キリト」

呼ばれ、自然と背筋が伸びる。

「汝、この女を妻とし、良き時も悪しき時も、富める時も貧しき時も、病める時も健やかなる時も、愛し、敬い、慰め、助け、共に歩んでいく事を——己の二刀に誓えますか？」

……剣に誓う、か。これ以上この世界で相応しい誓いの言葉も無いだろう。

「はい、誓います」

言うど、ヒースクリフは頷き、次いでアスナに視線を向ける。

「新婦、アスナ。汝、この男を夫とし、良き時も悪しき時も、富める時も貧しき時も、病める時も健やかなる時も、愛し、敬い、慰め、助け、共に歩んでいく事を——己の細剣に誓えますか？」

「はい、誓います」

アスナがそう答えると、ヒースクリフは再び頷いてみせる。そして、ティンクルが俺

へと譲渡し、俺からヒースクリフに先程預けておいた二つの指輪を彼は懐から取り出した。

「次にキリト君、君はこの指輪をアスナ君に対する愛の印しるしとして彼女に与えますか？」

「はい、与えます」

「アスナ君、君はこの指輪をキリト君に対する愛の印として受け取りますか？」

「はい、受け取ります」

「ではアスナ君、君はこの指輪をキリト君に対する愛の印として彼に与えますか？」

「はい、与えます」

「キリト君、君はこの指輪をアスナ君の君に対する愛の印として受け取りますか？」

「はい、受け取ります」

「宜しい。では、指輪の交換を」

それぞれ手渡された指輪を互いの薬指にはめ、指輪の交換を終える。

「…………ふう」

良し、何とかやりきった。中学時代を思えば、充分過ぎるくらいに頑張った方だ。

だが、安堵の息を吐いた束の間を狙うように、ヒースクリフが耳を疑うような台詞を

吐いた。

「それでは、最後に誓いのキスを」

「……………え」

思わず間の抜けた声が出る。

「ちよ、ちよつと待て！ キス!? ここで?」

「ここ以外の何処ですと言うのだね? いや、別に何処でしょうと別に構わないが」

「いや、だってこんな……………大勢の目の前でなんて」

そう、俺は完全にその存在を失念していたのだ。結婚式などそもそも見た事が無いのに加え、その手のドラマも余り好きではなかったから。

じとり、と嫌な汗が出る感覚。

何とか回避出来ないか? そう思っていると、意外な事に、ヒースクリフから助け船が出された。

「成る程、衆目の前ではし辛いと。そういえば、プロテスタント教会では誓いのキスは省略される事が多いと聞くが——」

「…………… だったら」

「まあ、だからと言って、今の私は“神父”なのであって“牧師”ではないのでね、それは無理な注文というものだ」

「……………」

と思つたら、次の瞬間には梯子を外されていた。

見れば、ヒースクリフは真顔ようできて、しかし、確かに口角が僅かに吊り上がっている。如何やら、先程の意趣返しのもりらしい。

……もしかして、割と根に持つタイプなのか……？

万事休す……いいや、どれ程絶望的な状況だろうと、必ず活路は見い出せる……！

そんな風にならしくもなくポジティブになってみたものの、幾ら考えを巡らせても何も思い付かず、堂内が俄かにざわめき始める。すると、

「キー坊のヘタレー！ 意気地ナシー！」

聞き覚えのあるコケティッシュな鼻音混じりの声が入垣を割って出た。

アルゴのやつ……!!

目を走らせその姿を捜してみるが、流石の《隠蔽スキル》の高さか当然のように見付からない。まさか何時ものフード姿ではないはずだが……。

そして、それを皮切りに、参列者一同による俺へのヘタレコールが巻き起こる。

『へ・タ・レ！ へ・タ・レ！』

「お前ら絶対楽しんでるだろ!？」

我慢出来ず悲鳴を上げるが、これ以上時間をかけると今度はキスコールをされ兼ねない。それだけは御免だった。

ふう……。恨むぞ、ティンクル。

「……心の準備は出来たかね？」

「ああ」

そのやり取り一つで、騒がしかった堂内が再び静寂に包まれる。そして、それに背中を押されるように、俺はアスナに向き直った。

「ごめん、こんな時に決心付かなくて」

「ううん、大丈夫……恥ずかしいのはわたしも同じだし。それに、キリト君の素の性格、最近少しずつだけ解ってきたから」

言われ、一瞬息が詰まる。

それは……喜んでいいのだろうか？——いや、喜ぶべきなんだろう。

βテスターとして、《攻略組》として、そして《黒の剣士》として……俺は今まで、他人に弱さを見せる事を極端に恐れてきた。強くなければこんな自分に価値は無いのだと、心の何処かですつと思っていた。

でも、そんな俺の隠してきた内側の部分を見抜き、力になってくれた二人の女性がいる。一人は常に一歩先で俺を導き、もう一人は隣に立つて今も支えてくれている。

「それでは、改めて誓いのキスを」

俺は二人に何を返せる？ 何をしてあげられる？

顔を覆うボールをゆつくりと上げていく。

ティンクルには何だかんだで両手の指じや足りないくらいの借りがある。これは正直、ゲームをクリアするのに至っても返せてる気がしない。下手をすれば、今からでも更に四つや五つ借りが増える可能性すらあるくらいだ。実際、今回の事でまた一つ借りが出来たと、少なくとも俺は思ってる。……だから悪いけど、彼女には完済まで気長に待って貰おう。

一旦真上まで上がったパールは、大きな弧を描いて向う側へと落ちていく。

なら、アスナに対して俺が出来る事は？

朱に染まった頬、濡れた瞳、桜色の唇。パールが取り払われ、それらが露わになる。

——ずっと後悔している事がある。クラインには「お前は悪くない」と言われ、ティンクルには「彼ら自身の責任を奪うな」と言われた。でも、そんな言葉は慰めにはならない。

二人は知らない……。寧ろ、知らなくて当然なのだ。だって、結局俺は、最期まで言葉にする事が出来なかったのだから。

自信が無かった。負い目があった。それでも口にすれば良かったと、それで何かが変わったんじゃないかと……。今でも、その想いが心の中で燻っているんだ。

これは、もしかしたら代償行為なのかも知れない。恥ずべき行いなのかも知れない。けれど、この気持ちは、紛れもなく本物だから。

もう二度と失いたくない。だから改めて、自分自身に誓いを立てる。

「どんな事があつても、君を守つてみせる。君だけは、必ず現実に還してみせるから」
 「なら、わたしももう一度言うね。——わたしは、君の前から居なくなつたりしないよ。だつて、わたしは君を守る方だもの。それとね」

ふわり、と花の香りが鼻孔を撫る。抱き付かれたのだと認識するのに数秒の時を要した。

「帰るときは、一緒だよ」

アスナの吐息が、優しく俺の耳を撫でる。

……そうだな、帰るときは一緒だ。

俺達は顔を見合わせ微笑みながら、そつと優しく唇を重ねた。

†

ケーキ入刀からブーケトスまで目ぼしいイベントは粗方やり終え、それじゃあそろそろ解散——となるどころか、騒がしきは一層増すばかり。夕闇に染まつた空に、先程から頻りに花火が打ち上げられている。

そして、一際大きな閃光がパーンと乾いた音を響かせ花開き、辺り一帯を明るく照らし出した。

「まさか、あんたも来てるとはね」

「こんばんは、リズさん」

顔を見るまでもなく、その声には覚えがあった。

「シリカ、あんたもあいつに呼ばれてたのね。《攻略組》じゃないはずだし、キリトかアスナの知り合い？」

「はい、キリトさんの……」

シリカのその声音に、あたしは知りたくもない事に気が付いてしまった。こういう時、自分の察しの良さが怨めしくなる。

「あんた、まさか……」

「はい。キリトさんの事が……その……」

「いや、言わんでいいから」

しまった、と思った。どうにも、第一印象が悪過ぎて、それが尾を引いてしまっている。シリカが悪い訳じゃない事は理解しているのに、彼女への対応が冷たくなってしまっている。

「え〜つと……その、ティンクルさんが何処にいるかご存知ありませんか？」

「あいつなら、今は教会の奥の部屋で休んでる。何時起きるか解らないし、あいつに何か用があるなら日を改めなさい。あー……あたしに話しても良い事なら、伝言言付かっても良いわよ」

どうする、とあたしが尋ねると、シリカは一瞬迷った素振りをみせて、けれど意を決したように口を開いた。

「あたし、キリトさんの事が好きで……二人が両思いだって知った後も諦めきれなくて」
「……うん」

その気持ちは痛いほどよく解る。一度本気で好きになつたら、多少の事では折れたりしない。本気の恋は、簡単に冷めてなんてくれないんだから。

「なので、昨日招待メールが届いた時は驚いて……。何て書いてあつたと思います？

『僕は略奪愛を否定するつもりはないけれど、彼らの友人としては余りお勧めは出来ない。だから、これを送らせてもらいます。二人の幸せを壊してでも、キリトと恋仲になりたいのか。判断はシリカ自身に委ねます』……酷いと思いませんか？」

「確かにえげつないわね」

要するに、二人の幸せそうな姿を見せ付けて心を折りにいつたつてわけか……。恐ろしい事をする。

「でも、今日お二人の姿を見て、決心出来ました。あたしは、お二人の仲を切り裂いてでも、キリトさんの隣に立ちたいんだって……知る事が出来ました。なので、絶対に諦めない、お姉さんには負けないと伝えておいてください」

よろしくお願いします、と言いたい事を全て吐き出したシリカは、いつそ清々しさす

ら感じるほどの笑顔で闇の中へと消えていった。

「あくあ……あたし知らないからね」

聞けば、祭りの屋台は全てチャリティーなのだという。《軍》に搾取されている《はじめの街》の住人達——特に、教会で暮らしている子供達に、今日だけでも美味しいものを食べて貰おうと集まったのだそう。つまり彼らはみんな、光が集めたボランティアという訳だ。

「あいつ、ホント馬鹿よね……」

頭が良い癖に、肝心のところが抜けている。他人に気を配る暇があつたら、もっと自分を労わるべきだ。

「ホント……お人好しなんだから」

視界がぼやける。泣かないと決めたはずなのに、涙が頬を伝って行くのを止められない。い。

ああ、そうだ。本気で好きになったら、一つや二つ……いや、十個や二十個悪いところを見付けたところで、嫌いになれる訳がない。だって、欠点を一つ見付けたそばから、長所を二つ見付けてしまう。あいつならきつと、惚れた欲目だなんて意地の悪い事を言うんだらうけど、そんなの知るもんか。

これが恋だ。これが愛だ。これが、誰かを好きになるって事だ。

「どれだけあたしに心配かけるつもりよ——」
『ヒュウッ』

「——光の馬鹿あああッ!!」

『バーンッ!!』

夜空に大輪の花が咲き、あたしの叫び声は掻き消された。

お詫びとご報告

拝啓。皆さま、如何お過ごしでしょうか？

私は、可もなく不可もなくと言ったところ です。

さて、この度こうして筆を執ったのは、タイトルの通りです。

長期間に渡り何の音沙汰もなかったこと、誠に申し訳なく思っています。

お詫びしなければならぬことは沢山ありますが、まず私の近況についてご報告させていただきます。

最近 は小説家になろう様の方で、オリジナル小説をぼちぼち書いております。それ以前は、少し書いても長期間間隔が開き、そのままエタるというのを繰り返していました。「もう俺は書けないんだな」と、自分自身に匙を投げる状況です。読専に転向しようとも考えましたが、やつぱり書いちゃうんですよね。で、性懲りもなく投稿してしまいます。上にも書きましたが、俗に言う『エタる』という現象、客観的に言つて、ネット小説には多いと思います。

別に、自分を正当化するつもりはありません。私も一読者として、自分が追っていた作品が更新されなくなり、何の音沙汰もなくなるのは地味にショックに思うものです。

そして、自分自身も同じ事をしてることを思い出し、自己嫌悪に陥るわけです。

これではいけない。筆を折ったにしても、その旨をご報告すべきだと、この度覚悟を決めました。

ソードアート・オンラインという作品は今でも好きです。原作は引き続き購入していただきますし、アリシゼーション編のアニメの方も全話視聴しました。

ですが、二次創作を続けられるかと言えば、残念ながら話が変わってきました。

当時と同じ心境で、同じ感覚で書くということが、どうしても出来ません。

必ず続きを書くとか口を叩いたのに、約束を違える自分自身が情けなく、同時に期待してくれた方々に申し訳ないです。

まあ、それはそれとして。この度、新作の投稿を始めて、思い知らされたんですよ。義務感で書くのと、自分が書きたいから書くのでは、余りに筆のスピードが違います。

ここ最近は三日に一度という、「俺の何処にそんな力が：？」と自分でも信じられないハペース（当社比）で投稿しています。

商業で書いてるわけでもないのに、義務感に駆られて書く。意味が分かりませんよね。

勝手に自分で自分を追い込んでいたのだと気付かされました。

こうなってくると、もう謝罪というより開き直りに近いですね。

ですが、これが未だに続きが投稿されるかもしれないと期待してくれている極少数だ
ろう読者様と、他でもない自分自身の区切りになればと思う次第です。

結論を言ってしまう。今後、黎明の女神、並びに姫と兎の聖譚曲が更新されるこ
とは万に一つもございません！

本当に申し訳ない。

ですが、エタっている他の作者の皆様が、全て私のような人間と思わないで頂きたい
です。

社会人、学生、人それぞれ様々な事情があるものです。止むにやまれず、投稿できな
い、反応できない、ということもあるでしょう。希望を捨ててはいけません。

私の場合、怠惰だけです。敢えてぶつちやけてしまうと、罵倒や嘲笑が怖くてハー
メルン様の方にログインすること自体止めてました。我ながらチキンですね！

最後になりますが、漆黒の復讐者、黎明の女神、そして姫と兎の聖譚曲を読んで下さっ
た方々、ブックマークを付けて下さった方々にお礼を。

感想を頂いたこと、ランキングに載ったこと、今でも感謝しております。

以上です。敬具。